

中野市

MINAMIOOHARA

南大原遺跡

一般県道三水中野線建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書

2016.3

長野県北信建設事務所
長野県埋蔵文化財センター



南大原遺跡遠景



南大原遺跡遺構出土栗林式土器



南大原遺跡 SD02 (溝跡) 出土土器 上段：上層出土遺物 下段：下層出土遺物



弥生時代の鉄斧・鉄鏃・勾玉



弥生時代の台石・蔽石・砥石



弥生時代の粘土塊

はじめに

高社山を前方に望み、千曲川は中野盆地から飯山盆地に向かって大きくうねりながら、左右の丘陵間を縫って北流し、新潟県を流れ日本海へと通じています。その蛇行する千曲川沿いに南大原遺跡があります。旧千曲川河道を挟んで東側には県指定史跡の栗林遺跡があり、下流には、平成26年に国の重要文化財に指定された銅戈、銅鐸を出土した柳沢遺跡があります。本遺跡の周辺には、弥生時代中期の重要な遺跡が連なっています。

南大原遺跡は縄文時代前期の遺跡として知られていましたが、その後の発掘調査で、弥生時代の集落跡が埋蔵されていることが明らかとなりました。長野県埋蔵文化財センターでは一般県道三水中野線の建設にともない、平成23年度から25年度にかけて中野市南大原遺跡の発掘作業を実施しました。その後、整理作業を継続してまいりましたが、このたび、発掘調査成果を報告書として刊行する運びとなりました。

今回の発掘調査では、10棟の竪穴住居跡と墓跡が発見されました。縄文時代前期の住居跡は1棟見つかりましたが、大半は弥生時代の中期から後期にかけて使われたものです。住居跡からはたくさんの遺物が出土しました。中でも弥生時代中期の住居跡から出土した鉄斧や鍬などの金属器は特筆されます。長野県内では弥生時代中期の金属器の発見例は稀です。さらに、調査では弥生時代中期に鉄器の加工をしていた可能性を示す焼土や、石製工具と思われる敲石・台石が見つかりました。弥生時代中期に鉄の加工をしていた遺跡は西日本では発見されていますが、東日本での事例はあまりありません。ことに長野県では弥生時代に鉄器加工をしていた遺跡は、これまでのところ知られていません。今回の発掘調査で、弥生時代中期に鉄器の加工をしていた可能性が確認できたことは大きな成果です。

最後になりましたが、発掘調査から整理作業、本報告書の刊行に至るまで深いご理解とご協力をいただいた地元地権者や区長の皆さま、中野市上今井地区の方がた、中野市教育委員会、長野県教育委員会文化財・生涯学習課や長野県立歴史館、発掘・整理作業に従事協力いただいた方がたに心から敬意と感謝を表す次第です。

例 言

1. 本書は一般県道三水中野線建設に関わる長野県中野市上今井字南大原に所在する南大原（みなみおほはら）遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、長野県北信建設事務所の委託を受けて、長野県教育委員会の指導の下、（一財）長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センターが実施した。
3. これまで発掘・整理作業の概要は「長野県埋蔵文化財センター年報」28～31、現地説明会、速報展資料等で紹介してきたが、本書をもって最終報告書とする。内容に相違がある場合は本書をもって訂正する。
4. 本書で使用した地図は国土交通省国土地理院発行の1：25,000「中野西部」、1：50,000「中野」・「飯山」、1：200,000「長野」・「高田」である。
5. 発掘・整理作業において以下の機関に業務委託、または協力依頼をした。
 - 測量業務および空中写真撮影：株式会社写真測図研究所、有限会社測地、株式会社みすず総合コンサルタント
 - 遺物注記：株式会社歴史の杜、第一合成株式会社
 - 炭化物年代測定：株式会社加速器分析研究所
 - 木製品の年代測定・樹種同定：バリノサーヴェイ株式会社
 - 土壌分析（珪藻・花粉・植物珪酸体分析）：バリノサーヴェイ株式会社
 - 土壌分析（リン酸・カルシウム分析）：バリノサーヴェイ株式会社
 - 金属器のX線撮影および保存処理：長野県立歴史館、株式会社文化財ユニオン
 - 遺物写真撮影：信毎書籍印刷株式会社
6. 発掘・整理作業において以下の方がたに、ご指導、ご教示をいただいた。記して感謝の意を表します。
 - 石川日出志、伊藤宏幸、市澤英利、神田弓月、桐原 健、工業普通、笹澤 浩、谷 幸樹、土屋 積、中島庄一、中村由克、榎宜田佳男、山田昌久
 - 中野市教育委員会、中野市立博物館、淡路市教育委員会
7. 発掘調査・整理作業の担当者、発掘・整理作業員は第1章第1節第3表に記載した。
8. 本報告書は第1章第1節1項・第3節を調査第2課長町田勝則、それ以外の執筆と編集は鶴田典昭がおこない、調査部長平林彰、調査第2課長町田勝則が校閲した。
9. 註および引用参考文献は各章の末尾に記載した。ただし、第4章の註は第2節と第3節の末尾に記載した。
10. 調査資料及び遺物は長野県立歴史館又は中野市教育委員会へ移管予定である。

凡 例

1. 遺物分布図・遺構図等に示した国家座標は世界測地系の値である。
2. 遺物番号は本文、挿表、遺物図版、遺構図版の遺物出土状況図、写真図版のすべてに共通する。遺物図版に実測図が掲載されていない遺物の写真には、() をつけて遺物管理番号を示した。
3. 基本土層・埋土の色調の記録は「新版 標準土色帖」による。
4. 本報告書掲載図の縮尺は原則として以下の通りである。

(遺構実測図)

全体図 (1:1,000) 遺構配置図 (1:500, 1:80) 竪穴住居跡 (1:60)・掘立柱建物跡 (1:80)
土坑 (1:40) 木棺墓・礎床木棺墓 (1:30)

(遺物実測図)

器形復原をした土器実測図・拓本 (1:4) 土器拓本 (1:3)
石製品・土製品・金属製品 (1:2) 石器実測図 (1:2, 1:3, 1:4)
上記以外の縮尺も用いているが、それぞれ図中に記載している。

5. 遺構図版の P は土器、S は石器または自然礫を示す。遺物観察表の石材名は以下の記号を用いる。

(石材)

Ag:玉髄 An:無斑晶質安山岩 AZ:安山岩 Ch:チャート Co:礫岩 DB:輝緑岩
DR:閃緑岩 Gn:片麻岩 Gr:花崗岩 GT:緑色岩 GS:緑色片岩 GW:硬砂岩
Jade:ヒスイ KA:輝石安山岩 Ob:黒曜石 Po:ヒン岩 Rh:流紋岩 Sa:砂岩
Se:蛇紋岩・透閃石岩 Sh:頁岩 Sl:粘板岩 SS:珪質頁岩 TS:凝灰質頁岩
Tu:凝灰岩 Qu:石英 ※ AZは無斑晶質安山岩と輝石安山岩以外の安山岩

6. 本報告書で用いたスクリーン・トーン等の凡例は以下の通りである。この他のものは、各図版に凡例を付した。

遺物図版 (土器・石器)

遺構図版



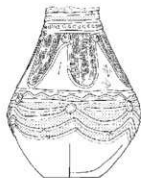
赤彩



繊維土器



磨り痕



縄文・擬似縄文



敲打痕

目 次

口絵	
はじめに	
例言	
凡例	
目次	
図版目次	
表目次	
写真図版目次	
第1章 調査の経緯と方法	
第1節 発掘調査の経緯と作業経過	1
1 調査に至る経緯	1
2 発掘作業と整理作業の経過	3
3 調査体制	3
4 調査日誌抄	4
第2節 発掘作業と整理作業の方法	8
1 発掘作業の方法	8
2 整理作業の方法	10
3 遺物と記録の収納	11
第3節 遺跡・遺物の公開方法	12
1 公開の方法	12
第2章 遺跡の環境と概要	
第1節 遺跡の位置と地理的環境	15
第2節 周辺の遺跡と歴史的環境	17
第3節 南大原遺跡の概観	26
1 遺跡の範囲	26
2 発掘調査歴	26
第4節 調査成果の概要と基本層序	27
1 調査成果の概要	27
2 基本層序	33
第3章 縄文時代の遺構と遺物	
第1節 概 要	38
第2節 遺構と遺物	40
1 遺 構	40
2 遺 物	40

第4章 弥生時代の遺構と遺物	
第1節 概要	45
第2節 遺構	46
1 竪穴住居跡・竪穴状遺構	46
2 掘立柱建物跡・ピット群・櫛列	51
3 土坑・墓跡	55
4 溝跡	58
第3節 遺物	91
1 土器	91
2 土製品・ミニチュア土器	103
3 石器	104
4 石製品	108
5 木製品	109
6 金属製品	109
第5章 古墳時代以降の遺構と遺物	
第1節 概要	144
第2節 遺構と遺物	145
1 方形周溝墓	145
2 その他の遺構	147
3 遺構外の遺物	147
第6章 自然科学分析	
第1節 分析の目的	148
第2節 分析成果の概要	148
1 炭素14年代測定および炭化物樹種同定	148
2 花粉・珪藻・植物硅酸体分析	152
3 リン酸・カルシウム分析	154
第7章 総括	
第1節 南大原遺跡調査成果のまとめ	155
第2節 弥生時代鍛冶遺構の可能性について	156
第3節 善光寺平周辺の弥生時代の遺跡	158
第4節 弥生時代中期後半の南大原遺跡	160
第5節 今後の課題	162
遺物観察表	165
写真図版	
報告書抄録	
添付DVD	

図版目次

第1図	遺跡範囲	2	第38図	ビット群1・ビット群2平面図	76
第2図	グリッドの呼称	9	第39図	ビット群3・ビット群4平面図	77
第3図	調査区範囲とグリッド設定図	9	第40図	ビット群5・ビット群6平面図	78
第4図	南大原遺跡の位置	16	第41図	SK遺構図(1)	80
第5図	南大原遺跡周辺の弥生時代中期後半から 後期前半の主な遺跡	16	第42図	SK遺構図(2)	81
第6図	南大原遺跡周辺遺跡分布図	19	第43図	SK遺構図(3)	82
第7図	長野盆地周辺の弥生時代中期遺跡分布図	22	第44図	SM01・SM02遺構図	83
第8図	長野盆地周辺の弥生時代後期遺跡分布図	23	第45図	SM03・SM04・SM05遺構図	84
第9図	南大原遺跡の範囲と調査地点	28	第46図	SD01・SD04・SD05遺構図	85
第10図	遺跡範囲と調査区範囲	29	第47図	SD02遺構図	86
第11図	三水中野線建設に伴う発掘調査全体図	30	第48図	SD02断面図(1)	87
第12図	南大原遺跡①～③区遺構配置図	31	第49図	SD02断面図(2)	88
第13図	南大原遺跡⑤区遺構配置図	32	第50図	SD02 ①・②区遺物出土状況図	89
第14図	南大原遺跡の土層	34	第51図	SD02 ③・⑤区遺物出土状況図	90
第15図	南大原遺跡の基本土層	35	第52図	弥生土器の器種分類	94
第16図	縄文土器分布範囲	38	第53図	弥生土器の文様分類	95
第17図	縄文時代の遺構配置図	39	第54図	SB04・SB05出土土器	113
第18図	縄文時代の遺構	41	第55図	SB06・SB07・SB08出土土器	114
第19図	縄文土器(1)	42	第56図	SB08・SB09・SB11出土土器	115
第20図	縄文土器(2)	43	第57図	SB11出土土器(1)	116
第21図	縄文石器	43	第58図	SB11出土土器(2)	117
第22図	弥生時代遺構配置図	45	第59図	SB12出土土器	118
第23図	SB04遺構図	61	第60図	SB12・SB13出土土器	119
第24図	SB05遺構図	62	第61図	SB13・SB14出土土器	120
第25図	SB06・SB09遺構図	63	第62図	SB14出土土器(1)	121
第26図	SB07遺構図	64	第63図	SB14出土土器(2)	122
第27図	SB08遺構図	65	第64図	SB14出土土器(3)	123
第28図	SB11・SB12遺構図(1)	66	第65図	SB15出土土器	124
第29図	SB11・SB12遺構図(2)	67	第66図	SB15・ST04・SD01・SD02下層出土土器	125
第30図	SB11・SB12遺構図(3)	68	第67図	SD02下層出土土器(1)	126
第31図	SB11・SB12遺構図(4)	69	第68図	SD02下層出土土器(2)	127
第32図	SB13遺構図	70	第69図	SD02出土土器	128
第33図	SB14遺構図(1)	71	第70図	SD03・SK・ST出土土器	129
第34図	SB14遺構図(2)	72	第71図	SK出土土器	130
第35図	SB15遺構図	73	第72図	SK174出土土器	131
第36図	ST01・ST02・ST03・ST04遺構図	74	第73図	遺構外出土土器(1)	132
第37図	ST07・ST08遺構図	75	第74図	遺構外出土土器(2)	133
			第75図	土製品・ミニチュア土器	134

第76図	石器 (1)	135
第77図	石器 (2)	136
第78図	石器 (3)	137
第79図	石器 (4)	138
第80図	石器 (5)	139
第81図	石器 (6)	140
第82図	石器 (7)	141
第83図	石器 (8)	142
第84図	木製品・鉄製品	143

第85図	古墳時代以降の遺構配置図	144
第86図	SD03遺構図・出土遺物	146
第87図	SK160遺構図	147
第88図	分析試料サンプル地点	149
第89図	南大原遺跡周辺の弥生時代中期後半の暦年 校正年代	151
第90図	善光寺平周辺の弥生時代の遺跡	159
第91図	弥生時代中期の木製品・鉄製品・特殊な石器	160
第92図	南大原遺跡周辺の弥生時代中期後半の遺跡	161

目次

第1表	文化財保護法に関わる諸届	1
第2表	受委託契約一覧	1
第3表	調査体制	3
第4表	南大原遺跡周辺の遺跡地名表	20
第5表	長野盆地周辺の弥生時代遺跡地名表	24
第6表	SB11・SB12 Pit 一覧	67
第7表	ST Pit 一覧	75
第8表	ビット群一覧	79
第9表	SK (土坑) 一覧	81

第10表	遺構別出土土器重量	92
第11表	遺構別器種組成	104
第12表	器種別石材組成	105
第13表	遺構別剥片数	105
第14表	分析一覧	149
第15表	年代測定試料一覧	150
第16表	土壌分析試料一覧	153
第17表	長野県内の弥生時代中期の金属製品一覧	157

写真図版目次

PL1	南大原遺跡 遠景と基本土層
PL2	南大原遺跡の遺構1
PL3	南大原遺跡の遺構2
PL4	南大原遺跡の遺構3
PL5	縄文時代の土器1
PL6	弥生時代の土器1
PL7	弥生時代の土器2
PL8	弥生時代の土器3
PL9	弥生時代の土器4
PL10	弥生時代の土器5
PL11	弥生時代の土器6
PL12	弥生時代の土器7
PL13	弥生時代の土器8
PL14	弥生時代の土器9
PL15	弥生時代の土器10
PL16	弥生時代の土器11

PL17	弥生時代の土器12
PL18	弥生時代の土器13
PL19	弥生時代の土器14
PL20	弥生時代の土器15
PL21	弥生時代の土器16
PL22	弥生時代の土器17
PL23	弥生時代の土器18
PL24	弥生時代の土器19
PL25	弥生時代の土器20
PL26	弥生時代の土器21
PL27	弥生時代の土器22
PL28	弥生時代の土器23
PL29	弥生時代の土器24
PL30	縄文時代・弥生時代の石器1
PL31	縄文時代・弥生時代の石器2
PL32	縄文時代・弥生時代の石器3

添付 DVD 収録データ

遺物観察表

挿表データ

自然科学分析報告書

発掘調査記録写真

南大原遺跡周辺の弥生時代遺跡

土器の種子圧痕

弥生時代金属器出土遺跡資料一覧

第1章 調査の経緯と方法

第1節 発掘調査の経緯と作業経過

1 調査に至る経緯

長野県中野市上今井地区にある上今井橋の袂付近は、旧千曲川左岸域に発達した微高地と明治初期の改修工事により埋め立てられた旧河川流路（低地部分）よりなる。微高地の標高は332mほどで、旧流路部分の標高328mとは4mもの高低差があり、台風等による千曲川増水時には浸水被害に見まわられている。ことに当該箇所では冠水により、中野市と飯綱町（旧三水村）を結ぶ県道505号線がたびたび遮断され、生活道路の安全性確保が急務となっていた。このため、災害に強い道づくりを目指し、長野県は県単道路改築事業（一）三水中野線の計画を進めた。

改築は道路の嵩上げを目的としており、現道部分を含む路線近傍は、中野市南大原遺跡（遺跡番号：中野市196）が所在するため（第1図）、長野県北信建設事務所（以下「建設事務所」）は、中野市教育委員会（以下「市教委」）及び長野県教育委員会（以下「県教委」）と開発計画と遺跡の保護について協議した。

南大原遺跡は、昭和4年（1929年）以降、学会に知られることとなった縄文時代前期及び弥生時代中期の著名な遺跡である。今回の開発事業に該当する現道部分は、昭和32年（1957年）と昭和54年（1979年）に発掘調査がなされており、市教委及び県教委は、現道嵩上げに伴う道路拡幅部分の保護措置を記録保存のための発掘調査と決定した。

建設事務所は、平成23年2月2日付け22北建第65号で「土木工事等のための埋蔵文化財発掘の通知」を提出、県教委は埋蔵文化財の発掘調査を長野県埋蔵文化財センター（以下「当センター」）に委託して実施する旨、建設事務所に通知した。当センターは、平成23年度から建設事務所と埋蔵文化財発掘調査委託業務を締結し、今年度の報告書刊行に至るまで、5箇年にわたる事業を実施することとなった。

遺跡名 (調査年度)	発掘届 (法92条1項)		発掘許可通知 (法92条2項)		発掘終了報告		埋蔵物発見届 (遺失物法)		埋蔵文化財保管証		文化財認定 (法102条)	
	日付	文書番号	日付	文書番号	日付	文書番号	日付	文書番号	日付	文書番号	日付	文書番号
南大原 (H23)	H23.3.28	22長理 第1-11号	H23.3.10	22教文 第6-12号	H23.7.20	23長理 第6-2号	H23.7.20	23長理 第4-2号	H23.7.20	23長理 第5-2号	H23.7.27	23教文- 20-57号
南大原 (H24)	H24.9.12	24長理 第1-6号	H24.9.24	24教文 第6-12号	H24.12.12	24長理 第4-10号	H24.12.12	24長理 第2-10号	H24.12.12	24長理 第3-10号	H24.12.25	24教文- 20-84号
南大原 (H25)	H25.6.24	25長理 第1-3号	H25.7.2	25教文 第6-3号	H25.11.15	25長理 第4-5号	H25.11.15	25長理 第2-5号	H25.11.15	25長理 第3-5号	H25.11.26	25教文- 20-77号

第1表 文化財保護法に関わる諸届

年度	埋蔵文化財発掘調査業務名	契約期間	契約額(円)	作業内容
H23	平成22年度 県単道路改築事業 上今井～栗林その5	H23.3.24～H24.3.31	10,500,000	発掘作業 基礎整理作業
	平成22年度 県単道路改築事業 上今井～栗林その6	H23.3.24～H24.3.31	7,875,000	発掘作業 基礎整理作業
H24	平成23年度 県単道路改築事業 上今井～栗林その2	H24.3.30～H25.3.31	10,127,000	発掘作業 基礎整理作業
H25	平成25年度 県単道路改築事業 上今井～栗林その2	H25.7.22～H26.3.28	23,856,000	発掘作業 基礎整理作業
H26	平成25年度 県単道路改築事業 上今井～栗林その6	H26.3.28～H27.3.27	22,680,000	本格整理作業
H27	平成27年度 県単道路改築事業 上今井	H27.4.1～H28.3.25	6,512,400	本格整理作業 報告書刊行

第2表 受委託契約一覧

2 発掘作業と整理作業の経過

(1) 発掘作業

平成23年度から25年度の3次にわたる発掘調査を行なった。道路幅幅に伴う発掘調査であり、現道に沿って調査区が設定された。調査区を①区から⑤区に区分し、調査を実施した。(第3図)

①～③区・⑤区は表土を重機で除去したのち、遺構検出を行ない、弥生時代を主体とした遺構の調査を実施した。⑤区では、道路建設時に削平された崖面で、弥生時代の遺構検出面の下に縄文時代の遺構が確認されたため、弥生時代の遺構調査を終了した後、縄文時代の遺構が検出された場所を中心に、重機で約30～40cm掘削し、第2面目の調査を行なった。

また、盛土をして建設されている現道に沿った調査区(①区・③区)では、盛土の法尻のため調査区の幅が狭くなり、道路際までは調査していない。また、⑤区では、すでに遺構検出面以下まで掘削された部分があり(旧バス停部分)、発掘作業は行っていない。

なお、④区は安全上の理由からトレンチ調査のみで、面調査は行なわなかった。

発掘作業期間と調査面積は以下のとおりである。

平成23年 4月20日～7月19日	2,000㎡
平成24年 10月23日～12月11日	335㎡
平成25年 8月1日～11月13日	939㎡(2面調査延べ面積1,355㎡)

(2) 整理作業

図面、写真、遺構等の台帳類作成、遺物の洗浄と注記等の基礎整理は、発掘作業年度に実施した。

平成25年度に溝跡(SD02)出土の土器の接合作業に部分的に着手した。

平成26年度は遺物の分類、接合・復元、計測、実測、トレース、遺物写真撮影、遺構図版作成など本格的に整理作業を開始した。これらの作業の他、SK174出土土器を土ごと取上げたものを室内でクリーニングし、出土状況の記録をとった。また、平成25年度の調査で採取した土壌の水洗選別を行ない、微細遺物を採取した。

平成27年度は、図版組、原稿執筆、報告書の印刷製本を行なった。

3 調査体制

調査体制は、第3表のとおりである。

年度	所長	調査部長	担当課長	本書関連作業の担当調査研究員		
平成23年	窪田久雄	大竹憲昭	上田典男	町田勝則	前田一也	
平成24年	窪田久雄	大竹憲昭	町田勝則	黒岩 陸	前田一也	
平成25年	窪田久雄	大竹憲昭	町田勝則	黒岩 陸	長谷川桂子	
平成26年	会津敏男	大竹憲昭	町田勝則	鶴田典昭		
平成27年	会津敏男	平林 彰	町田勝則	鶴田典昭		
平成23～25年度 発掘作業員						
池田道保 石井 博 大塚加津美 岡村文雄 久保 昇 黒岩哲彦 小林伸子 坂本清一 清水孝夫 高木こずえ 高野光男 高山いづ美 土屋美晴 徳竹志津雄 徳竹知從 徳竹寿幸 中條茂吉 橋内賢裕 平尾恭子 丸山いづ子 宮沢アヤ子 宮本和子 望月悦夫 山上知也						
平成23～27年度 整理作業員						
赤尾香苗 阿部高子 市川ちず子 猪股万里子 宇賀村節子 白井博子 岡村美喜子 柄沢登紀子 北村マユミ 窪田 順 窪田 翔 倉科千文 倉島由美子 小林とも子 近藤朋子 島田茂子 清水栄子 高山いづ美 鳥羽仁美 中澤克子 中澤ヒデ子 中村智恵子 西島典子 西村はるみ 日向富美子 平尾恭子 藤井裕子 宮澤理恵子 宮下正治 望月悦夫 柳原澄子						

第3表 調査体制

4 調査日誌抄

平成23年度（発掘作業）

- 4月12日 現場事務所・駐車場造成開始
- 4月19日 機材搬入
- 4月20日 ①区表土剥ぎ開始。表土、黒色土、茶褐色土、明黄褐色土の順の地積層を確認
発掘作業員開始式
- 4月22日 黄褐色砂質土・茶褐色砂質土を除去し、掘立柱建物跡を検出
- 4月25日 竪穴住居跡と思われるプランを3箇所確認
- 5月9日 ①区南東部で埋設流路または大溝（SD02）を検出
- 5月11日 南大原遺跡の埋蔵文化財包蔵地範囲の拡張について県教委・市教委と協議
- 5月19日 協議により、埋蔵文化財包蔵地外については試掘調査を行ない、本調査が必要な場合は、平成24年度以降調査を行なうこととなる。
- 5月20日 ②区遺構検出開始。黒色土（Ⅲ層）は遺物包含層で、Ⅳ層上面が遺構検出面開始。基本土層は①区と同様
- 5月26日 大溝（SD02）の調査開始
- 5月30日 中野市立豊井小学校体験発掘が雨天の為中止となり、小学校にて出前授業
- 6月1日 竪穴住居跡（SB07）の調査開始
- 6月8日 SD02土器廃棄状況の調査を始める。
- 6月15日 SB04調査開始。豊井小学校6年生発掘体験
- 6月17日 SD02遺物取上げを完了し、底面の確認トレンチ調査
- 6月21日 ②区の遺構検出開始
- 6月23日 ②区のSD02検出
- 6月27日 ④区の確認調査。盛土が厚いため、面的な調査は安全上不可能と判断
- 6月28日 ③区確認調査により、SD02の続きが確認される。
③区は次年度調査とする。
- 6月29日 ④区確認調査で、遺物包含層が無いことが判明
- 6月30日 ①・②区空中写真撮影
- 7月5日 ピット群2に規則的な配置を確認し、掘立柱建物跡（ST07・ST08）とする。SB05調査開始
- 7月19日 発掘調査終了
- 7月14～28日 図面・写真整理と遺物洗浄等基礎整理



平成23年度（基礎整理作業）

- 図面修正、写真整理、遺構所見カード記載を行なった。
- 12月15日 基礎整理開始
- 12月20日 遺物注記委託のため、株式会社歴史の社に遺物を引き渡す。
- 12月27日 炭素14年代測定業務委託のため、株式会社加速器分析研究所に試料8点を引き渡す。

(平成24年)

- 1月16日 北信合同庁舎パネル展(～1月20日)
- 2月3日 遺物注記業務委託終了
- 2月22日 長野県考古学会桐原健元会長の調査指導
- 3月9日 炭素14年代測定結果納品
- 3月16日 測量委託図面等成果品の納品(撰写真個図研究所)

平成24年度(発掘作業)

- 10月23日 調査開始
- 10月29日 ③区表土剥ぎ開始。プレハブ等設置
- 11月1日 発掘作業員が調査に入り、遺構検出開始
SD02部分のトレンチ調査
- 11月2日 土坑(柱穴を含む)を多数、竪穴住居跡の床
面?を検出
- 11月7日 グリッド杭設定
- 11月9日 柱痕跡があるピット(SK81)を確認。SK91よ
り渠林式の壺出土
- 11月15日 大溝(SD02)最深部の調査にかかる。
- 11月20日 建設事務所整備課渠林整備第一係長現場視察
- 11月22日 調査区全景写真撮影
- 11月28日 調査区東側で土壌分析(珪藻、花粉他)の試料
サンプリング。SD02最深部で壺と甕が重なっ
て出土。地形測量
- 11月30日 ラジコンヘリによる空中写真撮影
- 12月4日 東側埋戻し。西側土壌分析試料サンプリング
- 12月5日 SD02底面下の掘削を行ない、調査終了
- 12月6日 調査区埋戻し開始
- 12月7日 発掘作業員終了式
- 12月11日 プレハブ、トイレ撤去。調査終了

平成24年度(基礎整理作業)

記録図面類の修正、写真記録類整理、遺物接合、遺構所
見カード作成を行なった。

- 12月20日 榎第一合成による注記委託業務開始
- 12月26日 榎加速器分析研究所による炭素14年代測定分析
委託業務開始
- 12月27日 榎ハリノサーヴェイによる珪藻、花粉、プラ
ントオパール分析委託業務開始

(平成25年)

- 3月15日 測量委託業務完了、成果品納品
- 3月19日 冬期整理作業員の業務終了
- 3月25日 注記委託業務完了、遺物納品
- 3月26日 炭素14年代測定業務委託完了
- 3月28日 珪藻、花粉、プラントオパール分析業務完了
- 3月29日 平成24年度基礎整理作業終了

平成25年度(発掘作業)

- 7月29日 プレハブ、トイレ設置
- 7月31日 発掘作業員琵琶島道路より、南大原遺跡へ引ッ
越し。
- 8月1日 発掘調査開始。⑤a区のトレンチ調査で、弥生
時代中期後半の遺物包含層を確認
- 8月6日 ⑤a区の表土剥ぎ開始。遺構検出開始
- 8月7日 竪穴住居跡(SB08)、土坑の調査開始。グリッ
ド杭設定
- 8月19日 長野県文化財保護審議会笹澤浩委員、市教委中
島庄一氏現場見学
- 8月20日 新たに竪穴住居跡3棟検出
- 8月22日 中野市立博物館土屋積植長現場見学
- 8月27日 ⑤b区、表土剥ぎ開始。弥生時代遺物包含層
の下に、縄文時代の遺物包含層を確認
- 8月30日 SB09掘下げ開始。SB10検出
- 9月3日 SD02埋土を重機(ミニバック)で掘削
- 9月4日 SB10掘下げ開始
- 9月5日 建設事務所整備課藤井隆男担当係長現場視察
- 9月6日 SB08調査終了
- 9月9日 ⑤b区で礎床木棺墓2基検出
- 9月10日 SD02調査終了
- 9月13日 高所作業車を用い、⑤a区的全景写真撮影



⑤a区表土剥ぎ(2013)

- 9月17日 磯床木棺墓（SM01）磯検出状況写真撮影
 9月18日 SB11・SB12検出
 9月19日 磯床木棺墓（SM02）磯検出状況写真撮影。
 SB14・SB15を検出
 9月20日 SB11・SB14・SB15掘下げ開始
 9月25日 長野県文化振興事業団市浄英理事現場視察
 9月27日 ラジコンヘリによる、⑤a・⑤b区の空中写真撮影
 9月30日 SB08・SB09調査終了
 10月2日 ⑤a区にて、縄文時代の遺物包含層確認のため
 トレンチ調査をするが、遺構・遺物は確認され
 ない。北地区埋戻し開始
 10月3日 SB14から磨製石鏃出土
 10月4日 調査部研修会で、現地で調査内容の検討を行な
 う。
 10月9日 SB14の床面に完形の壺、小型壺、砥石が出土
 県教委平林彰主任指導主事視察
 10月10日 ラジコンヘリによる、⑤b区の空中写真撮影
 10月11日 SD02ダマ押し。県立歴史館中野亮一学芸員現
 場見学
 10月16日 北信タイムス取材
 10月17日 発掘現場一般公開（～24日）、見学者延べ30
 名。テレビ信州、信濃毎日新聞取材。⑤b区
 の中央部を第2調査面まで重機で掘下げる。
 10月18日 SM02（磯床木棺墓）小口痕の調査。検出面を
 下げた結果SB11・12と重複するSD03を認識
 する。
 10月21日 飯山市教育委員会望月静雄氏、市教委中島庄一
 氏現場見学。⑤a区埋戻し完了
 10月30日 SB11・SB12調査終了。SM01（磯床木棺墓）籬
 取上げ。
 10月31日 SB16（縄文時代竪穴住居跡）検出
 11月1日 SM03・SM04調査開始。⑤b区深掘りし、下
 層に遺物包含層等の調査面が無いことを確認
 11月5日 調査区壁にSM05（磯床墓）を検出し、一部拡
 張し調査。⑤b区埋戻し開始
 11月7日 作業員終了式
 11月13日 安全柵撤去。現場管理を建設事務所に引き渡す。
 調査終了



平成25年度（基礎整理作業）

写真記録類の整理、図面の整理、土器接合・復元、遺構
 所見カードの作成をした。

12月6日 ㈱文化財ユニオンによる鉄製品保存処理委託業
 務開始

（平成26年）

1月8日 ㈱パリオサーヴェイによる珪藻、花粉、プラン
 トオパール分析委託業務実施

1月9日 ㈱加速器研究所による炭素14年代測定、樹種同
 定委託業務実施

1月24日 測量委託業務に関わる遺跡全体図作成、割付平
 面図校正等打合せ。

2月12日 北信合同庁舎ロビー、パネル展示（～21日）

3月5日 木製品の整理について首都大学東京山田昌久教
 授の指導を受ける。

3月13日 炭素14年代測定、樹種同定の業務完了
 珪藻、花粉、プラントオパール分析業務完了

3月14日 測量委託業務完了、成果品納品

3月20日 冬期整理作業員の業務終了

3月28日 鉄製品保存処理委託業務完了、成果品納品

3月28日 平成25年度基礎整理作業終了

平成26年度（整理作業）

遺物の分類、接合、実測、トレース、遺物写真撮影、自
 然科学分析、仮図版組、原稿執筆、資料調査を行なった。

4月7日 整理作業開始

4月9日 石器分類開始

4月16日 神田五六氏所蔵南大原出土資料調査

4月30日 土器実測開始

5月21日 通明小学校5年生が整理作業見学

5月27日 遺構図デジタルトレース開始

- 8月4日 土器復元開始
 8月8日 石器実測開始
 9月16日 土ごと取上げた土坑（SK174）の土器の掘りだし、出土状況記録開始（～10月16日）
 10月22日 川中島中学生職場体験で作業見学
 10月23日 篠ノ井東中学生職場体験で作業見学
 11月4日 金属器保存処理業務委託契約（鉄鍔2点）
 11月7日 木製品年代測定・樹種同定業務委託契約。土壌分析業務委託契約
 11月20日 文化庁榎窪田主任文化財調査官視察
 12月19日 遺物写真撮影業務委託契約締結（平成27年）
 1月13日 木製品炭素14年代測定・樹種同定業務委託成果品納品
 1月14日 遺物写真撮影開始（～2月16日）
 1月16日 野尻湖ナウマンゾウ博物館中村由克元学芸員石材鑑定指導
 1月25日 明治大学石川日出志教授調査指導
 2月25日 金属器（鉄鍔）の保存処理完了
 2月26日 遺物写真撮影業務委託成果品納品
 2月27日 土壌理化学（リン酸カルシウム）分析業務委託成果品納品
 3月9日 兵庫県淡路市五斗長垣内遺跡資料調査（～11日）
 3月27日 平成26年度本格整理作業終了

平成27年度（整理作業）

原稿執筆、遺物園のトレースおよびスキミング、遺構図版、遺物図版、写真図版等の編集を行ない、報告書を刊行。

- 4月6日 整理作業開始
 5月26日 弥生時代中期の刺突文の中に、植物の雄花序に



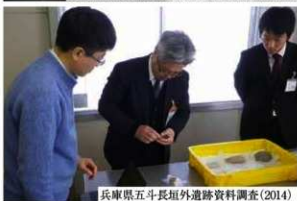
SK174室内で調査 (2014)

よるものがあることを確認

- 6月30日 弥生土器の種子丘写真撮影開始（～7月7日）
 11月11日 長野県文化振興事業団市澤英利理事調査指導
 12月18日 本書印刷製本等委託業務契約



文化庁榎窪田主任文化財調査官調査指導(2014)



兵庫県五斗長垣内遺跡資料調査(2014)

第2節 発掘作業と整理作業の方法

1 発掘作業の方法

(1) 遺跡記号と遺構記号

遺跡記号

南大原遺跡の遺跡記号は「AMH」(MINAMIHARA)である。

当センターでは記録の便宜を図るため、遺跡名をアルファベット3文字で示す遺跡記号を用いている。1文字目は長野県を10分割した地区記号で、須坂市以北の千曲川東岸地区を示す「A」、2文字目および3文字目は遺跡名のローマ字表記2文字を選択したものである。各種記録類や遺物の注記に上記の遺跡記号を用いた。

遺構記号

発掘調査では当センターで定める以下の遺構記号にアラビア数字を付して遺構名とした。

SB：2mを目安とし、それ以上の大きさの方形、円形、楕円形の掘り込み。【竪穴住居跡・竪穴状遺構】(註1)

SK：単独、もしくは他の掘り込みとの関係が認められないSBより小さな掘り込み。【土坑】

ST：SBより小さな落ち込みや石が一定間隔で方形、円形に配置するもの。これ以外の落ち込みと関係が認められるものがある。【掘立柱建物跡】

SA：SBより小さな落ち込みや石が列として配置するもの。それが2本並行し、その間に土が盛られるものも含む。【柵、築地】

SF：単独で存在し、火を焚いた跡が面的に広がるもの。【火床】

SD：溝状の掘り込み。【溝跡、河道、自然流路他】

SQ：遺物が面的に集中するもの。【旧石器のブロック、廃棄場】

SM：方形、円形、もしくはそれらが組み合わさった形の盛り上がり。【古墳、墳墓、周溝墓もここに含める】

(2) 調査グリッドの設定と呼称

国土地理院の平面直角座標系第Ⅷ系の原点を基点(X=0.0000、Y=0.0000)に、200の倍数値を選んで東西方向・南北方向の測量基準線を設けた。これを元に、調査対象範囲をカバーするようにグリッドを設定した。グリッドは大々地区・大地区・中地区・小地区の4段階に区分した(第2図)。

大々地区は200m×200mの区画で、ローマ数字で示した。X=83400.00、Y=-15800.00を基準として調査対象地区全体にかかる4区画を設定し、I～IVと表記した。(第3図)。

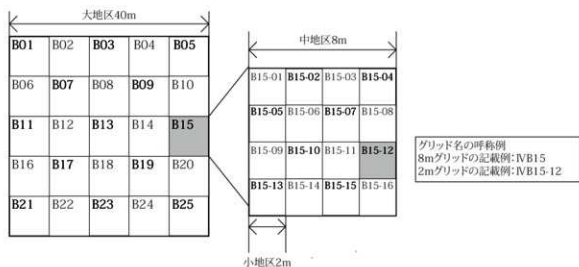
大地区は大々地区を40m×40mの25区画に分割したもので、北西から南東へA～Yまでの大文字アルファベットを用いた。中地区は大地区を8m×8mの25区画に分割したもので、北西から南東へ1から25の算用数字を用いた。遺構測量の基準・単位としたのがこの中地区画である。

(3) 調査区の設定と遺構の発掘

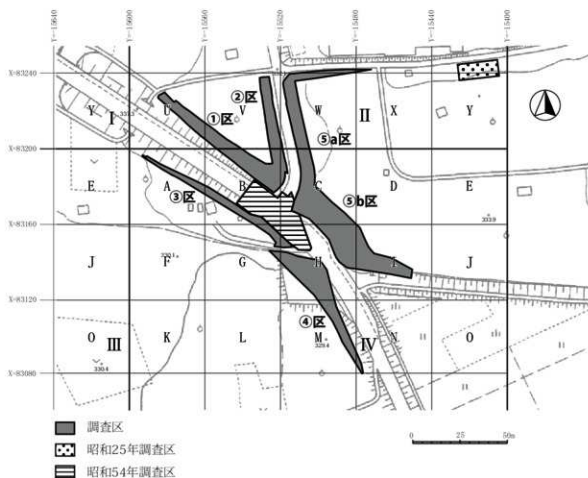
調査区の設定と掘削 第3図のとおり、①～⑤区の調査区を設定した。平成23年度は①区、②区、④区、平成24年度は③区、平成25年度は⑤区の調査を実施した。⑤区は屈曲部に境に北側を⑤a区、南側を⑤b区とした(註2)。なお、④区は盛土が厚いため、面的な調査は安全上不可能と判断し、トレンチの掘削のみで調査を終了した。

④区以外では、表土を重機で除去し、遺構検出を行なった。遺構検出面は、調査区により微妙に異なる

が、基本土層Ⅲb層上部からⅣ層上面で遺構検出を行ない、遺構の調査を実施した。調査面は基本的には1面であるが、⑤b区では弥生時代の調査面（第1検出面）の約20cm下面の、Ⅴa層で縄文時代前期の遺構の調査を実施した（第2検出面）。検出面で遺構の形状を確認したのち、セクションベルトを残し、両刃鎌および移植ゴテで掘り下げた。トレンチ、かく乱等で破壊された部分については、土を埋戻し、本来の形状を復元して写真撮影をした遺構もある。



第2図 グリッドの呼称



第3図 調査区範囲とグリッド設定図

①・②・③・⑤区で確認された溝跡（SD02）は、溝底部が地表面から2mを超える深さとなるため、安全確保のため調査区壁に階段状に犬走りをつけて掘り下げたため、深い部分の調査面は地表面の調査区範囲に比べ、狭くなる。

遺物の取上げ

遺物は遺構ごとに出土層位を分けて取上げ、出土地点の記録が必要なものには遺構ごとの遺物番号を付して取上げた。番号は土器と石器を区別し、土器はP1、P2・・・、石器はS1、S2・・・と番号の前にPまたはSを付した。遺構に属さない遺物は8mグリッド単位で取上げた。金属器、有機質等の脆弱な遺物は脆弱遺物台帳を作成し遺物を管理した。

なお、炭化米および管玉等の微細遺物の有無を確認するため、以下の遺構の土壌を採取し、1mmメッシュの篩を用いた水洗選別によって、微細遺物の採取を実施した。炭化物と土器片、石器剥片・砕片を検出したが炭化米、管玉等は確認できなかった。詳細は各遺構の項目で記述する。

SB11：Pit7

SB12：炉の埋土

SB13：セクションベルト

SB14：セクションベルト、炉の埋土

SD03：セクションベルト

SK142・144：埋土

SM01・02：礫床上面・下面埋土、小口埋土

SM03・04：小口埋土。

遺構の記録

遺構平面図は、8mグリッドを基準に図面用紙に記録したものと、遺構測量支援システム「遺構くん」を用いて測量したものがある。断面図はすべて図面用紙に記録した。遺構図の縮尺は1/20の縮尺を基本とし、必要に応じて1/10の縮尺で測量した。また、トレンチ位置、調査区範囲、地形の測量は業務委託で実施した。

写真記録は35mmリバーサル・モノクロフィルム、6×7リバーサル・モノクロフィルム、一眼レフデジタルカメラを用いた。ただし、当センターの記録調査方針の変更にとまひない、35mmリバーサル・モノクロフィルムは平成23年度のみ用いた。デジタル写真のファイル名は遺跡記号と通し番号を組み合わせたものとし（例：AMH0001、AMH0002…）、LAW データと JPG 形式のデータを保存した。

2 整理事業の方法

(1) 遺物の注記と遺物管理番号

注記について

金属器以外の土器・石器は1cm角以下程度の微細な資料を除きすべてに注記をした。遺跡名はAMH(MINAMIOOHARA)、出土地点または層位は以下の略号を用いて注記をした。

注記に用いた略号 埋：覆土(埋土)、床：床面、カク：かく乱、ベ：ベルト、キ：岸(SD02に用いた)、集：遺物集中、深：深掘トレンチ、表：表土・表採、Z：出土地点不明

遺物管理番号について

資料化が必要と判断した土器、土製品および、すべての加工が認められる石器・石核について、個別に管理番号を付した。管理番号は以下のとおり付した。これらの資料は、出土地点、器種、遺物の属性などを記載した遺物管理台帳を作成した。なお、管理番号を付したが、実測図を掲載できなかった資料は、「参

考資料」として遺物観察表に記載した。

弥生時代の土器 No.1～No.807（ミニチュア土器を含む）

縄文時代の土器 No.901～No.921

縄文時代～弥生時代の石器・石製品 No.1001～No.1192

土製品・粘土塊 No.2001～No.2036

木製品・金属器 No.3001～No.3005

（2）遺物の整理について

ブラシを用いた水洗作業の後、注記マシンによる注記を行ない、土器、石器、金属器は遺物の素材別に整理を進めた。

土器・土製品は遺構別、グリッド別に器種を分類し、破片数と重量を計測した。接合作業は、遺構の当該グリッド出土土器を含めて遺構ごとに実施した。切り合う遺構群は、相互の遺構間接合を実施し、器形が推定できる竪穴住居跡出土の土器は、他の住居跡との遺構間接合を実施したが、土器群全体の遺構間接合の実態を把握するには、不十分である。

石器・石製品は、器種分類した後、石器類、石核、剥片、砕片の法量と重量の計測を行なった。剥片石器については、接合作業を実施した。接合作業は、石材別に調査区全体を対象に実施した。なお、石器群の石材分類は中村由克氏の指導のもと、整理担当の鶴田が行なった。

金属器は、発掘調査後はシリカゲルを入れてタッパーに保管し、県立歴史館の協力でX線撮影を行なった後、鉄製品と判断した資料については業務委託により保存処理を行なった。

（3）遺構図の整理

遺構図は、グリッドを基準にして図面用紙に1/20で測量したものと、遺構測量支援システム「遺構くん」を用いて測量したものがある。図面用紙に記録した遺構は、業務委託でデジタルトレースを行ない、グリッドごとに、1/20で出力したものを第2原図とした。平面図は委託業務で作成したデジタルデータをもとに全体図、個別遺構図を作成し、断面図等は図面用紙に記録したものをIllustrator CS4・CS6を用いてデジタルトレースを行なった。

（4）写真記録の整理

フィルム写真は調査年度別にアルバムに収納し、撮影内容を注記した。デジタル写真は、ハードディスクとDVDに記録し、AMH0001～AMH5401の通し番号をファイル名とし、ファイル名と撮影内容を記入した台帳を作成した。また、JPGファイルについては、ファイル名を撮影内容としたものを、別途作成し、保存した。

3 遺物と記録の収納

遺物は、材質・種別ごとに報告書掲載遺物（管理番号を付した参考資料を含む）と非掲載遺物に分けた上で、出土遺構・グリッド等の地点別にテンバコに収納し、遺物収納台帳を作成した。

遺構平面図、断面図等の実測図面は通し番号（図面番号）を付けて図面台帳に登録し、図面ファイルに収納した。

写真は、発掘作業で撮影した遺構関係写真と、整理作業で撮影した遺物写真とに分けて写真台帳に登録し、アルバムに収納した。デジタル写真データは撮影内容をファイル名とし、DVDおよびポータブルハードディスクに記録した。

第3節 遺跡・遺物の公開方法

1 公開の方法

当センターが行なう埋蔵文化財の公開は、発掘作業時に行なうもの、整理等作業時に行なうもの、報告書刊行後に行なうものなど、3つの段階がある。本書では、前2者の段階について扱う。

(1) ホームページでの公開、発掘たよりの配布

発掘調査の情報を迅速に、そして的確に公開することは、発掘調査の透明性確保という観点において重要である。当センターでは、月に1回程度、公式ホームページに調査情報を開示するとともに、遺跡来訪者のみならず遺跡周辺の住民に対し「発掘たより」を配布して、情報の早期公開・共有化を図るよう努めている。南大原遺跡では、平成23年度4回、24年度2回、25年度2回、26年度1回、27年度2回、調査状況をホームページに掲載した。また「発掘たより」は平成23年度14回、24年度2回、25年度2回配布を行なった。

(2) 現地説明会、遺跡報告会、展示会の開催

「現地説明会」は、発掘調査を進める過程で、調査状況を広く一般に公開し、説明を加えることで、より分かりやすい馴染みのある存在として遺跡を周知できる。当センターでは、年に1回～2回程度、発掘調査の進行状況に応じ現地説明会を実施するように心掛けている。時に遺跡の周辺環境により、多くの見学者を受け入れることのできない場合は、現地説明会の方法を「現地公開」（遺跡公開期間を限定し、随時、見学者を受け入れるスタイル）に変更、あるいは開催周知の広狭、公開期間の長短などを工夫し実施している。南大原遺跡では、見学者駐車場のスペースが確保できないこと、公共交通機関の利用が難しいなどの点から、「現地公開」のスタイルで平成25年10月17日（木）から24日（木）までの間、遺跡現地を公開した。「遺跡報告会」や「展示会」は、遺跡の所在する地域と、より広い地域を対象に、それぞれの場所を選定し以下のとおり開催した。

遺跡報告会

実施日	場 所	内 容
平成24年2月3日（金）	長野県埋蔵文化財センター	平成23年度調査概要
平成24年3月24日（土）	長野県立歴史館	平成23年度調査概要
平成25年2月1日（金）	長野県埋蔵文化財センター	平成24年度調査概要
平成26年2月6日（木）	長野県埋蔵文化財センター	平成25年度調査概要
平成26年3月30日（日）	中野市中央公民館	ふるさとレポート発表会
平成27年2月25日（水）	長野県埋蔵文化財センター	平成23年度～25年度の調査のまとめ

展示会

実施日	場 所	内 容
平成23年8月14日（日）	上今井区夏祭り（区民祭・文化祭）	発掘調査パネル展
平成24年1月16日（月）～1月20日（金）	長野県北信合同庁舎	発掘調査パネル展
平成24年3月17日（土）～5月13日（日）	長野県立歴史館	「長野県の遺跡発掘2012」
平成24年7月28日（土）～8月19日（日）	長野県伊那文化会館	「長野県の遺跡発掘2012」
平成24年10月1日（日）～10月9日（金）	長野県北信合同庁舎	発掘調査パネル展
平成26年2月12日（水）～2月21日（金）	長野県北信合同庁舎	発掘調査パネル展
平成27年1月23日（金）～2月20日（金）	長野県埋蔵文化財センター	発掘調査速報展「掘るしん」
平成27年3月21日（土）～6月1日（日）	長野県立歴史館	「長野県の遺跡発掘2014」
平成27年7月19日（土）～8月24日（日）	長野県伊那文化会館	「長野県の遺跡発掘2014」
平成27年11月24日（火）～12月2日（金）	長野県北信合同庁舎	写真パネル展示



発掘調査パネル展のようす(H24北信合同庁舎)



「掘るしん」展のようす(H27県埋文センター)

(3) 発掘体験や埋文体験による文化財保護思想の深化

遺跡の発掘現場は、住民が地域の歴史に対して興味と関心を持ち、埋蔵文化財保護行政に対する理解を深めるうえで、たいへん重要な場である。この意味で発掘現場を公開することは、目的をよく理解し、適切な手法（現地説明会・現地公開など）を選択することで、大きな効果を期待できる。近年では、遺跡見学者の「体感」を重視した手法として「体験発掘」を併用する事例も増えてきている。

当センターでも遺跡現地説明会の開催に合わせ、状況に応じて発掘体験を盛り込んだ「体験型現地説明会」を実施している。南大原遺跡では遺跡周辺の環境条件等により、「現地公開」のスタイルを選択せざるを得なかったが、文化庁が保存と活用を進めるための具体的な施策として挙げる「(2) 地域づくりにむけての諸施策の実施」、「(エ) 国民・地域住民のニーズに応じた公開・活用事業の実施」事例として（註3）、地元小学校とともに、遺跡の発掘調査を通じて以下の活動を実施した。

発掘現場に近い地元の中野市立豊井小学校は、学校目標に「全人的な調和のとれた児童の育成」を掲げ、地域が「願う子どもの姿」を時勢に沿って具体化、重点化する方針を打ち立てている。南大原遺跡の発掘調査に際し、非日常的な遺跡の発掘に強い関心と興味を持ち、ことに卒業を控えた6年生を対象とした地域学習、歴史教育に重点を置く教育活動を志向している。当センターでは、小学校の依頼により、発掘調査開始時から教育活動に協力を行なった。遺跡発掘調査の成果等を題材にした歴史学習（出前授業）、児童自らが遺跡を掘る体験（体験発掘）、それらを通じて感じたこと、考えたことを具体的に表現する卒業制作（土器づくり）として、6年生の総合学習を発展させた。

出前授業

平成23年5月30日（月）豊井小学校6年、タイトル「弥生時代って、どんな時代」

平成23年12月14日（水）豊井小学校6年、タイトル「土器づくり」

発掘体験

平成23年6月15日（木）午前9時～12時、豊井小学校6年

土器づくり体験（豊井小学校主催）

平成23年10月第1回製作、平成24年1月第2回製作

卒業制作発表会（豊井小学校主催）

平成24年2月24日（金）午後2時10分～55分、授業参観として発表（土器観察体験、発掘体験、土器づくり体験）、作品の鑑賞

註

- 1) 竪穴住居跡の名称については、文化庁文化財記念物課発行の「発掘調査の手引き」では従来竪穴住居（址・跡）と呼称していたものについて、「それらが必ずしも居住施設とは限らないこと、掘立柱建物や礎石建物などの建築学用語との整合を図る必要から」、竪穴建物とすることが示されている。しかし、当センターの「遺跡調査の方針と手順」では竪穴住居跡の用語を用いており、住居の機能が確認できない竪穴を「竪穴状遺構」としている。また、学史的に「竪穴住居跡」は学術用語として用いられてきたと理解している。将来的には「竪穴建物跡」の用語に統一すべきであると考えるが、本報告書ではこれらを考慮し、「竪穴住居（跡）」の用語を用いた。
- 2) 発掘作業では、⑤a区を⑤区北、⑤b区を⑤区南と呼称し、日誌、台帳等の記録にその名称を用いた。
- 3) 文化庁2007「埋蔵文化財の保存と活用（報告）—地域づくり・ひとづくりをめざす埋蔵文化財保護行政」参照。



南大原遺跡体験発掘のようす（竪穴住居跡を掘る）



出前授業のようす



土器づくり卒業制作の発表（豊井小学校）

第2章 遺跡の環境と概要

第1節 遺跡の位置と地理的環境

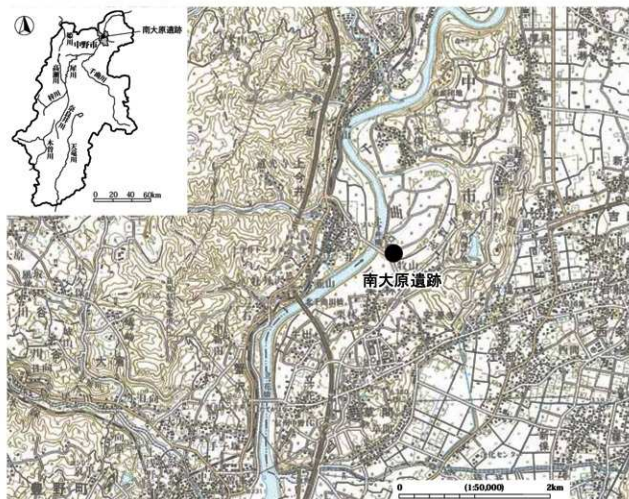
南大原遺跡は中野市大字上今井字南大原（平成の市町村合併以前は豊田村に所属）に所在する。JR飯山線上今井駅から約800m、千曲川を東へ渡った微高地にある（第4・5図）。

千曲川は群馬県境近くの甲武信ヶ岳を源流とし、佐久平、上田平、善光寺平を流れ下り、丘陵と山間地を抜けて新潟県に入り、信濃川と名前を変えて日本海に流れ込む。ことに、中野市立ヶ花から飯山市蓮地区までの区間は、長丘丘陵と米山山塊に挟まれ流路が狭く、大きく蛇行して北流する。遺跡付近は明治3年の治水対策により河道が変更されたため千曲川の東岸にあるが、かつては、川が遺跡の東側を流れており、三方を蛇行した千曲川に囲まれた環境であった。旧河道は現在水田となっており、上空から見ると帯状にその位置が確認できる。旧河道の対岸の段丘上には栗林式土器の標識遺跡である県史跡の栗林遺跡がある。

但し、弥生時代における南大原遺跡と千曲川的位置関係は、明らかではない。現在の流路がかつては湿地帯であったことが指摘されており（註1）、現在の千曲川のように遺跡の西側を川が流れていた可能性もある。弥生時代の河道がどこであったのか、栗林遺跡との関係を考える上で検討すべき課題である。



上空より南大原遺跡を望む（平成4年撮影）



第4図 南大原遺跡の位置 (1 : 50,000)



第5図 南大原遺跡周辺の弥生時代中期後半から後期前半の主な遺跡 (南から見た鳥瞰図)

第2節 周辺の遺跡と歴史的環境

南大原遺跡では、昭和25年からの4次にわたる発掘調査で、縄文時代前期、弥生時代および古墳時代前期の遺構と遺物が発見されている（註2）。縄文時代、弥生時代以外の遺物はほとんど見られず、古墳時代前期の方形周溝墓1基が確認されているのみで、それ以後の遺構は確認されていない。本節では、南大原遺跡近隣の遺跡の概要と、善光寺平周辺の弥生時代遺跡を概観する。

まず、南大原遺跡周辺の遺跡の概要を、時代ごとに述べる（第6図、第4表）。

旧石器時代：中野市の牛出窟跡（99）、沢田鍋土遺跡（126）、がまん淵遺跡（141）、長野市南曾峯遺跡（237）などでブロックが確認されている他、浜津ヶ池遺跡（90）、安源寺遺跡（106）、立ヶ花表遺跡（136）などでも旧石器時代の石器群が出土しており、千曲川兩岸の丘陵上に遺跡が点在している。沢田鍋土遺跡（126）、がまん淵遺跡（141）は、長野県でも最古段階に位置づけられている（大竹2010）。また、本遺跡の隣接地域には、日本有数の遺跡密度を示す野尻湖遺跡群や、新潟県津南町周辺の遺跡群がある（註3）。

縄文時代：草創期は南曾峯遺跡（237）でわずかな土器と石器が発見されている。早期では、がまん淵遺跡（141）で沈線文系の土器が、前期では立ヶ花遺跡（115）で前期後半の土器がまとめて出土している。中期では集落遺跡が増え、柳沢遺跡（18）、千田遺跡（63）、宮反遺跡（66）、姥ヶ沢遺跡（68）、栗林遺跡（94）で竪穴住居跡等の遺構が確認されている。また、風呂屋遺跡（65）では中期前葉の北陸系の土器が、千田遺跡では中期後葉の火焔型土器や東北系（大木式）の土器が、栗林遺跡（94）では関東系（加曾利E式）の土器が出土するなど、他地域との交流が認められる。また、姥ヶ沢遺跡（68）ではほぼ完全に復元される土偶が、千田遺跡では200点を超える土偶が出土している（中野市教育委員会1983、長野県埋蔵文化財センター2013b）。後期には、栗林遺跡で集落跡と貯蔵穴および水さらし場、千田遺跡では石槌墓群などの墓域が確認された。この他、飯綱平遺跡（37）、南大洞遺跡（64）、風呂屋遺跡（65）、山根遺跡（87）、新野遺跡（191）などで後期の土器が発見されているが、中期に比べ集落遺跡の数は少なくなる。晩期には遺跡が少なく、集落跡は確認されていない。替佐遺跡群川久保遺跡（51）、千田遺跡（63）、南大洞遺跡（64）、山根遺跡（87）、牛出遺跡（93）、立石ヶ丘遺跡（224）、南曾峯遺跡（237）で晩期の遺物が確認されている。

なお、飯綱平遺跡、沢田鍋土遺跡では中期と後期の粘土採掘跡が確認されており、長野県内では、縄文時代の粘土採掘跡の数少ない資料である（豊田村教育委員会2005、長野県埋蔵文化財センター1997）。

弥生時代：栗林式土器の標識遺跡である栗林遺跡（94）が千曲川旧河道の東岸に対峙している。栗林遺跡は中期後半から後期の集落遺跡であり、一部が県史跡に指定されている。千曲川上流域では、安源寺遺跡（106）、立ヶ花表遺跡（135）、南曾峯遺跡（237）、下流域では柳沢遺跡（18）、琵琶島遺跡（40）、替佐遺跡群川久保遺跡（51）、千田遺跡（63）などの中期後半から後期の集落跡が点在する。また、長丘丘陵の東側の榎野やその先に広がる夜間瀬川等の扇状地上には、七瀬遺跡（80）、西条・岩船遺跡群（152）、新野遺跡（191）、間山遺跡（194）などの集落遺跡が確認されている。

この他、笠倉遺跡（38）では有孔石剣（石戈）、七瀬遺跡では木製農具など弥生中期後半の希少な遺物が見つかっている。後期には、がまん淵遺跡（141）、七瀬遺跡などのように北陸系土器が確認される遺跡が見られるようになる。がまん淵遺跡は、北陸地方にみられる斜面中腹に環濠を備えた、高地性の防衛的集落と評価されている（長野県埋蔵文化財センター1997）。安源寺遺跡では弥生時代後期と考えられる粘土採掘跡が確認されている。

南大原遺跡周辺では、琵琶島遺跡、千田遺跡、栗林遺跡、七瀬遺跡などで中期後半、後期前葉、後期後

半の集落跡が確認されているが、中期前半の集落跡は確認されていない。また、中期後半と後期の集落跡が同じ場所に営まれる例は見られず、同じ遺跡内でも地点を異にする傾向にある。

なお、善光寺平（長野盆地）から奥信濃の千曲川にかけて、中期後半（栗林式）から後期（吉田式、箱清水式）の集落跡が群を成して多数確認されている（第7・8図、第5表参照）。笹澤浩氏は、これらのまとまりを遺跡群としてとらえている（笹澤2008・2009）。近年の発掘調査により多数の遺跡の内容が明らかとなり、遺跡群研究ができる資料が整ってきたといえよう。遺跡群の概要は、第7章で述べる。

古墳時代：千曲川沿岸には、牛出遺跡(93)（前期）・牛出窯跡(99)、替佐遺跡群川久保・宮沖遺跡(51)（中期～後期）などの集落跡が確認されている。千曲川に流れ込む夜間瀬川など扇状地上には神宮寺遺跡(23)や新野遺跡(191)など中期から後期の集落跡が確認されている。この他、前期の粘土採掘跡が見つかった沢田鍋土遺跡(126)、中期の祭祀遺跡とされる新井大ロフ遺跡(61)がある。

近隣の古墳を見ると、弥生時代終末から古墳時代初頭とされる安源寺遺跡(106)の前方後方形埴土墓が当地域の古墳の成立過程を考えるうえで注目される。また、千曲川東岸の長丘丘陵上には、中畝(53～57)、林畔(69・70)、七瀬(73～77)、高山(122・123)などの古墳群が見られたが、工事等で消滅した古墳も多い。西山古墳(129)、京塚古墳(130)など調査された古墳もあるが、詳細は明らかにされていない。ほかに、円筒埴輪を出土した前方後円墳の七瀬双子塚古墳(73)、馬具・銚留短甲を出土した林畔1号古墳(69)などがある。本遺跡からは東方の山地の裾野には、県内で古く位置づけられる、前方後方墳の蟹沢古墳(212)、前方後円墳の高遠山古墳(181)があり、6世紀代の合掌形石室をもつ金鑑山古墳(188)も存在する。

千曲川西岸では、銀象嵌の鐙を出土した南曾峯古墳(239)、7世紀代の風呂屋古墳(82)などが確認されている。

奈良・平安時代：奈良時代の集落跡は、壁田遺跡(30)、替佐遺跡群(51)、沢田鍋土遺跡(126)などで確認されている程度で、発見例が少ない。平安時代では、飯綱平遺跡(37)、替佐遺跡群(51)、風呂屋遺跡(65)、宮反遺跡(66)、牛出遺跡(93)、栗林遺跡(94)、安源寺遺跡(106)など千曲川沿いにある遺跡と、西条・岩船遺跡群(152)、上小田中遺跡(169)、新野遺跡(191)、間山遺跡(194)、小布施町の中子塚遺跡(253)、大道上遺跡など千曲川に流れ込む河川の扇状地上にある遺跡が確認されている。

遺跡の南方の丘陵上に高丘丘陵古窯跡群が広がっており、発掘調査等で、7世紀末～9世紀の須恵器の窯跡が51基確認されている。これらの窯跡は、茶臼峯、立ヶ花、立ヶ花表、牛出などの支群に分かれている（長野県埋蔵文化財センター1997・2013a）。その中には瓦陶兼用窯がある池田端窯跡(118)、「高井」・「佐玖郡」などの刻書がある須恵器が発見された清水山窯跡(127)など奈良時代の窯跡が多く見つかっている。また、沢田鍋土遺跡では奈良時代の土器製作の工房跡、池田端窯跡では粘土採掘跡が確認されている。

中世・近世：中世には北城城址(81)、南城城址(86)、安源寺城跡(103)、茶臼峯砦跡(112)、立ヶ花城跡(135)、草間城跡(143)、手子塚城跡(235)などの山城と、大俣城跡(67)、風呂屋居館址(83)、内堀館跡(88)、牛出城跡(114)、大久保館跡(121)などの館跡またはその推定地がある。

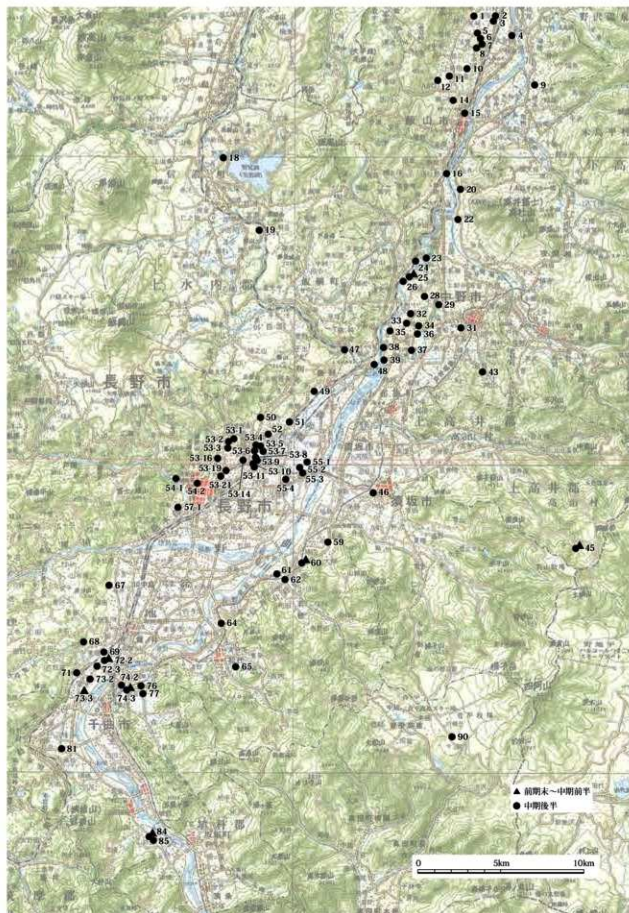
近世には、遺跡の旧河道の対岸には栗林船着場があり、舟番所遺構と指摘される建物跡が確認されている（中野市教育委員会1995）。

なお、第4表遺跡地名表で市町村遺跡番号が空欄の遺跡は、『川久保・宮沖遺跡』（長野県埋蔵文化財センター2013b）より引用した遺跡である。

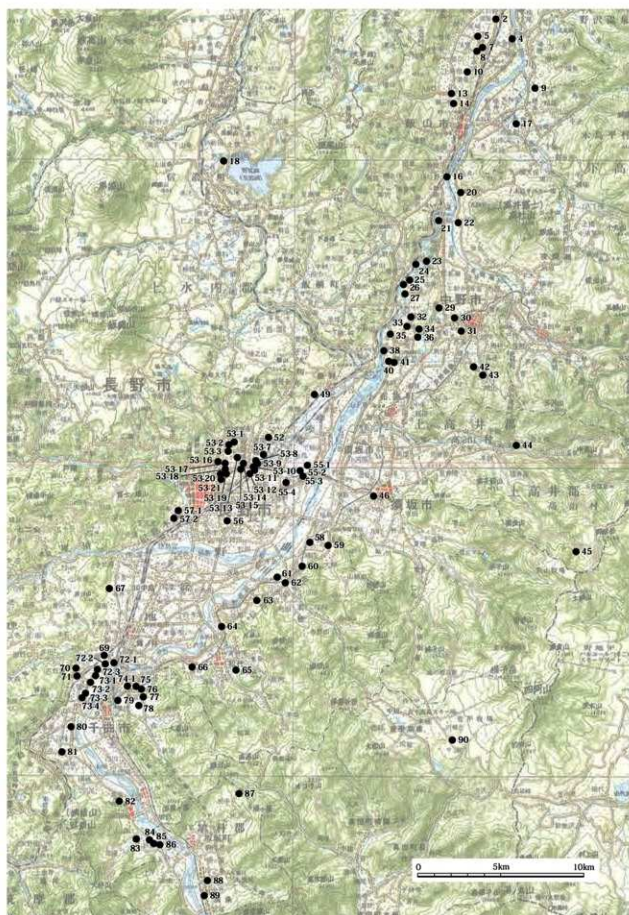


第6図 南大原遺跡周辺遺跡分布図 (1 : 50,000)

市町村名	掲載番号	遺跡名	石室	縄文	弥生	古墳	中世	近世	備考(発掘調査期)	市町村道路番号	掲載番号	遺跡名	石室	縄文	弥生	古墳	中世	近世	備考(発掘調査期)	市町村道路番号		
中野市	135	立ヶ花城跡	○	○	○	○			山城 1980-1984・2006	87	204	大円寺							寺院	13		
	136	立ヶ花表	○	○	○	○			1962-2007・2008	91	205	板沢遺跡群	○	○	○	○				1965・1969	3	
	137	立ヶ花1号墳								88	206	蟹沢塚								古墳・中世の塚	4	
	138	立ヶ花2号墳								89	207	二十瀬城跡・滝ノ入城跡									山城	1
	139	立ヶ花3号墳								90	208	中尾	○	○	○	○					2	
	140	鳥軒割								86	209	小丸館										
	141	がまん淵(湧)	○	○	○	○			1991-1993	92	210	板沢1号古墳									5	
	142	竜徳寺跡								93	211	板沢2号古墳									古墳	6
	143	草間城跡							山城	94	212	板沢3号古墳									蟹沢古墳(市史跡)	7
	144	川端								85	213	板沢4号古墳									1981	8
	145	草間中組								98	214	板沢5号古墳										9
	146	殿橋								84	215	板沢6号古墳										10
	147	屋裏								87	216	西山岩跡									山城	15
	148	吉田宮跡							2009-2010	76	217	真山城跡									山城	33
	149	五里原								75	218	左衛門屋敷										
	150	寿町								74	219	沼ノ入城跡									山城	14
	151	岩船								72	220	ツツ石										3
	152	西条・岩船遺跡群							1989~1995	69	221	極楽寺跡									寺院	49
	153	岩船氏居館							居館	70	222	小野井										46
	154	三好町							(風史跡)	70	223	箕野田										58
	155	中野野庁跡							居館(国史跡)1989~1992-1994-1998-1999	55	224	立石ヶ丘									1978	7
	156	高梨氏館跡							居館	55	225	八幡社										4
	157	中野小館							居館	52	226	板橋										5
158	曹代	○	○	○	○			1981	62	227	下張										6	
159	栗和田1号古墳								62	228	大道浜										17	
160	栗和田2号古墳								63	229	町尻	○	○	○							16	
161	竹のところ									230	観音堂										12	
162	旗塚								58	231	機場										13	
163	旗塚								59	232	中島										10	
164	帯之瀬城跡							山城	57	233	坊溜										101	
165	鴨ヶ嶽城跡							山城(風史跡)	54	234	手子塚										47	
166	西条長屋塚							西条長屋城跡を改葬	68	235	手子塚城跡										山城	80
167	西条東屋敷	○	○	○	○			居館 1998-2014	67	236	膳棚										77	
168	五加								66	237	南曾峯	○	○	○	○	○				1980-1993-2005-2007	8	
169	上小田中	○	○	○	○			1971-1997-1998	44	238	峠の煙										11	
170	下小田中	○	○	○	○				45	239	南曾峯古墳										9	
171	光念寺古墳								45	240	北久保	○	○	○							66	
172	上小田中経塚								51	241	土橋・川強										67	
173	経塚							1966-1968	49	242	横約										68	
174	姥懐山古墳							1967 酒蔵	50	243	西郷										1	
175	北郷巻	○							47		くぬぎ塚 高梨氏居館											
176	中郷								41													
177	伊勢山下							1968	48	245	向屋敷	○	○	○							2	
178	上の山古墳								43	246	西薬坊	○	○	○							3	
179	然武山一乗院跡								42	247	三木	○	○	○							4	
180	新保								22	248	六川	○	○	○	○						5	
181	高滝山古墳							(風史跡)1997-1999	38	249	松宮	○	○	○	○						8	
182	寺上								39	250	権谷藩六川陣屋										近世陣屋	
183	間瀬場								40	251	三田町	○	○	○	○						9	
184	藤井店跡							居館 型跡 内田屋敷	21	252	道添										6	
185	行人塚								26	253	中子塚	○	○	○	○						1978	7
186	道添								20	254	鎌子塚古墳											16
187	三ツ和								19	255	中条塚	○	○	○	○						1953-1976-1977	10
188	金鷲山古墳							(市史跡) 1925	23	256	古穴塚古墳											17
189	新野1号古墳								24	257	中野	○	○	○	○							12
190	新野2号古墳								25	258	木戸脇	○	○	○	○							22
191	新野	○	○	○	○	○		1990-2002-2010	28	259	飯淵前	○	○	○	○							21
192	新野陣屋跡							近世陣屋	29	260	下人4号墳											37
193	新野上東							1983	30	261	下人5号墳											38
194	間山							1958-1983-1991-1992	31	262	下人6号墳											39
195	間山館							居館	37	263	わぐ	○	○	○								20
196	道光岩跡							山城	37	264	二十瀬城跡										山城	25
197	岸梨							1879	32	265	二十瀬1号墳											33
198	文び十山古墳								18	266	二十瀬2号墳											34
199	専福寺跡								17	267	二十瀬3号墳											35
200	大隈日影								16													
201	小曾屋城跡							山城	27	268	龜屋敷											8
202	大日前							時期不明	11													
203	大熊日向	○	○					大熊日影遺跡を改葬	12													
中野市																						
長野市																						
小布施町																						
飯綱町																						



第7図 長野盆地周辺の弥生時代中期遺跡分布図



第8図 長野盆地周辺の弥生時代後期遺跡分布図

掲載番号	市町村名	遺跡名	中期	後期	その他の遺構	備考
1		押出	○		方形周溝墓?	
2		光明寺前	◎	○		
3		照丘	◎			木製品
4		上野	○	◎	木棺墓群	
5		柳町	◎	◎	木棺墓	
6		西面寺	◎		中期土器集中	
7		小泉	◎		木棺墓	楕状木製品
8		東長峰	◎	◎		ヤリガンナ、板状製品、釘状製品等、陶、土製勾玉
9		尾崎	◎	◎		
10		針淵池(田針尾池)	◎		円形・方形周溝墓	
11		短野遺跡群北原	◎			
12		短野遺跡群新吉田	◎			
13		小佐原(旧 城端遺跡)	◎			
14		須多ヶ峯	○	◎	周溝墓	鉄剣、勾玉
15		北町	◎			
16		田原川尻	◎	◎		
17	木島平村	根塚		○	墳丘墓	鉄剣
18	信濃町	仲町	◎	○		
19		山根	◎			
20		田上遺跡群	◎	◎		
21		古牧	◎	◎		
22		柳沢	◎	◎	竪床木棺墓、溝、青銅器埋納坑、木田、土器墓	シロ絵土器、銅文、銅牌、管玉
23		経懸島(渡輪)	◎	◎		
24		笠倉(含、川原遺跡)	○	◎		有孔石剣
25		妙佐遺跡群(川久保・宮沖・原沼・小宮)	◎	◎	水田跡	
26		千田	◎	◎		
27		宮反	◎			
28		鏡ヶ沢	◎			
29		七瀬	◎		水田跡	木製農具、銅網、ヤリガンナ、鉄剣、ガラス玉、管玉、北陸系土器
30	中野市	吉田宮脇(含、吉田屋敷下、吉田立遺跡群)	◎			
31		西条・岩船遺跡群	◎		土坑墓	ガラス小玉
32		南大原	◎	◎		鉄矛、鉄鏃、細形管玉、滑石勾玉未成品?、板状木製品
33		栗林	◎	◎	木棺墓、竪床木棺墓、溝、環塚?	石文、石剣、細形管玉、勾玉
34		安原寺城跡	○	◎	南方後方形墳丘墓	
35		牛田	◎			
36		安原寺	◎	◎	土坑墓群、粘土探掘坑	陶、ガラス玉
37		高屋敷	◎			
38		立ヶ花	◎	◎		
39		立ヶ花城跡	◎			管玉
40		立ヶ花表	◎			
41		がまん洞(含、西山宗跡、西山中世墓址)	◎	◎	環塚、櫓列	滑石製勾玉、北陸系土器
42		新野	◎			
43		間山	◎	◎		
44	高山村	長峯	◎	◎		
45	須坂市	湯倉洞窟	◎	◎	敷石	青銅、骨針、骨器
46		須坂農業高校校庭	○	○		
47		尚平	○			
48		南曾峯	○		環塚?	
49		北土井下	○	○	環塚?	
50		牟礼バイパスD	◎			
51		三才遺跡群三才田子	◎			
52		浅川扇状地遺跡群徳間本堂原	◎	◎	竪床木棺墓	
53-1		浅川扇状地遺跡群神楽橋	◎	◎		
53-2		浅川扇状地遺跡群横田	◎	◎	竪床木棺墓、木棺墓、溝、土坑墓、土器棺墓、円形周溝墓	石製品(細形管玉・太形管玉)、鉄剣、銅網、北陸系土器、東海系土器、鈴鐺車、勾玉、管玉、小玉
53-3		浅川扇状地遺跡群浅川端	◎	◎		
53-4		浅川扇状地遺跡群徳間	○			鉄片
53-5		浅川扇状地遺跡群徳間柳田	◎		溝	
53-6		浅川扇状地遺跡群本郷	◎		溝	
53-7		浅川扇状地遺跡群二ツ宮	◎	◎		
53-8		浅川扇状地遺跡群鉢爪	◎	◎	溝、土器集中	
53-9		浅川扇状地遺跡群説巳池	○	◎		

第5表 長野盆地周辺の弥生時代遺跡地名表

掲載番号	市町村名	遺跡名	中期	後期	その他の遺構	備考	
53-10		浅川屈状地遺跡群吉田古屋敷	◎	◎	木棺墓、土器棺墓	ガラス玉	
53-11		浅川屈状地遺跡群吉田四ノ屋	◎	◎	土器棺墓	管玉、ガラス玉	
53-12		浅川屈状地遺跡群新幹線地点		○		鉄剣	
53-13		浅川屈状地遺跡群長野吉田高校グラウンド		◎		土製勾玉、土製紡錘車、勾玉	
53-14		浅川屈状地遺跡群吉田町東	◎	◎	溝		
53-15		浅川屈状地遺跡群福原宮北	◎	◎	方形周溝墓	馬歯	
53-16		浅川屈状地遺跡群本村東沖	◎	◎	円形周溝墓、木棺墓、土器棺墓	鉄剣、銅劍、鉄鍬、北陸系土器、管玉、ガラス玉、人骨	
53-17		浅川屈状地遺跡群下宇木		◎			
53-18		浅川屈状地遺跡群長野女子高校校庭		◎		北陸系土器	
53-19		浅川屈状地遺跡群三輪	○	◎			
53-20		浅川屈状地遺跡群三輪小学校		◎			
53-21		浅川屈状地遺跡群本郷前		◎			
54-1		長野遺跡群新築田町	◎	◎	配石遺構		
54-2		長野遺跡群西町		◎			
55-1		小島・柳原遺跡群中俣		◎			
55-2		小島・柳原遺跡群水内里一元神社	◎	◎	溝、周溝墓、環溝	銅製木盾、木製槍先、弓、平刀、鋤、櫛、北陸系土器	
55-3		小島・柳原遺跡群宮西		◎			
55-4		小島・柳原遺跡群小島堤		◎			
56		稲花川屈状地遺跡群入幡田神		◎	溝		
57-1		安茂里遺跡群平楽平		◎	方形周溝墓		
57-2		安茂里遺跡群大門		◎			
58		鍋内遺跡群高野		◎		土製勾玉	
59	長野市	鍋内遺跡群横田	◎	◎	墓、溝、環溝、周溝墓	有孔石剣、指輪状石製品、銅劍、銅鍬、紡錘車、勾玉、管玉、ガラス玉	
60		暮山田	◎	◎	溝、周溝墓、墓、水田跡、井戸、遺物集積	板状鉄斧、銅劍、木器、管玉、ガラス小玉、布、人骨	
61		町川田(町川田桑里・水田桑里)	◎	◎	◎	衆棺墓	
62		川田桑里遺跡群川田桑里	◎	◎	◎	水田跡、方形周溝墓、水田跡	木材、勾玉、管玉、農具
63		村東山手		◎	◎	土坑墓	鉄剣、ガラス玉
64		松原	◎	◎	◎	環状木棺墓、木棺墓、井戸跡	漆塗堅楯、漆塗小型酒杯、木製曲柄平楯、木製鎌、木製臼ほか、人面付土器、記号付土器、土製勾玉、輪軸形土製品、意形土製品、鉄剣形石剣、有樋式石文、鉄石文、勾玉、管玉、指輪状石製品、釣針形石製品ほか、骨鏃、牙鏃、骨針、猪牙製輪軸ほか
65		稲地	◎	◎	◎	衆棺墓、衆石遺構	鉄製品
66	四ツ屋		◎	◎	溝	銅劍、土骨、紡錘車	
67	光林寺裏山		◎	◎		板状鉄斧、袋状鉄斧、勾玉、細形管玉	
68	湯の入上		◎	◎			
69		石川桑里遺跡群	◎	◎		骨角製品、銅鍬、帯状円環型銅劍、異形土製品、土骨、ガラス小玉、管玉	
70		四野宮		◎			
71		長谷橋前遺跡群鏡前	○	◎		銅劍	
72-1		篠ノ井遺跡群新幹線地点		◎	周溝墓		
72-2		篠ノ井遺跡群高速道路地点		◎			
72-3		篠ノ井遺跡群聖川堤防地点		◎		鉄剣、鉄鋼、鉄鍬、指輪状青銅製品	
73-1		塩崎遺跡群観屋敷		◎	方形周溝墓		
73-2		塩崎遺跡群塩崎小学校		◎		紡錘車、密玉、管玉	
73-3		塩崎遺跡群松節	○	◎		広縁銅剣器片、石剣	
73-4		塩崎遺跡群中委		◎			
74-1		塩代遺跡群大境		◎			
74-2		塩代遺跡群尻井		◎			
74-3		塩代遺跡群高速道路地点		◎			
75		市宮遺跡群灰塚		◎		銅鍬	
76		市宮遺跡群大宮		◎	溝		
77		市宮遺跡群生仁		◎		鑿形打石斧、鹿角、骨角器、土骨	
78	千曲市	更埴桑里		◎			
79		塩代遺跡群新幹線地点		◎		銅鍬、ヤリガンナ	
80		八幡遺跡群六反田		◎			
81		塚原坂	○	◎	土器棺墓		
82		館塚		◎		細形銅劍	
83		御原敷		◎		銅劍	
84		力石桑里遺跡群	◎	◎	円形墓、土坑墓、溝	土偶、玉頸、骨角製品	
85		薬師堂		◎			
86		西沖		◎			
87		和平A		◎			
88		城町横尾		◎			
89		塚田遺跡(田端)		◎	溝	板状鉄斧	
90	上田市	陣ノ岩岩陰	○	◎		骨角器、銅劍	

◎は住所跡が確認された遺跡

第3節 南大原遺跡の概観

1 遺跡の範囲

南大原遺跡の遺跡範囲は、市教委が示す遺跡地図に示されている（中野市教育委員会2014）。今回の発掘調査により遺跡範囲が若干北側に広がったが（第9図）、遺跡範囲の北端に位置する㊦a区で弥生時代の堅穴住居跡を検出しており、昭和25年に確認された縄文時代前期の堅穴住居跡の調査区（推定地）も遺跡境界の北端にあることから、遺跡の範囲はさらに北に広がる可能性が高い。

2 発掘調査歴

今回の発掘調査を含め、4次にわたる発掘調査が実施されている（第10図）。発掘対象範囲の大半は、一般県道三水中野線の道路建設に関わる部分である。現在、遺跡は果樹園として利用されているところが多く、その大半は未調査で保存されていると考えられる。発掘調査で、縄文時代前期、弥生時代中期・後期、古墳時代前期の遺構が検出されている。南大原遺跡の発見と調査の履歴は以下のとおりである。

昭和25年（1950年）、神田五六氏が弥生土器を発見し、遺跡であることが明らかとなった（註4）。その後昭和32年、昭和54年に発掘調査が行なわれており、縄文時代前期、弥生時代中期後半から後期の集落跡が確認されている（註5）。今回報告する平成23年～25年の発掘調査では、縄文時代前期と弥生時代中期後半から後期、古墳時代前期の遺構が検出された。また、遺跡内に奈良・平安時代の土師器が散在しているようであり（豊田村教育委員会1980）、当該期の集落跡の存在が想定される。既存の発掘調査成果の概要は以下のとおりである。

昭和25年11月に、神田五六氏と飯山南高校豊井分校生徒・上今井地区有志・北信学生考古学会有志による発掘調査が行なわれた。約24㎡を調査し、縄文時代前期諸磯a式の堅穴住居跡？を検出。住居跡は約4m×6～7mの長方形であつたらしく、柱穴は確認されていたものの、「壁や溝のようなものは全然認められず、従って、堅穴ではなかったと思われるが、調査が不徹底だったので断定は差し控えたい。」と報告されている（神田五六1951）。諸磯a式土器、石鏃、石匙、玦状耳飾、石皿、凹石、ニホンジカ、イノシシの骨の小破片（土器内出土）などの遺物が出土した。

昭和32年（1957年）の調査では、溝状遺構を発掘し、弥生時代後期の土器が出土した（桐原健1967）。

昭和54年（1979年）の道路建設に伴う発掘調査では、弥生時代中期後半の堅穴住居跡3棟と、弥生時代中期後半から後期前半の小堅穴5基が検出された（豊田村教育委員会1980）。昭和25年の調査で縄文時代前期南大原式土器を検出した地点の南西約100m離れた地点の調査である。第5節まとめの中で、高橋桂氏は「本遺跡出土土器が該地方弥生中期後半から同末期にいたる土器型式を考える上で重要な示唆を私達に与えてくれたことを素直に喜びたい。」と発掘調査の総括をしている。また、昭和25年の調査で検出された遺構・遺物の時期が異なることなどを考慮し、「将来、南大原遺跡B地点として分離する方がよいかも知れない。」としていることを付記しておく。

なお、南大原遺跡は、前期後半の土器型式、南大原式の標識遺跡である。南大原式は、1950年に神田五六氏が発掘した資料を基準に型式設定されたもので（信濃史料刊行会1956）、この時出土した南大原式土器の内1点は、東京国立博物館で展示・保管されている。



東京国立博物館に展示されている土器

第4節 調査成果の概要と基本層序

1 調査成果の概要

一般県道三水中野線建設に伴う発掘調査は、調査対象地区を①区～⑤区に区分し、平成23年度に①・②・④区、平成24年度に③区、平成25年度に⑤区の調査を実施した（第11図）。

検出された遺構・遺物は、縄文時代前期、弥生時代中期後半から後期、古墳時代前期のものである。この他、須恵器破片、近世以降の陶磁器が少量出土したのみで、他の時代の遺構・遺物はなかった（第12・13図）。

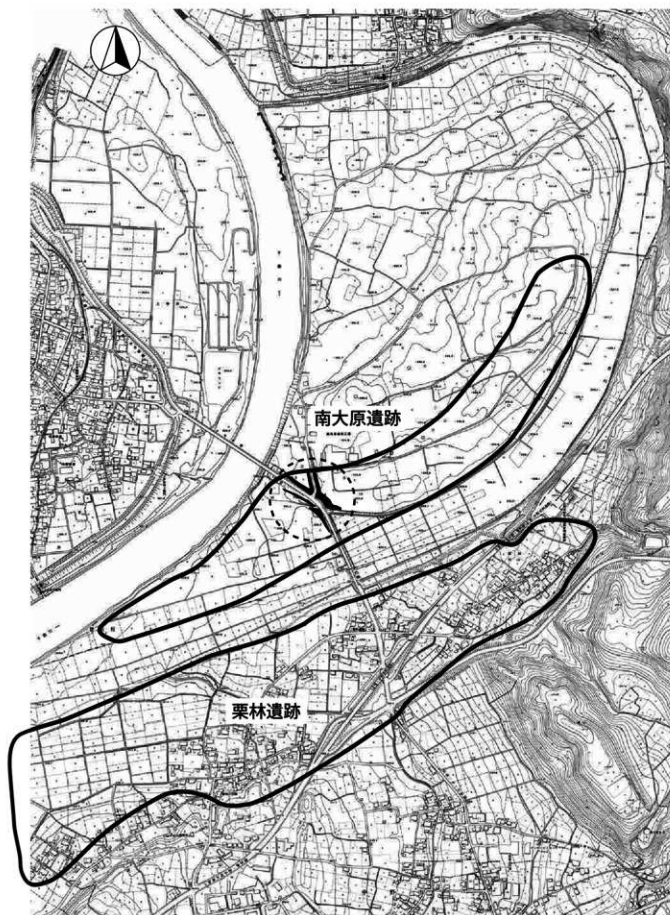
縄文時代では、前期の竪穴住居跡が1棟と時期不明の土坑2基が確認され、土器（前期、中期、後期）と石器が少量出土しているのみである。

弥生時代では、竪穴住居跡9棟（中期後半7棟、後期前葉2棟）、竪穴状遺構1基、掘立柱建物跡6棟、礎床木棺墓3基、木棺墓2基、土坑18基、ピット群6ヶ所（註6）、柵列1基、溝跡4条（中期後半）を検出した。土坑は柱穴状の小さなピットが大半を占めるが、土坑墓と推定できるものが2基ある。竪穴住居跡では、床面に複数の顕著な焼土跡を確認できるものがあり、鍛冶関連遺構の可能性を検討した。遺物では、弥生時代中期の竪穴住居跡（SB11・12、SB13、SB14）から鉄鏃および鉄斧と推定できる鉄器が出土した。石器類は磨製石鏃、磨製石斧などの磨製石器の他、擦切り具などの特殊な工具類、鍛冶遺構に関わる可能性がある敲石や台石などの礫石器が多数出土した。また、包含層からではあるが、木製品の破片と思われる炭化材が出土した。

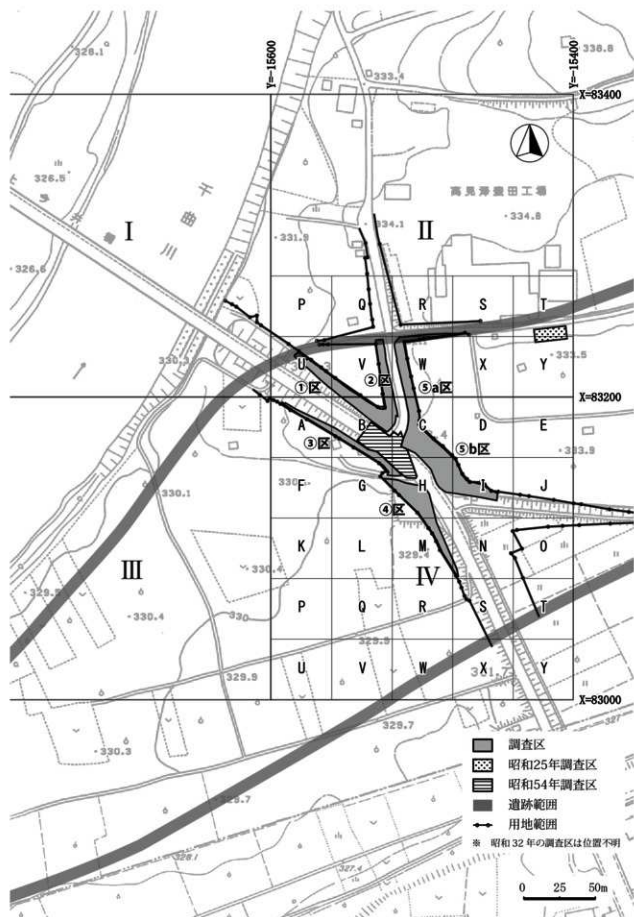
古墳時代では前期の方形周溝墓1基（SD03）を確認した。調査時には弥生時代後期の遺構と判断していたが、整理作業で遺構覆土から土師器が見つかり、SD03は古墳時代の遺構であることが判明した。



南大原遺跡 調査区遠景



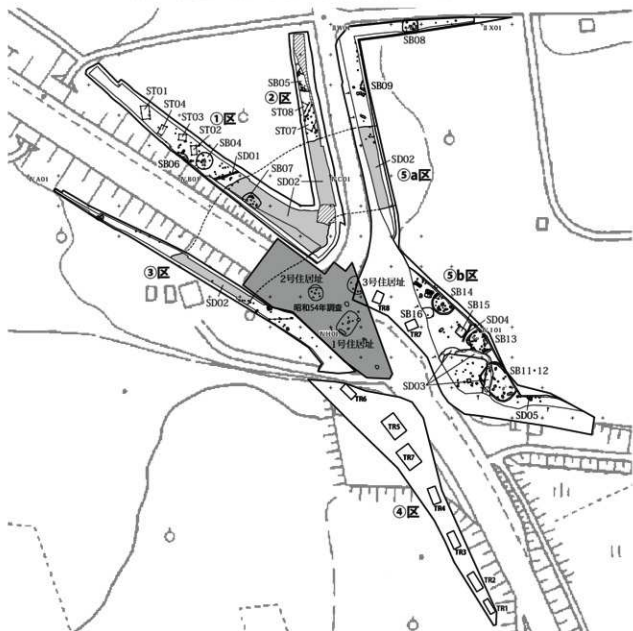
第9図 南大原遺跡の範囲と調査地点 (1 : 10,000)



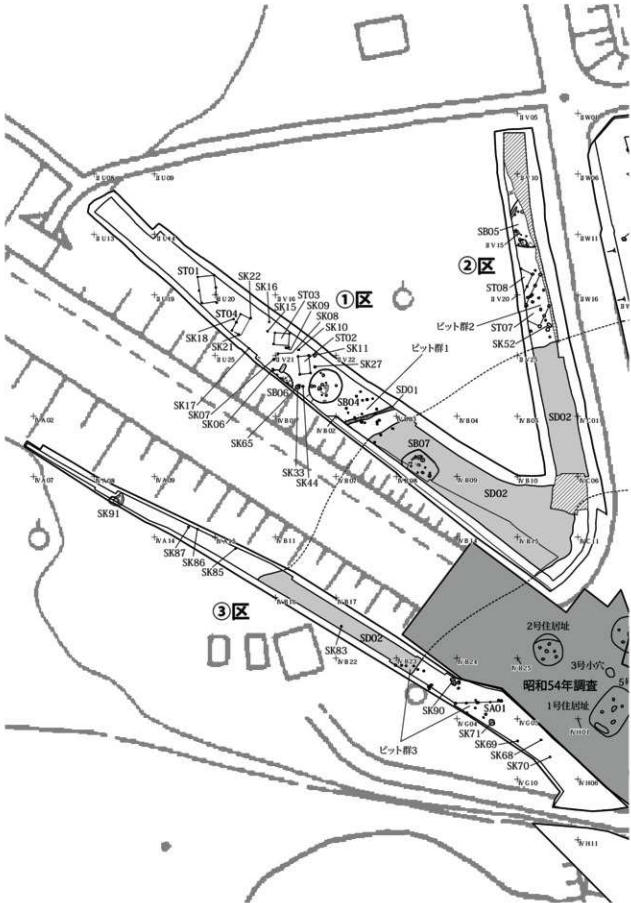
第10図 遺跡範囲と調査区範囲



昭和54年調査区(東から)(中野市教育委員会1980より)



第11図 三水中野線建設に伴う発掘調査全体図(1:1,000)



第12図 南大原遺跡①～③区遺構配置図 (1 : 500)

2 基本層序

調査区が3ヶ所に分断されており、調査区間の土層の連続的な対比はできなかったが、遺跡全体では、基本的にI層からIV層の基本層序が確認できる(第14・15図)。I層が褐色砂質土で表土(耕作土)、II層が黒褐色砂質土、III層がシルト質の黒褐色土、IV層がシルト質の暗褐色土である(以下の文章および図版の土層断面図の注記では、「シルト質の土壌」を「シルト」と表記する。)。III層が弥生時代の遺物包含層、IV層が地山である。調査区により、各土層の色調や土質が一樣ではなく、基本層序の細分は調査区間で差が生じている。そこで、①区中央部の(第14図B地点)を基本層序とし、調査地区ごとに複数地点の土層柱状図を第15図に示した。深掘トレンチ等で、IV層より下位の土層を提示している箇所があるが、調査区により色調が異なっており、対比ができないため、IV層より下位の砂層(または砂質土)をV層群、シルト層をVI層群とし、地区ごとに層名を付した。

なお、④区は厚い盛土があり、トレンチ調査の一部で旧表土が確認されたのみで、プライマリーな土層が確認できなかった。基本層序の各層は以下のとおりである。

I層: 褐色砂質土 (Hue10YR4/4)。表土(耕作土)。粒子が細く粘性、しまり無し。①・②区ではI a～I c層に分層され、⑤区ではI a～I d層に分層される。

II層: 黒褐色砂質土 (Hue10YR2/3)。粘性が非常に弱い。

III層: 黒褐色シルト (Hue10YR2/2)。粘性が弱い。しまり有り。①・②・③・⑤区ではIII a層、III b層に分層される。弥生時代の遺物包含層。

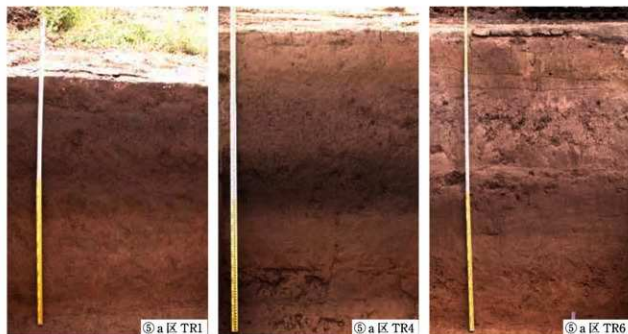
IV層: 暗褐色シルト (Hue10YR3/3)。粒子細い。粘性弱い。しまり有り。①・⑤区ではIV a層、IV b層に分層される地点がある。III層下部からIV層上面が古墳時代と弥生時代の遺構検出面で、IV層中部(IV b層)が縄文時代の遺構検出面である。

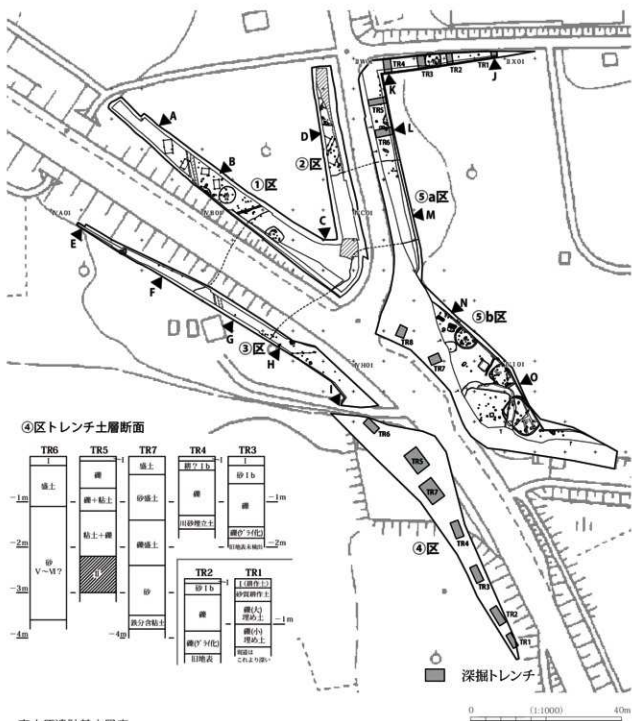
V層群: 砂層または砂質シルト層。調査区により土質と色調が異なる。

①・②区では、暗褐色砂質土～砂層 (Hue10YR3/4)。粒子細い。粘性、しまり無し。非常に脆い。

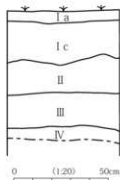
③区では未確認。⑤区では灰黄褐色砂層、黒褐色シルト質砂層、黄褐色砂質シルト層に分層される。

VI層群: ぶい黄褐色シルト (Hue10YR5/4)。⑤区で確認したのみ。





南大原遺跡基本層序



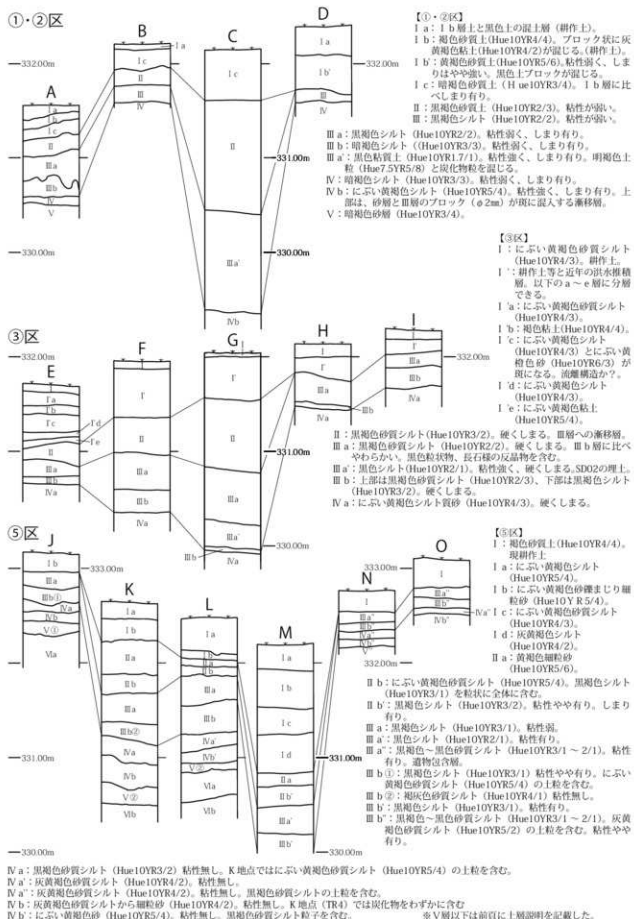
【基本層序】

- I：褐色砂質土 (Hue10YR4/4)。表土。粘性。しまり無し。I a～I c 層に区分される地区がある。
- II：黒褐色砂質土 (Hue10YR2/3)。粘性が非常に強い。
- III：黒褐色シルト (Hue10YR2/2)。粘性が強い。しまり有り。弥生時代の遺物包含層。
- IV：暗褐色シルト (Hue10YR3/3)。粘性が強い。しまり有り。

【⑤区】(次ページ南大原遺跡の基本土層の土層説明のつづき)

- V①：灰黄褐色砂 (Hue10YR4/2)。
- V②：黒褐色 (Hue10YR3/2) シルト質砂。黄褐色シルトを含む。
- V'：灰黄褐色細粒砂 (記号記載なし)。黄褐色シルト粒子を全体に含む。
- V：にぶい黄褐色砂質シルト (Hue10YR4/3)。
- VI a：にぶい黄褐色砂質シルト (Hue10YR5/4)。粘性弱い。
- VI b：にぶい黄褐色シルト (Hue10YR5/4) 粘性あり。棕色の鉄集積。斑紋あり。灰白色シルトを斑紋状に含む。

第14図 南大原遺跡の土層



第15図 南大原遺跡の基本土層 (1:40)

註

- 1) 高橋桂氏は「現在の千曲川の流路は、かつて湿地帯であつたらうと推定される。従つてここは、水田として利用され、上今井の人達にとっては重要な耕地であつた。新水路の開鑿によつて上今井の人々は広大な水田を失ひ生活が極度に圧迫されたといふ。その生活苦を克服するために、旧河川の湿地帯を水田化するための努力が嘗々と続けられ、現在みられるような見事な水田が切り開かれたのである。この間における上今井の人達の苦勞は並大抵ではなかつた。このことは発掘調査地点の南東にある開田碑が如実に物語っている。」と述べている（豊田村教育委員会1980）。
- 2) 1次調査は1950年（昭和25年）、2次調査は1957年（昭和32年）、3次調査は1979年（昭和54年）、4次調査は本書で報告する2011～2013年（平成23～25年）の発掘調査。
- 3) 野尻湖遺跡群は南大原遺跡から西に125km、津南町周辺の遺跡群は千曲川を約30km下つた位置にある。
- 4) 昭和25年4月に下水内郡豊井村上今井区南大原の高橋治平氏の畑（栗果畑）より栗林期土器の頸部出土。なお、神田植治氏が昭和4年に、豊田村南大原地籍（栗林遺跡の対岸）の有文弥生式土器を報告している（神田植治1929）。
- 5) 昭和25年の調査区の位置は、調査地点の地主高橋氏の証言による。昭和32年の発掘調査について、桐原健氏に確認したところ、1日の調査で簡単なスケッチしか記録が無いため、発掘調査の場所を特定できないとのことであつた。昭和54年の調査区の位置は「南大原遺跡」（豊田村教育委員会1980）による。
- 6) 長軸2m以下の穴はSKの遺構記号を付けて記録した。SKは166基あり、長軸が16cmのものから186cmのものまで規模はさまざまである。便宜的に、柱穴の可能性が高い長軸60cm以下のSKをピット、長軸が60cmを超えるものを土坑と区分した。ピットの多くは限られた区域に群集する傾向にあり、それらをピット群とした。

参考文献

- 麻生 優 1958 「長野県下水内郡南大原遺跡出土の土器」『考古学手帳』5
- 飯山南高校郷土班 1951 「第一次南大原遺跡発掘略報告」
- 石川日出志 2009 「弥生文化と信濃」（10月24日長野県立歴史館における講演会資料）
- 石川日出志 2012 「Ⅱ栗林式土器の編年・系譜と青銅器文化の受容」『柳沢遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書100
- 大竹憲昭 2010 「『竹佐中原遺跡石器文化』の時代性に関して（予察）」『長野県竹佐中原遺跡における旧石器時代の石器文化Ⅱ』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書85
- 金井正三 1982 「南大原遺跡」『長野県史 考古資料編 主要遺跡（北・東信）』
- 神田植治 1929 「山根遺跡」『信濃考古学会誌』三号
- 神田五六 1951 「長野県下水内郡豊井村南大原縄文諸磯式遺跡概要」『信濃』Ⅲ・3-8
- 神田五六 1952 「縄文諸磯期における低地性遺跡と高地性遺跡」『信濃』Ⅲ4-9
- 桐原 健 1967 「南大原遺跡のV字溝」『高井』5
- 笹澤 浩 2008 「信濃の弥生文化と柳沢遺跡」『北信濃 柳沢遺跡の銅戈・銅鐙』信濃毎日新聞社
- 笹澤 浩 2009 「善光寺平の弥生文化」（10月7日長野県立歴史館における講演会資料）
- 信濃史料刊行会 1966 「B縄文時代」『信濃史料 第一巻下』
- 柴田 徹 2011 「構成石材から見た南関東地方における弥生時代の磨製石斧—千葉県佐倉市大崎大遺跡と神奈川県秦野市砂田台遺跡の磨製石斧から—」『物質文化』9
- 豊野町誌刊行委員会 2001 『豊野町誌』
- 豊田村教育委員会 1980 『南大原遺跡』
- 豊田村教育委員会 1994 『飯綱平遺跡』
- 豊田村教育委員会 2005 『飯綱平遺跡Ⅱ』

- 中野市教育委員会 1983 『絶ヶ沢』
- 中野市教育委員会 1995 『栗林遺跡発掘調査報告書』
- 中野市教育委員会 2014 『長野県中野市遺跡詳細分布図（改訂版）』
- 長野県埋蔵文化財センター 1997 『飯田古屋敷遺跡 玄照寺跡 がまん淵遺跡 沢田鍋土遺跡 清水山遺跡 池田端竈跡
牛出古竈遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書24
- 長野県埋蔵文化財センター 2012 『南曾峯遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書93
- 長野県埋蔵文化財センター 2012 『柳沢遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書100
- 長野県埋蔵文化財センター 2013a 『沢田鍋土遺跡 立ヶ花表遺跡 立ヶ花城跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書94
- 長野県埋蔵文化財センター 2013b 『千田遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書98
- 長野県埋蔵文化財センター 2013c 『川久保・宮沖遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書99
- 文化庁文化財部記念物課 2010 『発掘調査のてびき』
- 馬場伸一郎 2001 『南関東弥生中期の地域社会（上）（下）—石器石材の流通と石器製作技術を中心に—』『古代文化』
53-5、53-6
- 馬場伸一郎 2009 『弥生時代長野盆地における榎田型磨製石斧の生産と流通』『職台史学』第120号
- 馬場伸一郎 2011 『栗林式土器分布圏の石器・石製品と弥生中期社会』『長野県考古学会誌』138・139合併号
- 町田勝則 2008 『石器に弥生の社会を読む』『赤い土器のタニ』の考古学』
- 町田勝則 2010 『中部日本』『季刊考古学』第111号 特集石器生産と流通にみる弥生文化』



⑤ a区調査前の状況



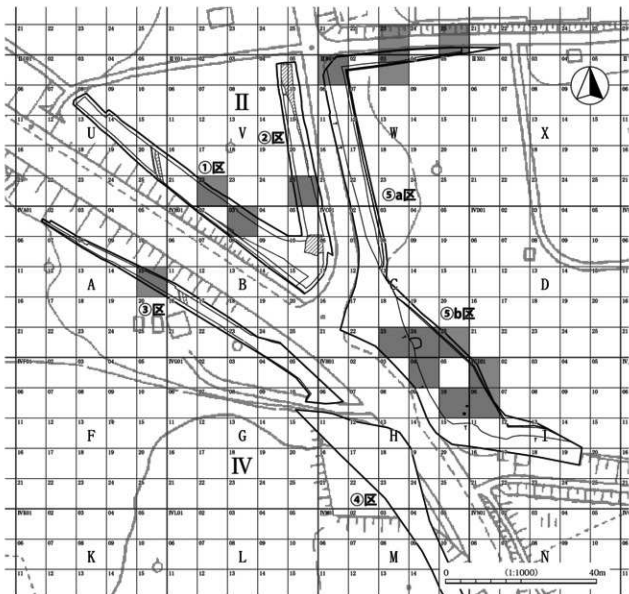
②区調査前の状況

第3章 縄文時代の遺構と遺物

第1節 概要

南大原遺跡は、昭和25年の調査で竪穴住居跡と想定された遺構から出土した資料をもとに、南大原式（諸磯a式併行）が設定された標識遺跡であるが、現在は、南大原式の土器型式名はあまり用いられない。昭和25年の発掘調査では、南大原式（諸磯a式）土器を中心に、中期土器、石鏃、石錐、石匙、打製石斧、磨製石斧、凹石、石皿などの石器類と玦状耳飾りが出土している（神田1951、金井1982）。

今回の調査では肋骨文などを特徴とするいわゆる南大原式（諸磯a式併行）土器は出土しなかったが、



第16図 縄文土器分布範囲

前期初頭と後葉、中期前半、後期前半の土器、および石器が出土した。遺物量は少なく、テン箱1箱程度である。遺構は前期の堅穴状遺構1基と、時期不明の土坑2基である。土器は④区を除く全地区から出土したが、遺構はいずれも⑤b区で確認され、遺物の大半も同地区で出土した。⑤b区以外の土器は少量であり、前期の土器は⑤b区に限定される（第16図）。

⑤b区では、弥生時代の遺構検出面より下面で縄文時代の遺物を確認したため、検出面を下げて調査を実施した。遺構検出は、弥生時代の遺構検出面より20cmほど下がった、IV層中部（第2検出面）でおこなった（註1）。⑤b区以外では、縄文時代の遺構は確認されていない（第17図）。

なお、石器は⑤b区の第2検出面で出土したものを本章で報告する。その他に石鏃、二次加工がある剝片など縄文時代の石器と思われるものについては、弥生時代の石器と一緒に第4章で報告する（註2）。



第17図 縄文時代の遺構配置図

第2節 遺構と遺物

1 遺構

(1) 竪穴状遺構

SB16 (第18図、PL3)

IV C24グリッドIV層中部で検出した。南西側は調査区外で、すでに削平されている。隅丸方形で、南側は壁面が確認できなかった。規模は推定値で、東西3.09m、南北2.76m。検出面から床面までは、深いところで12cmである。炉跡、柱穴は確認されない。弥生時代以降のSK149・SK171に切られる。

前期後葉の土器(第19図1・4・5・8・9)と、凹石2点(第21図1・2)が出土した。

(2) 土坑

⑤b区のIV層中部で11基(SK163~SK173)の土坑を検出した。縄文時代前期のSB16の埋土と類似するSK164とSK165は縄文時代の遺構と判断した。その他は弥生時代中期の土器片が出土するもの、埋土が弥生時代の遺構と類似するものがあり、第1調査面で見逃した弥生時代以降の土坑と判断した。

SK164 (第18図)

IV H10グリッドで検出した。38cm×30cmの楕円形で、深さ22cmである。出土遺物なし。

SK165 (第18図)

IV H10グリッドで検出した。56cm×48cmの不定形で、深さ15cmである。出土遺物なし。

2 遺物

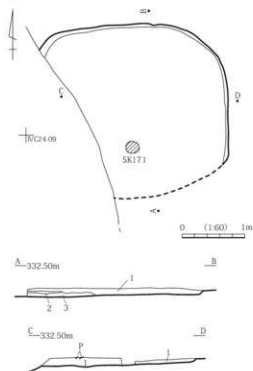
(1) 土器(第19・20図、PL5)

146片の破片(総重量2.032kg)が出土したのみで、出土量は少ない。前期の土器は⑤b区のみで出土しており、中期の土器は④区以外のすべての調査区から出土した。前期では、前期初頭と思われる尖底土器、前期後葉の羽式(諸磯a式からb式併行)、中期前半、後期前半の土器が出土した。なお、写真図版には、拓本で図示していない土器片も提示している(註3)。

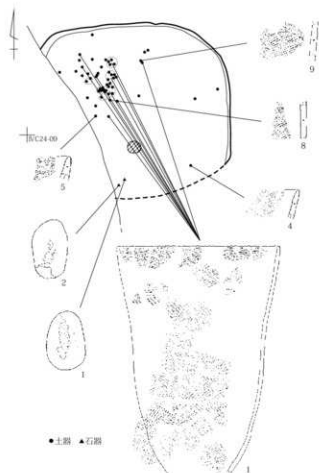
1は前期後半の諸磯b式併行期の土器である(註4)。1a~1fは1の破片部分を拓本で示したものである。口唇部に棒状工具によるキザミが認められ、RL単節縄文を地紋とし半截竹管による横線で区画した中を格子目状の半截竹管文を描く口縁部文様帯が形成される。胴部文様帯は基本的には羽状縄文であるが、原体はRL単節縄文を用いて施文方向を変えて羽状縄文としており、部分的に菱形を呈する部分がある(第19図1e)。2・3はLR単節縄文、3は羽状構成で、縄文原体端部の施文が確認される。4・5は口縁に篋状工具による横走沈線が認められる。地紋に縄文が施文されているように見えるが、不明瞭で単節か無節か判断できない。6~11は無節のR縄文が施文され、6・7・9には縄文原体端部の施文と思われるループ様の文様がある。11は尖底部である。6~11はわずかであるが繊維を混入する。1~5と6~11の2群に区分され、前者は前期後葉、後者は前期初頭と判断した。なお、4・5は1と同時期と判断したが、胎土と施文原体が1~3とは異なること、8が埋土内から出土していることから、前期初頭のものも混入した可能性も残しておきたい。前期の土器は、1・2・4・5・8・9がSB16、3がSB14、6・7・10・11は②区の遺構外で出土した。

12・13・17は後期初頭から前半の土器と判断した(註5)。いずれも①区のIV B03グリッドで出土しており、特に13と17は胎土も類似しており文様は同時期と考えられる。14~16・18~22は中期前半の土器である。14は浅鉢口縁、他は深鉢の胴部または底部破片である。16・19~22は隆帯が貼付され19~21は斜交

SB16



- 1: 灰黄褐色砂質シルト (Hue10YR4/2)。粘性、しまりなし。炭化物片混入。
- 2: 潮灰色砂質シルト (Hue10YR4/1)。粘性、しまりなし。1層よりやや暗色だが、炭化物を含まない。
- 3: にぶい黄褐色砂質シルト (Hue10YR5/4)。粘性、しまりなし。上部に ϕ 2cm以下の明褐色土 (Hue7.5YR5/8) ブロックを含む。



SK164

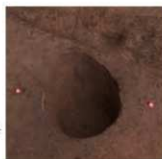


- 1: 潮灰色砂 (Hue10YR4/1)。粘性、しまりなし。炭化物を含む。地山の明褐色砂粒子を全体に含む。

SK165



- 1: 潮灰色砂 (Hue10YR4/2)。粘性、しまりなし。モヤモヤしている。



0 (1:40) 1m

第18図 縄文時代の遺構

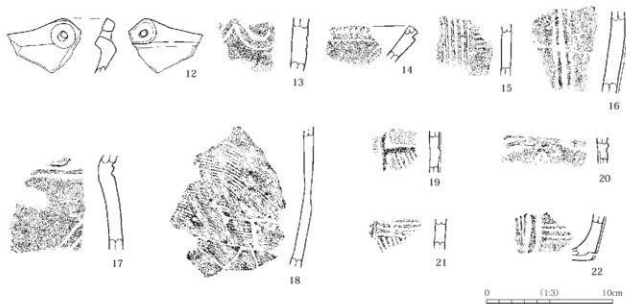


第19図 縄文土器 (1)

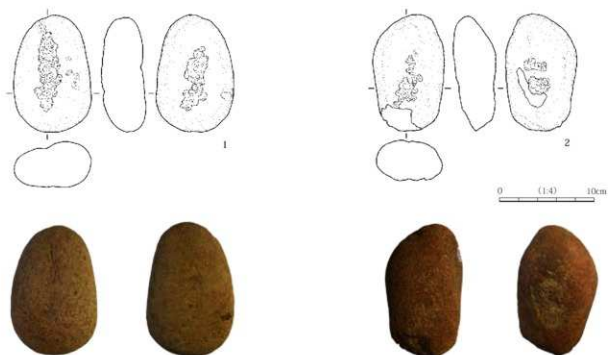
沈線が認められる。15は半截竹管による半隆起線文である。18はLR 縄文施文後に指ナデ痕がみられる。中期の土器は、14・15が②区、18が③区、16・19~22は⑤b区で出土した。

(2) 石器 (第21図)

出土した石器は、SB16から出土した凹石2点(第21図1・2)である。いずれも両面に敲打による凹痕が確認される。1は長軸端部に小剥離痕があり、敲石として用いられた可能性がある。2は被熱により暗赤褐色の変色が全面に観察され、凹痕の周辺に被熱によると考えられる剥落がある。



第20図 縄文土器(2)



第21図 縄文石器

註

- 1) 検出面は2面となったが、弥生時代と縄文時代の遺物包含層が区分できるのではない。遺構埋土が縄文時代と弥生時代以降では異なっており、Ⅳ層上面では縄文時代の遺構検出が困難であった。
- 2) 弥生時代の遺構および遺物包含層には、縄文土器が混入しており当該期の石器群が混在している可能性がある。すべての石器について時期を区別することができないことから、弥生時代の遺構および遺物包含層出土の石器群については、「第4章 弥生時代の遺構と遺物」で報告することとした。
- 3) 複数の破片が接合した資料でも、器形復元が困難な場合はその土器の特徴を示す破片を選んで土器図版で提示し、全体は写真図版に掲載した。写真図版で()がない数字は遺物図版の掲載番号を示す。なお、()を付して示した数字は、遺物図版に掲載していない土器片の管理番号で、遺物図版に拓本を掲載していないものであることを示す。
- 4) 諸磯b式併行期の格子目文土器は、「新潟県の中魚沼・頸南地域と長野県の飯山地域に集中的に分布している。」(寺崎1991)とされており、新潟県の刈羽式の一類型と考えられている。これまでの南大原遺跡の報告では図示されていないが、南大原遺跡の資料中に平行沈線の交差点に円形竹管を挿入するものと平行沈線で格子目文を描くものが出土している。(寺崎1991)と指摘されている。今回出土した資料(第19図1)の類例は、長野市浅川扇状地遺跡群松ノ木田遺跡、飯山市大倉崎遺跡などにある。
- 5) 小破片であり断定はできないが、称名寺式の新しい段階から堀之内1式の古い段階に併行すると判断した。

参考文献

- 麻生 優 1958 「長野県下水内郡南大原遺跡出土の土器」『考古学手帖』5
- 飯山市教育委員会 1990 「小沼沼滝バイパス関係遺跡発掘調査報告Ⅱ 上野遺跡・大倉崎遺跡」飯山市埋蔵文化財調査報告書第21集
- 飯山南高校郷土班 1951 「第一次南大原遺跡発掘略報告」
- 金井正三 1982 「南大原遺跡」『長野県史 考古資料編 主要遺跡(北・東信)』
- 神田五六 1951 「長野県下水内郡豊井村南大原縄文諸磯式遺跡概報」『信濃』Ⅲ3-8
- 神田五六 1952 「縄文諸磯期における低地性遺跡と高地性遺跡」『信濃』Ⅲ4-9
- 桐原 健 1967 「南大原遺跡のV字溝」『高井』5
- 寺崎祐助 1991 「縄文時代前期後半の格子目文土器について」『新潟考古学談話会会報』
- 寺崎祐助 1997 「吉川町古町B遺跡について—長野県大倉崎遺跡との比較検討」『新潟考古学談話会会報』17
- 寺崎祐助 1999 「新潟県における縄文時代前期の土器—その標識資料と編年」『縄文土器論集—縄文セミナー10周年記念論文集』
- 長野市教育委員会 1996 「浅川扇状地遺跡群 松ノ木田遺跡」

第4章 弥生時代の遺構と遺物

第1節 概要

弥生中期後半(栗林式)から後期(吉田式・箱清水式)の遺構・遺物を確認した。遺構は、竪穴住居跡9棟(中期後半7棟、後期前葉2棟)(註1)、竪穴状遺構1基、掘立柱建物跡6棟、礎床木棺墓3基、木棺墓2基、土坑18基、ピット群6ヶ所(註2)、橋列1基、溝跡4条(中期後半)を検出した。特に、土坑とピット群は時代が判明しないものも含むが、今回の調査では弥生時代以外の土器がほとんど認められないことから、大半は弥生時代の遺構と判断し、本章に掲載した。弥生後期のものは竪穴住居跡1棟(SB13)、土坑1基(SK142)、ピット1基(ピット群5のSK134)を確認したが、他の遺構は大半が弥生中期後半のものである(註3)。

遺物は、土器、石器、金属器、木器が出土した。土器は、栗林式・吉田式・箱清水式が認められるが、主体は栗林式土器で、栗林1式～3式(石川2002)がある(註4)。本報告書では、石川編年(石川2002・2012)に従って記述をする。石器は、弥生中期後半の磨製石鏃、打製石鏃、刃器、大型蛤刃石斧、敲石などの石器群が出土している。金属器では、竪穴住居跡SB11(弥生中期)から鉄斧、SB13(弥生後期)とSB14(弥生中期)から鉄鏃が出土した。遺物包含層から炭化した木製品が1点出土した。



第22図 弥生時代遺構配置図

第2節 遺構

1 竪穴住居跡・竪穴状遺構

SB04 (第23図、PL2)

位置と調査経過: ①区のⅡ V21・22グリッドのⅣ層上面にて遺構検出。かく乱で南西壁の一部を破壊されている。

遺構の構造: はほぼ正円で、南北約440cm×東西約430cm、深さ20cmである。ピットを9基確認し、柱穴はPit1～Pit4と想定される。Pit1～Pit4は最大径で約20cm、深さはいずれも80cm前後と深い。他のピットはいずれも20cm～40cm程度の深さである。Pit8とPit9は柱穴のPit3・Pit4に隣接しているが性格は不明である。炉跡は地床炉で本遺構のほぼ中央部にあり、20cm程度の掘り込みがある。焼土はこの掘り込みの南側にみられた。またこの掘り込みと焼土を被うように炭化物層が薄く堆積し、長軸120cmほどの範囲に分布していた。炭化物層中の炭化物の炭素14年代測定を実施し、2050±30yrBPの測定結果を得た。詳細は第6章参照。

また炉の南西に隣接して径40cm・深さ20cmほどの楕円状の掘り込みがあるが、埋土に焼土・炭化物はなかった。南壁付近でも焼土と炭化物の分布を確認した。

他の住居跡と比較して、主柱穴の深さとプランが正円に近い点は特筆される。

遺物出土状況: 埋土から総重量3.413kgの栗林式の土器が出土した(第54図)。東側の壁際には台付甕(第54図11)が出土したほか、ミニチュア土器(第75図558・559)、土製円板(第75図568・570)が2点出土した。石器では、石錐1点(第76図15)、楔形石器1点(第76図17)、砥石1点、敲石1点、台石2点(第82図71・73)、ヒスイの剥片1点、チャートと頁岩(安山岩)の剥片9点が出土した。剥片については、SB04埋土から縄文土器が出土していないこと、弥生中期の可能性のあるチャートと頁岩製の打製石鏃が調査区内で出土していること、SB04から頁岩製の石錐(第76図15)が出土していることを考え合わせると、弥生時代の剥片石器製作に関わる遺物と想定することができる。なお、台石2点は炉の東側から出土した。

遺構の時期: 出土した土器から栗林2式新段階と考えられる。

SB05 (第24図、PL2)

位置と調査経過: ②区のⅡ V09・10・14・15グリッドのⅣ層上面で検出。西側は用地外に伸びており、東側はかく乱されていたが、全体の1/3程を調査できた。

遺構の構造: 西壁と南壁を確認したのみで、全体の形状は明らかでないが、隅丸の方形または長方形と想定した。主軸方位はN-20°Eである。南北方向の全長は約640cmと推定され、深さ10cmである。ピットは9基を確認した。Pit1とPit2が柱穴と考えられる。Pit4は柱穴の可能性はあるが配置が不自然である。Pit3、Pit6～Pit9は直径20cm程度の浅い小穴で壁際に並んでおり、何らかの施設の痕跡である可能性を想定した。Pit5は90cm×80cm、深さ10cmである。調査範囲には炉は確認できていない。また北側の壁際に、幅30cm、深さ8cm程度の溝が確認できた。周溝の一部である可能性がある。床面は平坦ではあるが、多少の凹凸が見られた。

残存する掘り込みは北側で深く、南側はわずかに10cm程度であった。

遺物出土状況: 埋土から総重量1.935kgの栗林式の土器が出土した(第54図)。南側の壁際から鉢の上平部(第54図25)、安山岩製の大型の刃器(第79図39・40)などの遺物がまとめて出土した。割れて出土

した刃器は剥離面での接合関係が確認できた（第80図39+40）。また、ⅡV15杭近くの床面に食い込んでいた石皿（第82図69）は、床剥ぎ時に取上げており、調査時には本遺構の構築以前に土中にあった縄文時代の石皿と判断したが、結論は保留したい（註5）。その他、砥石（第80図46）、凹石・磨石（第81図54・55）、二次加工がある剥片が出土した。小型石器の剥片類は出土していない。

遺構の時期：出土した土器はいずれも破片であり、時期をしなければならないが栗林2式古～新段階の遺構と考えられる。

SB06（第25図、PL2）

位置と調査経過：①区のⅡU25、ⅡV21グリッドⅣ層上面で検出。南西側2/3が調査区外であり、一部は県道建設時に破壊されている可能性がある。また、北壁の一部がかく乱されている。平面形態は円形と判断したが、隅丸方形の可能性も否定できず確定できない。埋土の床面より若干高い位置でPit1～3を認め当初土坑として調査をおこなったが、本跡の埋没土は浅く、床面よりこれら土坑が掘り込まれた可能性も高いため、本遺構に伴う施設と判断した。

遺構の構造：形状は正円に近いが全体形は不明。調査部分は南北約340cm×東西約100cmで、深さは検出面から床面まで5cm程度である。主軸方位はN-50°-Wである。ピットを3基確認し、床面からの深さはPit1が10cm、Pit2が20cm、Pit3は8cmである。Pit1とPit2とが柱穴と想定される。Pit3には焼土や炭化物はない。炉跡は調査区外に存在すると考えられる。なお、埋土は黒色土で、壁は明瞭に立ち上がり、底面もやや硬く平坦であった。

遺物出土状況：埋土から総重量1.247kgの栗林式の土器が出土した（第55図）。東側の壁際に台付甕のほぼ完形品（第55図34）が出土したほか、甕形土器等の破片が比較的数量多く出土した。土器はいずれも床面よりわずかに浮いた状態で出土した。この他に土製円板（第75図565）が出土した。石器類は出土していない。また、埋土中から出土した炭化物の炭素14年代測定を実施し、2100±30yrBPの測定結果を得た。詳細は第6章参照。

遺構の時期：出土した土器はいずれも破片であり、時期をしなければならないが栗林2式古～新段階の資料と考えられる。年代測定の結果を考慮すると栗林2式新段階の遺構と考えられる。

SB07（第26図、PL2）

位置と調査経過：①区のⅣB03・08グリッドⅣ層上面で検出した。南西壁は調査区外で全体の3/4ほどを調査した。南東側はSD02と切り合う。SD02とSB07の埋土は類似しており、東側の壁面の立ち上がりは不明瞭で前後関係は確認できなかったが、SD02の埋土（黒色土）を掘り込んでSB07が造られたと想定して調査を進めた。したがって、壁の立ち上がりが確認できなかった南東側の壁面は破線で示した。

遺構の構造：形状は明確ではないが、一辺4.76mの隅丸長方形もしくは隅丸方形と推定される。貼床はなかった。本遺構の中心から北西寄りに地床炉と思われる焼土とくぼみがある。ピットを15基検出したが、すべてが本遺構の施設であるかどうか確認できない。Pit1・4・6・9が北東壁に沿った柱穴になる可能性があるが、判断できない。Pit8・11～15は長軸25cm以下の小さなピットで、特にPit8・11・13・15は本遺構とは別の掘立柱建物跡と考えることも可能である。他の竅穴住居跡に付属するピットの在り方を考慮すると、本遺構の施設ではないピットも含まれていると考えた方が妥当であろう。なお、ピットの深さは、Pit12、Pit14が50cm前後で最も深く、Pit7が13cmで一番浅い。床下の掘方調査の際、北西壁際に弧状の深さ1～数cmの浅い溝を検出したが、他の壁際にはなかったため、周溝などの施設ではないと判断した。（註6）。埋土は単層で、黒褐色（Hue10YR2/2）の結質のシルトである。

遺物出土状況：埋土から総重量5.964kgの粟林式の土器が出土した（第55図）。床面に遺棄または廃棄された遺物はない。赤彩されたミニチュア土器（第75図553）と粘土塊1点が出土した。Pit2から打製石鏃（第76図2）が1点出土した他、埋土中から小型の磨製石斧（第76図21）、凹石（第81図57）、有孔石製品（第83図76）、砥石、敲石などの石器が出土した。剥片類は13点出土したが、凝灰質頁岩、黒曜石、輝石安山岩、石英、チャート、無斑晶質安山岩、頁岩（安山岩）、輝石安山岩の石材が確認され、輝石安山岩と黒曜石以外は本遺跡出土の弥生時代の石器石材ではないこと、出土点数がわずかであることから、当該期の剥片石器製作に関わるものではないと判断した。なお、床面付近から炭化した種子が1点出土したが（第26図）、本遺構に伴うものかどうか判断できない。床面等から出土した4点の炭化物の炭素14年代測定を実施し、最も新しいもので2060±20yrBPの結果を得た。

遺構の時期：出土土器は破片のみであり、弥生中期後半粟林2式古～新段階のものであると判断した。年代測定の結果を考慮すると、粟林2式新段階の遺構であると考えられる。

SB08（第27図、PL2）

位置と調査経過：⑤a区ⅡR23、ⅡW03グリッドⅢb層上面で検出した。北壁と南壁の大半はかく乱または調査区外で堅穴全体の調査はできなかった。切り合う遺構はない。

遺構の構造：主軸方位はN-80°-Wである。東西方向に長軸がある隅丸方形で、東西415cm×南北約370cm（註7）、深さは東側が30cm、西側で20cmである。南東側で凹凸のある硬い貼床を確認した。特に、炉（Pit5）南東側は黄褐色土の硬い貼床である。Pit1～Pit4が柱穴で、最大径38～55cmを測り、Pit3が最も大きい。深さは24～36cmでPit3が最も深い。Pit4からは炭化物が出土した。炉跡（Pit5）は本遺構の中央にあり、ほぼ円形の地床炉で長軸47cm、深さ8cmの掘り込みを持つ。底面がやや赤色化する程度であり、顕著な焼土は見られない。Pit6は東側壁際に92cm×40cm、深さ21cmの長楕円形のビットで、梯子を埋め込んだ入口施設の可能性がある。Pit4埋土およびその周辺の床面を中心に炭化物が散見される。埋土には、焼土粒に混じって微細なベンガラ粒が含まれていた。

遺物出土状況：埋土からは、粟林式を主体とした総重量4.013kgの土器が出土した（第55・56図）。南東の壁際には甕とほぼ完形となる片口鉢（第55図61）とが出土した。南東壁際、南西壁際に遺物が集中した。また、床面および床面付近に、底部破片等のやや大きめの土器片が礫（註8）とともに出土した。この他、ミニチュア土器（第75図557）が出土した。石器は楔形石器と敲石の2点が出土したのみで、剥片類は出土していない。Pit4の2層から出土した炭化物の年代測定を実施し、2170±30yrBPの結果を得た。

遺構の時期：弥生中期粟林2式古～新段階の遺構であると判断した。

SB09（第25図、PL2）

位置と調査経過：⑤a区ⅡW07・11・12グリッドⅣ層上面で検出した。東側約半分が調査区外で未調査である。SK110がSB09の埋土を掘り込んでいる。

遺構の構造：主軸方位はN-20°-Eで、隅丸長方形である。南の壁面がカーブを描きコーナー付近のように見えるが、南壁は一部が壁崩落で膨らんでいるものと考えられ、規模は不明である。深さは25cmである。ビットを6基検出したが、柱穴は不明。Pit1が柱穴とすると上記の規模より大きな遺構を想定しなくてはならないが、断定できない。埋土1層から出土した炭化物の年代測定を実施し、2140±20yrBPの結果を得た。詳細は第6章参照。

遺物出土状況：埋土からは、少量の土器片（0.282kg）と刃器破片1点が出土した（第56図）。

遺構の時期：土器が少なく断定できないが、後期前葉の吉田式と判断した。

SB11・12 (第28～31図、PL2・3)

位置と調査経過: ⑤b区のIVH10、IVI06・07・11・12グリッドIV層上面で検出した。SD03に切られており、南東隅は調査区外になり、現代のパイプ埋設による溝状のかく乱がある。2棟の竪穴住居が重複していると判断し南東側をSB11、北西側をSB12として調査をおこない記録したが、床面レベルは同じであり、1棟の竪穴住居跡のごとく認識できる。調査所見では、東側トレンチの断面でSB12がSB11を切っていることと観察したが、平面プランでの切り合いは認識できなかった。断面で観察したSB12の南東壁の立ち上がりでプランを推定すると、SB12の柱穴の位置が壁際により過ぎている。SB12の立ち上がりは写真で確認する限り明確ではない。したがって、SB12の立ち上がりは誤認の可能性があると考え、SB11とSB12を一つの遺構として報告する。調査時に認識した土層の切り合いは破線で示した(第28図spA-Bの左側)。なお、ピット番号が重複するため、報告書では第6表のとおりSB12のピット番号を変更して報告した。注記、写真等の記録類は調査時の番号を用いている。

遺構の構造: 主軸方位はN-50°-Wで、9.8m×7.35mの隅丸長方形である。検出面からの深さは35cmである。柱穴はPit5・8・11・12・15と判断した。南東隅の柱穴は調査区外となり、6本柱の竪穴住居跡で、Pit14・16は入口施設に係るピットであると想定した。本遺構に伴う施設が否か確認できないが、上記の他にPit2・4・17が70cmを超える深さで、これらのピットが本遺構に関わる柱穴である可能性がある。その他のピットも含め、配置を検討すると、Pit2・3は棟持柱の可能性があり、Pit1・4・9・13・17は後述するように建替え前の柱穴である可能性もある。ピットの深さは第6表のとおりである。

SD03に重複している部分以外は、途切れることなく壁際に周溝が巡る(周溝1)。この周溝の他に、北西側に溝が2ヶ所ある(周溝2)。周溝1より周溝2が浅いが、周溝2は床を削いだ後に検出したものである。周溝を2棟分確認しているが、掘方の調査でも時期の異なる2棟の重複は確認されない。また、SB11とSB12の出土遺物を比較しても大きく時期差がある土器が混在している様子は認められない。したがって、2棟分の周溝は竪穴の重複ではなく、建替えによる拡張があったと判断した。

中央より北西寄りに幅45cm、長さ125cmの地床炉を検出した。この他に南東側に焼土跡が3ヶ所ある。焼土1はやや窪んでいるが、焼土2、焼土3は平坦な床面が火床となる。焼土1～3は鍛冶遺構の可能性がある。詳細は第7章で述べる。

遺物出土状況: 出土土器の総重量は33.491kgである(註9)。南東側のSB11として取上げた遺物が圧倒的に多く、床面にはほぼ完形に復元される土器がつぶれた状態で出土した(第56・57図86・87・90)。

SB11とSB12の出土土器の中に、弥生後期のものが含まれているが(第58・59図101・126・128・137)、遺構検出時のプランの誤認で後期の遺物が混入した可能性が高い(註10)。

土製甲板1点(第75図564)と粘土塊1点が出土した。

石器は、打製石斧破片2点、石槌1点(第77図22)、軽石3点、敲石1点(第81図64)、擦切り具(第78図30)、二次加工がある剥片1点、剥片14点が出土した。剥片は、出土点数、石材から弥生時代の剥片石器製作に関わる資料ではなく、縄文時代のものが大半を占めると判断した。

鉄斧(第84図82)が焼土2の南東側の床面で出土した。北東隅の炭化材(炭化物1)は樹種同定の結果、コナラ属クスギ節であることが判明し、炭素14年代測定を実施し、2090±20yrBPの分析結果を得た。

遺構の時期: 出土遺物から弥生中期栗林2式新段階後半から栗林3式と判断した。

SB13 (第32図、PL3)

位置と調査経過: ⑤b区のIVH05、IVI01グリッドIV層上面で検出した。北東壁側が調査区外であり、南西隅をSD03に切られる。ピット20基を検出したが、Pit1～16が床面で、Pit17～20は貼床を除去した後

に確認した。建替えに関わる古いピット等の可能性がある。Pit12は周溝の外側にあり、本遺構の施設ではない別な土坑の重複と想定できるが、埋土掘下げ後に、周溝との位置関係が判明し、SB13として調査した。

遺構の構造：平面形は不整形な隅丸長方形であるが、周溝と炉の位置から想定し、主軸方位はN-25°Wで、6.50m×約5.20mの隅丸長方形と考えられる。柱穴は明確にできなかったが、Pit7・11が深い掘り込みがあり柱穴の可能性がある。南東壁際のPit4・5・19・20が主軸に沿って方形に配列している。Pit19・20は貼土を剝した後に確認したもので2時期に分かれる可能性もあるが、4つのピットの規模と配置が規則的であり一連の遺構群と判断した。入口に関わる施設と考えておきたい。Pit1は主軸と並行すること、出土土器がSB13埋土のものと同時期差が無いことから、本遺構の施設と判断した。他のPitについては、本遺構の施設であるか否か判断できない。周溝は西壁で二本の溝跡が並行しており、建て替えの可能性もある。

炉は地床炉で、床面から数cm窪んだところで焼土を確認した。炉の北西側の床面に炭化物が多く出土した。

遺物出土状況：土器は16.79kg出土した（第60・61図）。この内、弥生中期土器が0.64kg、後期が7.63kg、時期が限定できない櫛波状文、縹状文の甕の破片および無文部の破片が8.81kgであり、弥生後期の土器が多量に出土した。その他、土製勾玉（第75図579）と粘土塊1点が出土した。

鉄鍬2点（第84図83・85）が出土した。83はPit9の南側の床から数cm浮いた2層で出土したが、85は出土地点不明である。

石器は、磨製石鍬1点（第76図12）、楔形石器1点（第76図16）三脚石器1点（第77図25）、砥石1点（第80図45）、台石1点（第82図72）（註11）、刃器1点（第78図38）、剥片7点、赤色化した礫の破片2点が出土した。なお、三脚石器、楔形石器、剥片の大半は縄文時代の石器群の可能性が高い。

2層出土の炭化物の炭素14年代測定で、2080±30yrBPの結果を得た。

遺構の時期：出土した土器から弥生後期吉田式の時期の遺構であると判断した。なお、炭化物の年代は栗林2式新段階の堅穴住居出土の炭化物に近似する年代であり、本遺構に伴わない炭化物であったと考えられる。

SB14（第33・34図、PL3）

位置と調査経過：⑤b区のIV C19・24・25グリッドIV層上面で検出した。北東側約1/3が調査区外となる。切り合う遺構はない。

遺構の構造：ほぼ正円で、直径約6.2m、深さ40cmである。ピットを15基確認した。比較的深く規則的に配列するPit1・2・7・11が柱穴で、調査区外に2基を加えた6本柱と想定した。壁際の周溝の他に、北壁側に、周溝状の溝があることから、建替えがあった可能性も考慮しなければならない。柱穴以外のピットが本遺構の施設であるかどうか判断できないが、建替えがあったとするとそれに関わる施設の可能性がある。また、後述するとおり、弥生後期の遺物が混在しており、埋土に掘られたピットを含んでいる可能性もある。

炉1は中央部よりやや南西寄りにあり、2つのピットが重複しており、建替えにより炉の位置がずれたと想定した。炉の構造から正方位から45°傾いた主軸が想定できる。埋土は3層に分層できる。

炉2とPit15には火床面があり鍛冶遺構の可能性がある。詳細は第7章で述べる。

遺物出土状況：土器の出土量は他の遺構に比べ圧倒的に多く、特に、2層・3層に出土遺物が多い。出土土器の総重量は、55.8kgである（第61～64図）。弥生後期土器が0.24kg混入しており、埋土内に掘りこま

れた弥生後期の遺構を見落とした可能性がある。南東側に、器形復元できる土器が多く出土している。この他に、ミニチュア土器3点(第75図555)、土製円板6点(第75図561・567・571・572・575・576)、粘土塊1点が出土した。

石器は、打製石鏃3点(第76図1・8・9)、磨製石鏃1点(第76図13)、楔形石器2点(第76図20)、二次加工がある剥片3点、磨製石斧破片2点(PL31)、石核3点(第77図26・27)、軽石1点、砥石7点(第80・83図44・47・49・74・75)、敲石10点(第81図58・59・65・68)、台石2点(第82図70)、擦切り具3点(第78図28・31・32)、刃器13点(第78・79図34・35・41~43)、ヒスイの石製品1点(第83図79)、剥片61点、赤色化した礫破片4点が出土した。剥片の石材組成は輝石安山岩45点、チャート10点、頁岩(安山岩)3点、黒曜石1点、凝灰質頁岩1点である。鉄鏃(第84図84)が1点出土した。

炉1の1層出土の炭化物の炭素14年代測定で、2090±30yrBPの結果を得た。

遺構の時期: 弥生中期後半栗林2式新段階の遺構と判断した。

SB15 (第35図、PL3)

位置と調査経過: ⑤b区のIVC25、IVH05グリッドIV層上面で検出した。

遺構の構造: 2.40m×2.30mの方形で、深さ約85cmである。柱穴、炉跡などの付属施設が認められないことから堅穴状遺構とした。主軸方位はN-45°-Wである。埋土は3層に大別される。

遺物出土状況: 土器は、1層下部から2層を中心に出土した。遺構の規模の割には出土量が多く、総重量は14.78kgである(第65・66図)。なお、弥生後期と判別できる小破片の土器が0.126kg混入する。出土位置を記録した大型の破片はいずれも2層出土である。3層から出土した土器は少量で、すべて小破片である。この他に、粘土塊5点が出土した。

石器は、打製石鏃1点(第76図10)、楔形石器3点、二次加工がある剥片1点、敲石2点(第81図60)、磨製石斧破片2点(PL31)、軽石2点(PL31)、剥片60点、赤色化または黒色付着物のある礫4点が出土した。剥片の石材組成は頁岩(安山岩)48点、チャート6点、凝灰質頁岩2点、珪質頁岩2点、安山岩1点、輝石安山岩1点である。いずれも、1層・2層で出土しており、本遺構が埋没する過程で土器とともに廃棄されたものと判断できる。

埋土2層出土の炭化物の炭素14年代測定で、2270±30yrBPの結果を得た。

遺構の時期: 出土した土器から弥生中期後半栗林1式～2式古段階の遺構と判断した。

2 掘立柱建物跡・ピット群・柵列

発掘調査では掘立柱建物跡6棟、柵列1、ピット群6ヶ所を確認した(註12)。

掘立柱建物跡(遺構記号ST)は、調査当初に建物跡としての柱穴の配置を認識できず、SKの遺構記号を付して調査し、その後掘立柱建物跡の柱穴と認識したものがある。図面、遺物等の記録類は調査当初に付した遺構記号SKを用いている。本文中では、SK番号を付した掘立柱建物跡の柱穴については便宜的にPit番号で記述し、遺構図版で調査時のSK番号を併記した。

ST01 (第36図)

位置と遺構の構造: ①区のIIU14・15・19・20グリッドのIV層上面で確認した。6基の柱穴で構成される、1×2軒の掘立柱建物跡である。検出面のレベルが異なり柱穴の深さに差があるが、底面レベルはある程度近似値を示している。主軸方位はN-10°-Wで、南北方向である。東西2.15m、南北3.50mの規模である。各柱穴の大きさは第7表のとおりである。

出土遺物: Pit1で弥生中期後半の土器片が出土した。

遺構の時期: 周辺には弥生後期以降の遺物がないことから、弥生中期後半栗林式期の遺構と判断した。

ST02 (第36図)

位置と遺構の構造: ①区のⅡV16・21グリッドのⅣ層上面で検出した。4基の柱穴で構成される、1×1軒の掘立柱建物跡である。Pit3は底面がわずかに確認されたのみである。主軸方位はN-5°-Wで、南北方向である。東西1.40m、南北2.40mの規模である。各柱穴の大きさは第7表のとおりである。

出土遺物: なし。

遺構の時期: ST01と主軸方向が平行しているため、ST01と同時期（栗林式期）の遺構と判断した。

ST03 (第36図)

位置と遺構の構造: ①区のⅡU20、ⅡV16グリッドⅣ層上面で検出した。4基の柱穴で構成される、1×1軒の掘立柱建物跡である。主軸方位はN-85°-Wで、東西方向である。東西1.90m南北1.80mの規模である。各柱穴の大きさは第7表のとおりである。

出土遺物: Pit2で炭化物が出土したのみである。

遺構の時期: 周辺には弥生後期以降の遺物がないことから、弥生中期後半栗林式期の遺構と判断した。

ST04 (第36図)

位置と遺構の構造: ①区のⅡU20グリッドのⅣ層上面で検出した。等間隔で直線上に並ぶPit1～3とそれに対峙するPit4・Pit5およびかく乱部分にあったと想定される穴を1×2軒の掘立柱建物跡と想定したが、配置が不整形であり、掘立柱建物跡ではない可能性がある。主軸はST01～03とずれ、近くの竪穴住居跡（SB04）と平行する。各柱穴の大きさは第7表のとおりである。

出土遺物: Pit1で弥生中期後半の土器片1点と、Pit1で栗林式の甕（第66図365）が出土した。

遺構の時期: 弥生中期後半栗林式期の遺構と判断した。

ST05・06 (第38図)

位置と遺構の構造: ①区のⅡV22・ⅣB02グリッドⅣ層上面で検出した。ST05はL字状に配列するPit1～3とSK37・SK43、さらに1基は調査区外にある6基の柱穴で構成される1×2軒の掘立柱建物跡と認識した。ST06は、SK24・SK25・SK26・SK31・SK34・SK35・SK39・SK67の遺構名を付した8基の穴が楕円形配列の掘立柱建物跡となると認識した。しかし、配列が不整形であり、2基の掘立柱建物跡と想定したものが重複している。その周辺にも同様の柱穴が複数存在しており、同一遺構の柱穴を明確に認識することは困難であり、ST05・06は、掘立柱建物跡と報告することを保留し、ピット群1として、別途報告する。

ST07 (第37図)

位置と遺構の構造: ②区のⅡV15・20グリッドⅣ層上面で検出した。調査当初、SK45・SK48・SK50・SK55・SK58・SK60・SK61としたものを1×4軒の掘立柱建物跡の一部と認識し、10基の柱穴の内、3基は調査区外にあると想定した。主軸方位はN-25°-Eで東に傾き、6.25m×2.75mの規模が想定される。主軸の方位は、SB04・SB05と概ね平行する。各柱穴の大きさは第7表のとおりである。なお、遺物、記録類の注記はSK番号でなされている。

出土遺物: Pit2・4・5・6から弥生中期後半の壺・甕の破片等が出土した(第70図476~478)。石器類は出土していない。Pit5埋土出土の炭化物の炭素14年代測定で、 2150 ± 30 yrBPの結果を得た。

遺構の時期: 周辺には弥生中期以外の遺物はなく、遺構内の出土遺物、主軸の方向から弥生中期後半栗林式期の遺構と判断した。

ST08 (第37図)

位置と遺構の構造: ②区のⅡV15グリッドⅣ層上面で検出した。ST07に隣接したL字状に配列するピットを掘立柱建物跡の一部と認識した。南西側が調査区外であり、規模は確認できない。各柱穴の大きさは第7表のとおりである。

ST07と平行した配列を示すため、掘立柱建物跡と認識した。周辺に埋土が類似する柱穴状の穴が複数あり、ST07を含めこれらの柱穴状のまとまりをピット群2として、別途報告する。

出土遺物: SK64から炭化物を採取した。その他に出土遺物はない。炭化物の炭素14年代測定で、 2110 ± 20 yrBPの結果を得た。

遺構の時期: 周辺には栗林式以外の土器はなく、遺構内の出土遺物、主軸の方向から弥生中期後半栗林式期の遺構と判断した。

SA01 (第39図)

位置と遺構の構造: ③区のⅣB23・24グリッドⅣ層上面で検出した。直線に配列するSK72・SK76・SK77・SK95・SK98のピットを横列と認識した。なお、遺物、記録類の注記はSK番号でなされている。SA01周辺には埋土が類似するピットを複数検出しており、他のピットとの関連も考慮し、SA01を含めてピット群3として別途報告した。

出土遺物: すべてのピットから弥生時代の無文の土器片と、SK76から弥生中期後半の土器片が1点出土した。また、SK72から打製石鏃(第76図6)が、SK77から頁岩(安山岩)の剥片が2点出土した。

遺構の時期: 周辺から弥生後期以降の土器が出土していないことから、弥生中期後半栗林式期の遺構と判断した。

ピット群1 (第38図)

位置と概要: ①区ⅡV22グリッド周辺のⅣ層上面で検出した19基のピット群である。掘立柱建物跡の再検証の必要性からST05・ST06のピットも含めている。それぞれのピットの規模は第8表に掲載した。ST05Pit5(SK43)はSD02の埋土である基本土層Ⅲa層を除去した後に確認された遺構であるが、Ⅲa層と類似した埋土であり、SD02との前後関係は確認できない。SK40・41・42もSD02埋土の基本土層Ⅲa層除去後に確認したが、SD02との前後関係は確認できなかった。ST06は円形に配列することから縄文時代の柱穴である可能性があるが、これらの埋土は縄文時代前期の遺構の埋土と色調が異なる。

出土遺物: SK24・SK25・SK26・SK32・SK34から弥生中期後半の土器が出土した(第70図471~475)。また、SK25から砥石が出土した(第80図48)。

遺構の時期: 一部に縄文時代の遺構を含む可能性もあるが、出土遺物と、埋土の色調の類似から、また栗林2式新段階のSB04に近接することから、大半は栗林2式新段階の遺構群と判断した。

ピット群2 (第38図)

位置と概要: ②区ⅡV15・20グリッドのⅣ層上面で検出した20基のピット群である。掘立柱建物跡の再検証の必要性からST07・ST08のピットも含めている。それぞれのピットの規模は第8表に掲載した。

出土遺物：前述の ST07・ST08の Pit 出土遺物以外では、SK59から弥生中期後半の土器片が出土した。

遺構の時期：出土遺物と、埋土が弥生時代の遺構と類似していることから、弥生時代の遺構群と判断した。

ビット群3（第39図）

位置と概要：③区Ⅳ B22・23・24グリッドのⅣ層上面で検出した23基のビット群である。それぞれのビットの規模は第8表に掲載した。横列跡の再検証の必要性から SA01のビットも含めている。ビットの切り合いがあり、SK82とSK99がSK89を切り、SK84がSK92を切る。なお、SK89は、特殊な遺物出土状況であるため、第3項の土坑・墓坑にも報告している。

出土遺物：前述の SA01の Pit 出土遺物以外では、SK74・SK75・SK78・SK79・SK80・SK81・SK82・SK89・SK92・SK94・SK99から無文の土器片を主体とした弥生中期後半と思われる土器が出土した。特にSK89からはほぼ完形の甕（第71図479）が出土した。

遺構の時期：出土遺物と、埋土が弥生時代の遺構と類似していることから、弥生時代の遺構群と判断したが、重複するビットがあり、複数の時期のものが存在する。

ビット群4（第39図）

位置と概要：⑤a区Ⅱ W17グリッドのⅢb層中で検出した8基のビット群である。いずれも、SD02の埋土である基本土層Ⅲa層を除去して検出したものであるが、埋土はⅢa層と類似しており、SD02が完全に埋没する前に形成されたと判断できる。それぞれのビットの規模は第8表に掲載した。

出土遺物：SK119・SK121・SK122・SK123・SK126から無文の土器片を主体とした弥生中期後半と思われる土器が出土した。また、SK123から出土した炭化種子（クヌギ子葉）の炭素14年代測定で、2100±20yrBPの結果を得た。

遺構の時期：出土遺物と、埋土が弥生時代の遺構と類似していることから、弥生時代の遺構群と判断した。

ビット群5（第40図）

位置と概要：⑤b区Ⅳ H10・Ⅳ I06グリッドのⅣ層上面で検出した18基のビット群である。それぞれのビットの規模は第8表に掲載した。

出土遺物：SK129・SK135・SK138・SK139・SK141・SK161・SK163から無文の土器片を主体とした弥生中期後半と思われる土器が出土した。SK134からは弥生後期の土器が出土した。

遺構の時期：周辺では弥生中期後半から後期の遺構と遺物を多数確認しており、ビット群の埋土が弥生時代の遺構と類似していることから、弥生時代の遺構群と判断した。

ビット群6（第40図）

位置と概要：⑤b区Ⅳ II2グリッドのⅣ層上面で検出した9基のビット群である。規則的な配列は認識できない。それぞれのビットの規模は第8表に掲載した。

出土遺物：SK151・SK153・SK157から無文の土器片を主体とした弥生中期後半と思われる土器が出土した。

遺構の時期：周辺では弥生中期後半から後期の遺構と遺物を多数確認しており、ビット群の埋土が弥生時代の遺構と類似していることから、弥生時代の遺構群と判断した。

3 土坑・墓跡

(1) 土坑・土坑墓・土器棺墓

土坑を18基検出した。遺物出土状況が特殊なもの、土坑墓、土器棺墓と想定されるものを以下に記述する。他の土坑は、第9表に位置、大きさ、出土遺物を記した。

SK89 (第41図)

位置と遺構の構造：③区のIVB23グリッドIV層上面で検出。42cm×38cm、深さ57cmの円形の土坑で、甕が潰れた状態で出土した。甕はほぼ完形に復元され（第71図479）、底部の出土状態から正位に埋設された甕が埋設後に潰れた可能性があるが、埋土の上層で出土しており廃棄した可能性も否定できない。遺構の性格は不明である。

遺構の時期：弥生中期後半栗林2式期と判断した。

SK142 (第42図)

位置と遺構の構造：⑤b区のIVH04グリッドIV層上面で検出した。124cm×64cm、深さ25cmの隅丸長方形である。

出土遺物：弥生後期の壺（第71図497）などが出土した。

遺構の時期：出土遺物から弥生後期吉田式期と判断した。

SK144 (第42図)

位置と遺構の構造：⑤b区のIVC19・24グリッドのⅢb層最下部で検出した。175cm×106cm、深さ20cmの隅丸長方形である。

出土遺物：弥生中期後半の土器片が数点出土した（第71図498～500）。土坑墓の可能性を考慮し、埋土の水洗選別をおこなったが、無文の土器片が出土したのみである。

遺構の時期：弥生中期後半栗林2式期と判断した。

SK174 (第43図)

位置と調査経過：⑤b区IV C25グリッドのⅢa層中で検出した。調査区北東壁際に土器片がまとまって出土したため、SQ02（遺物集中）の遺構番号を付して調査を進めた。甕が潰れた状態でまともっており、調査区壁面で掘り込みを認識したため、SK174とした。ただし、土坑と認識した時には調査面が土坑底面まで達しており、土坑の形状は確認できなかった。調査期間の制約で現地での精緻な調査ができないと判断し、調査区壁面を掘り込んで土器を周りの土ごと取上げた。室内での調査により、2個体の変形土器が口縁部を合わせたような状況で埋設されていたことが判明した。遺物の注記や記録類はSK174とした。



第43図に示した土器出土状況は、室内調査で記録したものである。遺物の傾きは現場での状況を正確には再現できなかったが、発掘現場で記録した図面および写真と照合し、出土時の状況を推定復元したものである。

遺構の構造と遺物出土状況：土坑の平面形状は不明であるが、土坑に土器を埋設した遺構であることは、調査区壁面で確認できた。土坑底面はⅣ a 層上部であり、堅穴住居跡の床面やピット群 Pit の底面に比べ高いことが確認できる。

土器は2個体の甕と、壺の破片1点である。2個体の甕を仮に甕A（第72図504）と甕B（第72図503）とする。甕Bは40～50°の角度で横倒しになり、口縁部の一部が欠けているものの概ね原形を留めた状態で出土した。内部には、甕Bの口縁部と甕Aの破片が落ち込んでいたが、いずれも埋土の上半部で出土していた。ある程度甕Bに土が堆積した後、土器が割れて崩れ落ちた状況が想定される。甕B内は空洞であったか、有機物が納められていたのであろう。甕Aの大形破片は甕Bをかこむように出土しており、一部は甕Bの中に落ち込んでいた。これらの状況から、甕Aと甕Bは口縁を向い合せにして、くの字状に設置されていたと想定した。なお、甕B内より出土した壺の頸部破片（第72図505）は混入品と判断した。甕A・Bの出土状況から合せ口の土器棺墓を想定して土壌分析をおこなったところ、遺体が納められていたと断定はできないが、甕B内土壌のリン酸とカルシウムの値が高いことが確認された。分析報告書は、「リン酸の供給源としては植物遺体などに由来する腐植によると判断され、土器内土壌のリン酸やカルシウム含量の挙動も腐植に伴った変化を反映している可能性が高い。」と記されている。骨、歯等の有機質の遺物は検出されず、土壌分析からも土器棺墓であることを支持する結果は得られなかったが、特異な出土状況から、土器棺墓の可能性が高いと判断した。資料調査をした範囲では、長野県で弥生中期後半の合せ口の土器棺墓は報告されていないが、弥生後期には確認されている。今後類例が見つかるまで、本遺構の評価は保留しておきたい。

遺構の時期：甕A・Bは弥生中期後半栗林2式新段階～3式、第72図505の壺が栗林3式と考えられる。遺構の時期も栗林2式新段階の終り～3式のものとして判断した。

（2）礫床木棺墓・木棺墓

木棺墓、礫床木棺墓は⑤ b 区Ⅰの一角の8mほどの範囲でまともな検出したが、調査区外へさらに広がることが予想される。SM01～04の主軸がほぼ平行し、SM05はこれらと直交する。

なお、礫床木棺墓は3基あり、礫の石材組成を見るとSM01・05とSM02に大別できる。前者は頁岩と硬砂岩が主体であり、後者は安山岩が主体となる。前者についても、SM01にはチャートがわずかに含まれるが、SM05には見られず、3基の石材組成は必ずしも一致しない。この差が有意なものであるのか、偶然の産物であるのか、3つの遺構の比較では結論は出せない。礫床木棺墓の礫の石材等の属性については添付DVDにデータ収録した（ファイル名「礫床木棺墓礫台帳」参照）。

SM01（第44図）

位置と遺構の構造：⑤ b 区ⅣC19グリッドのⅢ a 層下部で検出した。SK144に切られる。中央部を畑灌のパイプ埋設によりかく乱されている。138cm×55cmの範囲に礫が敷かれ、礫の東西両端に小口痕がある礫床木棺墓である。掘方を含めた土坑全体は220cm×100cmの方形である。主軸方位はN-67°-Wである。東側の小口痕は上端62cm×18cmで深さ35cm、西側は80cm×29cmで深さ37cmであり、小口痕内にも少量の礫が落ち込んでいる。また礫床の両側面は、幅20cm、深さ10cmに溝状に落込み、礫が溝幅の半分程度まで入り込んでいる。位置的に長側板痕と考えられる。東側小口痕、西側小口痕埋土の花粉分析をしたが、花粉化

石はほとんどなかった。

出土遺物：弥生中期後半の栗林式土器破片が礎床および小口痕埋土から出土した。埋土の水洗選別を実施したが、土器片と炭化物が出土したのみで、玉類等の副葬品は検出できなかった。

遺構の時期：出土遺物と、複数報告されていることから、弥生中期後半の遺構と判断した。ただし、SB14とは近接しており、SB14と同時存在したとは考え難い。

SM02 (第44図)

位置と遺構の構造：⑤b区IVC18・19グリッドのⅢa層下部で検出した。SK172と切り合うが、前後関係が明確に確認できなかった。

150cm×60cmの範囲に礎が敷かれ、礎の東西両端に小口痕がある礎床木棺墓である。掘方を含めた土坑全体は210cm×75cmの方形である。主軸方位はN-54°-Wである。東側の小口痕は上端80cm×25cmで深さ45cm、西側は75cm×30cmで深さ35cmであり、小口痕内にも礎が落ち込んでいる。

出土遺物：弥生中期後半の土器片が少量出土した。石器では、打製石鏃1点(第76図3)と、凝灰質頁岩、頁岩(安山岩)、輝石安山岩の剥片各1点が出土した。石鏃は礎床下の掘方から出土している。埋土の水洗選別を実施したが、土器片が出土したのみで、玉類等の副葬品は検出できなかった。

遺構の時期：出土土器から、弥生中期後半の遺構と判断した。

SM03 (第45図)

位置と遺構の構造：⑤b区IVC18・19グリッドのIV層上部で小口痕と思われる平行した2ヶ所の長楕円形のピットを確認したのみである。SM01・02に比べ検出面の標高が低いため、床面および掘方は削平されたものと思われる。当初東側の小口痕はSK167の遺構記号を付したが、SM03(Pit1・2)と遺構名を改めた。Pit1は60cm×28cmで深さ35cm、Pit2は上端73cm×26cmで深さ33cmである。小口痕の間隔は190cmであり、SM02とはほぼ同じ規模である。主軸方位はN-65°-Wで、SM02とはほぼ平行して配置されている。

出土遺物：弥生中期後半の土器片が1点出土したのみである。

遺構の時期：出土遺物と、位置関係からSM02と同時期の弥生中期後半と判断した。

SM04 (第45図)

位置と遺構の構造：⑤b区IVC19グリッドのIV層上部で小口痕と思われる平行した2ヶ所の長楕円形のピットを確認したのみである。SM01・SM02に比べ検出面の標高が低いため、床面および掘方は削平されたものと思われる。当初西側のピットはSK168の遺構記号を付したが、SM04(Pit1・2)と遺構名を改めた。Pit1は72cm×30cmで深さ32cm、Pit2は上端52cm×30cmで深さ32cmである。小口痕の間隔は102cmであり、SM03に比べ小さな木棺墓が想定される。主軸方位はN-82°-Wである。

出土遺物：出土遺物なし。

遺構の時期：SM03と類似することから、弥生中期後半の遺構と判断した。

SM05 (第45図)

位置と遺構の構造：⑤b区IVC19グリッドの調査区壁面で確認した。調査区を部分的に拡張して調査をおこなった。Ⅲa層を掘り込んで礎床を設けている。礎床はSM01・SM02とはほぼ同じ標高値でⅢa層上部のレベルである。北東側は調査区外であり、南西側は表土除去作業で掘削してしまい、全体形状は不明である。小口痕は確認できなかった。主軸方位は明確ではないが、他の(礎床)木棺墓とはほぼ直交する。

出土遺物：弥生中期後半の土器片が出土したのみである。

遺構の時期：弥生中期後半の遺構と判断した。

4 溝跡

SD01 (第46図)

位置と遺構の構造：①区ⅡV22、ⅣB02グリッドのⅣ層上面で確認した。ピット群1のSK43 (ST05)を切る遺構である。幅30cm～50cm、深さ8～15cm、約7.0mにわたり検出した。東西両端は調査区外であり、全長は不明である。底面はほぼ水平であるが、わずかに東から西に向かって傾斜する。

出土遺物：弥生中期後半の土器(総重量0.727kg)(第66図366～369)と刺片2点が出土した。

遺構の時期：出土遺物から弥生中期後半栗林2式期と判断した。

SD02 (第47～51図、PL4)

位置と調査経過：①・②・③・⑤a区に広がる溝跡である。H23～H25年度の3年度に分けて調査をおこなった。①・③区ではⅢb層まで重機で掘り下げた後、人力で掘り下げた。⑤a区では調査区が狭く、安全を考慮し、重機で埋土を薄く削り、徐々に掘り下げた。

SB07、SK83、ピット群4と切り合う。SK83がSD02の埋土を掘り込んでいる。ピット群4はSD02の埋土を掘り込んでおり、埋没する過程で形成された遺構である。SB07とは土層の観察では新旧関係の確認はできなかった。

遺構の構造：溝状の窪地で、溝の縁の立ち上がりは緩やかで、溝幅を厳密に測定することは難しい。そのため基本土層Ⅳ層上面での地形変換点をもって、本溝跡の範囲とした(第47図)。最大幅は20mを超え、長さ約56mにわたり確認された。深さは①区では平坦部のⅣ層上面から測って1.5mである。基本土層Ⅱ層群、Ⅲ層群が埋土となる。Ⅱ層群の堆積時には溝部分はやや窪んでいたが、その後窪地は無くなり平坦となる。なお、⑤a区のⅠ層群最下部(Ⅰd層)で焼土を2ヶ所確認し、SF01、SF02として記録した。焼土は近世以降のもので詳細は第5章で記述する。

遺物出土状況：弥生中期後半から後期の土器が出土した。出土土器の総重量は76.17kgで、①区62.864kg、②区3.68kg、③区6.066kg、⑤a区3.563gと①区に土器が集中する。その大半は弥生中期後半の土器であるが、③区では弥生後期の土器の方が多く出土した。

弥生中期後半の土器は特に、①区でまとめて多量に出土した(第66～69図370～447)。出土状況から廃棄または遺棄されたと判断できる。これらと一緒に、ミニチュア土器1点(第75図552)、土製耳飾り1点(第75図577)、土製円板3点(第75図560・566・574)、粘土塊2点が出土した。石器は、①区を主体に、楔形石器2点、砥石2点(第80図50)、敲石18点(第81図61～63・67)、凹石2点(第81図56)、擦切り具1点(第78図29)、刃器2点(第78図36)、有孔石製品1点(第83図77)、刺片23点、赤色化または黒色付着物がある礫12点などが出土した。また、⑤区ではSD02の外側の縁辺部に堯の破片がまとめて出土した(第74図546)。

弥生後期の土器は①区と③区から出土した(第69図448～451)。①区の弥生後期土器はⅡ層から出土した。448と450は重なるようにして出土した。③区のものⅢa'層から出土したと認識したが、埋土内で見落とした土坑の遺物である可能性もある。

中期後半の土器群と、後期の土器群は混在して出土することではなく、それぞれにまとまりをもって出土した。後期土器群が中期後半土器群より相対的に上層から出土したと判断できることから、便宜的に前者をSD02上層土器群、後者をSD02下層土器群とする。

Ⅲ層（Ⅳa層）出土の炭化物4点の炭素14年代測定を実施し、 $2070 \pm 20\text{yrBP}$ 、 $2090 \pm 30\text{yrBP}$ （2点）、 $2200 \pm 30\text{yrBP}$ の結果を得た。

遺構の時期と性格：断面形状から人的な掘削は想定し難く、千曲川の氾濫などによってできた自然流路であった可能性が高い。ただ、珪藻分析の結果と①～③区の土器の出土状態から、弥生中期後半には離水しており、弥生後期には基本土層Ⅱ層までは埋まり窪みは浅くなっていたと想定される。自然流路がいつ形成されたかは不明である。

SD04（第46図）

位置と遺構の構造：⑤b区のⅣC25、ⅣH05グリッドのⅢb層で確認した。幅0.24m～0.3m、深さ0.12m、長さ4.2mにわたって南北に直線的に延びる溝跡である。溝底はほぼ水平である。北側は調査区外で、南側は検出面まで掘り込まれていないため途中で途切れているが、さらに南側に延びると想定される。SB15に近接して、平行して掘られていることから、SB15の関連施設の可能性がある。

出土遺物：無文の土器片が3片出土したのみである。

遺構の時期：弥生中期後半の遺構と判断した。

SD05（第46図）

位置と遺構の構造：⑤b区のⅣI12グリッドのⅣ層上面で確認した。SK152・SK155と切り合うが、新旧関係は明らかにできなかった。幅0.18m、深さ0.14m、長さ1.85mにわたってやや弧状に延びる溝跡である。北側は調査区外であり、全体形状は不明。

出土遺物：なし。

遺構の時期：埋土が弥生時代の遺構のものに類似することから弥生時代の溝跡と判断した。

註

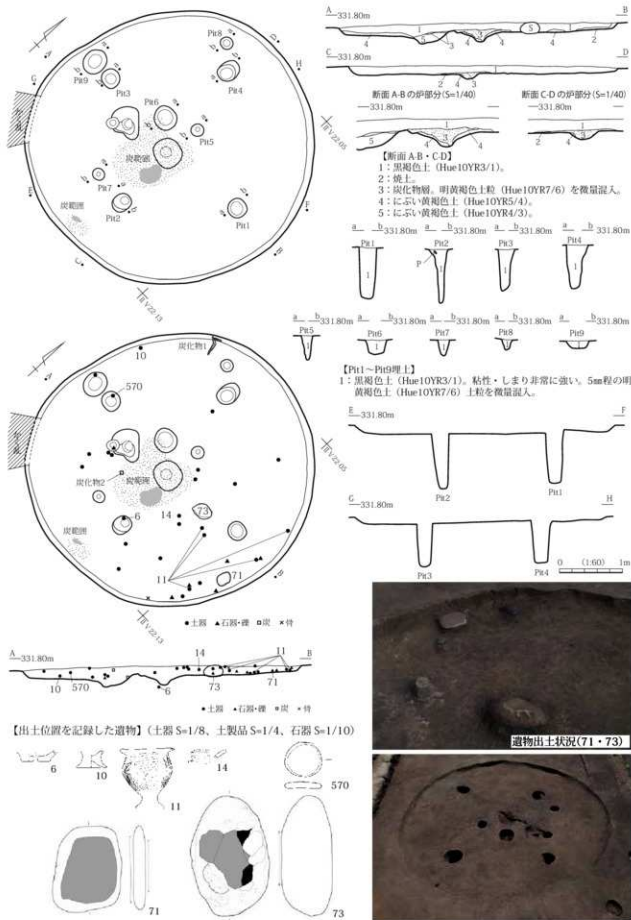
- 昭和54年の発掘調査で（豊田村教育委員会1980）で、1号～3号の竪穴住居跡（弥生時代中期後半）が確認されており、本調査では竪穴住居跡は4号からの遺構番号を用いた。また、当初SB10（ⅡW17・22グリッド）としたものは、遺構ではないと判断し欠番とした。
- 長軸2m以下の穴はSKの遺構記号を付して記録した。弥生時代と判断したSKの遺構記号を付した遺構は130基ある。SKとした遺構には長軸が16cmのものから186cmのものまで規模はさまざまである。便宜的に、柱穴の可能性が高い長軸60cm以下のSKをピット、長軸が90cmを超えるものを土坑と区分した。但し、長軸が60cm以下でも特殊な遺物出土状況などから柱穴ではないと想定されるものは土坑とした。ピットの多くは限られた区域に群集する傾向にあり、それらをピット群とした。なお、掘立柱建物跡の柱穴もピット群の区域にある場合はピット群の一部としてとらえた。
- 方形周溝墓（SD03）が1基確認されており、整理作業終盤まで弥生時代後期の遺構と認識していた。出土遺物中に土師器の壺が1点確認されたことで古墳時代の遺構と認識を改めた。
- 栗林式土器の編年研究の現状は馬場伸一郎により研究史を踏まえた詳細な検討がなされている（馬場2008b）。1929年～1931年に、南大原遺跡、栗林遺跡で弥生時代中期の土器が発見、報告されて以降、桐原健、笹澤浩、千野浩、上田典男、賛田明、青木一男、寺島孝典、安藤広道、石川日出志らが栗林式土器編年の研究を進めてきた。寺島孝典氏は、栗林式土器編年研究を整理し、現状では「栗林Ⅰ式・Ⅱ式」（笹澤1996）、「栗林古段階・中段階・新段階」（寺島1999）、「栗林Ⅰ式・2式・3式」（石川2002・2012、馬場2008）という型式設定が存在し、栗林式土器を扱う際にどの編年を使用すればよいのか判断に苦しみ、混乱が生じていることを鑑み、今後は石川編年を採用することを表明した（寺島孝典2013 p288）。合わせて、当センターが発掘調査をした中野市内の柳沢遺跡では石川編年、川久保遺跡では寺島編年、石川編

- 年、松原遺跡の段階設定をした賛田福年（賛田2000）を併用しており、これらの遺跡の調査成果との対比に混乱が無いよう、本報告書では石川福年を用いた。
- 5) SB05が検出された②区には縄文時代の遺構がない。また、②区では縄文時代前期と中期の土器片が7点出土したのみであり、縄文時代の石皿が存在する蓋然性は低い。調査時の認識が誤りで、石皿は弥生時代中期のものである可能性がある。
 - 6) 掘方調査の時に検出した溝で、壁際と、壁から20～30cm離れたところにあり、内側の溝は弧状を呈している。南東壁際にはないため、掘方の痕跡ととらえた。建て替えの痕跡である可能性も想定できる。
 - 7) 南北方向の長さは推定値。
 - 8) 礫は2点採取されたが、整理作業で自然礫と判断し計測した後廃棄した。この他赤色化した礫片1点が出土した。
 - 9) 33.491kgの内、SD03の埋土等に包含されていた土器で調査時の採取エラーでSB11・12の遺物として取上げたと考えられる弥生時代後期土器が1.115kg（SB11が0.502kg、SB12が0.613kg）ある。33.491kgの他に、所属遺構が不明でSB11・SB12・SD03のいずれかの埋土出土としたものが3.699kgある。
 - 10) 調査の当初SD03を認識していなかったために、SD03の遺物をSB11・12として取上げた可能性がある。SD03は弥生後期のSB13と重複しており、埋土に後期土器が含まれている。
 - 11) この他に台石の欠損品が1点出土しSB14出土の台石破片と接合した。
 - 12) 掘立柱建物跡、横列の柱穴のように規則的な配列を確認できないが、直径60cm以下の穴がまとまって検出される区域がある。これらをピット群とした。掘立柱建物跡、横列の中にはピット群の中に位置するものもあり、認識した建物跡のピットが一連のものであるか否か確認できないものもあり、これらも含めてピット群とした。横列についても同様である。

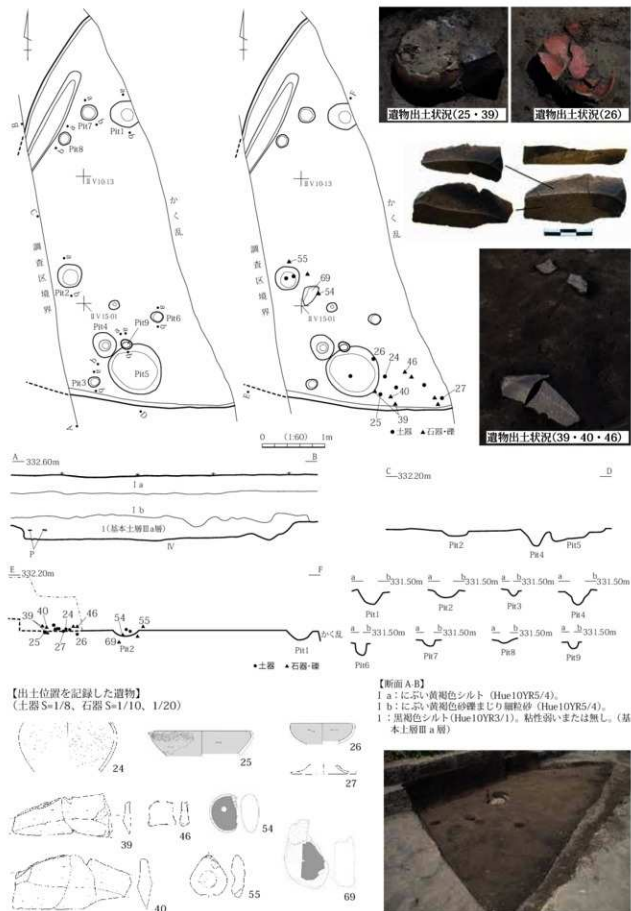
数行録

新遺跡 最近下水門郡登井村の須田順治氏から、同村の遺跡に就いて報告があつた。上今井村南大原からは有紋彌生式土器が遺跡工事の際地下二尺、深きところにて四五尺の所から多量の木炭と共に発見された。石斧、石鏃も出た。須田氏は須及形の磨石斧を採集した。上今井字山根から倭紋ある縄紋土器が出る。中には羽状細文のものが混じてゐる。石器としては磨石斧、石鏃、石匙、凹石等が出たと云ふ。

藤森栄一 1929 「数行録」より

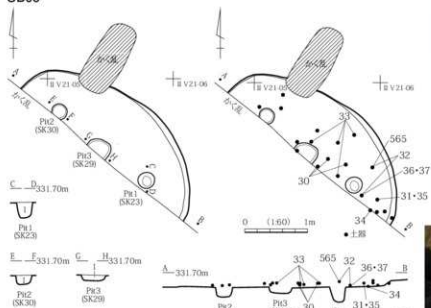


第23図 SB04遺構図



第24図 SB05遺構図

SB06



【Pit 埋土】

Pit1 (SK23) 土層注記不明。

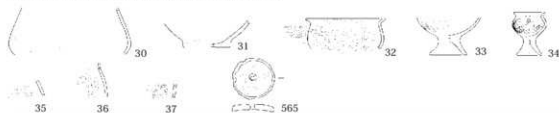
Pit2 (SK30)

1: 黒褐色土 (Hue10YR2/2)。シルト質。粒子細かい。

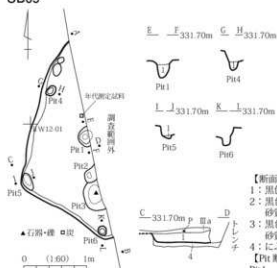
Pit3 (SK29)

1: 黒褐色土 (Hue10YR3/2)。シルト質。粒子細かい。

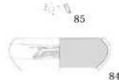
【出土位置を記録した遺物】(土器 S=1/8、土製品 S=1/4)



SB09



【出土遺物】(土器 S=1/8)



【断面 A B・C・D】

1: 黒色～黒褐色 (Hue10YR2/1～2/2) 砂まじりシルト。炭化物を少量含む。

2: 黒色～黒褐色 (Hue10YR2/1～2/2) 砂まじりシルト。にぶい黄褐色 (Hue10YR6/4) 砂質シルトをブロック状に含む。

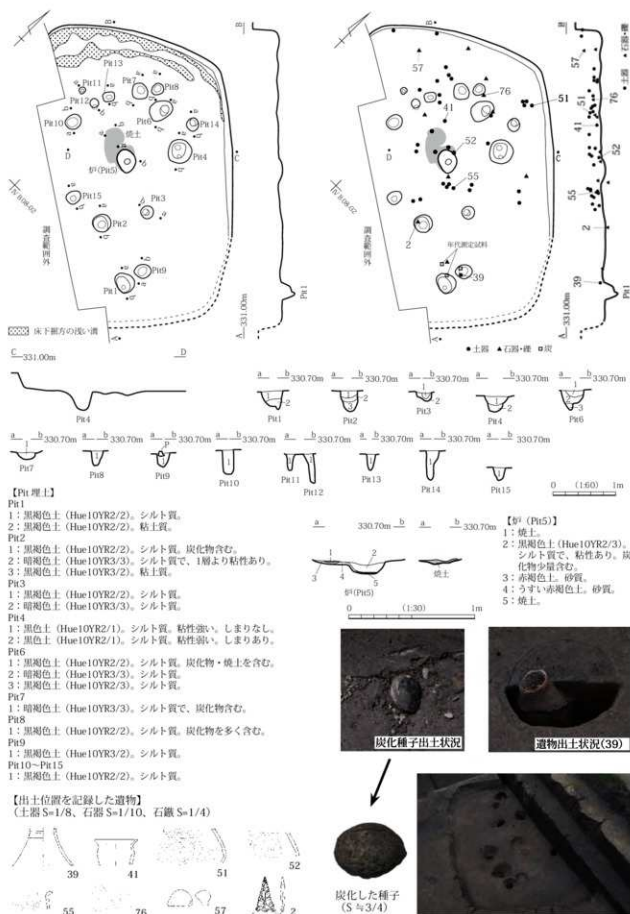
3: 黒色～黒褐色 (Hue10YR2/1～2/2) 砂まじりシルト。にぶい黄褐色 (Hue10YR6/4) 砂質シルトを多く含む。

4: にぶい黄褐色 (Hue10YR5/4) シルト。上部しまり良い。(床面)

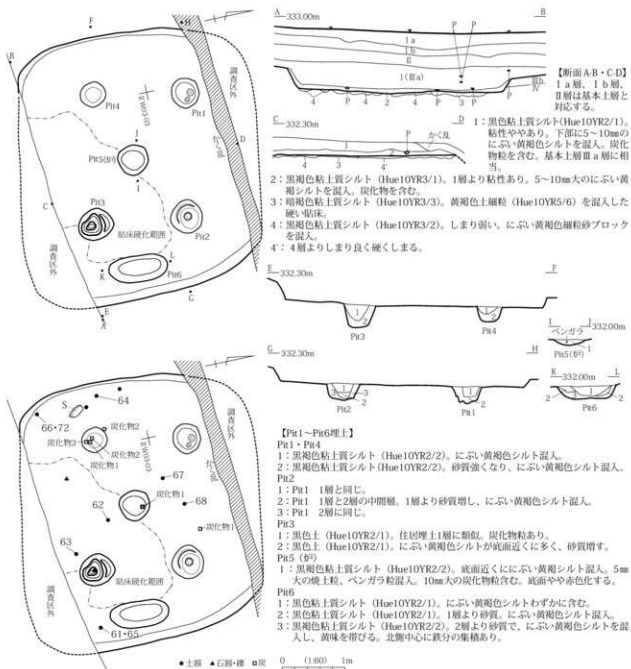
【Pit 断面】

Pit1
1: 黒色～黒褐色 (Hue10YR2/1～2/2) 砂まじりシルト。炭化物を含む。Pit2
1: 黒褐色 (Hue10YR3/2) 砂まじりシルト。粘性・黄褐色砂質土ブロックをわずかに含む。Pit3
1: 黒褐色 (Hue10YR3/1) 砂まじりシルト。粘性ややあり。黄褐色ブロックを少量含む。Pit4・Pit5
1: 黒色～黒褐色 (Hue10YR2/1～2/2) 砂まじりシルト。にぶい黄褐色 (Hue10YR6/4) 砂質シルト粒を含む。炭化物を含む。

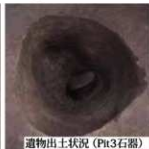
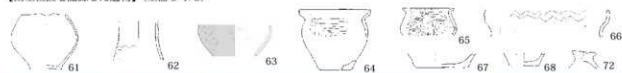
第25図 SB06・SB09遺構図



第26図 SB07遺構図



【出土位置を記録した遺物】(土器 S=1/8)

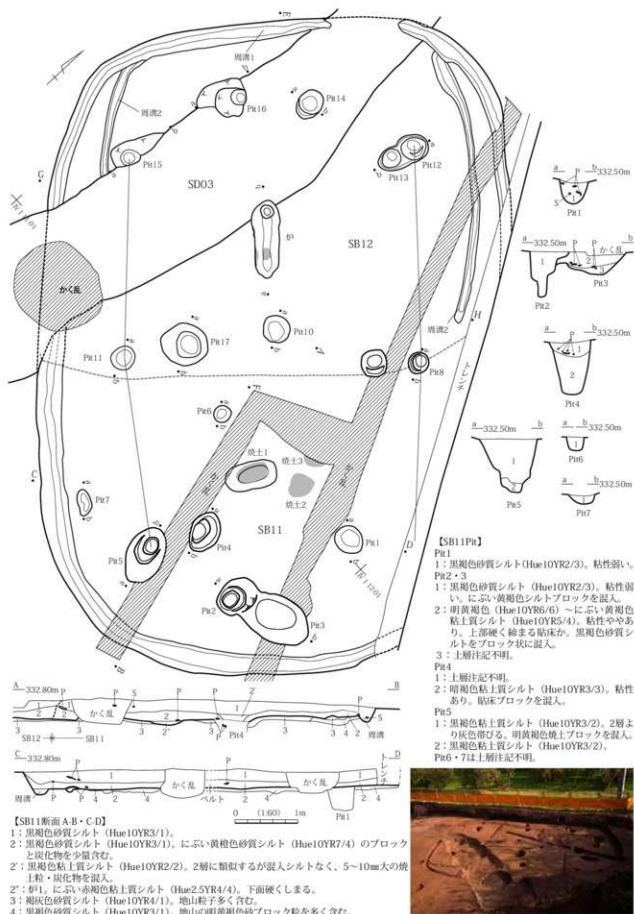


遺物出土状況(61・65)

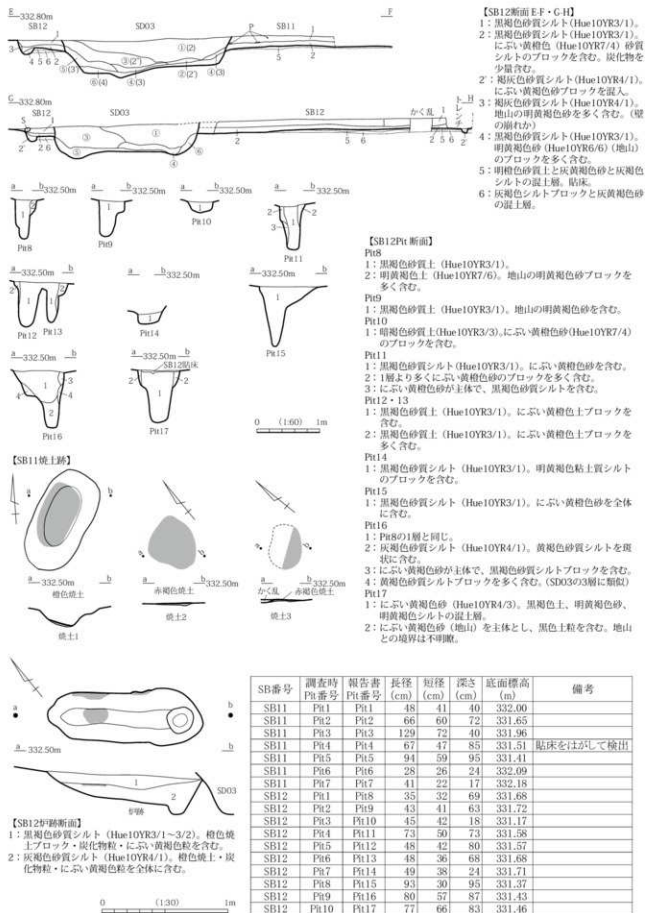
遺物出土状況(Pit3石部)

遺物出土状況(64・石部)

第27図 SB08遺構図

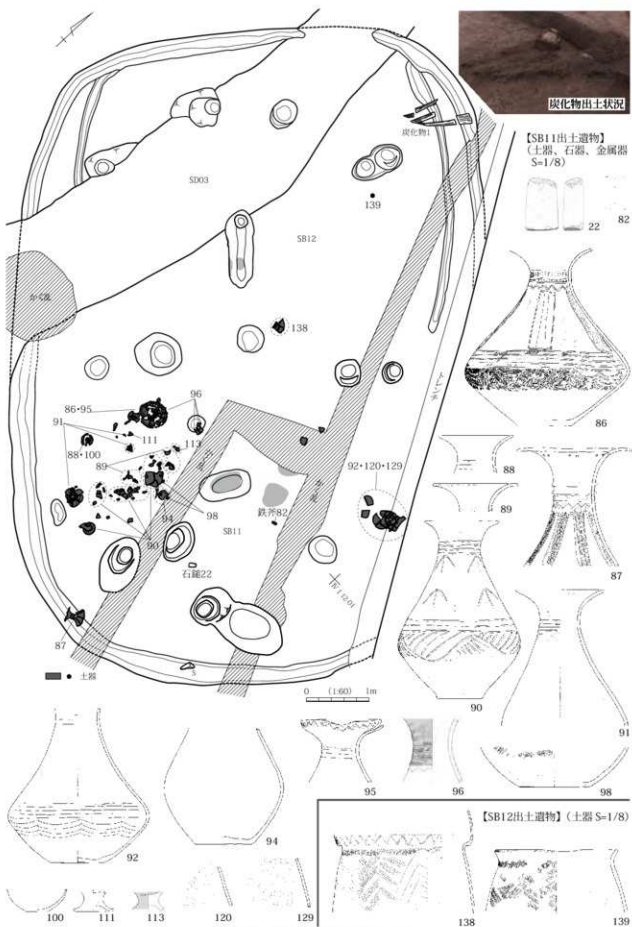


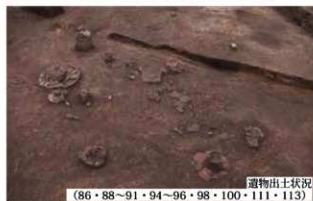
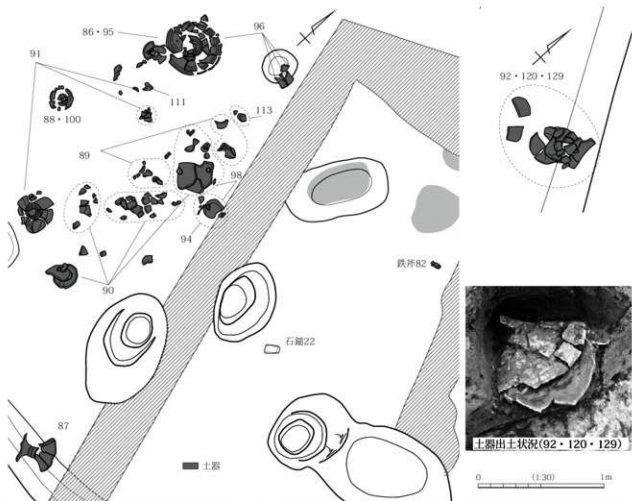
第28図 SB11・SB12遺構図(1)



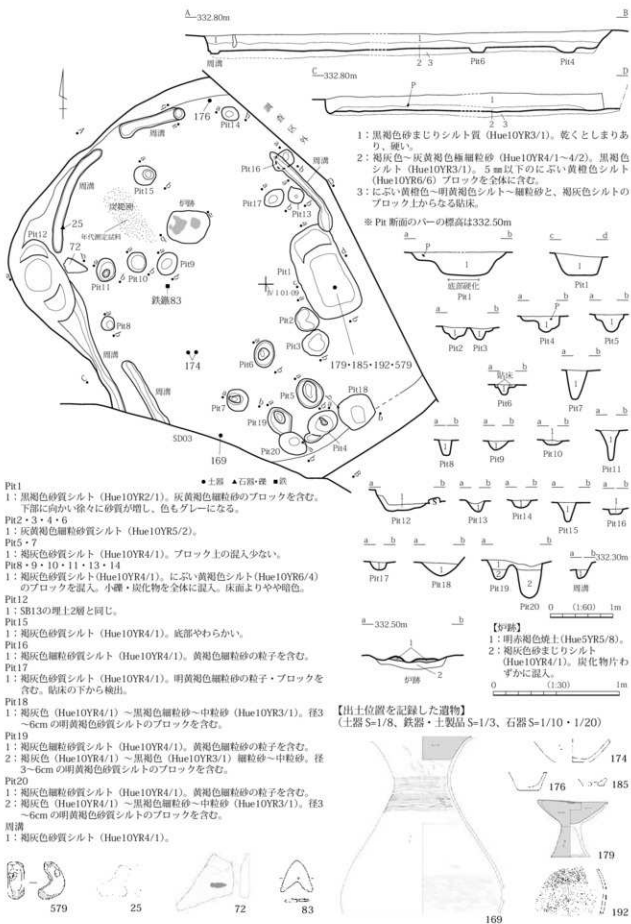
第29図 SB11・SB12遺構図(2)

第6表 SB11・SB12 Pit 一覧

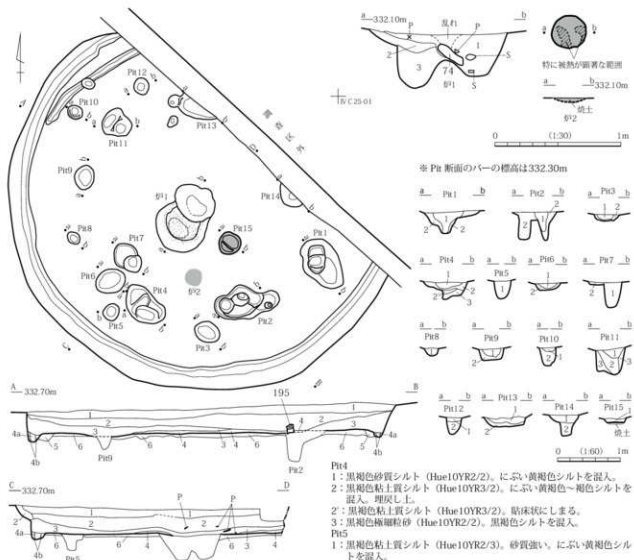




第31図 SB11・SB12遺構図(4)



第32図 SB13遺構図



【断面 A・B・C・D】

- 1: 黒褐色砂まじりシルト (Hue10YR3/2)。
 2: 黒褐色砂質シルト (Hue10YR3/1)。
 3: 2層に地上上がブロック状に混じる。
 4: 灰黄褐色砂質シルト (Hue10YR4/2) にふい黄褐色 (Hue10YR6/4 ~6/6) シルトを含む。
 4a: 黒褐色シルト (Hue10YR3/1)。しまりなし。
 4a・4b・5・6: 土層注記不明

Pt1

- 1: 灰黄褐色極細砂 (Hue10YR4/2)。灰褐色 (Hue7.5YR6/2) ~ 黒褐色 (Hue7.5YR3/2) の壁を混じるシルト層が1.5~2cm間隔で輪状に堆積。その下部はしまりが悪くなり暗褐色となり、炭化物を混入。
 2: 黒褐色粘上質シルト (Hue10YR2/2)。炭化物の混入した黒色土を混入。
 3: 土層注記不明。

Pt2

- 1: 黒褐色粘上質シルト (Hue10YR2/2)。炭化物を混入。
 2: 黒褐色粘上質シルト (Hue10YR3/2)。地山にふい黄褐色シルトをブロック状に混入。埋戻し上。炭化物を含む。

Pt3・6

- 1: 黒褐色粘上質シルト (Hue10YR2/2) にふい黄褐色シルトブロックを混入。
 2: 暗褐色砂質シルト (Hue10YR3/3) にふい黄褐色シルトブロックを混入。焼土粒、炭化物を混入。

Pt4

- 1: 黒褐色砂質シルト (Hue10YR2/2) にふい黄褐色シルトを混入。
 2: 黒褐色粘上質シルト (Hue10YR3/2) にふい黄褐色~褐色シルトを混入。埋戻し上。
 3: 黒褐色極細砂 (Hue10YR2/2)。黒褐色シルトを混入。

Pt5

- 1: 黒褐色粘上質シルト (Hue10YR2/3)。砂質強い。にふい黄褐色シルトを混入。

Pt7

- 1: 黒褐色砂質シルト (Hue10YR2/3)。壁際にふい黄褐色シルトを混入。
 2: 暗褐色砂質シルト (Hue10YR3/3) にふい黄褐色シルトを混入。

Pt8

- 1: 黒褐色粘上質シルト (Hue10YR2/2) にふい黄褐色シルトを混入。炭化物が上部に分布。

Pt9

- 1: 黒褐色粘上質シルト (Hue10YR2/2) にふい黄褐色シルトを混入。炭化物を含む。
 2: 暗褐色粘上質シルト (Hue10YR3/3)。黒褐色シルトを混入。

Pt10

- 1: 黒褐色粘上質シルト (Hue10YR2/2) にふい黄褐色シルトを混入。炭化物を微量含む。
 2: 暗褐色粘上質シルト (Hue10YR3/3)。黒褐色シルトを混入。

Pt11

- 1: 黒褐色粘上質シルト (Hue10YR2/3)。黄褐色シルトブロックを混入。
 2: 黒褐色粘上質シルト (Hue10YR2/3)。黄褐色シルトブロックを混入。
 3: 暗褐色粘上質シルト (Hue10YR3/3)。黒褐色シルトを混入。

Pt12

- 1: 暗褐色砂質シルト (Hue10YR3/3) にふい黄褐色シルトを混入。
 2: 暗褐色砂質シルト (Hue10YR3/3)。

Pt13

- 1: 黒褐色粘上質シルト (Hue10YR2/2)。
 2: 暗褐色粘上質シルト (Hue10YR3/3) にふい黄褐色シルトを混入。

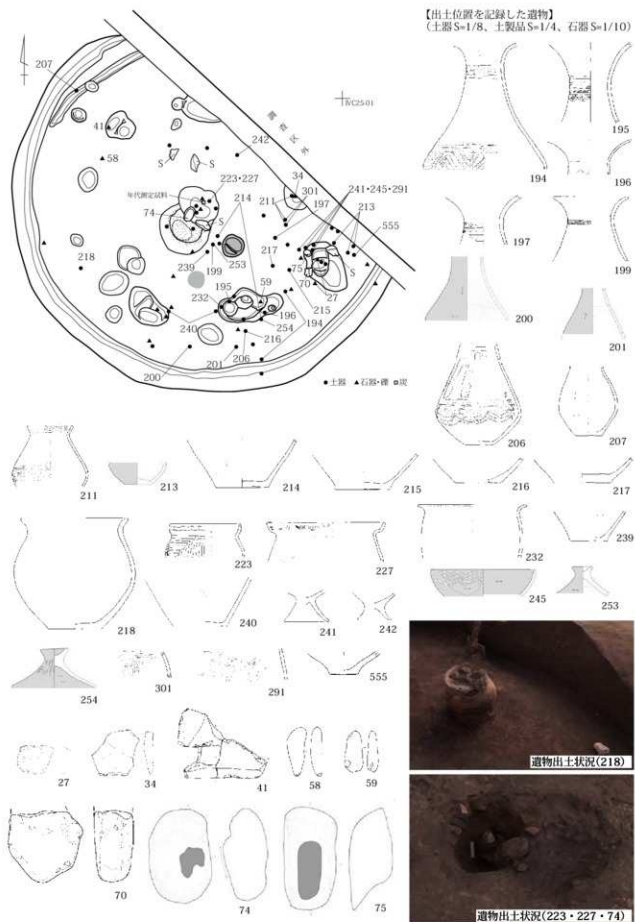
Pt14

- 1: 黒褐色粘上質シルト (Hue10YR2/2)。炭化物を混入。
 2: 黒褐色粘上質シルト (Hue10YR3/2)。ブロック状に1層が混入。

Pt15

- 1: 黒褐色粘上質シルト (Hue10YR2/2) にふい黄褐色シルトブロックを混入。炭化物を混入。底面赤く焼ける。

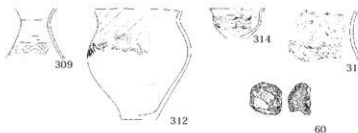
第33図 SB14遺構図(1)



第34図 SB14遺構図(2)



【出土位置を記録した遺物】(土器 S=1/8、石器 S=1/6)



- 1: 黒褐色砂まじりシルト (Hue10YR3/1~3/2)。しまりややあり。炭化物をわずかに混入。
- 2: 黒褐色砂質シルト (Hue10YR3/1~3/2)。径1cmの炭化物を含む。中粒砂~細粒砂が多い。遺構中央部に遺物破片多く含む。
- 2': 2層に明黄褐色粒子を含む。
- 2'': 黒褐色砂質シルト (Hue10YR3/1~4/1)。中粒砂~細粒砂が多い。明黄褐色砂質シルト (Hue10YR6/6~7/6) 粒を含む。
- 3: 黒褐色砂質シルト (Hue10YR3/1~4/1)。中粒砂が多い。地山の明黄褐色砂質シルト (Hue10YR6/6~7/6) の粒~ブロックを多く含む。
- 3': 黒褐色砂質シルト (Hue10YR3/1~4/1)。地山の明黄褐色砂質シルト粒~ブロックを多く含む。



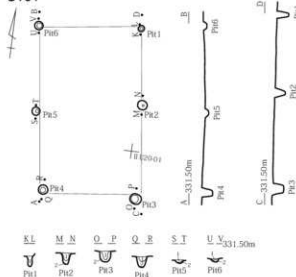
遺物出土状況(309・312・314・317・60)



遺物出土状況
(309・314・317・60)

第35図 SB15遺構図

ST01



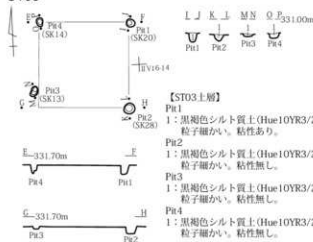
【ST01上層】

Pit1~6

- 1: 黒色砂質土 (Hue10YR2/1)。にぶい黄褐色 (Hue10YR7/4) の粘性の強い粒子を混入。
- 2: にぶい黄褐色砂質土 (Hue10YR7/4)。1層より粘性が弱い。黒色土 (Hue10YR2/1) を少量混入。



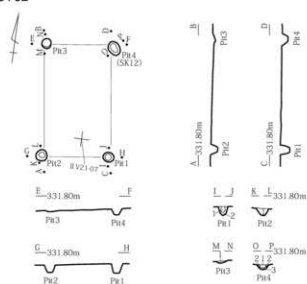
ST03



【ST03上層】

- Pit1
- 1: 黒褐色シルト質土 (Hue10YR3/2)。粒子細かい。粘性あり。
- Pit2
- 1: 黒褐色シルト質土 (Hue10YR3/2)。粒子細かい。粘性無し。
- Pit3
- 1: 黒褐色シルト質土 (Hue10YR3/2)。粒子細かい。粘性無し。
- Pit4
- 1: 黒褐色シルト質土 (Hue10YR3/2)。粒子細かい。粘性無し。

ST02

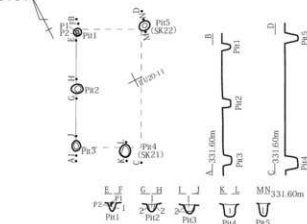


【ST02上層】

Pit1

- 1: 黒褐色土 (Hue10YR2/2)。シルト質。粒子細かい。
 - 2: 黒褐色土 (Hue10YR3/2)。シルト質。1層よりしりなし。粒子細かい。
- Pit2
- 1: 黒褐色土 (Hue10YR2/2)。シルト質。粒子細かい。
- Pit3
- 1: 黒褐色土 (Hue10YR3/2)。シルト質。粒子細かい。
- Pit4
- 1: 黒褐色土 (Hue10YR2/2)。シルト質。粒子細かい。
 - 2: 黒褐色土 (Hue10YR3/2)。シルト質。1層よりしりなし。粒子細かい。
 - 3: 褐色土 (Hue10YR4/6)。シルト質。1層よりしりなし。粒子非常に細かい。

ST04



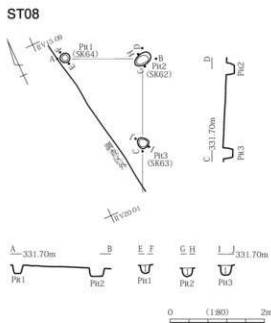
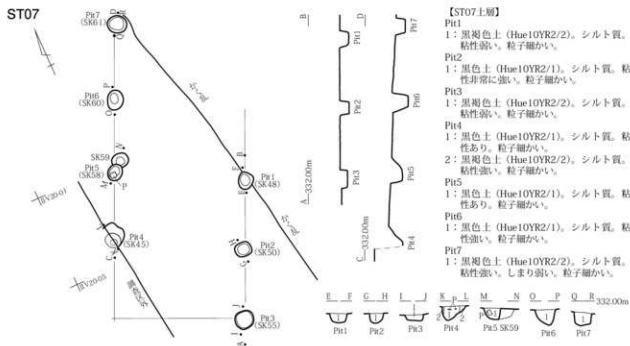
【ST04上層】

Pit1

- 1: 黒色土 (Hue10YR2/1)。シルト質。粘性強い。粒子細かい。
- Pit2
- 1: 黒色土 (Hue10YR2/1)。シルト質。粒子細かい。
 - 2: 暗褐色土 (Hue10YR3/3)。シルト質。粒子細かい。基本土層田圃とIV層が硬くなる。
- Pit3
- 1: 黒褐色土 (Hue10YR2/2)。シルト質。粒子細かい。
 - 2: 黒褐色土 (Hue10YR3/2)。シルト質。粒子細かい。
- Pit4
- 1: 黒褐色土 (Hue10YR2/2)。シルト質。粒子細かい。
- Pit5
- 1: 黒色土 (Hue10YR1.7/1)。シルト質。粘性とても強い。粒子細かい。



第36図 ST01・ST02・ST03・ST04遺構図



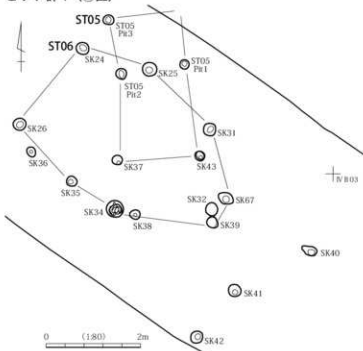
第37図 ST07・ST08遺構図

ST番号	Pit番号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	底面標高 (cm)	備考
ST01	Pit1	14	12	24.3	331.00	
ST01	Pit2	21	19	23.5	331.07	
ST01	Pit3	24	22	22.0	331.11	
ST01	Pit4	20	20	23.5	330.99	
ST01	Pit5	18	17	7.0	331.08	
ST01	Pit6	18	18	7.0	331.12	
ST02	Pit1	23	20	19.4	331.37	
ST02	Pit2	24	23	15.4	331.38	
ST02	Pit3	21	19	7.0	331.41	
ST02	Pit4	30	24	10.0	331.40	SK12
ST03	Pit1	19	18	19.0	331.31	SK20
ST03	Pit2	24	22	14.0	331.54	SK28
ST03	Pit3	23	16	5.0	331.15	SK13
ST03	Pit4	18	14	18.0	331.52	SK14
ST04	Pit1	17	16	18.0	331.22	
ST04	Pit2	25	19	18.7	331.20	
ST04	Pit3	22	18	17.7	331.19	
ST04	Pit4	28	23	28.0	331.11	SK21
ST04	Pit5	24	20	27.0	331.11	SK22
ST07	Pit1	38	32	20.0	331.15	SK48
ST07	Pit2	36	30	20.0	331.14	SK50
ST07	Pit3	40	38	14.0	331.18	SK55
ST07	Pit4	(30)	52	31.0	331.19	SK45
ST07	Pit5	36	30	24.0	331.22	SK58
ST07	Pit6	42	34	23.0	331.09	SK60
ST07	Pit7	40	38	28.0	331.08	SK61
ST08	Pit1	20	20	18.0	331.29	SK64
ST08	Pit2	38	24	18.0	331.23	SK62
ST08	Pit3	24	22	21.0	331.26	SK63

()内の数値は残存値

第7表 ST Pit一覽

ピット群1 (①区)

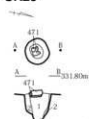


SK24



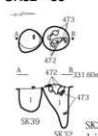
SK24遺物出土状況
1: 黒褐色土(Hue10YR2/2)。シルト質。

SK26



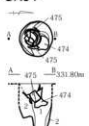
SK26遺物出土状況
(第70図471)
1: 黒褐色土(Hue10YR2/2)。シルト質。
2: 黒褐色土(Hue10YR3/2)。シルト質。

SK32・39



SK32遺物出土状況
(第70図472・473)
SK32・39
1: 黒褐色土(Hue10YR2/2)。シルト質。

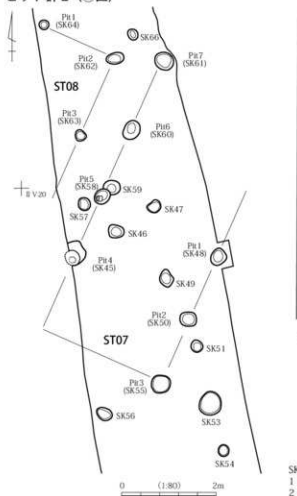
SK34



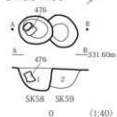
1: 黒色土 (Hue10YR2/1)。シルト質。
2: 黒褐色土 (Hue10YR2/3)。シルト質。1層上と地山 (IV層) の溝移層。

SK34遺物出土状況
(第70図474・475)

ピット群2 (②区)



SK58・59

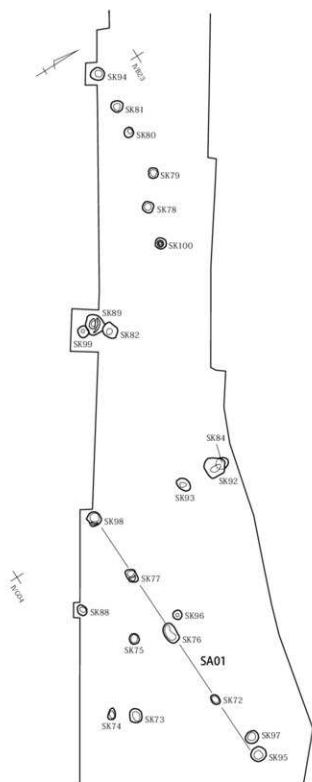


SK58・59
1: 黒色土 (Hue10YR2/1)。シルト質。粘性・しまりあり。
2: 黒色土(Hue10YR2/1)。シルト質。粘性強い。しまり弱い。

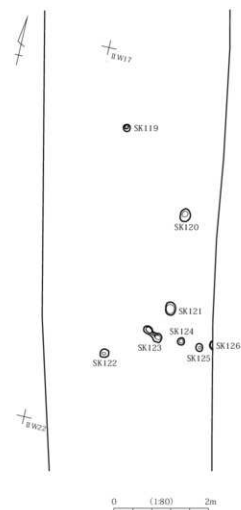
SK58遺物出土状況 (第70図476)

第38図 ピット群1・ピット群2平面図

ピット群3 (③区)



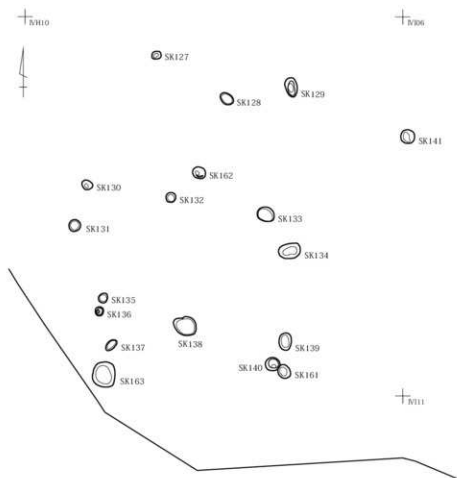
ピット群4 (⑤a区)



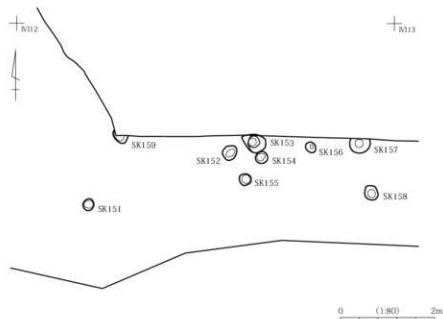
ピット群3

第39図 ピット群3・ピット群4平面図

ピット群5 (⑤b区)



ピット群6 (⑤b区)

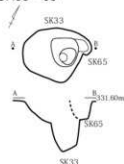


第40図 ピット群5・ピット群6平面図

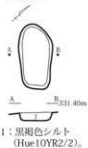
ピット群番号	Pit番号	長さ cm	短径 cm	深さ cm	底面 標高 m	出土遺物 (土器)	備考	ピット群 番号	Pit番号	長さ cm	短径 cm	深さ cm	底面 標高 m	出土遺物 (土器)	備考
ピット群1	SK24	28	26	18	331.45	弥生中期後半	ST06 P01	ピット群3	SK82	34	28	33	331.09		弥生中期後半
ピット群1	SK25	30	29	30	331.36	弥生中期後半	ST06 P02	ピット群3	SK84	(28)	24	11	331.47		
ピット群1	SK26	27	26	26	331.34	弥生中期後半	ST06 P08	ピット群3	SK88	24	19	12	331.56		
ピット群1	SK31	27	26	18	331.42		ST06 P03	ピット群3	SK89	42	(38)	57	330.91		弥生中期後半
ピット群1	SK32	28	26	43	331.04	弥生中期後半		ピット群3	SK92	(44)	42	28	331.29		弥生中期後半
ピット群1	SK34	36	35	55	331.15	弥生中期後半	ST06 P06	ピット群3	SK93	32	23	13	331.44		
ピット群1	SK35	23	21	40	331.23		ST06 P07	ピット群3	SK94	30	26	18	330.82		弥生中～後期
ピット群1	SK36	22	18	18	331.42			ピット群3	SK95	32	30	26	331.46		弥生中～後期 SA01 P01
ピット群1	SK37	22	20	14	331.40		ST05 P04	ピット群3	SK96	20	19	14	331.46		
ピット群1	SK38	22	18	16	331.52			ピット群3	SK97	28	26	14	331.56		
ピット群1	SK39	26	23	19	331.28	弥生中～後期	ST06 P05	ピット群3	SK98	28	26	13	331.36		弥生中～後期 SA01 P05
ピット群1	SK40	34	20	12	331.15			ピット群3	SK99	24	22	14	331.29		弥生中～後期
ピット群1	SK41	28	26	20	331.08			ピット群3	SK100	24	24	42	330.88		
ピット群1	SK42	28	26	22	330.97	弥生中～後期		ピット群4	SK119	16	15	40	330.84		弥生中～後期
ピット群1	SK43	21	20	24	331.24		ST05 P05	ピット群4	SK120	27	22	19	331.10		
ピット群1	SK67	35	25	12	331.33		ST06 P04	ピット群4	SK121	28	20	20	330.90		弥生中～後期
ピット群1	ST05 P01	20	19	34	331.24			ピット群4	SK122	18	18	26	330.74		弥生中～後期
ピット群1	ST05 P02	23	23	28	331.33			ピット群4	SK123	45	19	30	330.72		弥生中期後半
ピット群1	ST05 P03	23	20	48	331.13			ピット群4	SK124	16	15	32	330.70		
ピット群2	SK45	(60)	52	31	331.19	弥生中期後半	ST07 P04	ピット群4	SK125	17	14	40	330.62		
ピット群2	SK46	34	28	27	331.19			ピット群4	SK126	18	(12)	16	330.88		弥生中～後期
ピット群2	SK47	30	28	20	331.23			ピット群5	SK127	20	16	12	332.45		
ピット群2	SK48	38	32	20	331.15		ST07 P01	ピット群5	SK128	31	22	8	332.52		
ピット群2	SK49	38	30	20	331.20			ピット群5	SK129	41	25	28	332.33		弥生中～後期
ピット群2	SK50	36	30	20	331.14	弥生中期後半	ST07 P02	ピット群5	SK130	24	20	17	332.42		
ピット群2	SK51	26	26	26	331.08			ピット群5	SK131	25	25	19	332.40		
ピット群2	SK53	50	46	12	331.15			ピット群5	SK132	20	20	14	332.45		
ピット群2	SK54	26	24	25	331.02			ピット群5	SK133	38	30	12	332.50		
ピット群2	SK55	40	38	14	331.18		ST07 P03	ピット群5	SK134	46	32	18	332.47		弥生後期
ピット群2	SK56	36	26	14	331.16			ピット群5	SK135	22	18	24	332.25		弥生中期後半
ピット群2	SK57	28	26	14	331.34			ピット群5	SK136	19	17	23	332.24		
ピット群2	SK58	36	30	24	331.22	弥生中期後半	ST07 P05	ピット群5	SK137	30	16	16	332.28		
ピット群2	SK59	36	31	24	331.22	弥生中期後半		ピット群5	SK138	48	40	26	332.35		弥生中～後期
ピット群2	SK60	42	34	23	331.09	弥生中期後半	ST07 P06	ピット群5	SK139	36	26	12	332.42		弥生中期後半
ピット群2	SK61	40	38	28	331.08		ST07 P07	ピット群5	SK140	31	28	18	332.38		
ピット群2	SK62	38	24	18	331.22		ST08 P02	ピット群5	SK141	29	29	17	332.52		弥生中期後半
ピット群2	SK63	24	22	21	331.25		ST08 P03	ピット群5	SK161	30	25	14	332.27		弥生中～後期
ピット群2	SK64	20	20	18	331.08		ST08 P01	ピット群5	SK162	28	24	26	332.32		縄文
ピット群2	SK66	24	20	12	331.22			ピット群5	SK163	53	48	30	332.05		弥生中～後期
ピット群3	SK72	23	17	26	331.32	弥生中～後期	SA01 P02	ピット群6	SK151	25	23	16	332.38		弥生中～後期
ピット群3	SK73	30	26	18	331.44			ピット群6	SK152	32	30	9	332.48		
ピット群3	SK74	24	16	14	331.55	弥生中期後半		ピット群6	SK153	54	38	66	331.95		弥生中期後半
ピット群3	SK75	22	20	28	331.38	弥生中～後期		ピット群6	SK154	26	25	15	332.38		
ピット群3	SK76	45	26	27	331.40	弥生中期後半	SA01 P03	ピット群6	SK155	25	24	17	332.37		
ピット群3	SK77	30	20	35	331.27	弥生中～後期	SA01 P04	ピット群6	SK156	23	20	26	332.32		
ピット群3	SK78	25	24	40	330.83	弥生中～後期		ピット群6	SK157	44	(40)	60	332.02		弥生中期後半
ピット群3	SK79	22	20	30	330.85	弥生中～後期		ピット群6	SK158	30	28	30	332.24		
ピット群3	SK80	20	20	35	330.70	弥生中～後期		ピット群6	SK159	(36)	32	23	332.44		
ピット群3	SK81	26	25	17	330.82	弥生中～後期									()内の数値は推定値

第8表 ピット群一覧

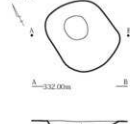
SK33・65



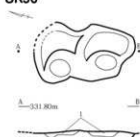
SK52



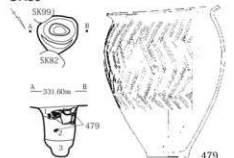
SK71



SK90



SK89



SK89遺物出土状況

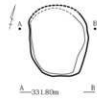


- 1: 黒褐色粘土質シルト (Hue10YR2/2)。均一な層で混入物ほとんどなし。壁際に5~10mmのぶい黄褐色シルトを少量混入。
- 2: 黒褐色粘土質シルト (Hue10YR2/3)。1層より粘性が強い。5~10mmの黄褐色シルトを少量混入。
- 3: 黒褐色粘土質シルト (Hue10YR3/2)。しまり良い。50mmのぶい黄褐色シルト、ブロック状に多く混入。(人為的埋戻し土である)

SK110



SK111



- 1: 黒色砂まじりシルト (Hue10YR2/1)。明赤褐色 (Hue5YR5/8) 径2mm~1cm (最大4cm) の炭土を混入。径1cmの炭化物混入。

- 1: 黒色砂混じりシルト (Hue10YR2/1)。地山(Ⅱb層)よりややしまりなく砂質でやや暗色。

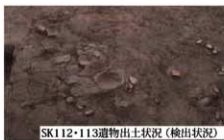
SK91



SK91断面と遺物出土状況

- 1: 黒褐色粘土質シルト (Hue10YR2/2)。5~10mmのぶい黄褐色シルトを混入。
- 2: 暗褐色砂質シルト (Hue10YR3/3)。

SK112・113

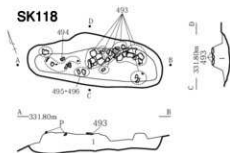


SK112・113遺物出土状況(検出状況)

- 1: 黒色砂混じりシルト (Hue10YR2/1)。径5mm以下のぶい黄褐色シルトブロック (Hue10YR5/3) をわずかに含む。

- 1: 黒色シルト (Hue10YR2/1)。炭化物を含む。

第41図 SK遺構図(1)



1: 黒色～黒褐色砂混じりシルト (Hue10YR2/1～2/2)。径2mm以下のふい黄褐色砂質シルトの層が、いブロックを少量含む。底面はしまり良い。



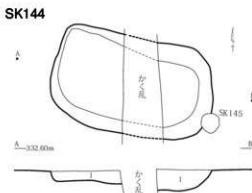
SK118遺物出土状況 (第71図493)



1: 黒色～黒褐色砂質シルト (Hue10YR2/1～3/1)。にふい黄褐色砂質シルト (Hue10YR5/4) ブロックを少量含む。5～10mmの炭化物をわずかに含む。

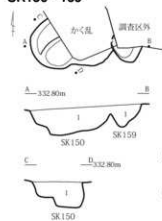


SK142遺物出土状況 (第71図497)

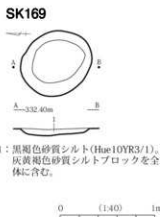


1: 黒褐色砂質シルト (Hue10YR3/1)。径5mm以下のにふい黄褐色砂混じりシルトブロック (Hue10YR5/4) を含む。

SK150・159

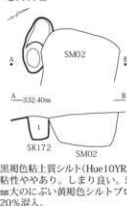


SK150
1: 黒褐色砂質シルト (Hue10YR3/1)。
SK159
1: 灰黄褐色砂質シルト (Hue10YR4/1)。



1: 黒褐色砂質シルト (Hue10YR3/1)。灰黄褐色砂質シルトブロックを全体に含む。

SK172



1: 黒褐色粘土質シルト (Hue10YR2/2)。粘性ややあり。しまり良い。5～10mm大のにふい黄褐色シルトブロック20%混入。

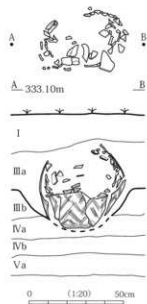
第42図 SK 遺構図 (2)

SK番号	地区	グリッド	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	底面標高 (m)	出土遺物
SK33	①区	II V21	(65)	60	54	331.04	弥生土器(時期不明)
SK52	②区	II V20	70	36	8	331.21	
SK71	④区	IV G04	76	68	12	331.50	
SK90	③区	IV B23	106	65	20	331.33	弥生土器(中期後半)
SK91	③区	IV A08	186	(180)	32	330.66	弥生土器(中期後半)
SK110	⑤a区	II W12	63	48	15	331.30	弥生土器(時期不明)
SK111	⑤a区	II W11	(76)	64	12	331.42	弥生土器(中期後半)
SK112	⑤a区	II W11・12	60	58	16	331.40	弥生土器(中期後半)
SK114	⑤a区	II W12	94	56	14	331.46	弥生土器(中期後半)
SK116	⑤a区	II W11	62	46	32	331.13	弥生土器(中期後半)
SK118	⑤a区	II W17	144	55	24	331.40	弥生土器(中期後半)
SK150	⑤b区	IV I12	(60)	54	28	332.36	
SK160	⑤b区	IV H10	105	104	24	332.27	弥生土器(中期後半)
SK169	⑤b区	IV C18・19	78	66	7	332.12	弥生土器(中期後半)
SK172	⑤b区	IV C18	60	(28)	50	331.58	弥生土器(中期後半)

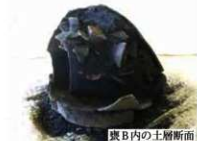
※()内の数値は推定値

第9表 SK (土坑) 一覧

SK174

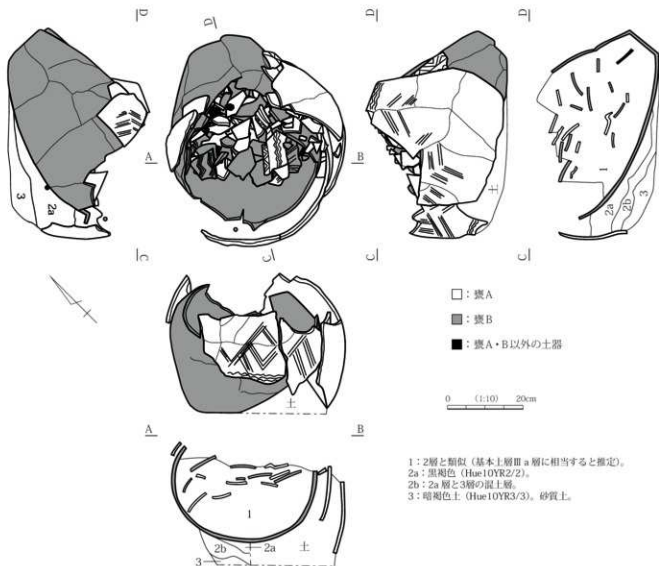


上面より俯瞰



裏B内の土層断面

I層：表上。現耕作土。
 III a層：黒褐色～黒色砂まじりシルト (Hue10YR3/1～2/1)。遺物包含層。
 III b層：黒褐色～黒色砂質シルト (Hue10YR3/1～2/1)。灰黄褐色砂質シルト (Hue10YR5/2) の粒子を含む。
 IV a層：灰黄褐色砂質シルト (Hue10YR4/2)。粘性なし。しまり普通。黒褐色砂質シルトの粒子含む。
 IV b層：にぶい黄褐色砂 (Hue10YR5/4)。黒褐色砂質シルト粒子含む。
 Va層：にぶい黄褐色砂質シルト (Hue10YR4/3)。

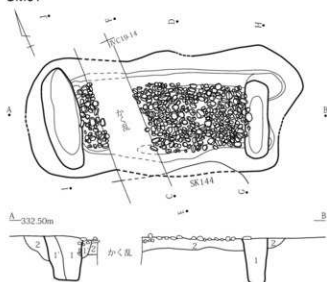


□：裏A
 ■：裏B
 ■：裏A・B以外の土器

1：2層と類似（基本土層III a層に相当すると推定）。
 2a：黒褐色 (Hue10YR2/2)。
 2b：2a層と3層の混土層。
 3：暗褐色土 (Hue10YR3/3)。砂質土。

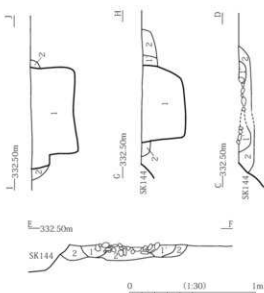
第43図 SK 遺構図 (3)

SM01



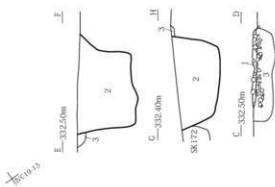
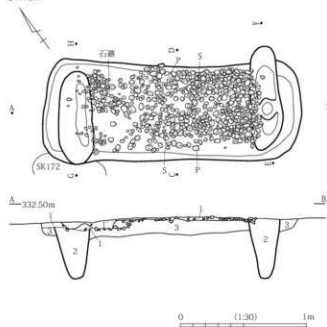
SM01

- 1: 黒褐色粘土質シルト (Hue10YR2/1~2/2)。5mm大のぶい黄褐色シルトブロックを少量混入。5mm大の炭化物粒わずかに含む。
 1': 黒褐色粘土質シルト (Hue10YR2/2)。5mm大のぶい黄褐色シルトブロックを混入。
 2: 黒褐色砂質シルト (Hue10YR2/2)。ぶい黄褐色シルトブロックを混入。2~5mm大の炭化物粒わずかに含む。(掘方)



SM01検出状況

SM02

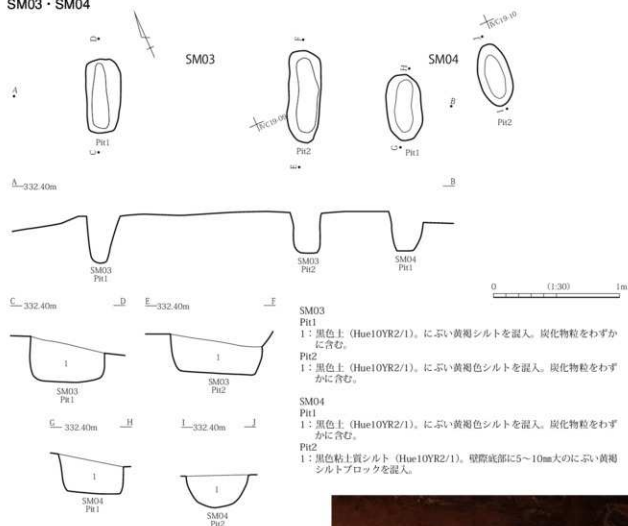


SM02

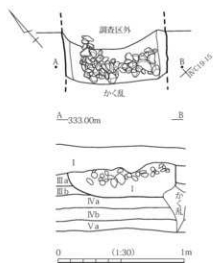
- 1: 黒褐色砂質シルト (Hue10YR2/2)。砂質強く1mm以下の白色砂粒を混入。上層に5mm大のぶい黄褐色シルトブロックが中央部に入る。
 1': 黒褐色粘土質 (Hue10YR2/3)。ぶい黄褐色極細粒砂を混入。
 2: 黒褐色砂質シルト~粘土質シルト (Hue10YR2/2)。全体に砂質シルトで混入物ほとんどなし。2~5mm大のぶい黄褐色シルト少量混入。
 3: 黒褐色砂質シルト (Hue10YR2/2)。全体に砂質シルトで、10~20mm大のぶい黄褐色シルトブロックを混入。地山上との違いは黒味帯び、粘性やや強い。SM01の2層と類似。(掘方)

第44図 SM01・SM02遺構図

SM03・SM04



SM05



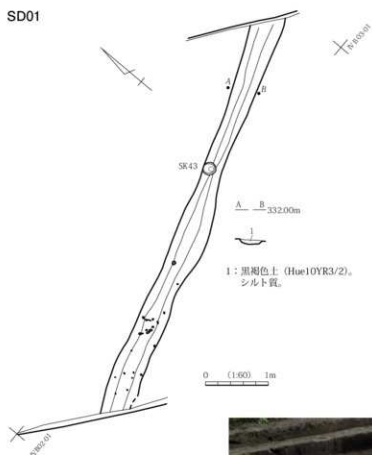
SM05

1: 黒褐色粘土質シルト (Hue10YR2/3)。他の粘土質シルトと比べ、砂質増す。



第45図 SM03・SM04・SM05遺構図

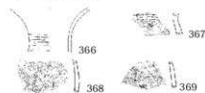
SD01



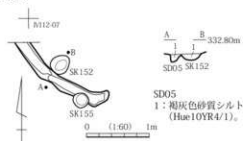
SD04



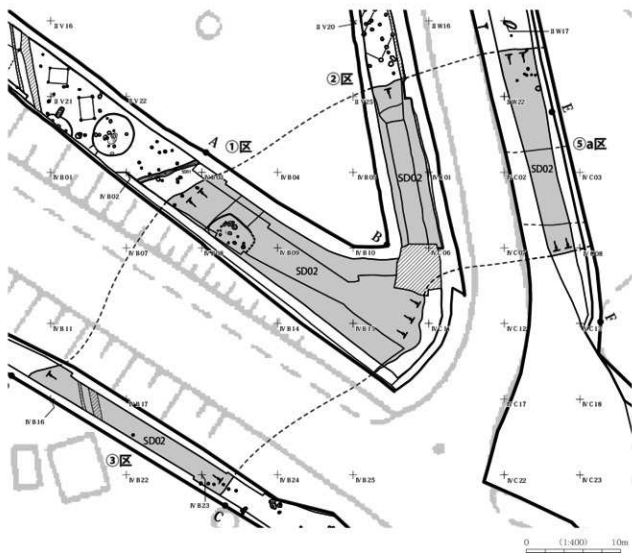
【SD01遺物】(土器 S=1/8、1/6)



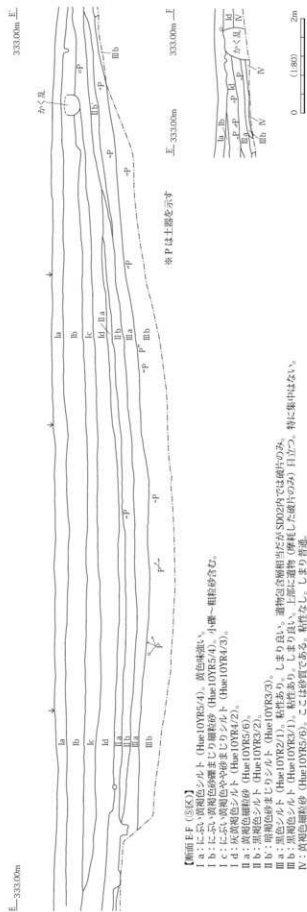
SD05



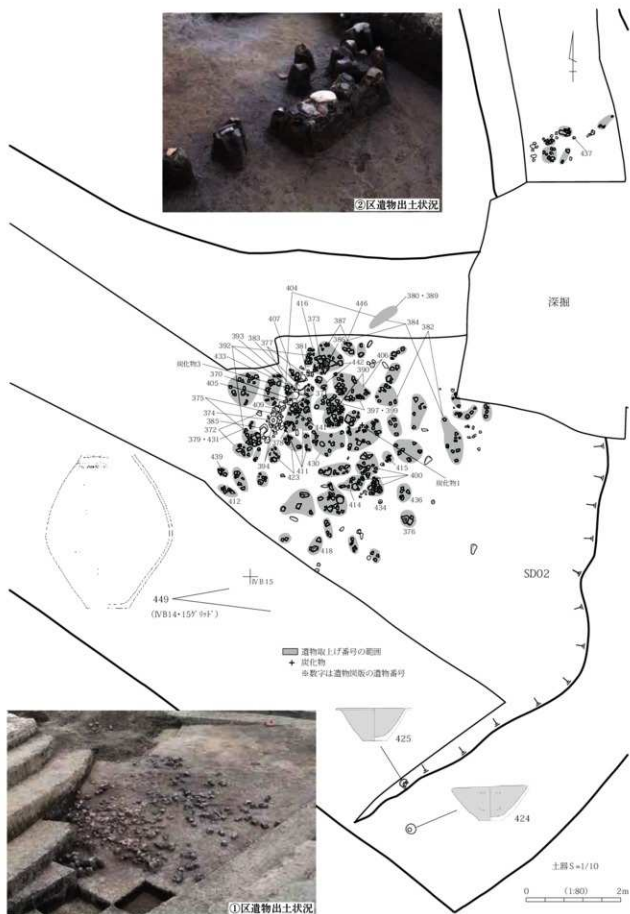
第46図 SD01・SD04・SD05遺構図



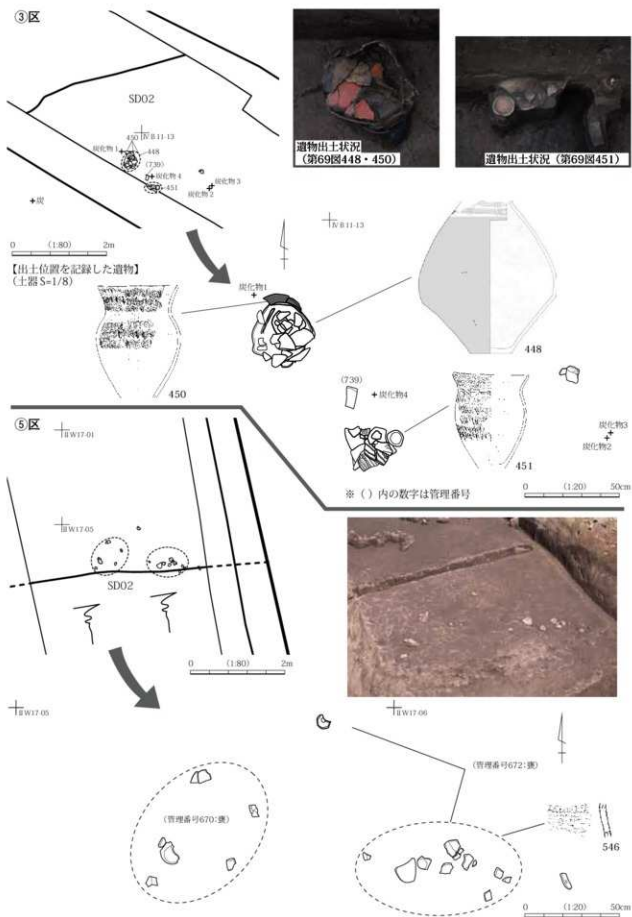
第47図 SD02遺構図



第49図 SD02断面図 (2)



第50図 SD02 ①・②区遺物出土状況図



第51図 SD02 ③・⑤区遺物出土状況図

第3節 遺物

1 土器

(1) 概要

今回の調査では、弥生時代中期後半から後期の土器が出土した。土器の多くは遺存状態が悪く、触ると手に粉が付くように土器の胎土がはがれ落ちる。土器が脆いため、洗浄の際、摩擦して器面調整が不明なものも多く、文様が不明瞭なものも多い。

中期後半の栗林式土器が主体であり、後期初頭の吉田式が少量、後期後半の箱清水式はごくわずかに出土した。第10表に遺構別の中期と後期の土器重量を示した。個々の破片資料から時期判別をおこなったため、無文の胴部破片（赤彩土器を含む）、底部の破片は時期不明とした。ただし、調査区全体で弥生時代後期の土器は少数で、中期後半と判断した遺構から出土した壺・甕・高杯・鉢破片の大半は遺構と同時期であると判断できる。また、遺構外についても同様に後期土器が少ないことから、時期不明とした土器片の多くは、中期後半であると判断できる。

接合して器形が復元できた土器は、大半が石川編年（石川2002）の栗林2式のものである。後期の土器では吉田式が主体で、箱清水式と思われるものが少数含まれる。

また、初圧痕などの種子圧痕が複数確認でき、稲の他にも稗、豆類の圧痕と思われるものを複数確認した。弥生中期後半の土器にみられる植物をそのまま原体とした縄文に類似した文様（擬似縄文）も複数確認できた。これらは、ハンノキなどの雄花序やオオバコなどを用いた文様である見通しがついた。これらの土器の詳細については後述する。

土器図版は遺構ごとに提示した（第54～74図）。そのため、遺構の切り合い関係の誤認などにより、遺構の時期よりも新しい土器が当該遺構に掲載されている場合があるが、第2節の当該遺構でその詳細を述べている。また、遺構の時期よりも古い土器が混入したものについても掲載した。なお、土器図版の土器は、器形を示したものが1/4、器形復元をしていない拓本は1/3の縮尺で掲載した。写真図版も同様に遺構ごとに掲載した。なお、破片資料について写真図版で天地が異なっているものがあるが、写真図版作成後に、遺物図版を修正したものがあためである。遺物図版の実測図・拓本が正しい天地の配置と了解していただきたい。

第7章の後ろに掲載した遺物観察表に土器の文様、調整、焼成と胎土（註1）等の観察記録を記載した。なお、遺物観察表では、以下の器種分類と文様の呼称を用いた。

(2) 器種分類と文様

(ア) 器種分類

器種は壺、広口壺（広口短頸壺）、無頸壺、甕、台付甕、高杯、鉢、甌、蓋がある（第52図）（註2）。これらの器種を模倣した器高10cm以下の小型の土器をミニチュア土器とした。なお、ミニチュア土器は次項の土製品で報告する。

(イ) 文様の分類と器面調整の呼称

施文方法、文様、器面調整については、松原遺跡の呼称に概ね準拠し、以下のように定義した（長野県埋蔵文化財センター 2000）。第53図に弥生時代中期後半から後期にみられる主な文様を示した。

① 施文方法

沈線文：施文原体は1本の棒状工具で、径3～5mm程の幅の沈線が多い。まれに幅1mm程度の細沈線が

ある。横方向に描くことが基本となり1本ずつ描かれる。

幅描文：施文原体は細い棒状のヒゴを束ねたものが想定され、徳永氏は「簾状工具」と命名している(徳永1995)。簾状工具は径1～2mmの棒が横位に編み込まれて結束したもので、幅描文はその端部を器面に於て移動させることによって文様を描く。

刺突文：工具を器面に直角に刺突するもので、刺突の形状により以下の3類に分類した。

A類：施文具の鋭い縁部で器面に刺突し、幅1mm程度の細い刺突が連続するもの。

出土遺構名	弥生中期				弥生時代時期不明				弥生後期				合計(%)	
	溝	竪溝・溝	竪溝・溝	不明・竪溝・赤彩	溝	不明・竪溝・赤彩	溝	不明	溝	不明	溝	不明		合計
SB04	1,266	1,889	66	112	107	3,130	29	507	40	531	85	1,304	55	3,810
SB05	80	259	207	16		962	327	1,162	15	29	1,333	40	1,935	
SB06	453	630	21			1,114	127	136		3	1,311	12	1,247	
SB07	890	1,153	209	38		2,290	437	3,090	57	46	26	6	3,964	
SB08	1,216	617	444	154		2,433	265	1,207		17	3	3	4,005	
SB09	16	29	161			206	11	58	7	69			282	
SB11+12	6,059	16,008	791	240		23,782	440	10,631	60	215	6	9	43	11,403
SB13	264	821	26			1,111	1,659	1,311		440	104	47	21	9,382
SB14	13,057	10,800	347	906	241	25,351	4,609	24,694	2	549	290	103	101	29,748
SB15	4,314	2,855	1,676		90	8,772	529	7,085	2	7	7,608	128	13	138
SB16	8		23			28				6				197
SB17	18	12				30				40				70
SB18	157	152				309	136	231	31	13	13	1,343	5,333	272
SB19	18,326	13,610	2,271	830	207	35,268	7,609	24,150	470	775	80	92	53	74,550
SB20	1,200	910				2,110	1,697	16,140	10	775	80	92	53	17,062
SB21	15	19				34	19	14		31				11
SB22	2					2	12	19		6				47
SB23	3					3		1		1				3
SB24	5					5		1		1				6
SB25	34					34		100		100				134
SB26	230					230		230		230				461
SB27	453					453		28		28				481
SB28	1,869					1,869		29		29				1,838
SB29	155	221	444			845	176	18		18				304
SB30	202					202		44		44				246
SB31	412	986	63			1,411	69	849	5	3				2,503
SB32	3	9	173			185	204	222		426				2,381
SB33	122					122	82	17	13	113				611
SB34	14					14		6		6				112
SB35	14					14	230	9		236				122
SB36	68	1,389				1,457	16	224	43	283				253
SB37	16	1,342				1,358	83	588	30	701				1,740
SB38	5	146				151		30		30				2,119
SB39	521					521	199	270		469				60
SB40	12,206	138				12,344	75	377	17	10				900
SB41	120	123	23			266	167	501	17	73				26
SB42	1,544	1,055	23			2,622	1,284	5,690	29	480				12,832
SB43	130	176	178			474	166	1,169		58				1,855
SB44	720	732	8			1,452	697	1,564		10				13
SB45	3,545	2,708	306	243		6,602	1,998	12,236	29	162	121	102	87	14,758
SB46	1,287	1,191				2,709	2,981	12,872	131	552	226	40	10	18,812
SB47	70,239	63,105	7,206	2,809	705	144,248	24,252	127,785	904	3,376	936	622	447	158,322
合計														2,107
合計														18,805
合計														822
合計														3
合計														218,112
合計														378,235
合計														325,130

単位：g

表10 遺構別出土土器重量

B類：扁平な棒状工具等で刺突し、幅3mm前後の刺突が連続するもの。刺突の内部に線状や網目状の文様が見られる場合がある（註3）。

C類：断面円形の棒状工具で刺突し、円形の刺突が連続するもの。

押し引き文：施文原体は幅3～5mmほどの1本の棒状工具で、原体を器面に押しあててから位置をずらし再び器面に押し当てることを繰り返して、線状に並ぶ列点となる。押し引き列点文と呼称する場合もある。

縄文：南大原遺跡では、すべて単節縄文で、LRが大半を占める。

擬似縄文：縄文に類似するが、ハンノキ、ヒメヤシャブシ、シラカバなどの樹木の雄花序、オオバコなどの草本の花序を原体としたと想定されるもの。回転施文するものと、押圧施文するものがある。なお、オオバコの花序を回転施文したものをオオバコ文と表記した（註4）。

ユビオサエ：口縁端部を内外面から指でつまんで調整をおこなうもので、口唇部が波状を呈することがある。

オサエ：口唇部に棒状工具、縄、植物の雄花序などの側面を押圧するもの。

刺突：口唇部に対して板状の小口を突きさすもので、ユビオサエ、オサエよりも細くて深い縦線が刻まれるもの。

なお、オサエか刺突か判断できないものもあり、両者を合わせてキザミと表現する場合もある。

② 文様の分類

第53図に松原遺跡の文様分類図を示した。基本的には松原遺跡の文様呼称に従ったが、各文様の細分はおこなわなかった（註5）。

沈線による文様は、横走沈線文、波状沈線文、山形沈線文、鋸歯沈線文、連弧文、押し引き文、重山形文、複合鋸歯文、コの字重ね文、懸垂文があり、変形工字文がわずかに認められる。懸垂文は、懸垂舌状文とも呼称され、沈線でU字状の沈線内部に櫛描文、縄文などを充填し、沈線に沿って押し引き列点文が付加される場合がある。

櫛描による文様は、櫛描直線文、櫛描簾状文、櫛描波状文、櫛描山形文、櫛描短斜線文、櫛描縦羽状文、櫛描横羽状文、櫛描斜線文、櫛描垂下文、櫛描T字文（T字文）がある。T字文は図に示していないが、密接施文の櫛描直線文の後、（櫛描）垂下文を描くもので、弥生時代後期の壺にみられる文様である。

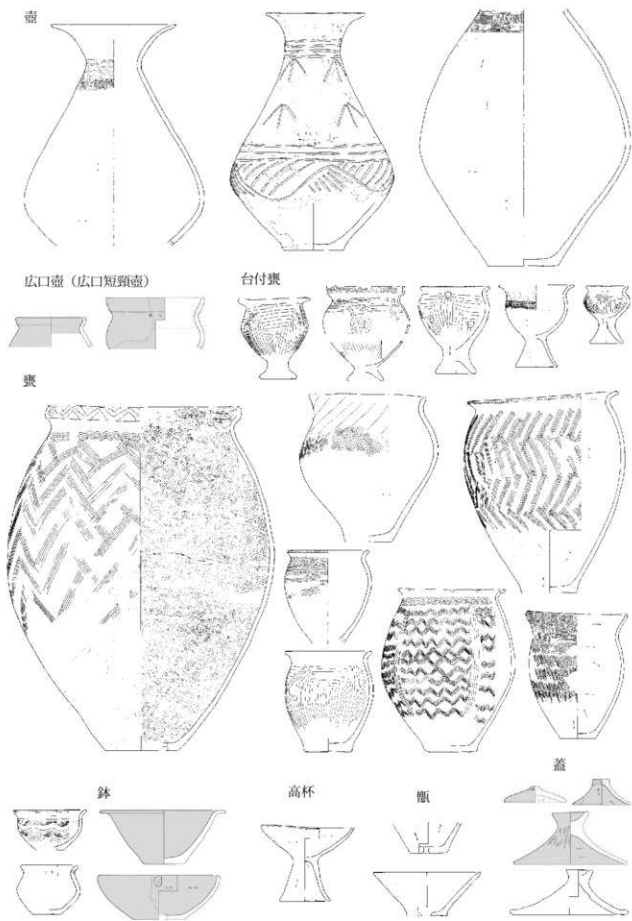
沈線、櫛描による文様の他に、ボタン状貼付け文、赤彩などの文様がある。南大原遺跡の土器は、器面の摩耗が著しく、特に中期後半の土器は赤彩がはがれている例が多い。実測図では、赤彩が想定される場合は、はがれた部分も想定して、網かけで示した。なお、沈線内のみに赤彩が認められる場合は、その範囲が想定できないため、沈線部のみに網かけをした。

③ 器面調整

本報告書で用いる器面調整に伴う痕跡には、ナデ、ハケメ、ミガキ、ケズリがある。前述の松原遺跡（長野県埋蔵文化財センター2000）では、ナデ、ハケメ、ミガキについてそれぞれ細分し記載しているが、本遺跡の土器は表面の摩耗が著しく、器面調整を詳細に観察することは困難であったため、細分はおこなわなかった。図示した各土器の器面調整は遺物観察表に記した。

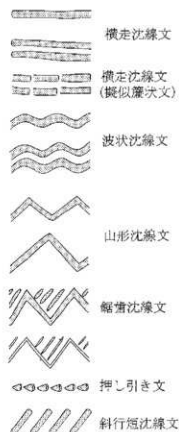
（3）弥生中期後半の土器

弥生時代中期後半の土器について遺構別に特徴的な土器、実測図・拓本の表現では不十分で説明が必要なものなどについて記す。器種、文様、調整、胎土等の属性は、第7章の後に掲載した遺物観察表を参照していただきたい。以下に弥生時代中期後半の遺構から出土した土器および遺構外の中期後半の土器について述べる。

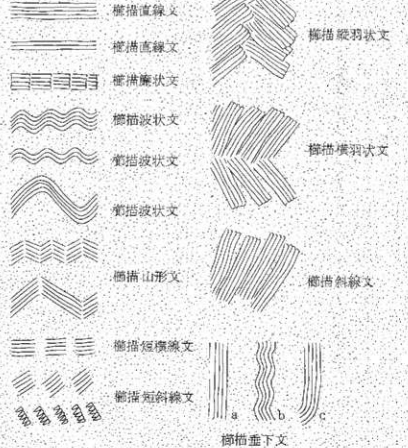


第52図 弥生土器の器種分類

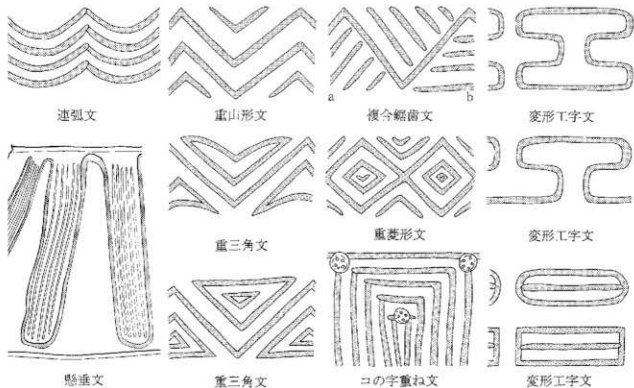
沈線文系



櫛描文系



沈線文系



第53図 弥生土器の文様分類 (『松原遺跡』長野県埋蔵文化財センター2000に加筆)

SB04 (第54図1~23, PL6・7) : 1~5・14~17は壺。1は口唇部と頸部に縄文を施文した後、横走沈線と山形沈線文を施文しているが、摩耗が著しく縄文は不明瞭である。2は頸部にオオバコ文(擬似縄文)を施文した後、横走沈線と山形沈線文を施文している。1と2は文様構成が同じため1も擬似縄文である可能性がある。4・5は赤彩された壺で、破片から器形復元したものである。胎土と調整が類似しており同一個体の可能性もあるが、頸部の直径が異なるため別個体として提示した。14は口唇部にオオバコ文(擬似縄文)が認められる。15・16はLR縄文が施文される。なお、2と14のオオバコ文はレプリカ法による顕微鏡観察で原体がオオバコと鑑定された。鑑定結果の詳細は添付DVDに収録した。

7~12・18~23は甕および台付甕で、11は口縁部の一部に補修のため粘土を貼り付け分厚くなる部分がある。6は甌、13は蓋である。

SB05 (第54図24~29, PL6・7) : 24・29は壺、25・26は鉢、27は蓋、28は甕である。24はハケ調整が明瞭に認められ櫛描波状文が施文され、胴下半部にはミガキ調整がみられる。25は赤彩された片口鉢である。

SB06 (第55図30~37, PL6・7) : 30・31・35は壺、32~34は台付甕、36・37は甕である。32と33は同一個体の可能性が高い。出土数が少ないが、甕の文様は、櫛描羽状文とコの字重ね文のみで、櫛描波状文は認められない。また、他の堅穴住居跡の甕の口唇部には縄文やオサエ(キザミ)があるが、SB06の甕には口唇部の施文が認められない。

SB07 (第55図38~59, PL6・8) : 38・39・42・44・47・48・50~54は壺、40・41・49・55~59は甕、43は鉢、45は高杯、46は蓋である。

38は頸部に凸帯が巡り刺突文A類が刻まれる。凸帯が巡る壺は本例を含めて6点出土しているのみである(註6)。39は摩耗しているが、胴部にハケ調整が顕著に残る。40は口唇部にオサエ、胴部は横方向のハケ調整の後、頸部に櫛描波状文、胴部に櫛描縦羽状文が施文される。内面にも顕著なハケ調整が見られる。42は壺底部で、底面に焼成後の貫通していない穿孔の痕跡がある。46は内面は摩耗して不明瞭であるが両面赤彩された蓋である(註7)。54は壺の頸部と想定され、オオバコ文と思われる擬似縄文である。

SB08 (第55・56図60~83, PL6・8) : 60は広口短頸壺、61は片口の鉢、62・63・74~77は壺、64~70・78~83は甕および台付甕、71~73は蓋である。

60は全周の2割程度の破片から実測したもので、頸部の焼成前穿孔を有する可能性がある。61は片口鉢としたが、内面にハケ調整が明瞭に残っており、内面がミガキ調整の鉢とは異なり、特異な器形を示す。71は両面が赤彩されているが、摩耗が著しく痕跡を残すのみである。72は内面に赤彩の痕跡と思われるものが認められるが、赤彩かどうか確認できない。74・75はそれぞれ口唇部にキザミ、LR縄文が施文される。なお、82は壺の可能性もあるが、小破片であり判断できない。

SB11・SB12 (第56~60図86~165, PL9~13) : SB11とSB12は発掘調査時には重複した2棟の遺構と認識していたが、当初想定した重複は誤認であると判断し、建替えをおこなった遺構と認識して報告した。遺物、記録類の注記は調査時のSB11、SB12を用いており、遺物図版では発掘調査時の遺構別に報告した。

南東半分のSB11部分は、残存率の高い土器が他の堅穴住居跡に比べ多く、ほぼ完形に復元されたもの

もある。これらの多くは床面から出土している（86～91・94・95・98）。これに対し北西側のSB12部分は残存率の高い土器が少ない。

SB11部分では、86～99・101・102・120～126は壺、100・116～119は鉢、103～111・127～131は甕および台付甕、112・113は高杯、114・115は蓋である。

86は摩耗して不明瞭であるが頸部と胴部下半部に部分的にLR縄文が確認できる。胴部の懸垂文は櫛描直線文で充填される。87は口唇部が花びら状に波状を呈し、口縁内部に羽状縄文が施文され、二孔一對の穿孔が7ヶ所に認められる。摩耗して不明瞭な部分があるが羽状縄文は3重に施文されている。頸部は二重の凸帯が回りその下方に、LR縄文を地文をし横走沈線と籐状文、山形沈線文が施文される。胴部の懸垂文は9ヶ所見られ、櫛描波状文で充填される。摩耗が著しく器面調整が不明瞭であるが、胴部にハケ調整が部分的に確認できる。90は頸部の横走沈線が螺旋を描き最上段の沈線は途中で途切れる。胴部には4ヶ所に矢印の記号文がある。記号文は本遺跡では他に類例がない（註8）。器面はハケ調整の後ミガキ調整をおこなうが、ハケ調整の痕跡が残る。91は全面赤彩の可能性があるが、摩耗して不明瞭である。93は胴部に横走沈線で区画した中を押し引き列点文が施文される壺である。95は片口がある受口状口縁の壺で、口唇部と口縁部にLR縄文が施文される。96は摩耗が著しく明確ではないが、ハケ調整や縄文の節の窪みに赤彩の痕跡が観察されたため、頸部から口縁にかけて赤彩されていたと判断した。横走沈線より下の胴部は摩耗が著しく赤彩の有無は確認できない。100は内面にハケ調整が明確に残っているが、くの字状の口縁の鉢と判断した。102は胴部下半に細い沈線が回り、二個一對の貼付文があるが、破片のため貼付文の数は不明である。109は胴部上半に櫛描波状文が施文されるが、屈曲部があり壺に分類してもよい器形である。126は器壁が薄く、鋸歯文に円形刺突文（刺突文C）が充填されたものと想定され（第56図85参照）、吉田式と判断した。

SB12部分では、132～137・149～152は壺、138～143・153～164は甕、144・145は高杯、146・165は鉢、147・148は蓋である。

135が頸部に段を有する特異な器形で、摩耗して不明瞭であるが口唇部に縄文またはキザミが施文されていたと想定される。137は後期の壺口縁であるがSD03との重複部分から出土しており、SD03の埋土を誤認して遺物を取り上げた可能性が高い（註9）。138は口唇部にキザミがあり、受口状口縁に山形沈線が施文される。頸部に波状文、胴部に櫛描縦羽状文があるが、器面の摩耗が著しく、調整痕は確認できない。141は大型の甕で最大径47.8cm、SK174出土の土器棺と推定した甕よりも大きい。145の内面は明確に赤彩が認められるが、外面はミガキ調整がなく赤彩の痕跡が部分的に残存する。口縁部も赤彩があったと推定されるが、摩耗して痕跡が認められない。146aと146bは同一個体の可能性が高い。

口唇部の施文について、壺では89・95がLR縄文、甕では106・138がオサエ（キザミ）、139が刺突、104・140・142・154がLR縄文または擬似縄文であるが、摩耗で不明瞭で誤認しているものがあるかもしれない。

なお、SB11・12出土としたものに後期の土器が含まれる（101・126・128・160）。これらは出土位置から重複するSD03の埋土を誤認してSB11・12とした可能性があり、本来SD03に伴う遺物であると判断した。また、SD03から中期後半の土器が出土しており（第70図464～470）、これらはSB11・12の埋土に包含されていたものと考えられる。

SB11・12の甕の胴部文様は図示したもので櫛描波状文が認められず、非掲載の甕についても波状文はきわめて少ない。また、頸部の裝飾帯の下部に山形文などの模様が付加された壺（註10）が一定量含まれていることから、栗林2式新段階から栗林3式の遺物群と判断した。

SB14 (第61～64図194～306、PL14～18) : SB14は埋土から約55kgの土器が出土しており、遺構埋土出土量では、他を圧倒して多い。

194～217・256～269は壺、その内204・208・209・211は広口短頸壺、218～243・270～302は甕および台付甕、244～248・303～306は鉢、249・250は瓶、251～255は蓋である。

194～198は頸部にLR縄文地文に横走沈線による施文が認められる。194は胴下半部にもLR縄文地文に沈線による施文が認められる。196は摩耗が著しく縄文が摩耗して失われている可能性がある。199は頸部から胴部にかけてハケ調整が顕著であるのに対し、205は全面にナデ調整がなされており、器面調整が対照的である。前者は頸部のみの施文、後者は頸部と胴部全面が文様帯となる。206は摩耗して器面調整が不明瞭で、縄文の範囲は推定である。207は摩耗で不明瞭な部分があるが、全面ミガキの無文の壺である。211はハケ調整の後ナデ調整がおこなわれ、LR縄文を施文した後、横走沈線と連弧文が施文される。文様構成は他に類例があるが、器形が他の壺に比べ広口で本遺跡での類例は少ない。200・201・213は全面赤彩の無文と想定され、特に201・213は210の様な小型の注口壺の可能性もある。212は胴上半のみが赤彩される。204は破片で確認できないが、208・209と同様二孔一對の穿孔があると想定される。

218は摩耗して器面調整は観察できないが、無文である。219・220も頸部までは無文で、219の口唇部は面取りがなされている。221は摩耗して、器面調整と文様が不明瞭である。222・226はハケ調整痕が残っているところにコの字重ね文などが施文される。これに対し223は内外面に丁寧なナデまたはミガキ調整の後、コの字重ね文など沈線による施文がされる。225は摩耗が著しく器面調整、文様が不明瞭であり、同一個体と思われる口縁破片に補修孔が見られる(PL16参照)。227は摩耗して、文様と調整が不明瞭であるが、口縁に貼付文があり、口唇には縄文などの施文の可能性もある。なお、222は口唇部にLR縄文が施されている。228・229はハケ調整・ナデ調整の後櫛描縦羽状文を施文しており、230は摩耗で器面調整が不明である。232は口唇がRL縄文(摩耗で不明瞭)で、胴部はハケ・ナデ調整のみで無文である。233・234は胴部にLR縄文(註11)、235は236と285と同一個体と思われる、口唇に擬似縄文、胴部はハケ・ナデ調整に櫛描波状文が施文される。237・241～243は台付甕で、いずれも摩耗して、調整、文様不明瞭である。237は器壁が非常に薄く、薄い部分は2～3mm程度で、口唇にLR縄文、櫛描波状文・簾状文、コの字重ね文が施文される。

245・246の鉢は小破片での器形復元であり器形は正確ではない。また、いずれも内外面全面に赤彩しているように表現しているが、245・247の外表面は摩耗して、波状文部分に赤彩があるのか否か確認できない。256・276は口唇部にLR縄文、278は口唇部に刺突が確認できる。265は摩耗して不明瞭であるがLR縄文を地文とし沈線文が描かれている。287～289の甕は図版作成後接合することがわかった。304・306はハケ調整とLR縄文、305は口縁部に刺突文Bが施文される。なお、304は甕の胴部破片の可能性もある。

249・250は底部に穿孔がある甕であるが、250は円形の焼成前穿孔であるのに対し、249は楕円形で、摩耗のため焼成前穿孔であるか否か判断できず、焼成後の穿孔の可能性もある。

251～255は蓋で、赤彩されたものと赤彩が無いものがある。251はつまみ部中央の表裏面に焼成後の未貫通の穿孔痕と思われる小さな窪みがある。253は内面にわずかな赤彩があるが外面に比べ明確ではない。254は摩耗して赤彩は部分的に確認できるのみであり、同一個体と思われる口縁部破片から口径を復元したもので、完形ではない。

なお、後期と思われる土器も少量含まれるが(第61図203・第64図277・282、PL14管理番号442・444)、埋土中に掘り込まれた後期の遺構またはかく乱を見逃した可能性が考えられる。壺では2a装飾帯があるものが主体を占めることから、栗林2式新段階の遺物群が主体を占めると判断した。

SB15 (第65・66図307~364, PL19・20) : 307~310・317~342は壺、311~313・346~364は甕、314・315・343~345は鉢、316は甌である。

307・308は頸部に刺突文が廻る。307の刺突は凸帯に施文され、本遺跡では類例がない器形で、摩耗で器面調整が不明である。なお、307は壺としたが、器種分類の検討が必要である。また、308は口縁部にハケ調整が顕著に残るが、胴部はハケ調整の後ミガキをしている(註12)。309は摩耗が著しく、器面調整と文様が不明瞭であるが、横走沈線に区画された胴部にわずかに縄文が確認できる。310は無文の壺で本遺跡では類似した器形は見られない。311・313の口唇部はLR縄文にオサエがみられる。313は胴部と底部は接合せず、図上復元したもので、櫛描文とも見える粗いハケ調整の胴部に刺突文が廻る。312は櫛描横羽状文であるが、摩耗が著しく頸部付近は櫛描文の痕跡が残るのみであり、文様を推定復元した。314は口唇部と胴部にLR縄文を施文し、胴部には横走沈線と連弧文が施文されるが、摩耗で縄文が不明瞭である。315は同一個体と思われる未接合破片に焼成前穿孔がある。

318は頸部の二条の隆帯にキザミがあり、胴部にはLR縄文を施文した後横走沈線で区画する。319は頸部に押し引き列点文、320は刺突文Aがある。321~342は壺胴部で、321~323は懸垂文、332・333は櫛描短斜線文である。324~329には地文にLR縄文がある。330・331は変形工字文で大多数の土器と異なり胎土が白色で同一個体と思われ、在地の土器でない可能性がある。341・342は特殊な文様構成の土器と判断したが、櫛描波状文の一部で櫛描羽状文と櫛描波状文の甕とした方が妥当かもしれない。344と345は同一個体の可能性がある鉢で、口唇と外面地文にLR縄文が施文され、344口縁には焼成前穿孔が見られる。

口縁破片でも口唇部施文の甕が多く、LR縄文(346・348・351~354)、ユビオサエ(347・352)、オサエ・刺突(353~355)などが確認される。

ST04 (第66図365, PL19) : 365はST04Pit1から出土したコの字重ね文の甕で、外面はナデ、内面はナデとミガキで器面調整がなされる。

SD01 (第66図366~369, PL29) : 366は摩耗して、縄文と横走沈線文の施文順が観察できない。367~369は櫛描羽状文の甕で、368・369にはハケ調整がなされる。

SD02下層 (第66~69図370~447, PL24~28) : SD02は、深いところで検出面から約1.5mあり、Ⅱ層からⅢa層上部で出土した上層遺物と、Ⅲb層出土の下層遺物に区分できる。下層遺物は弥生中期後半で、上層遺物は弥生後期である。

370~389・443・444は壺、392~417・431・447は甕および台付甕、418~430は鉢および高杯、428は片口の鉢、445・446は折り返し口縁の鉢、432~440は蓋、441・442は甌である。

壺の口唇部または頸部にLR縄文が施文されるもの(370~376・381・386)が多い。382・384・386は摩耗のため調整、文様が不明瞭である。ハケ調整とナデ・ミガキ調整の後沈線文様が施文されるが、ハケ調整の痕跡が残るものが多い。378~380・388・389は赤彩された小型の壺で、380は摩耗して赤彩が部分的に残るのみであり、接合しないが同一個体と思われる破片から器形復元をした。390は広口壺で、391は広口壺としたが本遺跡では器形の類例がなく、器種名の再検討が必要である。

甕および台付甕の口唇部施文は、392が刺突、399・411・412・415・447が縄文であり、417は擬似縄文と思われる(註13)。394・395・369・402も口唇部施文の痕跡があるが、摩耗して文様種類を認識できない。器面のハケ調整が明瞭に残るものが多く、内面でも5割近くの甕にハケ調整の痕跡が確認できる。398は摩耗して文様が不明瞭で、胴部に2段以上の波状文が確認できるがどこまでが波状文の施文範囲か

は不明である。また、内面には赤彩の痕跡があり、赤彩用のベンガラを容器として用いた可能性がある。402は口縁と胴部にLR縄文を地文とし文様が施文され、口縁部にはボタン状貼付文がある。447も胴部にLR縄文が施文されるが、甕の胴部に縄文が施文される例は少ない(註14)。416は摩耗して器面調整が不明。431は図版作成後、第68図414と同一個体の可能性があることが判明し、台付甕と認識した。445・446は折り返し口縁で、本遺跡では稀な例である。

鉢および高杯では、420は摩耗して赤彩の有無が確認できないが、他の事例から赤彩されたものと推定できる。また、420～423・426・428は小破片から器形復元をなっており、器形は正確ではない。

蓋では、432は器高が低く円板状でつまみ状の突起に2ヶ所穿孔があり、433～440とは異なる器形であり、本遺跡では類似例が少ない。

甌では、底部穿孔が441は焼成後で、442は焼成前であることから、441は甕の転用品と考えておきたい。445・446は鉢としたが、折り返し口縁の例は少なく、SK91に1点(第71図485)あるのみで、甌の可能性もある。

土坑出土土器 (第70～72図472～496・498～505、PL21～23) : 472は摩耗して調整が不明瞭であるが、胴下半部に地文LR縄文に横走沈線と複合鋸歯文が施文される。474は頸部と口唇部に縄文がみられるが条の間隔が広い。477・478は同一個体と思われる、頸部は櫛描直線文で胴部は縦羽状文の甕である。479はほぼ完形に復元され、口唇部にLR縄文、胴部はハケ調整の後櫛描羽状文が施文され、内面はミガキ調整の甕である。480は口唇にLR縄文、483は口唇と口縁に無節の縄文、484の口縁にはRL縄文が施文される。無節縄文、RL縄文は本遺跡では事例が少ない。485は折り返し口縁の鉢である。491・492は鉢で、492は摩耗して赤彩・器面調整が不明瞭であり、底部が欠損なのか穿孔なのか判断できない。491と同一個体の可能性があり、外面も内外面赤彩されていたと推定される。493の甕は摩耗して器面調整が不明瞭である。494～496はそれぞれ胴部、口縁、口唇にLR縄文が施文される。498～500は同一個体の甕の可能性が高い。501は摩耗して不明瞭だが外面に赤彩があると判断した。503・504はSK174出土の土器棺と推定した甕である。いずれもほぼ完形に復元できた。503は口唇にLR縄文、口縁はナデ調整に重山形沈線文、頸部は2段の文様で下段は櫛描簾状文であるが、上段は櫛描波状文の途中から櫛描簾状文となる。胴部は櫛描斜線文が施文される。頸部から胴部には内外面にハケ調整がなされる。内面胴下半部にハケ調整が消されている3条の指ナデのような窪みがある。504は口唇にLR縄文、口縁はLR縄文の後重山形沈線文、頸部の櫛描波状文の後胴部に櫛描縦羽状文を施文する。頸部から胴部にハケ調整が確認できる。505は頸部に2段の櫛描直線文が施文される甕である。503の中から出土したもので、埋土に混入したものと想定されるが、中期後半では一般的ではない文様構成で後期的である。

なお、491・492の鉢は中期後半～後期にもみられる器形で、後期の所産である可能性がある。

遺構外出土土器 (第73・74図507～515、517～551、PL28) : 507～509・513・528～537は甕で、508は口縁部の形状が類例を見ない。摩耗して器面調整が不明瞭であるが、外面にハケ調整が確認できる。510は広口短頸甕で赤彩される。511・512・514・515・538・539・541～550は甕で、541の口縁に焼成後の穿孔がある。521・522・540は鉢、523～527・551は蓋、518～520は赤彩された高杯である。519の脚部に螺旋状の沈線が認められる。526・551の円板状の蓋は本遺跡では類例が少なく、蓋の大半は器高が高い山形の蓋である。

529・531と532・536・537はそれぞれ同一個体の甕の可能性があり、後期の土器であるかもしれない。また、510・514・515・517～525は後期前半にも認められる器形であり、中期後半とは断定できない。

(4) 弥生後期の土器

弥生時代後期の土器について遺構別に特徴的な土器、実測図・拓本の表現では不十分で説明が必要なものなどについて記す。器種、文様、調整、胎土等の属性は、第7章の後に掲載した遺物観察表を参照していただきたい。以下に、弥生時代後期の遺構から出土した土器、及び遺構外の後期土器について述べる。

SB09 (第56図84・85、PL6・7)：28点の土器片が出土したのみで、遺物は少ない。84は鉢で、実測図は内面のみで赤彩のように提示しているが、摩耗が著しくわずかに赤彩の痕跡が残っている程度である。供伴遺物から吉田式であると考えれば、外面には赤彩がない可能性が高い。85は壺で、鋸歯文の区画を竹管状の施文具を用いた円形刺突文（刺突文C類）で充填しており、吉田式の壺の破片と判断した。SB11の第58図126が類似例である。刺突文Cは類例が少ない。

SB13 (第60・61図166～193、PL13・14)：166～175・186は壺、176～178・181・187～193は甕および台付甕、179・180は高杯、182・183は鉢、184は蓋、185は甌である。残存率が高い土器は169・177・179・180であり、他は小破片から器形を復元したものである。

169・170は頸部に櫛描直線文あるいは櫛描波状文が施文され、169は内面のみ赤彩が施され、170は両面に赤彩が認められるが摩耗しており不鮮明である。171は頸部に横走沈線が施文されるが摩耗が著しい。特に外面は全面摩耗しており赤彩の有無が不明である。多くは後期前半の吉田式の土器と判断したが、173の胴下半部に屈曲がある壺、186の櫛描T字文、191の甕など後期後半箱清水式の可能性がある土器が含まれる。173はSD03と重複した南西の区画から出土した。

182は口縁部に櫛描波状文の鉢の破片で、中期後半のものが混入したものであろう。

SD02上層 (第69図448～451、PL24)：448・450・451は③区のSD02北辺近くの検出面（Ⅲa層上部）でまとまって（第51図）、449は①区のⅡ層から出土した（第50図）。448は頸部に櫛描直線文（7本1単位）に3本沈線文が直交するT字文、胴部が赤彩される。内面はハケ調整で、部分的に表面が剝離している。449は頸部に上から櫛描簾状文、波状文、簾状文を交互に施文し、胴部はハケの後ミガキ調整のみで、赤彩されない。450は8本1単位、451は9本1単位の櫛描文で、頸部の簾状文を施文した後に口縁と胴部の波状文を施文する。450は口唇部にも波状文が認められる。③区の3点は出土状況から、同時期に遺棄または廃棄されたものと推定されるが、451は450と比べ器形が箱清水式の甕に近い。他は吉田式と判断した。

SD03 (第70図452～470、PL23)：SD03は古墳時代初頭の遺構と判断したが、SB11・12、SB13と重複しており、それらの遺構の土器を混入しているため、中期後半栗林式、後期前半吉田式の土器が含まれる。452～455、460・461は後期であるが、456～459の高杯と甌は中期後半から後期前半にみられる器形であり、時期を確定できない。462～470は中期後半の壺と甕である。

土坑出土土器 (第70図471、第71図497、PL21・22)：471はSK26出土で中期末から後期初頭の壺であろうか。497はSK142出土で、櫛描文のT字文の下に櫛描波状文が施文される赤彩された壺である。摩耗した文様、器面調整が不明瞭である。後期後半箱清水式土器と判断した。

遺構外出土土器 (第73図506・516、PL28)：506は③区ⅣA15グリッドで出土した壺で、底部を除いてほぼ完形に復元できた。頸部に櫛描簾状文と櫛描波状文が施文され、胴部はミガキ調整である。516は③区

IVA09グリッドⅢ層中から出土した台付甕で、頸部に櫛描簾状文と櫛描波状文が施文され、胴部と脚部はハケ調整の後ミガキ調整されている。

(5) 種子圧痕

46点の土器に種子圧痕があった(写真1)。一つの土器に複数の種子圧痕がついているものや、欠損面についているものもあり、器面に顔を出さない種子圧痕も多数あるものと思われる。籾圧痕の他に稗・粟・豆類と思われるものが確認できるが、種の同定はおこなっていない。なお、稗・粟・豆類と思われる種子圧痕の有無は、実測、拓本をするために管理番号を付して抽出した土器のみを観察した結果であり、管理番号を付していない多量の土器片の中にこれらの種子圧痕があるものが含まれていると考えられる。種子圧痕の一覧と写真を貼付DVDに収録した。



写真1 種子圧痕(約等倍)

(6) 擬似縄文

擬似縄文、刺突文B類、口唇部のオサエの中にハンノキなどの雄花序、オオバコの花序などの植物をそのまま原体とした文様が認められる。第54図2・14は、レプリカ法による顕微鏡観察による鑑定でオオバコ文と確認された。鑑定は株式会社バレオ・ラボがおこない、分析結果は添付DVDに収録した。また、ハンノキ、ヒメヤシャブ、シラカバなどの雄花序を回転施文したところ、擬似縄文に類似した文様が施文できることが判明した(写真2)。実際の土器の擬似縄文がどの植物の雄花序を用いたかは確認していないが、原体の解明が今後の課題である。



第65図311



第65図313

写真2 穂状花序による擬似縄文

2 土製品・ミニチュア土器

ミニチュア土器13点、土製円板17点、土製装飾品3点、その他土製品2点、粘土塊が13点が出土した(第75図)。

(1) ミニチュア土器 (第75図552～559、PL29)

13点中8点は中期後半の遺構から出土したもので、4点が後期の遺構または遺構外から出土した。後者の内556は中期後半の遺構から出土した557と類似しており中期後半のものと判断した。他の3点は小破片であり、時期は確定できない。実測図を掲載していないものは、いずれも小破片であり、括弧付きの数字で管理番号291・292・445・469を示し、写真図版PL29の写真に掲載した。

(2) 土製円板 (第75図560～576、PL29)

土製円板は、大半は中期後半の土器片を用いたものである。中央に穿孔があるものと無いもの、穿孔途中のものがある。側面の磨り痕が明確に観察できる場合は、その範囲を矢印で示したが、摩耗が著しく磨り面が明確に観察できない場合は示していない。穿孔があるものは土製紡錘車で、穿孔途中のものはその未成品と分類することもできる。

(3) 土製装飾品 (第75図577～579、PL29)

577の土製耳飾りはSD02から出土した。578は管状に孔があいた玉類の土製模造品で、SK25から出土した。579は土製勾玉でSB13から出土した。

(4) その他の土製品

小片で全体形状は不明である。実測図は掲載していないが、括弧付きの数字で管理番号2021・2022を示し、写真図版PL29の中段の写真に掲載した。それぞれ、SB13、SB14から出土した。

(5) 粘土塊

粘土塊は13点(総重量235g)出土した。比較的大きく特徴的なものを抽出し、管理番号を付した。管理番号を付した13点を巻頭写真に掲載した。これらは、SB07、SB12～SB15、SD02、SD03および遺構外から出土しており、その多くは⑤b区で出土した。⑤b区では、鍛冶関連遺構の可能性のある火床を検出したSB11・SB12、SB14がある。これらの粘土塊が鍛冶遺構関連遺物である可能性を考慮する必要がある(註15)。多くの粘土塊は破片であるが、欠損部分が認められないものもある。鍛冶関連以外の粘土塊が含まれているのかもしれない。



※()内の数字は遺物管理番号

写真3 粘土塊

3 石器

第2章で提示した石器は、層位的に縄文時代のものであることが確認できるものである。一方、弥生時代の土器と一緒に出土した石器の中には縄文時代の石器が含まれている可能性は高く、両者を明確に峻別することはできないため、弥生時代の遺構および遺物包含層から出土した石器をまとめて本項で報告する。

石器類192点と、原石2点、石核6点、剥片・砕片250点、石製品5点が出土した。これらの内、三脚石器は縄文時代の石器である。剥片・砕片は集落内で石器製作をおこなったと考えるにはきわめて少数であり、弥生時代の遺構および遺物包含層から縄文土器が少数ながら出土することから、縄文時代の剥片が含まれていると判断した。ただし、輝石安山岩は弥生時代の石器に用いられる石材でSB14にまとまっており、頁岩（安山岩）（註16）もSB15で40点以上とまとまっている。これらを勘案すると輝石安山岩、頁岩（安山岩）は弥生時代中期後半の石器製作に関わる剥片の可能性が高い。これらの剥片の石材と共通する楔形石器、二次加工がある剥片、微細な剝離がある剥片など時期が検討できないものについても、縄文時代の石器である可能性がある。

実測図を第76図～83図に器種別に提示し、出土地点別の器種組成、器種別の石材組成を第11・12表に示した。各石器の属性は遺物観察表に掲載した。

(1) 石鏃（第76図1～14、PL30）

打製石鏃10点と磨製石鏃4点が出土。遺構から出土したものは、磨製石鏃2点は後期の遺構から1点が中期の遺構から出土、打製石鏃は10点中7点が中期の遺構から出土した。1～6は有茎石鏃で、縄文時

遺構名	打製石鏃	磨製石鏃	石鏃	楔形石器	磨製石斧破片	石核	三脚石器	打製石斧	瓶切り具	刀	二次加工がある剥片	微細な剝離がある剥片	砥石	凹石	磨石	敲石	みがき石	石胆	台石	石核	原石	軽石	有孔石製品	勾玉	石製品	石器類・石製品合計	剥片・砕片	石器群合計	
SD04			1	1									1			1			2							6	10	16	
SD05										3	2		1	1	1			1								9	1	10	
SB07	1			1									2	1		1				1	1	1				9	13	22	
SD08				1											1											2	0	2	
SD09										1																1	0	1	
SB11						1		2	1													2				6	10	16	
SB12											1						1						1			3	2	5	
SB13		1	1				1			1			1						2							7	7	14	
SB14	3	1	2	2				3	14	3		7			10				2	3		1		1	52	61	113		
SB15	1		3	2							1					2						2				11	60	71	
SB16															2											2	0	2	
SD02			2						1	2		2	2	18	1				1	1		1	1	1	32	23	55		
SD03		1	2												2							2				7	18	25	
SK110			1						1																	2	0	2	
SK116									1																	1	0	1	
SK25													1													1	0	1	
SK72		1																								1	0	1	
SK91															1											1	0	1	
SM02		1																								1	3	4	
その他遺構																											14		
遺構外	3	1		2	1			1		4	5	1	3	1	3	9	1		2	1	1	3		1		43	28	71	
合計	10	4	1	13	3	5	1	1	3	6	26	12	1	18	7	4	46	2	1	8	6	2	12	2	1	2	197	250	447

第11表 遺構別器種組成

石材	打製石楯	磨製石楯	石鏃	楔形石器	磨製石斧	磨製石斧破片	石鏃	三脚石器	打製石斧	磨切り具	月器	二次加工がある割片	微細な割片がある割片	砥石	凹石	磨石	砥石	みがき石	石皿	石椀	石楯	原石	軽石	有孔石製品	勾玉	石製品	石器類・石製品合計	銅片・鉄片	石器類合計
頁岩(安山岩)	4	2	1	5				1	3			5														27	93	119	
輝石安山岩										6	25	7		2	2	2						5	1			50	72	122	
チャート	4			5													6									20	37	57	
凝灰質頁岩				1																		1				2	7	9	
片麻岩										1																1	11	12	
黒曜石												1														1	8	9	
珪質頁岩	2																									2	5	7	
石英				1																						1	4	5	
無斑品質安山岩																	1				1					2	3	5	
安山岩														2	2	2	7		1	3						17	3	20	
ヒスイ																								1	1	1	1	2	
花崗岩																	1									1	0	1	
輝緑岩					1	5	1																			7	0	7	
凝灰岩														1												1	0	1	
硬砂岩				1														1								2	0	2	
砂岩														13	3		13									29	0	29	
蛇紋岩																								1		1	0	1	
透閃石岩					1																					1	0	1	
閃緑岩																	1									1	0	1	
緑色岩																								1	1	1	0	1	
緑色片岩		2																								2	0	2	
礫岩																	1									1	0	1	
ひん岩																	2									2	0	2	
不明				1													8	1								10	4	14	
軽石																							12	2		14	0	14	
玉髓																										1	1	1	
流紋岩																											1	1	
合計	10	4	1	13	3	5	1	1	3	6	26	12	1	18	7	4	46	2	1	8	6	2	12	2	1	2	197	250	447

第12表 器種別石材組成

遺構名	頁岩(安山岩)	輝石安山岩	チャート	凝灰質頁岩	片麻岩	黒曜石	珪質頁岩	石英	無斑品質安山岩	安山岩	玉髓	流紋岩	ヒスイ	不明	合計
SB04	4			5										1	10
SB05		1													1
SB07	1	3	1	1				3	1					1	13
SB11	4	2	2		1	1									10
SB12		1			1										2
SB13	1	3			1						1	1			7
SB14	3	45	10	1			1			1					61
SB15	48	1	6	2			2			1					60
SD01	1		1												2
SD02	6	8	8		1										23
SD03	3	4	1		6		2							2	18
SK142										1					1
SK153	1			1											2
SK174									2						2
SK33	4														4
SK69	1														1
SK77	2														2
SM02	1	1		1											3
遺構外	13	3	3	1	1	4	1	1						1	28
合計	93	72	37	7	11	8	5	4	3	3	1	1	1	4	250

第13表 遺構別割片数

代晩期から弥生時代中期に特徴的な形態を示す。石材は、打製石鏃が黒色の安山岩・チャート・珪質頁岩、磨製石鏃は頁岩・緑色片岩を用いる。

(2) 石鏃 (第76図15、PL30)

1点出土。中期の遺構から出土した。先端部が欠損するが、側縁部に摩耗痕が認められる。

(3) 楔形石器 (第76図16～20、PL30)

13点出土。中期の遺構から10点、後期の遺構から3点出土した。16・17は石槌石核と分類できるものである。黒色の安山岩とチャートが主体であり打製石鏃製作との関連が想定される。

(4) 磨製石斧 (第76・77図21・23・24、PL31)

8点出土。5点は剝片状の小破片である。3点が遺構外、5点は中期後半の遺構から出土した。21は小型で硬砂岩の自然石の端部を研磨したのみである。23は大型蛤刃磨製石斧で刃部が潰れている。24は透閃石岩(蛇紋岩)製の定角式磨製石斧で縄文時代の石器であろう。5点の剝片状の小破片は、大型蛤刃磨製石斧の破片である。

(5) 石槌 (第77図22、PL31)

1点出土。中期後半の遺構(SB11)から出土した。大型蛤刃磨製石斧と同じ輝緑岩製である。実測図下面が研磨されている。

(6) 三脚石器 (第77図25、PL31)

1点出土。後期の遺構(SB13)から出土した。全面が顕著に摩耗している。北陸地域の縄文遺跡で多く出土する石器であり、長野県でも縄文時代の遺跡で確認される。

(7) 打製石斧 (PL30)

3点出土。2点が中期後半の遺構(SB11)、他は遺構外出土である。いずれも頁岩製で欠損品である。刃部に摩耗痕がみられるものがある(PL30管理番号1030)。縄文時代の石器の可能性が高い。SB11からは縄文土器1点が出土している。

(8) 擦切り具 (第78図28～33、PL33)

6点出土。いずれも中期後半の遺構から出土した。縁辺の両面に摩耗痕が認められ、石鋸と報告されることがある。石材はすべて輝石安山岩で、刃器と同じ石材を用いる。

(9) 刃器 (第78・79図34～43、PL32)

26点出土。中期後半の遺構20点、後期の遺構から2点、他は遺構外出土である。大型の剝片を素材とし、縁辺部に二次加工もしくは使用による微細剝離が認められる石器を刃器とした。形状を大きく変更する調整加工は認められない。石材は片麻岩1点の他はすべて輝石安山岩である。長辺が20cm以下の小型のもの(34～38)、20cmを超える大型のもの(39～43)とに大別できる。

接合は欠損部での接合と剝離面での接合が確認できる。接合資料の多くは同一遺構内での接合である。39～42は欠損部での接合であるが、41bは41の一部で、割れた後の調整加工が認められ、二次的な石器の

利用が想定できる。41と43および39と40は剥離面で接合する（第80図）。前者はSB14、後者はSB05から出土した。43は41との接合関係から大型刃器の欠損部であることが判明するが、欠損部分は出土していない。39・40は被熱による変色が認められる。その状態から被熱した後に剥離したことが確認できる。

(10) 二次加工がある剥片

12点出土。10cm以下の小型の剥片に二次剥離があるものを一括した。弥生時代中期後半の遺構から7点、他は遺構外出土である。石材は輝石安山岩7点、頁岩5点である。輝石安山岩製のものはすべて欠損品で本来の形状が不明であり、刃器の破片の可能性がある。詳細は遺物観察表を参照していただきたい。

(11) 微細な剥離がある剥片

1点出土。黒曜石製で、①区の遺構外出土である。黒曜石の石器は他に認められず、剥片も8点出土したのみである。剥片を含め黒曜石の石器群は縄文時代の遺物の可能性が高い。

(12) 砥石（第80図44～52、第83図74・75、PL32・34）

18点出土。15点が中期後半の遺構から出土した。自然礫をそのまま用いたものと、角柱状に加工したものの（52）とに大別され、前者は長辺が10cm～20cm程度の小型の板状のもの（44～51）と、20cmを超える厚手の自然礫を用いたもの（74・75）とに分かれる。石材は、砂岩13点、凝灰岩1、安山岩2点、輝石安山岩2点である。実測図を示したもののうち、51はⅡ W06グリッドⅢ a層、52はⅡ W11グリッドⅢ a層から出土しており遺物の時期が特定できない。Ⅲ a層は平安時代以前の遺物包含層と想定されるが、これらが出土した⑤ a区では古代の須恵器破片が1点出土したのみで、他は弥生時代の遺物であるため、弥生時代砥石の可能性もある（註17）。52は実測図上部がわずかに欠損する先細りの形状を示し、下面は欠損面である。部分的に被熱によると思われる黒褐色の変色が認められる。

(13) 凹石・磨石・みがき石（第81図53～57、PL33）

凹石5点（註18）、磨石4点、みがき石が2点出土。敲打による凹部のみがあるものを凹石、磨面があるものは磨石、研磨状の擦痕が認められるものをみがき石とした。凹石4点、磨石1点、みがき石1点が中期後半の遺構から出土し、他は遺構外である。凹石は、敲打によりわずかに凹部があるもの（53）と、皿状に凹部形成されるもの（55～57）とがある。前者は敲石の敲打痕との区別が明確ではなく、敲石と同じ用途のものを含んでいる可能性がある。54の磨石は表裏面に磨面があり、片面に敲打による凹部が認められる。みがき石は楕円礫を用いた土器製作に関わる石器と推定したが、詳細は遺物観察表を参照。

(14) 敲石（第81図58～68、PL33）

46点出土。35点が中期後半の遺構から出土し、2点が後期の遺構、他は遺構外で出土した。石材は砂岩、頁岩、安山岩、無斑晶質安山岩、閃緑岩、礫岩などバラエティーがある。自然礫をそのまま用いているが、形状は長さが幅の2倍以上となる棒状のもの（58・59・62～65・67・68）と、長さが幅の2倍以下のもの（60・61・66）に大別できる。敲打痕の部位は、長軸の端部（敲打痕a）、側面（敲打痕b）、平坦面（敲打痕c）、不定形の亜角礫の稜上（敲打痕d）の4種類に分類できる。一種類の敲打痕が単独で認められるものと、a～cの敲打痕が複合するものがある。60は側面のほぼ全周に敲打痕が認められ、本遺跡の中では特異な使用状況である。また、ターレット状の黒色付着物があるものが2点（PL33掲載の管理番号1092）、被熱によると思われる赤褐色化が認められるものが5点ある（66、PL33掲載の管理番号1078・

1081)。

石器製作に関わる剥片が出土しない遺構から多くの敲石が出土している。SB11・12、SB14の床面に灰跡以外の焼土(火床)が存在すること、焼成した粘土塊が出土すること、鉄斧・鉄鎌が出土すること、後述する台石の存在から、敲石の中に弥生時代における鍛冶遺構に関わる工具が含まれていると想定した。しかしながら、鍛冶遺構に関連して出土する鍛冶剥片である微小鉄片(註19)は検出していない。鍛冶関連遺構に関わる詳細は第7章に述べる。

(15) 石皿・台石(第82図69～73、PL33・34)

石皿が1点、台石が8点出土。便宜的に機能面が窪みを有するものを石皿(69)、素材の自然礫の形状に変更が認められないものを台石(70～73)とした。台石は平坦面がある板状の礫を用いるもの(70～72)と、機能面が凸面となる楕円礫を用いるものがある(73)。

石皿は、弥生中期後半のSB05の床下の地山に入り込んでおり、調査所見では縄文時代のものであるとされている。台石は、4点が中期後半、2点が後期の遺構、他は遺構外出土である。石材は安山岩、輝石安山岩が用いられている。台石の機能面は磨り、敲打、線条痕などの痕跡が確認される。

(16) 石核(第77図26・27、PL31)

6点出土。5点が中期の遺構(SB07・14、SD02)から出土した。遺構内から出土した石核の石材は、チャート、凝灰質頁岩、無斑晶質安山岩製であり、各石材の剥片の出土点数はチャート37点、凝灰質頁岩7点、無斑晶質安山岩3点である。珪質頁岩、無斑晶質安山岩は剥片数が少なく、定形的な石器は認められない。弥生時代中期の集落内で、これらの石材を用いた石器製作をおこなったとは考え難く、いずれも縄文時代の遺物である可能性が高い。

(17) 原石(PL33)

2点出土。チャートと輝石安山岩(PL33、管理番号1072)各1点である。

(18) 剥片・砕片

剥片247点、砕片3点が出土した。中期後半の遺構から197点、後期・古墳前期の遺構から25点、遺構外から28点出土した。出土地点別の石材組成は第13表に示した。頁岩93点、輝石安山岩72点、チャート37点、片麻岩11点以外は10点以下の少数であり、砕片がほとんど出土していないことから、集落内での剥片石器の製作はあまりおこなわれていないことが想定される。出土点数が多い頁岩・チャートは打製石鏃、磨製石鏃、楔形石器、二次加工がある剥片などに用いられ、輝石安山岩は刃器と擦切り具に用いられる石材である。なお、ヒスイの剥片1点は石製品の破片の可能性もある。

(19) 軽石(PL31)

12点出土。中期後半の遺構から7点、後期～古墳前期の遺構から2点、他は遺構外から出土した。

4 石製品

有孔石製品2点、勾玉1点、ヒスイ製石製品1点、緑色岩製石製品1点が出土した(第83図、PL30・31、巻頭図版)。有孔石製品(76・77)は軽石を素材に貫通した穴がある。76は貫通した直径0.7～0.9cmの1孔と表裏面からの穿孔途中の窪みがある。77は中央部に貫通した直径1.2～1.5cmの1孔がある。いずれ

も中期後半の遺構（SB07・SD02）から出土した。勾玉（78）は蛇紋岩製で⑤a区のSB09付近の弥生時代の遺物包含層から出土した。ヒスイ裂石製品（79）は側面と表裏面が研磨された板状の小破片であるが、全体の形状は不明である。中期後半のSB14から出土したが、詳細な出土位置は不明。緑色岩裂石製品（80）はほぼ全面が研磨され、実測図下面が鋭角な稜を作り出している。欠損しており未成品の可能性もある。中期後半のSD02の①区と②区の境界部で出土した。

5 木製品

⑤a区の遺物包含層（基本土層Ⅲ層）から出土した。出土地点周辺には炭化物が多数出土しており、微細遺物を採取するため、包含層の土壌をサンプリングし、水洗選別をしているときに確認された板状の炭化した木製品である（第84図81）。実測図の上下端部が新鮮な欠損面であり、サンプリング時に欠損したものである。断面形状を見ると、左側面がやや湾曲しており、右側縁に湾曲は認められない。側縁部が本来の木製品の形状を示していると判断したが、炭化し欠損面が摩耗していることから、本来の形状を誤認している可能性もある。残存長5.05cm、最大幅4.1cm、厚さ0.5cmである。杓子または匙形木製品などすくい具の持ち手の一部である可能性もあるが（註20）、全体形状が不明のため、用途不明である。

顕微鏡観察による樹種同定の結果、広葉樹のカバノキ属に同定された。また、炭素14年代測定で2,200±30yrBPの結果を得た（註21）。なお、分析結果の詳細な報告は、添付DVDに収録した。

6 金属製品

鉄斧1点、鉄鎌3点が出土した（第84図82～85、巻頭図版）。鉄斧（82）はSB11（中期後半）の床面から出土した（第30図）。片刃の鍛造鉄斧で、錆部分を除いた法量は、長さ7.0cm、幅3.3cm、厚さ1.0cmである。84の鉄鎌はSB14（中期後半）、83と85の鉄鎌はSB13（後期）から出土した。83はほぼ完形で、Pi9の南側の床面から出土した。錆部分を除いた法量は、長さ2.5cm、幅2.5cm、厚さ0.3cmで、X線写真で円孔を1ヶ所確認できる。84・85は欠損品で遺構内での出土地点は不明である。84には円孔が3ヶ所確認でき、円孔の位置が偏ることから、右側縁が欠損している可能性がある。

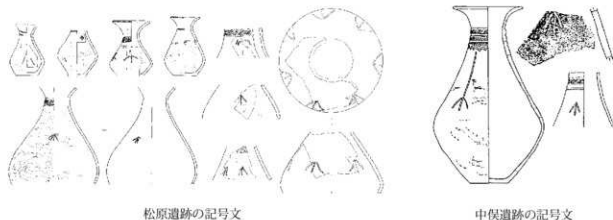
なお、金属器の保存処理は平成25年度と26年度に株式会社文化財ユニオンに委託し実施した。保存処理の経過を記録した報告書を添付DVDに収録した。

註

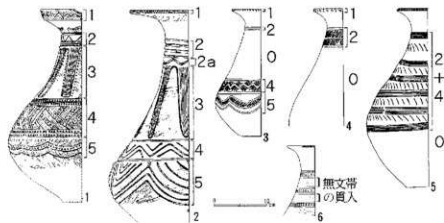
- 1) 土器の焼成と胎土については、大まかな分類をおこない、その内容は遺物観察表の凡例に示した。
- 2) 器種名称は本来、壺形土器、甕形土器、高杯形土器、鉢形土器、甌形土器、蓋形土器であるが、本文中では省略して壺、甕、高杯、鉢、甌、蓋と呼称した。また、壺を壺と広口壺（広口短頸壺）と無頸壺に、甕を甕と台付甕に細分して提示した。なお、無頸壺は小破片がSD02から1点出土したのみで、本遺跡では器形復元できるものは無い。
- 3) 刺突の中に文様が見られるものには、木製の板状工具の小口木目、ハンノキ等の植物の雄花序を押圧したものがあると想定される。刺突内の文様については、中野市琵琶島遺跡（長野県埋蔵文化財センター2016）、中野市南曾峯遺跡（長野県埋蔵文化財センター2012）、長野市松原遺跡（長野県埋蔵文化財センター2000）、栗林遺跡等で指摘されており、琵琶島遺跡では電子顕微鏡を用いた観察（株式会社パレオ・ラボに業務委託）でハンノキ属の雄花序であるとの分析結果が報告されている。なお、琵琶島遺跡で実施した分析報告書は添付DVDに収録した。
- 4) オオバコの花序を回転施文させたもの。栗林式土器文化圏では、佐久市森平遺跡（長野県埋蔵文化財センター2014）で確認され、同じ文様が南大原遺跡でも出土した。註3に記した琵琶島遺跡の整理作業で実施したレプリカ法による顕微鏡観察の鑑定でオオバコの花序を回転施文したことが確認された。なお、琵琶島遺跡で実施した分析報告書は添付DVD

に収録した。

- 5) 松原遺跡では、各文様を a・b・c などに細分しているが、その基準にファジーな部分がある。本遺跡では、松原遺跡と同一基準で細分できないため、文様の細分はおこなわなかった。
- 6) 凸帯が巡る壺は SB07 のほかに、SB11 (第56図87)、SB14 (第61図202)、SB15 (第65図307)、SD02 (第67図382) で出土している。
- 7) 本遺跡出土の蓋は赤彩されないうちが多いが、赤彩された蓋は10点確認されている。9点は中期後半の遺構、1点は遺構外から出土しており、中期後半に赤彩された蓋が用いられていたことは確認できる。
- 8) 矢印の記号文は長野市松原遺跡・中俣遺跡など複数の遺跡で確認されている。下図参照。



- 9) SD03は古墳時代前期の方形周溝墓と判断したが、弥生後期の吉田式の壑穴住居跡と重複しており、SD03埋土には後期の土器が包含されている。
- 10) 石川は、頸部の裝飾帯の下に波状文、鋸歯文などが付加されたものを2a裝飾帯と区分し、栗林2式新段階から栗林3式に見られる特徴としている (石川2002)。下図参照。



- 11) 壺の胴部に縄文が施文される例は少なく、本遺跡で管理番号を付け観察した壺283点中7点に胴部の縄文 (または擬似縄文) 施文が認められた。これらは SD02 と SB14 および遺構外で出土した (第63図233・234、第68図402、第69図447、第73図512)。
- 12) どちらが口縁か胴部か不明確であり、実測図は上下逆の可能性がある。
- 13) PL27の管理番号724・741も口唇部に擬似縄文と思われるものが確認できる。
- 14) 註11と同じ。
- 15) 兵庫県五斗長垣内遺跡の資料との比較から、粘土塊が鍛冶関連遺物である可能性を、榑宜田佳男氏にご指摘いただいた。弥生時代後期の鍛冶遺構が検出された兵庫県五斗長垣内遺跡では、壑穴建物跡床面の焼土、敲石・台石、とともに

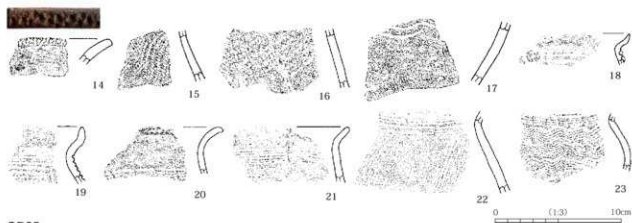
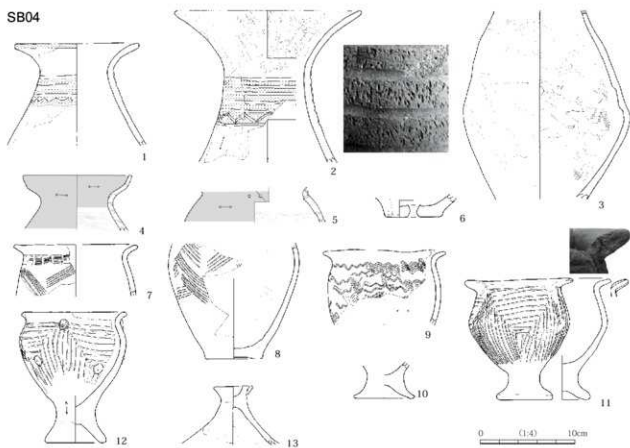
- 粘土塊が出土している。五斗長垣内遺跡の粘土塊は割れて破片になったものが多く、その状況は南大原遺跡でも同様である。粘土塊は輪に関わる遺物の可能性が指摘されており、南大原遺跡での鍛冶遺構の存在を考慮しなくてはならない。
- 16) 黒色で風化による変色が比較的に少ないものを頁岩と分類したが、頁岩としたものに安山岩が含まれることが判明し、「頁岩（安山岩）」と記述することとした。なお、「頁岩（安山岩）」に含まれる安山岩は黒色の安山岩で、中には無斑晶安山岩も含まれるが、長野県と新潟県の県境付近で採取される無斑晶質安山岩としたものとは質が異なる。
- 17) 村田裕一（村田2002）は砥石の形態を大まかに定形砥石と不定形砥石に分類し、「定形砥石は直角柱状または多角柱状を呈する砥石である。最も重要な概念規定は、側面が研面または平坦な整形面が自然面であり、かつまた側面と側面が互いに稜をなして接していることである。（中略）定形砥石の概念規定に外れるのはすべて不定形砥石とすることができる。」と定義をしている。弥生時代の砥石の主体は不定形砥石であるが、西日本では中期後半に定形砥石が出土している。長野県内での弥生時代における定形砥石の出土状況は把握できていないが、東日本を含め、定形砥石の集成をする必要があろう。
- 18) 第11表では凹石の合計は7点となっているがSB16は縄文時代前期の遺構で第3章で報告しているため、本章ではSB16出土の2点を除いた。
- 19) 微小鉄片は鍛造剥片の微細なもので、厚さ1mm程度、1cm四方以下の熱した鉄をたたいて加工する際生じる残滓である。ネオジム磁石など強力な磁石で土壤中より採取できるが、今回の調査ではその作業は実施していない。
- 20) 匙形木製品などのすくい具の類別は、福岡県拾六待ちツイジ遺跡、鳥取県青谷上寺地遺跡、岡山県南方遺跡岡山病院建設地点、石川県八日市地方遺跡などに出土例がある。いずれも山田昌久氏のご教示による。
- 21) 暦年較正年代（ 1σ ）はcal2,305yrBP-cal2,152yrBPである。暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.0.1（Copyright 1986-2014 M Stuiver and PJ Reimer）を用いている。

参考文献

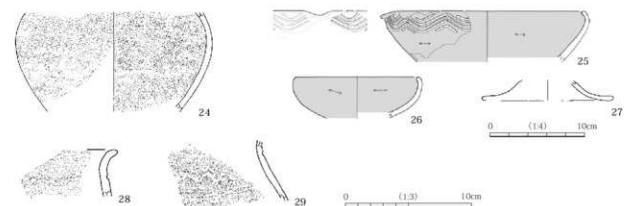
- 石川日出志 2002 「栗林式土器の形成過程」『長野県考古学会誌99・100号合併号』
- 石川日出志 2012 「Ⅱ 栗林式土器の編年・系譜と青銅器文化の受容」『柳沢遺跡』
- 神田五六 1935 「信濃栗林の弥生式石器」『考古学』6-10
- 神田五六 1936 「北信濃の弥生土器」『考古学』7-7
- 桐原 健 1963 「栗林式土器の再検討」『考古学雑誌』49-3
- 小山岳夫 1986 「佐久地方における弥生時代中期後半の土器」『第7回三県シンポジウム 東日本における中期後半の弥生土器』
- 小山岳夫 1987 「弥生中期後半の土器について」『北西の久保遺跡—南部台地上の調査』
- 笹澤 浩 1968 「善光寺平における栗林式直前の土器」『信濃』第20巻第4号
- 笹澤 浩 1971 「善光寺平における弥生時代中期後半の土器」『信濃』第23巻第11号
- 笹澤 浩 1974a 「第3章 弥生時代」『上水内郡志』歴史編（88-115頁）
- 笹澤 浩 1974b 「藤森栄一先生と荒山式土器」『長野県考古学会誌』19号・20号合併号
- 笹澤 浩 1977 「弥生土器—中部 中部高地1～3」『考古学ジャーナル131・133・134』
- 笹澤 浩 1978 「中部高地型御描文の系譜」『中部高地の考古学』
- 笹澤 浩 1987 「中部高地型の御描文土器」『弥生文化の研究』4
- 笹澤 浩 1996 「栗林式土器」『日本土器事典』（505-505頁）
- 千野 浩 2001 「第4章2 出土土器の様相—吉田式土器の基礎的検討—」『長野吉田高校グランド遺跡Ⅱ』長野市の埋蔵文化財第97集 長野市教育委員会
- 寺島孝典 1993 「第3節 弥生時代中期後半の土器様相」『松原遺跡Ⅲ』

- 寺島孝典 1999 「長野盆地南部の様相」[99シンポジウム 長野県の弥生土器編年]
- 寺島孝典 2001 「成立期の栗林式土器」[長野県考古学会誌] 93・94合併号
- 徳永哲秀 1995 「箱清水式土器の施文具および施文法について」[長野県考古学会誌] 75
- 豊田村教育委員会 1980 「南大原遺跡」
- 長野県埋蔵文化財センター 2000 「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書5 松原遺跡 弥生・総論3 弥生中期・土器本文」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書36
- 長野県埋蔵文化財センター 2012 「北陸新幹線建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書6 南曾峯遺跡」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書93
- 長野県埋蔵文化財センター 2014 「中部横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書5 森平遺跡 寄塚遺跡群 今井西原遺跡 今井宮の前遺跡」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 107
- 長野県埋蔵文化財センター 2016 「一般県道豊田中野線建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書 琵琶島遺跡・壁田城跡・ねごや遺跡」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書112
- 費田 明 2000 「第1章 壺形土器の文様帯構造と変遷」[松原遺跡 弥生総論7]長野県埋蔵文化財センター
- 橋本知行 1988 「東日本弥生絵画・記号総論」[縄原考古学研究所論集] 第八
- 春成秀爾 1991 「絵画から記号へ 弥生時代における農業儀礼の盛衰」[国立歴史民俗博物館研究報告] 第35集
- 馬場伸一 2007 「大規模集落と手工業生産にみる弥生中期後葉の長野盆地南部」[考古学研究] 第54巻第1号
- 馬場伸一 2008a 「武器形石製品と弥生中期栗林文化」[「赤い土器のクニ」の考古学] 雄山閣
- 馬場伸一 2008b 「弥生中期・栗林式土器編年の再構築と分布論的研究」国立歴史民俗博物館研究報告145
- 藤森栄一 1929 「敷行録」[信濃考古学会誌] 第一年第三号
- 藤森栄一 1936 「信濃の弥生式土器」[考古学] 7-7
- 藤森栄一 1968 「中部高地地方」[弥生式土器集成 本編]
- 村田裕一 2002 「工具一畝石」[考古資料大観9 弥生・古墳時代 石器・石製品・骨角器] 小学館

SB04

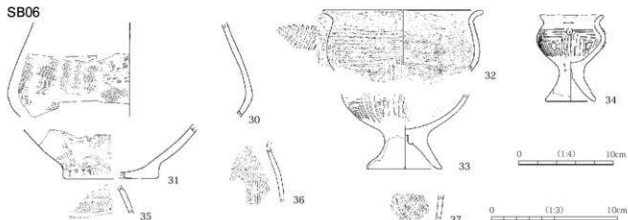


SB05

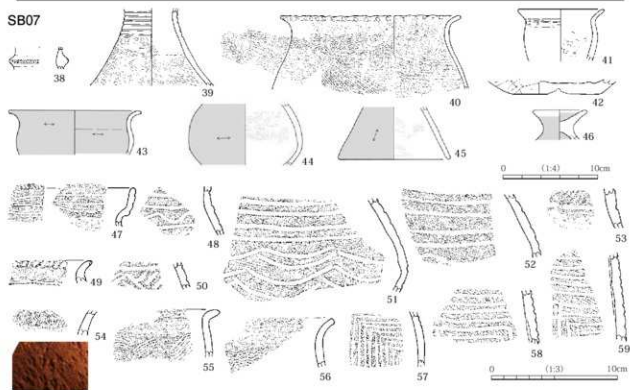


第54図 SB04・SB05出土土器

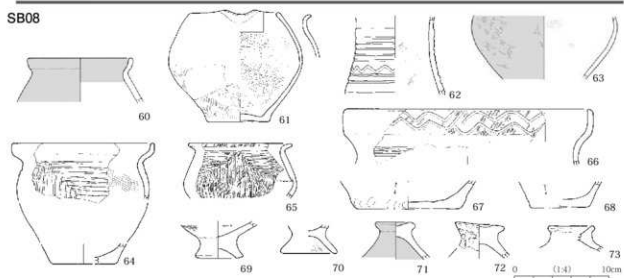
SB06



SB07

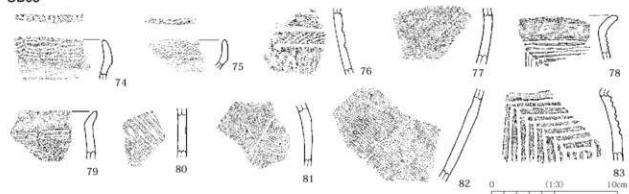


SB08

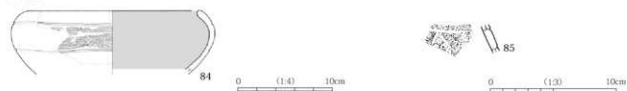


第55図 SB06・SB07・SB08出土土器

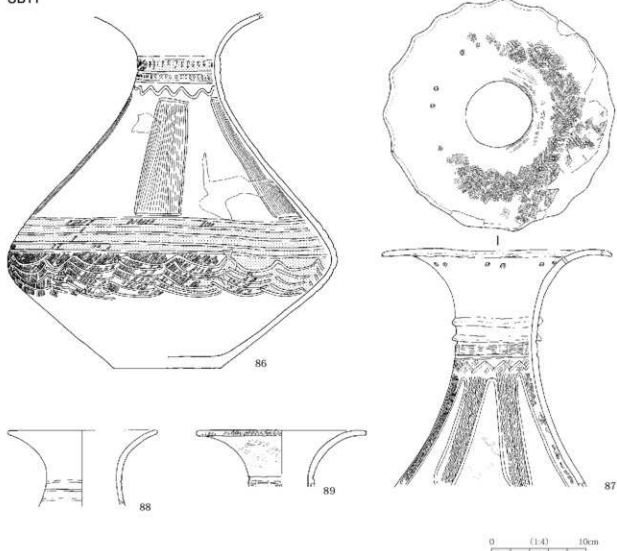
SB08



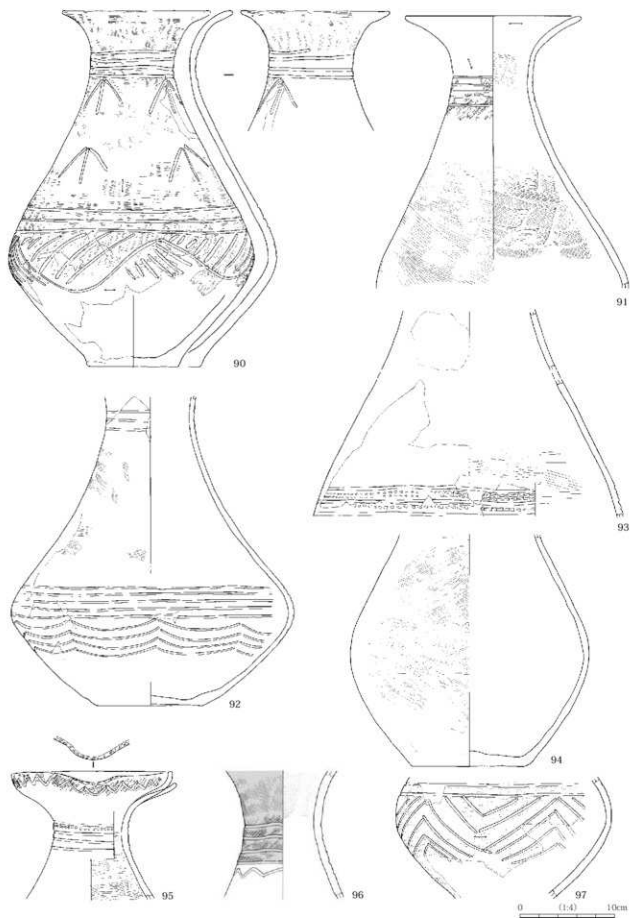
SB09



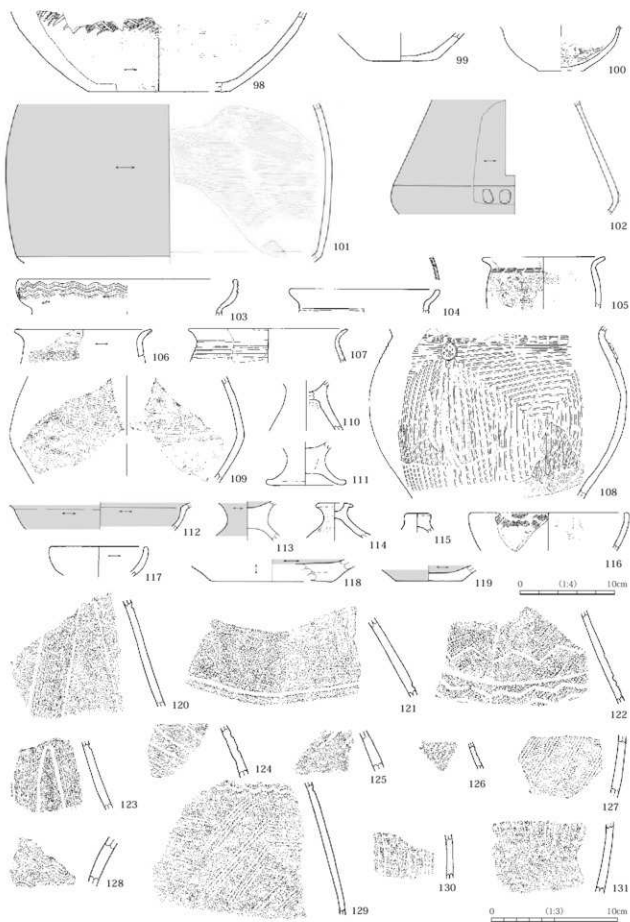
SB11



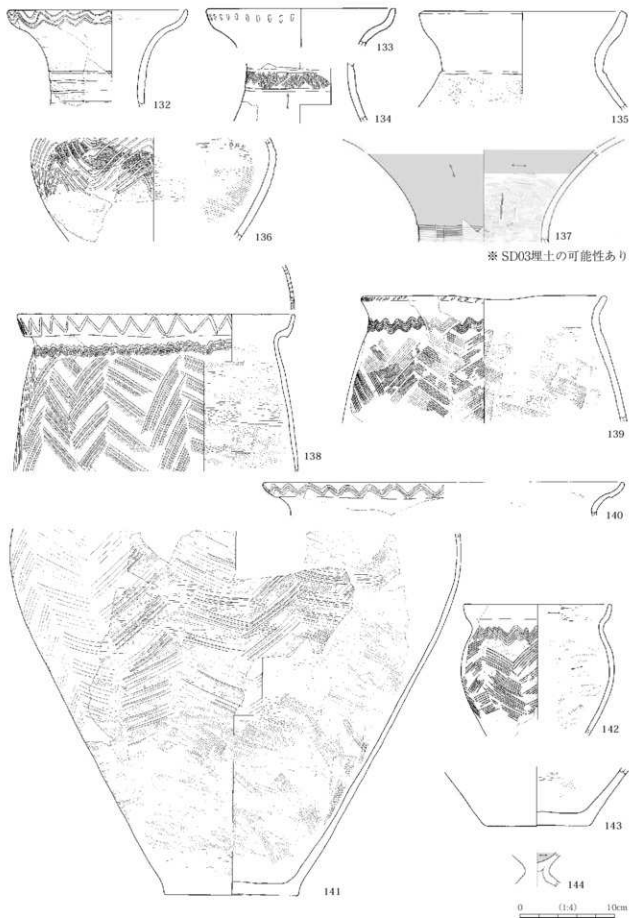
第56図 SB08・SB09・SB11出土土器



第57図 SB11出土土器(1)

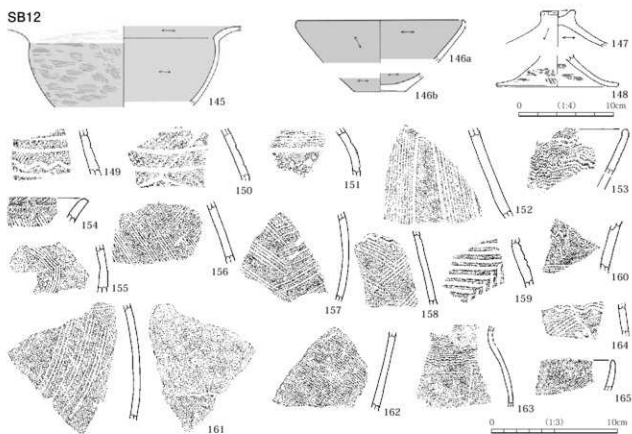


第58図 SB11出土土器(2)

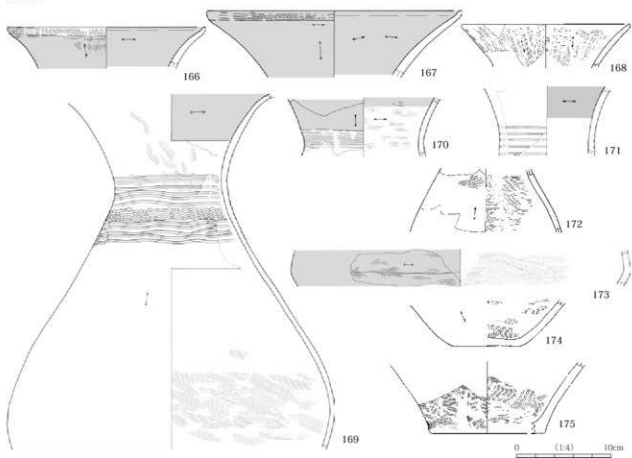


第59図 SB12出土土器

SB12

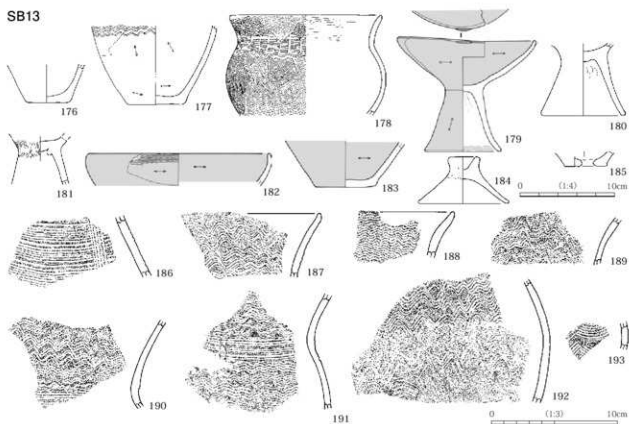


SB13

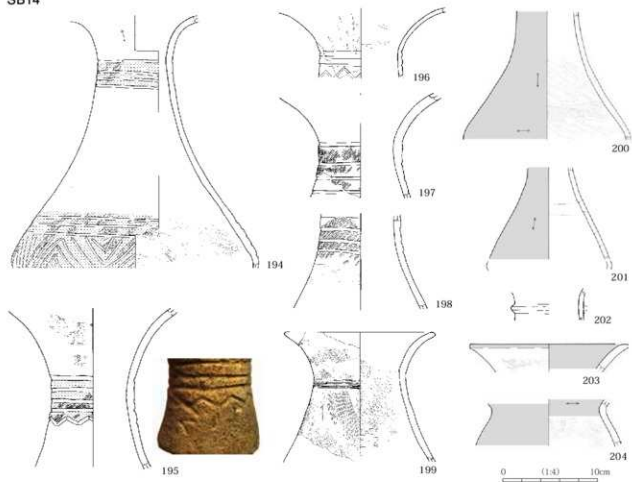


第60圖 SB12・SB13出土土器

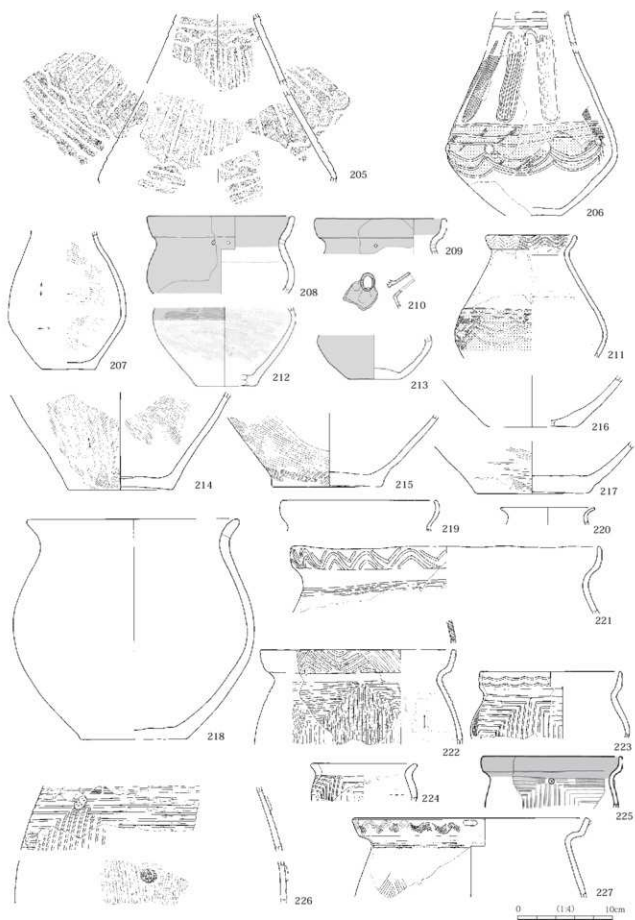
SB13



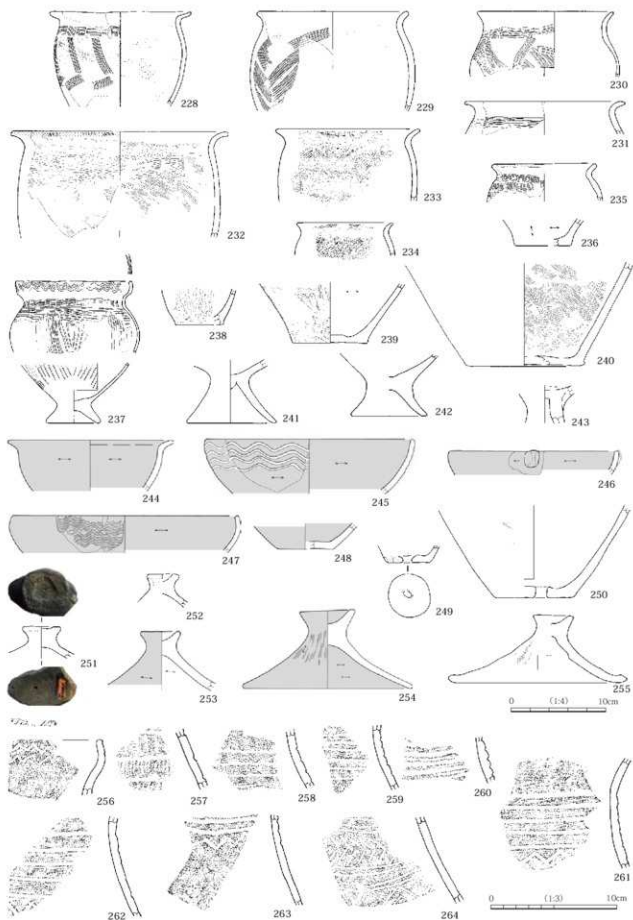
SB14



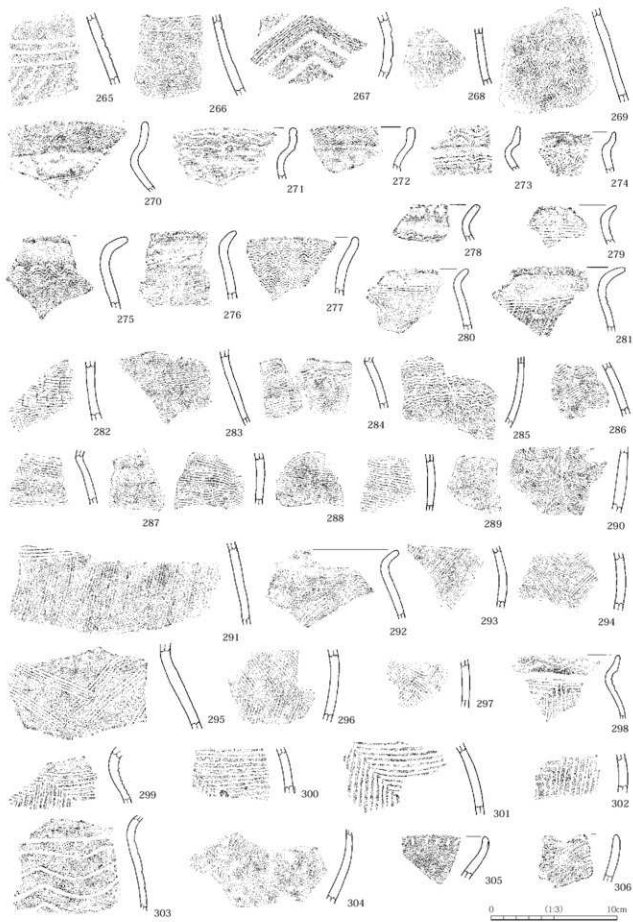
第61図 SB13・SB14出土土器



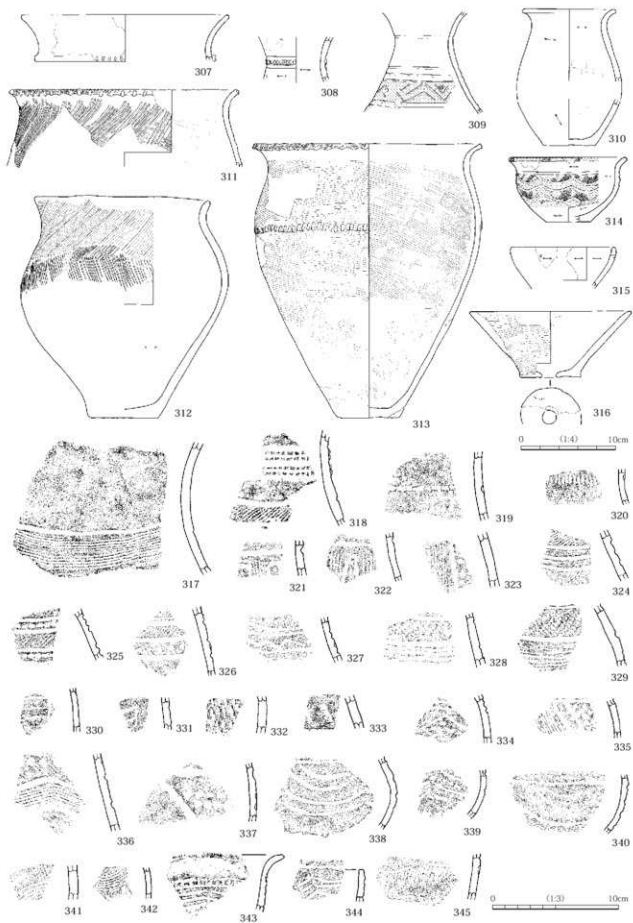
第62図 SB14出土土器(1)



第63図 SB14出土土器(2)

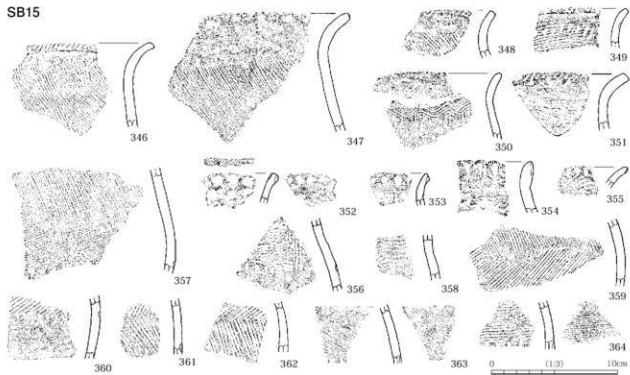


第64圖 SB14出土土器(3)

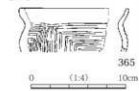


第65図 SB15出土土器

SB15



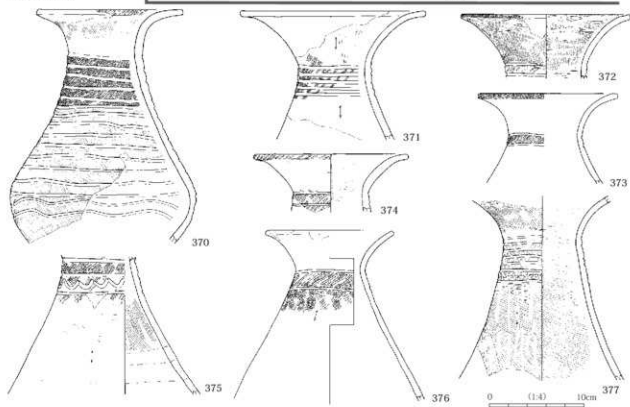
ST04



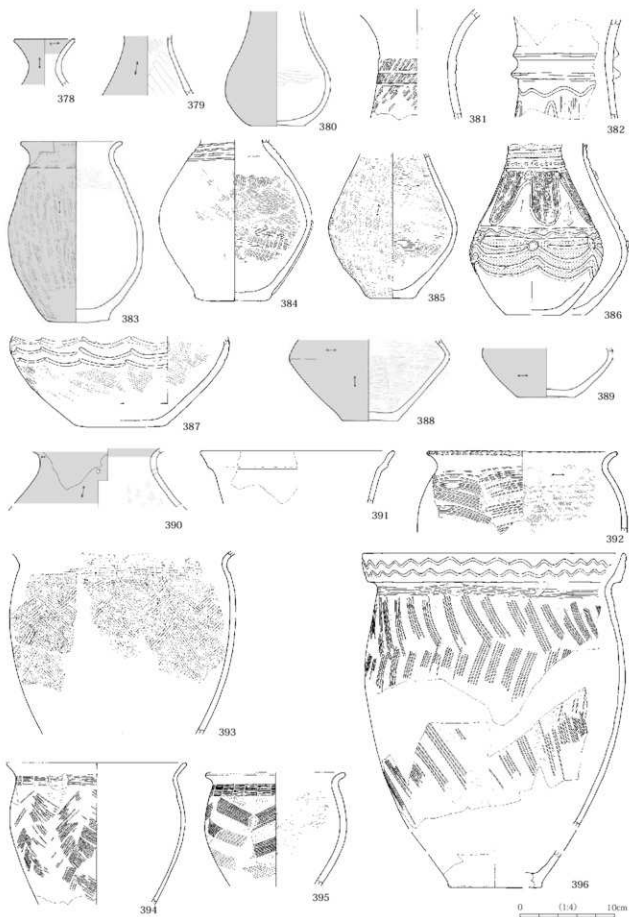
SD01



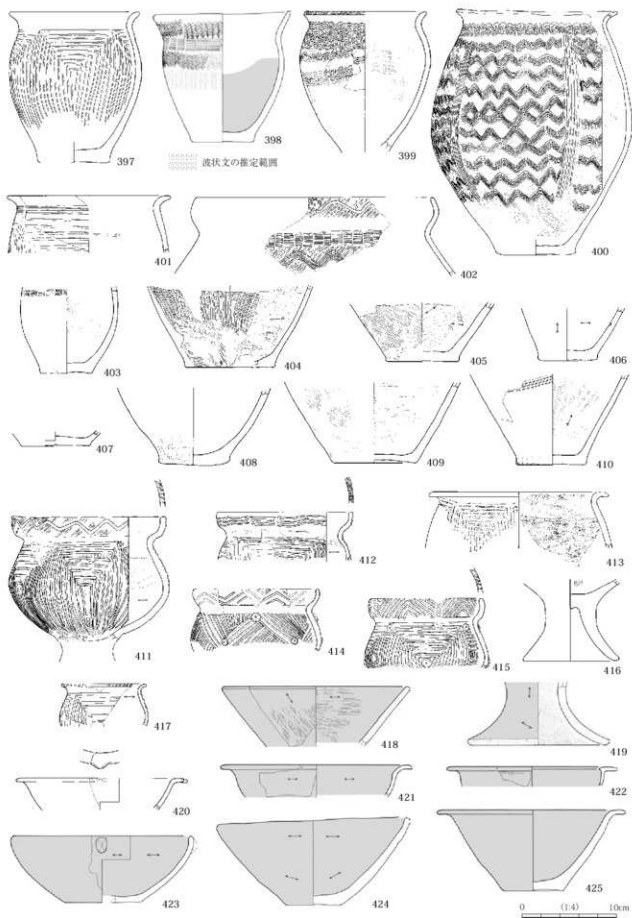
SD02 下層



第66図 SB15、ST04、SD01・SD02下層出土土器

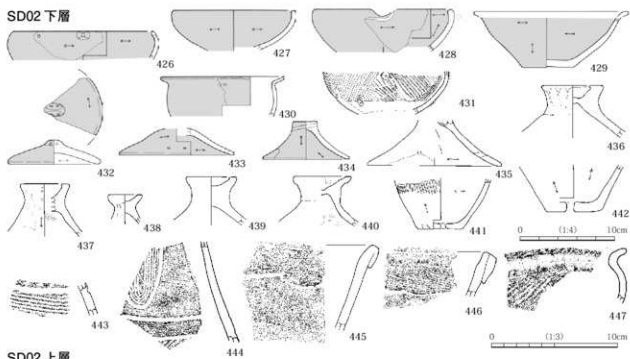


第67図 SD02下層出土土器(1)

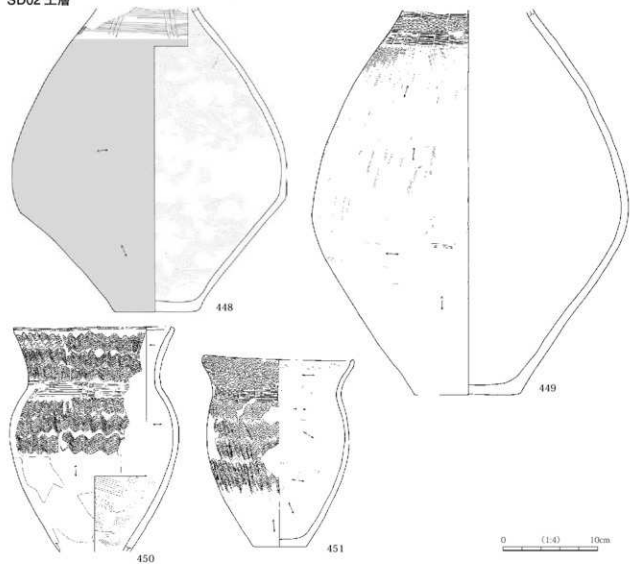


第68図 SD02下層出土土器(2)

SD02 下層

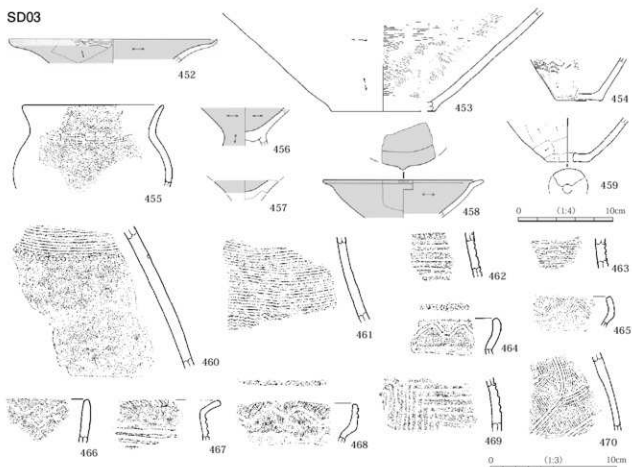


SD02 上層



第69図 SD02出土土器

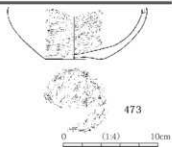
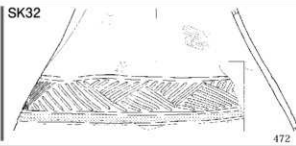
SD03



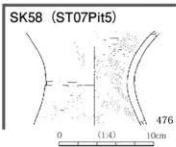
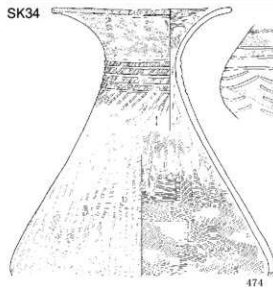
SK26



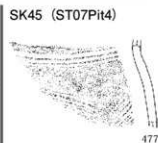
SK32



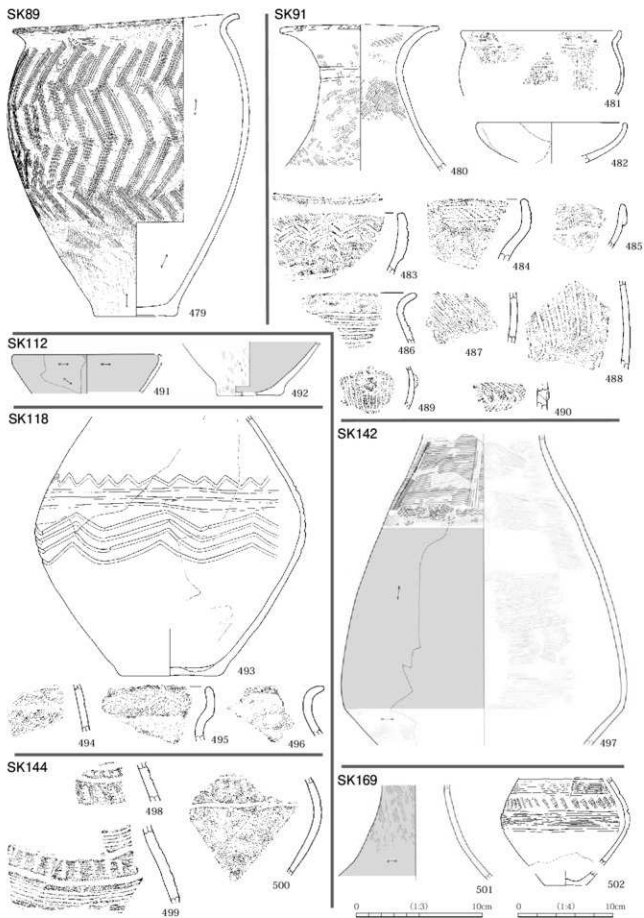
SK34



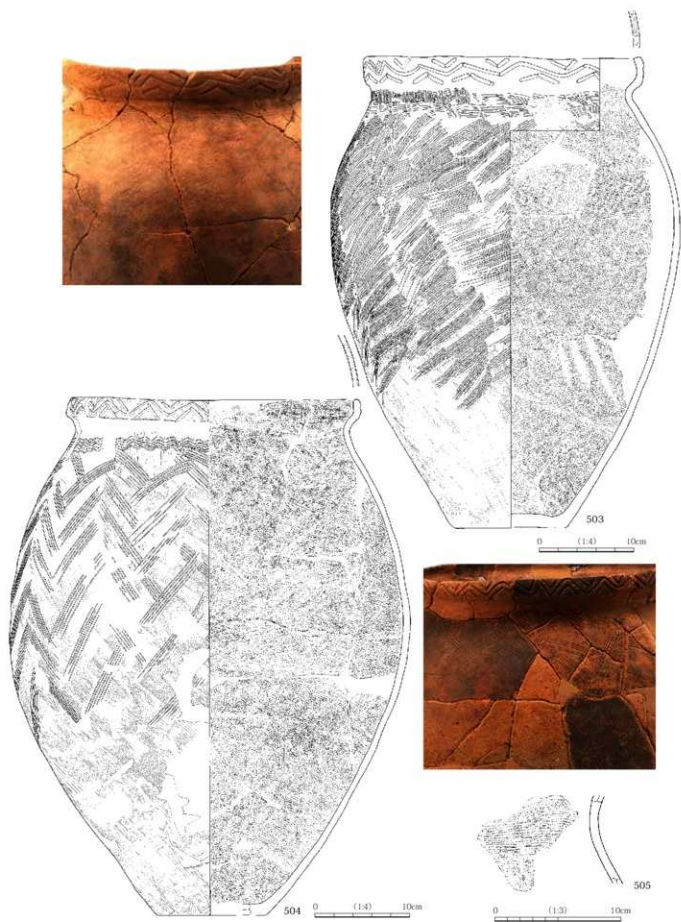
SK45 (ST07Pit4)



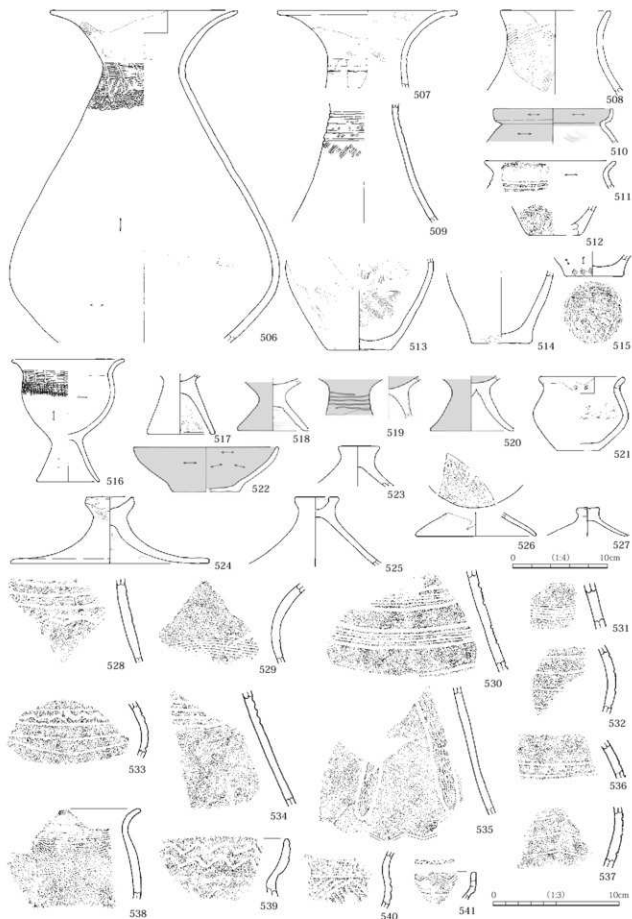
第70図 SD03、SK、ST 出土土器



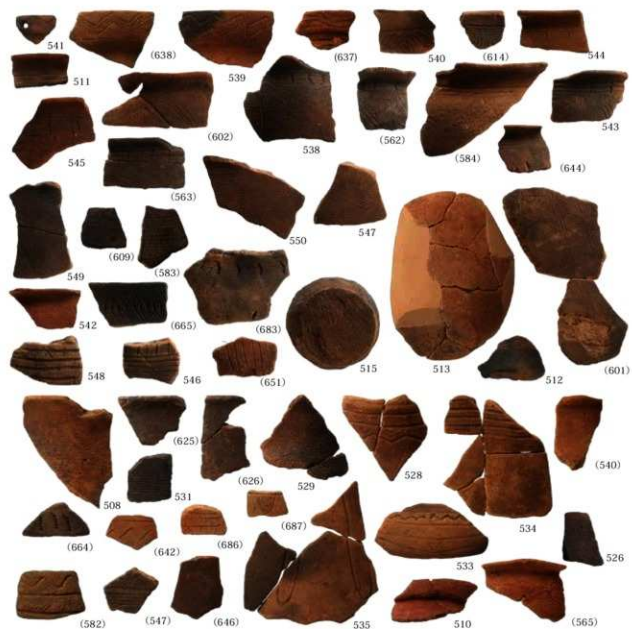
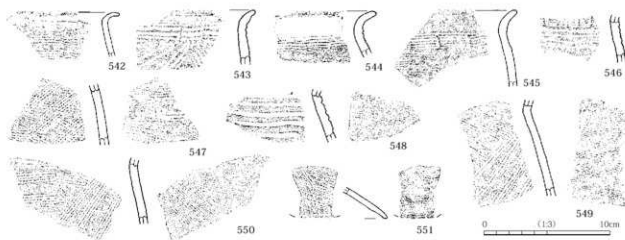
第71図 SK 出土土器



第72図 SK174出土土器

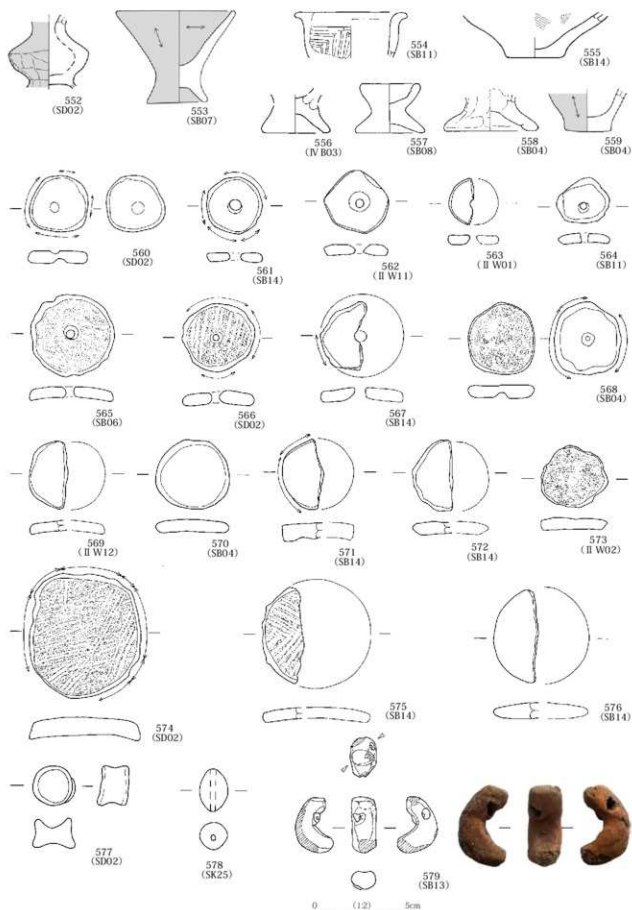


第73図 遺構外出土土器(1)

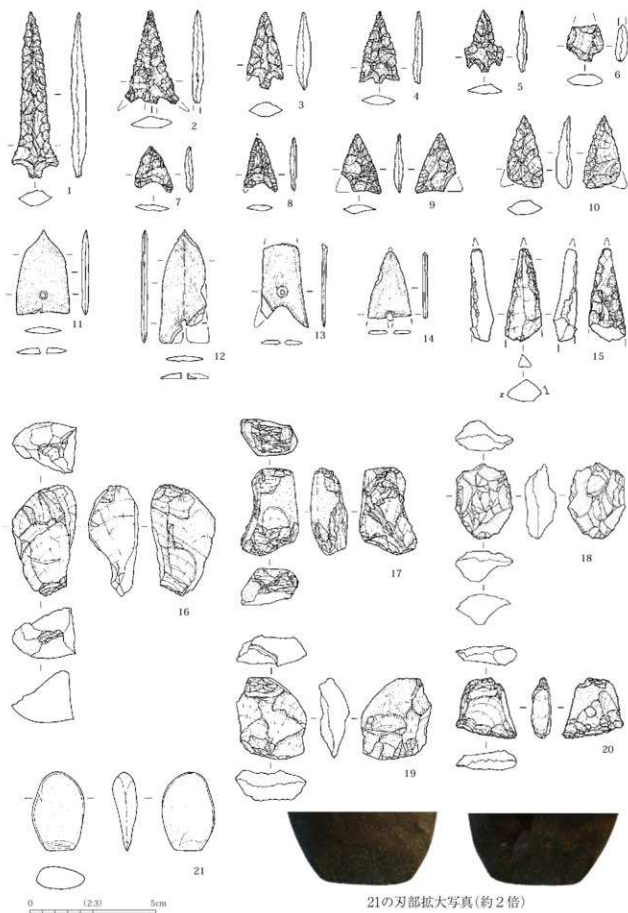


*数字は遺物図版番号、() 付きの数字は管理番号で、写真のみ掲載 (S₁:1:3)

第74図 遺構外出土器(2)

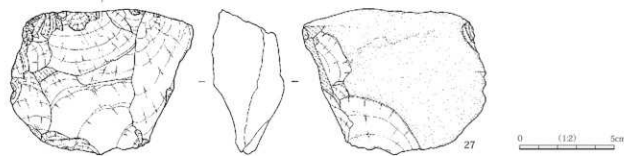
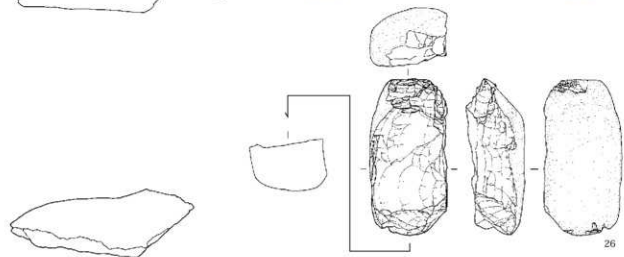
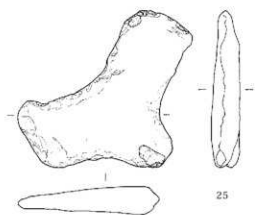
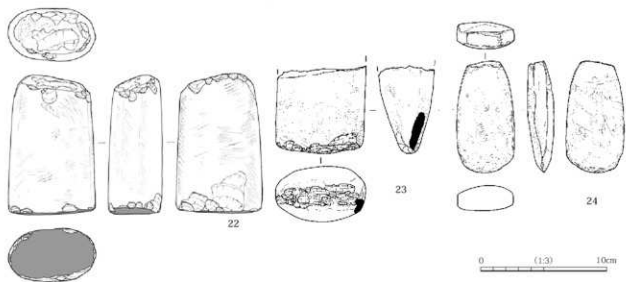


第75図 土製品・ミニチュア土器

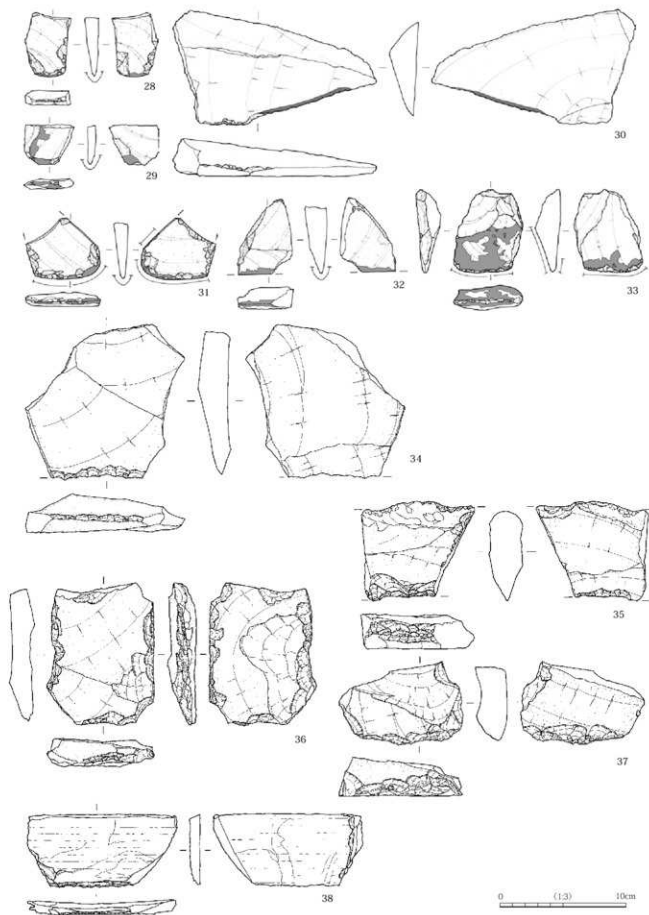


21の刃部拡大写真(約2倍)

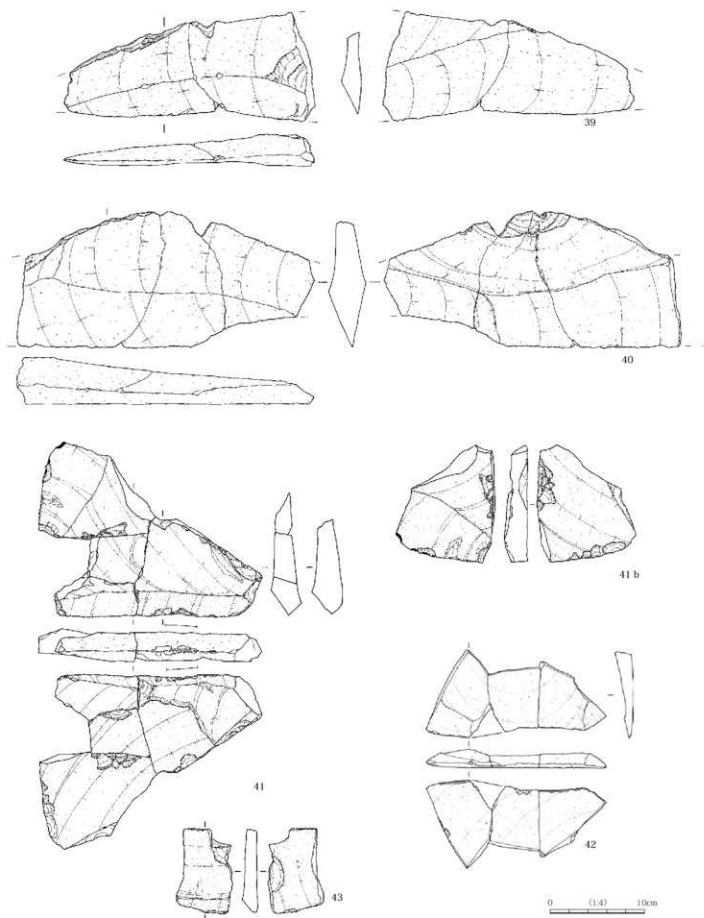
第76図 石器(1)



第77図 石器(2)

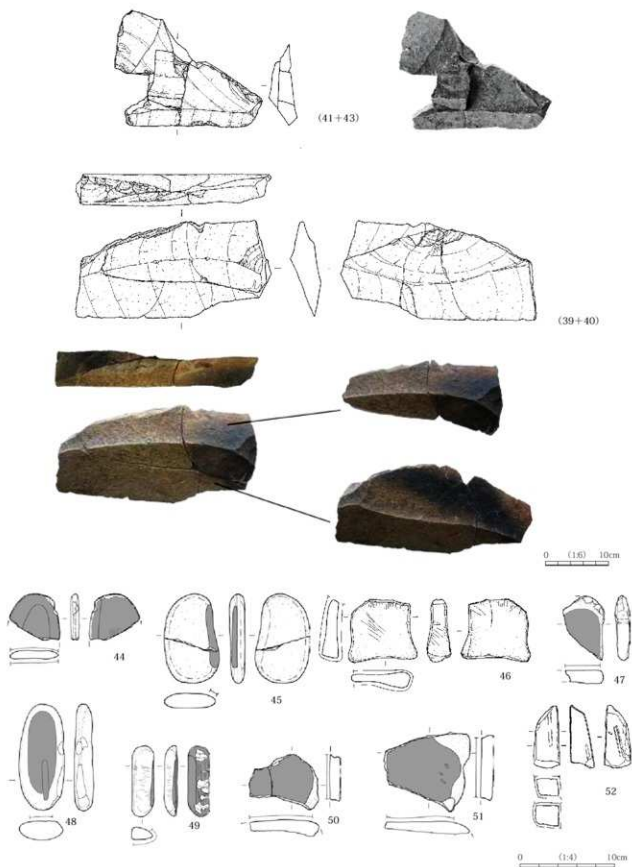


第78圖 石器(3)

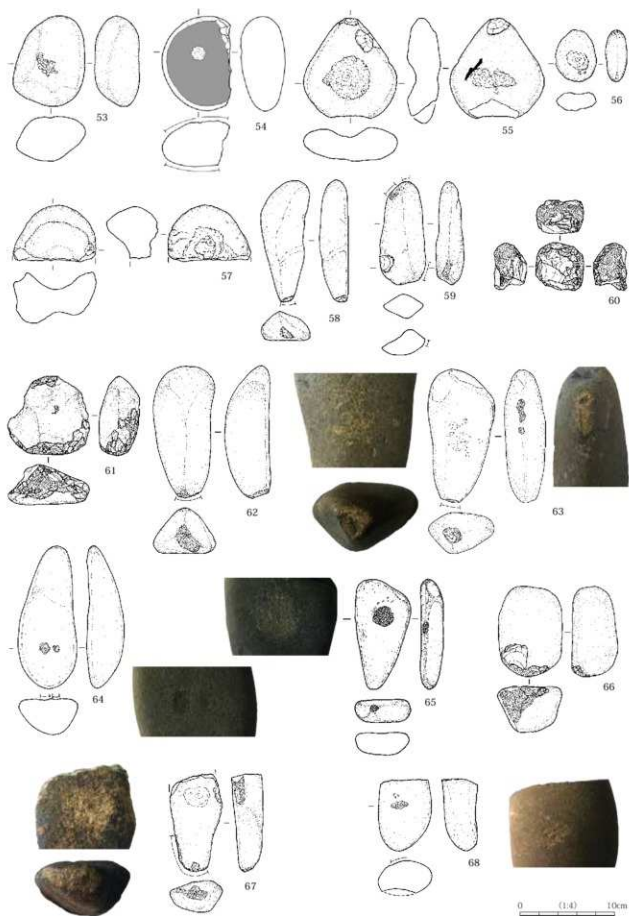


第79図 石器(4)

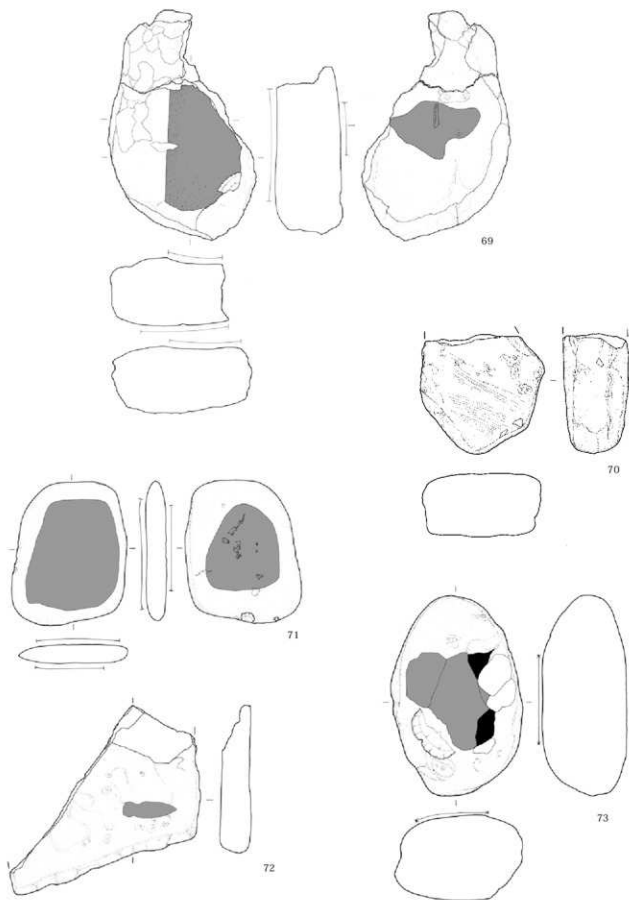
接合資料



第80圖 石器(5)

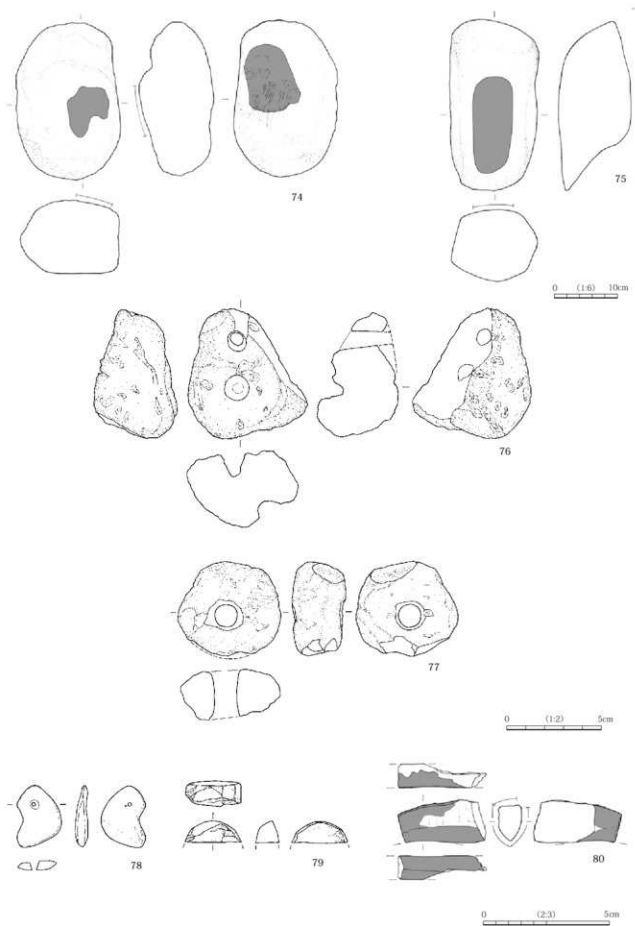


第81図 石器(6)

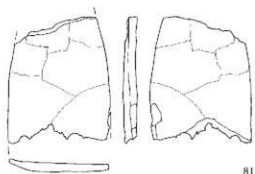


第82圖 石器(7)

0 (1/6) 10cm



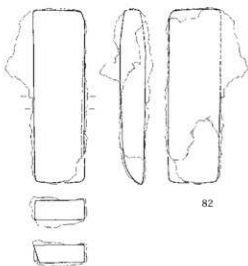
第83図 石器(8)



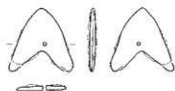
81



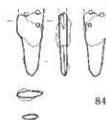
※写真は等倍



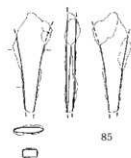
82



83

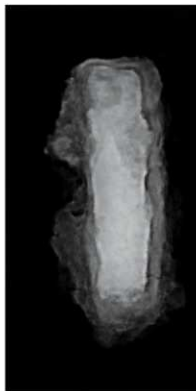


84



85

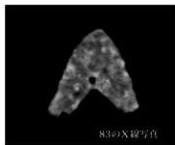
0 (2.3) 5cm



82のX線写真



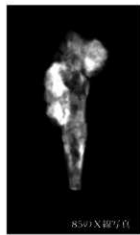
※X線写真は等倍



84のX線写真



85のX線写真



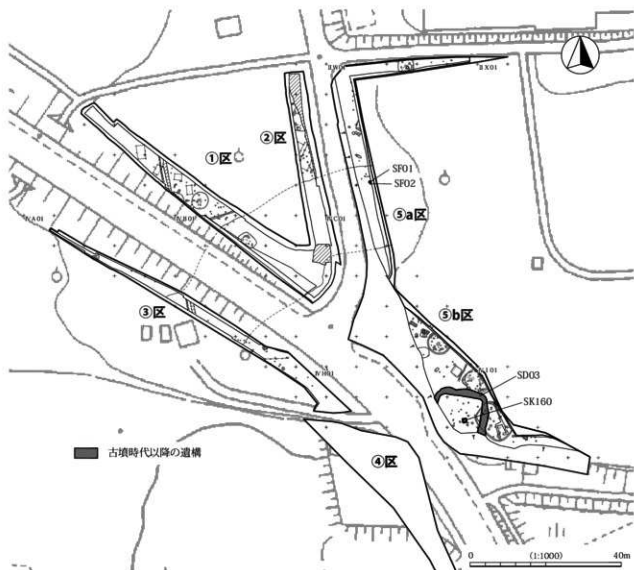
85のX線写真

第84図 木製品・鉄製品

第5章 古墳時代以降の遺構と遺物

第1節 概要

古墳時代以降と判断できる遺構は方形周溝墓1基、土坑1基、焼土跡2ヶ所のみである。古墳時代中期以降の遺物は見られない。古墳時代中期以降の遺物・遺構はこれまでの調査でもほとんど確認されていないことから、南大原遺跡では、縄文時代と弥生時代に集落（墓域を含む）が営まれた後、古墳時代前期に墓域となり、それ以降の近世になるまで土地利用の痕跡は確認されていない。ただし、周囲には遺跡指定範囲外も含めて未調査部分が広く残されており、今後の調査で古墳時代中期以降の集落跡が発見される可能性はある。



第85図 古墳時代以降の遺構配置図

第2節 遺構と遺物

1 方形周溝墓

SD03 (第86図)

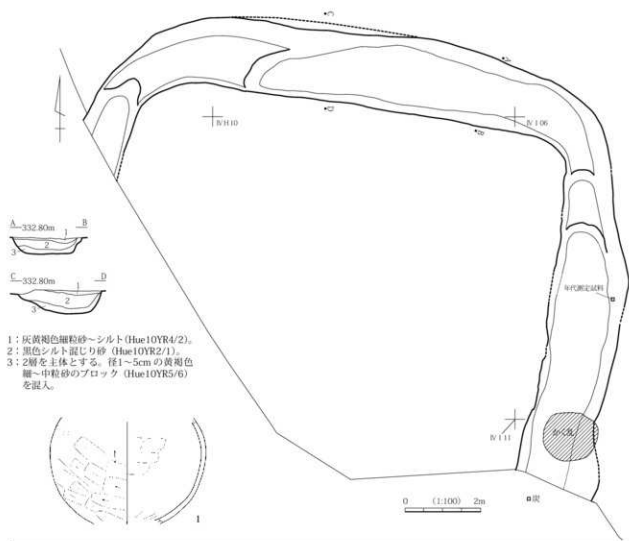
位置と調査経緯：⑤ b 区のIVH04・05・09・10、IVI01・06・11グリッドのIV層上面で確認した。SB11・12、SB13と重複し最も新しい遺構である。当初Ⅲ層下部で検出したが、プランが不明瞭で、SB11・12、SB13との前後関係が明確でないため、IV層上面まで検出面を下げて平面形を確認した。遺構検出をする際に出土した遺物は重複するなどの遺構に属するか不明であったため、「SB11・12・SD03」など該当する遺構名を併記して取り上げた。これらは、重複関係で一番新しいSD03の遺物として報告する。

遺構の構造：幅1.15～2.20m、深さ20～58cmの溝がコの字状に巡る。溝底面は平坦な部分もあるが、凹凸も見られる。かつての道路建設の際に削平された南側にも溝が続いている。主体部は確認できなかったが、方形に区画される周溝墓と判断した(註1)。溝の外側で計測すると、東西15mである。中野市内では安源寺遺跡などで、古墳時代前期の前方後方形の周溝墓が確認されている(中野市教育委員会1995)。削平された南側に張り出部がある前方後方形の周溝墓の可能性も考慮しておきたい。

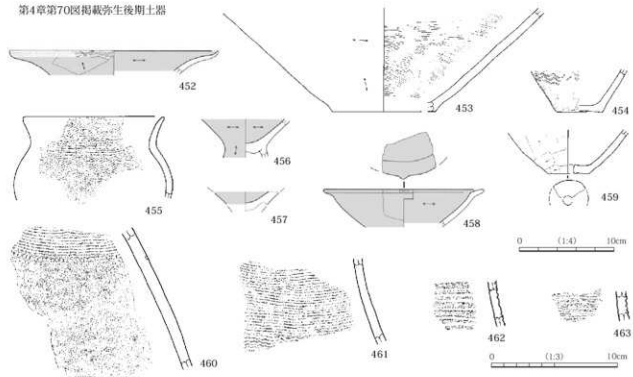
出土遺物：1は丸底または小径底部の土師器の壺で、外面はハケ調整の後ナデ調整とケズリ調整がみられ、内面は板状工具によるナデが認められる。胴部破片のみであるが頸部が屈曲し、小径の平底の器形を想定している。他は第4章で提示した資料(註2)で、454・460・462～463(A群)は後期吉田式である。これらは重複するSB13の埋土中のものが混入したものである。452・453、461(B群)は箱清水式の可能性があるが小破片であり、吉田式か箱清水式かの判断は保留する。この他に、粘土塊1点が出土した。

遺構の時期：第86図1の土師器の出土状況が明らかでないため明言はできないが、土師器がSD03に





第4章第70図掲載弥生後期土器



第86図 SD03遺構図・出土遺物

関連する遺物であるとの認識から古墳時代前期と判断した。しかし、前述のB群の土器が箱清水式で、SD03に関わる遺物であるとする、第86図1の土師器の壺との時期差が生じる。遺構の時期は弥生時代後期の可能性も残しておいた方がよいと考える。なお、埋土出土の炭化物の年代測定で、 $2130 \pm 30\text{yrBP}$ の結果を得た。弥生時代中期の年代であり、弥生時代の炭化物が混入したものと判断した。

2 その他の遺構

SF01・SF02

位置と遺構の構造：⑤a区のⅡW17グリッドのⅠ層下部（Ⅰd層）で2ヶ所の焼土を確認した。SF01は $48 \times 48\text{cm}$ 、SF02は $12 \times 9\text{cm}$ （推定値）の範囲に明赤褐色焼土ブロックがまとまったものである。両者は 18cm の距離で近接しており、いずれも火床面は認識できない。古墳時代から中世の遺物がほとんど出土していないことから近世以降の焼土であると判断した。

SK160（第87図）

位置と遺構の構造：ⅣH10グリッドのⅣ層上面で検出した。 $105\text{cm} \times 104\text{cm}$ 、深さ 24cm の方形の土坑である。弥生土器が2片出土したが、混入品である。

遺構の時期：埋土がⅠ層群に類似することから近世以降のものであると判断した。



第87図 SK160遺構図

3 遺構外の遺物

古墳時代以降の遺構外の出土遺物はわずかである。奈良～平安時代の須恵器甕の破片が1点、近世以降の陶磁器を数点採取出土したのみである。

註

- 1) 奥信濃地域では弥生時代後期から古墳時代前期にかけて、飯山市須田ヶ峯遺跡の方形周溝墓、安源寺遺跡の前方後方形周溝墓が発見されているが、周溝墓の事例は少ない。
- 2) SD03からは弥生時代中期の土器片も多数出土しているが、SD03は弥生中期のSB11・12とも重複しており、中期土器は明らかにSB11・12などからの混入遺物であるので、本章では除外して提示した。

参考文献

- 千野 浩 2001 「第4章2 出土土器の様相—吉田式土器の基礎的検討—」『長野吉田高校グラウンド遺跡Ⅱ』長野市の埋蔵文化財第97集 長野市教育委員会
- 中野市教育委員会 1995 「安源寺遺跡 中野市西部ディサービスセンター建設予定地内」

第6章 自然科学分析

第1節 分析の目的

炭素14年代測定、炭化物の樹種同定、土壌の花粉・珪藻・植物珪酸体分析、土壌のリン酸カルシウム分析を業務委託で実施した（第14表・第88図）。

検出された遺構・遺物の大半は、弥生時代中期後半から弥生時代後期のものである。これらの遺構および遺物の年代を知るため、当該期の遺構出土炭化物と炭化木製品の年代測定を実施した。また、弥生時代における木材利用についての資料を得るため、年代測定試料の一部について、樹種同定をおこなった。土壌の花粉・珪藻・植物珪酸体分析では、弥生時代中期後半の南大原遺跡周辺の古環境復元、低地部の水田の有無、礎床木棺墓、木棺墓に伴う献花の可能性を探ることを目的とした。リン酸・カルシウム分析は、SK174出土の甕が土器棺であるとの想定を確認するために実施した。

分析は平成23～26年度の4年間に7つの委託業務による自然科学分析を実施した。同種の分析も実施年度ごとに分析報告書が作成されており、年度ごとの分析結果が報告されている。分析結果の詳細は、添付DVDに分析報告書のPDFファイルを取録したので、参照していただきたい。

なお、鉄製品の保存処理委託業務についても添付DVDに報告書を取録した。

第2節 分析成果の概要

1 炭素14年代測定および炭化物樹種同定

26点の炭化物・炭化木製品・炭化種実の年代測定を実施し、木製品および炭化物の一部について樹種同定を実施した。

(1) 炭素14年代測定

年代測定は4年度に分けて実施し、分析委託業者は2社となる。4章と5章の遺構に関わる記述で測定年代を提示してある。暦年較正年代は第15表を参照していただきたい（註1）。

弥生時代中期後半から後期前葉の遺構出土試料の年代測定結果を古い順に並べると、概ねSB15→SB08・(SD02)→SB09・SD03→SB06・(SB07)・SB12・SB13・SB14・SD02→SB04・SB07となる。このなかには、遺構出土の土器型式と甕が生じる年代を示すものもある。

例えば、竪穴住居跡SB08の出土試料は出土土器型式の想定年代（栗林2式古～新段階）より古い測定結果となった。分析試料はPit 4の2層から採取しているが、柱の抜き取り後に埋まった土に紛れ込んだのかもしれない。また、吉田式のSB09やSB13出土試料の年代は、栗林2式新段階のSB11・12、SB14とはほぼ同じかそれより古い。SB09の試料は埋土1層から採取したものであり、竪穴住居埋没の過程で紛れ込んだものと考えられるが、SB13のものは甕の北西側に広がる炭のなかから採取したものである。年代測定結果と出土土器型式との差がなぜ生じたのか、その原因はわからない。さらに、溝跡SD02の出土試料4点の年代は、BC200年以前と以後のおよそ100年の開きがある2グループに分かれた。これも古い年

代を示す試料が混在したと考えるか、溝の埋没期間が長かったと理解するのか、解釈が難しいところである。なお、SD02出土試料で最も新しい年代は標準偏差1 σ で111calBC~44calBCを示しており、少なくともその時期までは窪地であったことが想定できる。

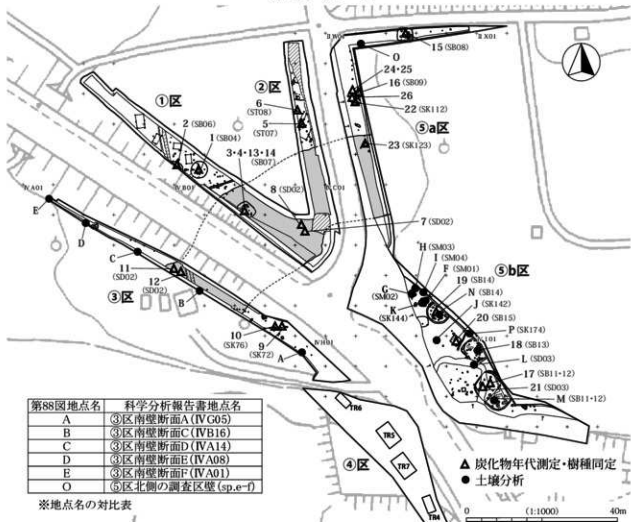
いずれにせよ、炭化物の年代測定は試料がどのような出土状態であるのかを念頭に置く必要があり、1点の測定資料で遺構の年代を推定する危険性を排除しなければならない。

第89図に1標準偏差(1 σ =68.2%)の値をグラフで示した。濃い部分がより確立の高い年代値で、薄い部分が確立が低い年代値である。確立が10%未満のものは表示していない。

栗林1式を中心とした琵琶島遺跡の炭素14年代測定の結果を見ると、暦年較正年代で概ね BC230年以

分析内容	分析年度	サンプル地点名	サンプル地点	分析機関
年代測定	H23年度	1~8	SB04, SB06, SB07, SK58(ST07), SK64(ST08), SD02	株式会社 加速器分析研究所
年代測定	H24年度	9~14	SK72, SK76, SD02, SB07	株式会社 加速器分析研究所
年代測定	H25年度	15~25	SB08, SB09, SB12, SB13, SB14, SB15, SD03, SK112, SK123, ⑤a区(IIW06)	株式会社 加速器分析研究所
年代測定	H26年度	26	⑤a区(IIW11)	パリノ・サーヴェイ株式会社
珪藻、花粉及び植物珪酸体分析	H24年度	A~E	③区南壁	パリノ・サーヴェイ株式会社
珪藻、花粉及び植物珪酸体分析	H25年度	F~O	SM01, SM02, SM03, SM04, SK142, SK144, SD03, SB11, SB14, ⑤区北壁	パリノ・サーヴェイ株式会社
リン酸・カルシウム分析	H26年度	A・O・P	⑤区南壁, ⑤区北壁, SK174	パリノ・サーヴェイ株式会社

第14表 分析一覧



第88図 分析試料サンプル地点

分析年度	サンプル地点名	報告書分析No.	測定番号	出土地点	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり Libby Age(yrBP)	1 σ 暦年代範囲	試料形態 (樹種)	遺構の時期
H23	1	1	IAAA-112268	SB04 炭化物2 (炭範囲)	2,050 \pm 30	106calBC - 37calBC (56.4%) 30calBC - 21calBC (5.4%) 12calBC - 2calBC (6.4%)	炭化物	栗林2式新
H23	2	2	IAAA-112269	SB06 炭化物1	2,100 \pm 30	170calBC - 92calBC (63.2%) 69calBC - 61calBC (5.0%)	炭化物	栗林2式古～新
H23	3	3	IAAA-112270	SB07 床面 炭化物2	2,060 \pm 20	147calBC - 141calBC (3.4%) 11calBC - 42calBC (64.8%)	炭化物	栗林2式古～新
H23	4	4	IAAA-112271	SB07 炉内 炭化物3	2,120 \pm 20	197calBC - 111calBC (68.2%)	炭化物	栗林2式古～新
H23	5	5	IAAA-112272	SK58 (ST07) 炭化物1	2,150 \pm 30	347calBC - 320calBC (20.1%) 207calBC - 164calBC (44.9%) 128calBC - 122calBC (3.2%)	炭化物	不明
H23	6	6	IAAA-112273	SK64 (ST08) 炭化物1	2,110 \pm 20	174calBC - 94calBC (68.2%)	炭化物	不明
H23	7	7	IAAA-112274	SD02 III層 炭化物1	2,090 \pm 30	165calBC - 90calBC (56.3%) 74calBC - 58calBC (11.9%)	炭化物	栗林2式古～新
H23	8	8	IAAA-112275	SD02 III層 炭化物3	2,070 \pm 20	146calBC - 141calBC (3.2%) 11calBC - 44calBC (65.0%)	炭化物	栗林2式古～新
H24	9	1	IAAA-122465	SK72 (SA01) 底部	2,160 \pm 30	350calBC - 305calBC (37.3%) 209calBC - 173calBC (30.9%)	炭化物	不明
H24	10	2	IAAA-122466	SK76 (SA01) 底部	2,090 \pm 30	162calBC - 132calBC (24.1%) 118calBC - 88calBC (25.7%) 78calBC - 55calBC (18.4%)	炭化物	不明
H24	11	3	IAAA-122467	SD02 IVA15 炭1 IIIa層	2,090 \pm 30	158calBC - 134calBC (19.2%) 117calBC - 54calBC (49.0%)	炭化物	栗林2式古～新
H24	12	4	IAAA-122468	SD02 IVB11 炭4 IIIa層	2,200 \pm 30	356calBC - 286calBC (47.1%) 234calBC - 202calBC (21.1%)	炭化物	栗林2式古～新
H24	13	5	IAAA-122469	SB07 床面	2,110 \pm 30	178calBC - 93calBC (68.2%)	炭化物	栗林2式古～新
H24	14	6	IAAA-122470	SB07 Pit1	2,110 \pm 30	174calBC - 92calBC (65.8%) 67calBC - 63calBC (2.4%)	炭化物	栗林2式古～新
H25	15	1	IAAA-132926	SB08 Pit4 2層 炭化物3	2,170 \pm 30	351calBC - 303calBC (40.8%) 210calBC - 176calBC (27.4%)	炭化物	栗林2式新?
H25	16	2	IAAA-132927	SB09 1層	2,140 \pm 20	342calBC - 327calBC (7.8%) 205calBC - 157calBC (49.1%) 13calBC - 116calBC (11.3%)	炭化物	栗林2式新 ～吉田式
H25	17	3	IAAA-132928	SB12 2層 炭化物1	2,090 \pm 20	164calBC - 128calBC (28.8%) 122calBC - 89calBC (26.9%) 74calBC - 58calBC (12.5%)	炭化材 (コナラ属・コナラ亜 属クヌギ節)	栗林2式新～3式
H25	18	4	IAAA-132929	SB13 2層 (炭範囲)	2,080 \pm 30	153calBC - 137calBC (12.3%) 114calBC - 51calBC (55.9%)	炭化物	吉田式
H25	19	5	IAAA-132930	SB14 炉1 1層	2,090 \pm 30	164calBC - 89calBC (55.6%) 75calBC - 58calBC (12.6%)	炭化物	栗林2式新
H25	20	6	IAAA-132931	SB15 2層	2,270 \pm 30	394calBC - 358calBC (48.8%) 281calBC - 257calBC (19.4%)	炭化物	栗林1～2式古
H25	21	7	IAAA-132932	SD03 2層	2,130 \pm 30	199calBC - 111calBC (68.2%)	炭化物	古墳時代
H25	22	8	IAAA-132933	SK112 1層	2,090 \pm 30	164calBC - 89calBC (55.6%) 75calBC - 58calBC (12.6%)	炭化物	不明
H25	23	9	IAAA-132934	SKI23	2,100 \pm 20	165calBC - 91calBC (61.4%) 70calBC - 61calBC (6.8%)	炭化種子 (クヌギ子葉3個)	不明
H25	24	10	IAAA-132935	IIW06 IIIa層	2,110 \pm 20	175calBC - 94calBC (68.2%)	炭化材	不明
H25	25	11	IAAA-132936	IIW06 IIIa層	2,170 \pm 30	351calBC - 300calBC (42.9%) 227calBC - 224calBC (2.0%) 21calBC - 180calBC (23.3%)	炭化材 (エノキ属)	不明
H26	26	1	IAAA-141700	IIW11 III層	2,200 \pm 30	356calBC - 285calBC (67.8%) 235calBC - 203calBC (32.2%)	炭化木製品(カバ ノキ属カバノキ科)	不明

※サンプル地点名は第88図の地点名

※報告書分析No.は添付DVDに収録した科学分析報告書に記載された試料番号

第15表 年代測定試料一覧

前の年代を示しており、栗林2式の年代はBC200年以降とみることができる。

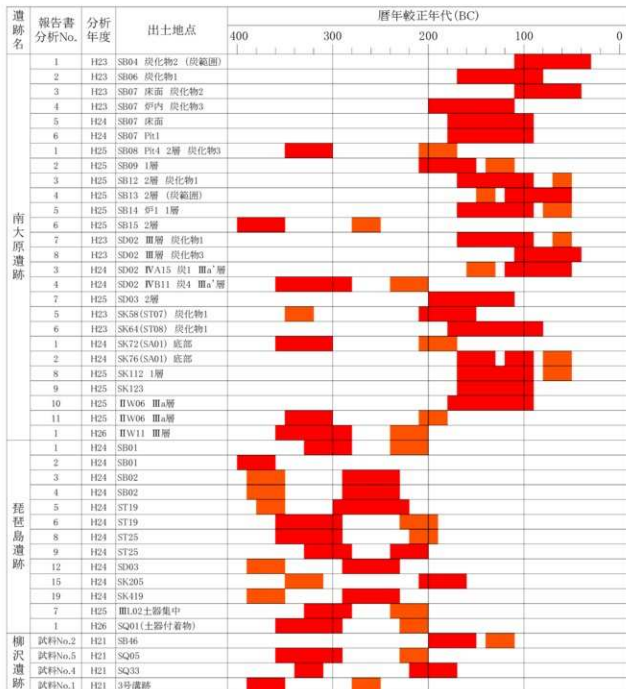
前述のとおり古い時期の炭化物の混入、測定結果と樹木の伐採時期との年代差など、考慮しなければならぬ問題は多々あるが、琵琶島遺跡、南大原遺跡の炭素14年代測定結果から、栗林式土器の石川編年の年代を以下のようにまとめることができるので、仮説として提示しておきたい。なお、以下の年代は暦年較正年代を用いたものである(註2)。

栗林1式：～BC230年

栗林2式古段階：BC230年～BC170年

栗林2式新段階：BC170年～BC50年

栗林3式：BC50年?～



第89図 南大原遺跡周辺の弥生時代中期後半の暦年較正年代

(2) 樹種同定

4点のサンプルの樹種同定をおこなった結果は第15表に記した。

SB12の炭化材(第4章第30回の炭化物1)は北隣の壁際で出土した細長い棒状の材で、コナラ属コナラ亜属クスギ節と報告された。弥生時代の木製品の出土例は多くないが、佐久市西一里塚遺跡では、弥生時代の鍬身や鍬柄にクスギ節が用いられるものがある(長野県埋蔵文化財センター 2012a)。また、長野市石川条里遺跡などの事例から弥生時代～古墳時代の農耕具の樹種はクスギが主体であることが指摘されている(白居2004)。一方、各時代の木製品が多数出土した長野市川田条里遺跡の樹種同定結果を見ると、約3,900点の内、コナラ属クスギ節と鑑定されたものは180点程度であり、弥生時代のものはその中の12点である。それらの多くは加工が見られない自然木か杭であり、木製品はわずかである。こうした点から考えて、SB12出土の炭化材は建築部材の可能性は低く、燃料もしくは農具の柄等であると想定する。

⑤a区ⅡW11グリッドの遺物包含層から出土した板状の炭化木製品は欠損しており、器種不明である(第84図81)。暦年較正年代(1 σ)が356calBC～285calBC(67.8%)、235calBC～203calBC(32.2%)で、弥生時代中期後半栗林1式～2式期古段階の年代値を示し、樹種はカバノキ属カバノキ科であることが判明した。前述の川田条里遺跡の樹種同定ではカバノキ属は7例確認され、いずれも古墳時代以降のもので加工品はない。石川条里遺跡では、弥生後期から古墳前期の曲柄鍬、棒(かせ)、横植にカバノキ属がみられるが、本遺跡の板状の木製品とは異なるものである。木製品でカバノキ属の事例が少なく、残念ながら、樹種から木製品の器種を推定することはできない。

2 花粉・珪藻・植物珪酸体分析

(1) 遺跡周辺の古環境復元について

③区と⑤区の弥生時代の遺物包含層であるⅡ層下部からⅢ層を試料とした分析結果は、珪藻化石、花粉化石はわずかに検出されたのみで、周辺の古環境復元をおこなう十分なデータは得られなかった。特に⑤区の試料では花粉化石がほとんど検出されなかった。なお、ハンノキ属・コナラ属コナラ亜属・ニレ属一ケヤキ属等の落葉広葉樹、モミ属ヤツガ属・マツ属等の針葉樹、イネ科・カヤツリグサ科・ナデシコ科・ヨモギ属・キク亜科などの草本類の花粉化石がわずかに検出された。

また、SD02、SD03埋土の珪藻分析では、全体的に検出された珪藻化石は少ないながら(註3)、いずれも陸生珪藻であり、埋土の堆積時には滞水するような状態でなかったと報告された。ただし、SD02の最下底部の土壌の分析はおこなっていないため、SD02形成時の環境は不明である。

(2) 調査区内の水田の存否について

遺構が存在する微高地に対し、③区のSD02から西側は低地部と傾斜していく。低地部の水田利用の可能性を検討するための植物珪酸体分析では、イネ科イネ属の植物珪酸体はわずかに検出されたものの、水田土壌を示す試料は認められず、弥生時代の水田が存在したデータを得ることはできなかった。植物珪酸体では、イネ科イネ属、クマザサ属を含むタケ亜科、ヨシ属、ススキ属、イチゴツナギ亜科等が確認された。また、SB11Pi17とSB14炉1の試料には乾燥土1gあたり200～300個のイネ科イネ属の植物珪酸体が確認され、遺物包含層の試料より多量の植物珪酸体が含まれていた。水田跡は確認されなかったが、栗林2式新段階には稲作が行なわれていたことの傍証となる。

なお、SB14炉1では、イネ科イネ属の他に乾燥土1gあたり9,900個のススキ属の植物珪酸体が検出された。「ススキ属等は、燃焼時間が短く火力も大きくないものの、燃焼し易いことから、焚付材等に利用された植物体の痕跡を示している可能性がある。」と報告された。このように炉跡からは燃焼材として用いられる植物の珪酸体が含まれることが想定されるため、炉内の土壌サンプルは古植生を復元する試料と

しては適当ではないようである。

(3) 墓跡における献花の可能性について

磯床木棺墓・木棺墓の埋土での花粉化石はほとんど検出されず、検出された化石も遺存状態が悪く、献花の可能性について検討できなかった。花粉化石の検出数が少ないのは、珪藻化石の分析から指摘されているように、土壌堆積時の環境が乾燥した状態であったためと考えられている。

(4) 土壌分析の有効性について

上記の花粉分析、珪藻分析、植物珪酸体分析（プラントオパール分析）についてはいずれも検出数が少なく、それぞれの分析目的を果たすデータは得られなかった。分析報告書では、湿潤ではない比較的乾燥した環境（分析報告書では「好気的環境」）で堆積した土壌では、分析対象の花粉、珪藻、植物珪酸体が遺存しにくいことが示されている。このような環境で堆積した土壌の花粉分析、珪藻分析、植物珪酸体分析は良好な分析結果が得られないことを確認した。

分析年度	サンプル地点名	報告書分析No.	採取地点	サンプル層位	分析内容
24年度	A	1	南壁断面A IVG05	Ⅲa層	珪藻・花粉分析
24年度	A	2	南壁断面A IVG05	Ⅲb層	珪藻・花粉分析
24年度	A	3	南壁断面A IVG05	Ⅳa層	珪藻・花粉分析
24年度	B	4	南壁断面C IVB16	Ⅱ層	珪藻・花粉分析
24年度	B	5	南壁断面C IVB16	Ⅲa層	珪藻・花粉分析
24年度	B	6	南壁断面C IVB16	Ⅲa'層	珪藻・花粉分析
24年度	B	7	南壁断面C IVB16	Ⅲb層	珪藻・花粉分析
24年度	C	8	南壁断面D IVA14	Ⅱ層上部	珪藻・花粉分析
24年度	C	9	南壁断面D IVA14	Ⅱ層下部	珪藻・花粉分析
24年度	C	10	南壁断面D IVA14	Ⅲa層上部	珪藻・花粉分析
24年度	C	11	南壁断面D IVA14	Ⅲa層下部	珪藻・花粉分析
24年度	C	12	南壁断面D IVA14	Ⅲb～Ⅳa層	珪藻・花粉分析
24年度	D	13	南壁断面E IVA08	Ⅲa層	珪藻・花粉分析
24年度	D	14	南壁断面E IVA08	Ⅲb層	珪藻・花粉分析
24年度	E	15	南壁断面F IVA01	Ⅲa層	珪藻・花粉分析
24年度	E	16	南壁断面F IVA01	Ⅲb層	珪藻・花粉分析
25年度	F	1	SM01 礎①	礎下層土	珪藻・花粉分析
25年度	F	2	SM01 東側 小口痕		珪藻・花粉分析
25年度	F	3	SM01 西側 小口痕		珪藻・花粉分析
25年度	G	4	SM02 礎②	礎下層土	珪藻・花粉分析
25年度	G	5	SM02 東側 小口痕		珪藻・花粉分析
25年度	H	6	SM03 東側 小口痕(東半分)		珪藻・花粉分析
25年度	I	7	SM04 東側 小口痕	下層	珪藻・花粉分析
25年度	J	8	SK142 b区		珪藻・花粉分析
25年度	K	9	SK144 d区		珪藻・花粉分析
25年度	L	10	SD03 spa-b間ベルト	3層	珪藻・花粉分析
25年度	M	11	SB11 P17内(土器中)		珪藻・花粉分析
25年度	N	12	SB14 炉1	2層下部	珪藻・花粉分析
25年度	O	13	⑤a区TR4 spe-f No5	Ⅲa層	珪藻・花粉分析
25年度	O	14	⑤a区TR4 spe-f No6	Ⅲb層	珪藻・花粉分析
26年度	A・O・P	1	SK174 南壁断面A IVG05 ⑤a区TR4 spe-f No6	埋土 Ⅲa層 Ⅲb層	リン酸カルシウム分析

※サンプル地点名は第88図の地点名

※報告書分析No.は添付DVDに収録した科学分析報告書に記載された試料番号

第16表 土壌分析試料一覧

3 リン酸・カルシウム分析

土器棺墓と想定したSK174の窆内外の土壌に含まれるリン酸、カルシウム、炭素（腐植）の含量を比較した。分析には土器内5点、土器外の土坑埋土2点、SK174から45mと80m離れた弥生時代遺物包含層（Ⅲa層、Ⅲb層）2点の9点の試料を用いた。その結果、土器内と土器外の試料では相対的に土器内のリン酸・カルシウムの含有量が多いものの、土器内に遺体があったと判断できる値ではなかった。他の遺跡で骨片が残っている墓の分析ではリン酸含量が6.0mg/g以上であるのに対し（註4）、SK174の窆内のリン酸含量は最大で2.3mg/gであった。カルシウムと炭素含量との比較から、窆内のリン酸含量が窆外の試料に比べ多い要因を、「リン酸の供給源としては植物遺体などに由来する腐植によると判断され、土器内土壌のリン酸やカルシウム含量の挙動も腐植に伴った変化を反映している可能性が高い。」と報告された。土壌分析から、SK174が土器棺であることを確認することはできなかった。

註

- 1) 暦年較正年代の計算には、H23・24年度はIntCal09データベースを用いOxCal4.1較正プログラムを使用、H25年度はIntcal13データベースでOxcal4.2較正プログラムを使用、H26年度はRADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.0.1をそれぞれ使用している。
- 2) 炭素14年代測定資料は、樹皮付近のものが樹木の伐採年代に近い年代を示すといわれ、樹齢が大きい樹木の芯の部分が測定試料となった場合、伐採年代との差が大きいとされる。測定した試料の樹齢や樹皮に近いところのものかどうかは確認していない。また、第15表の暦年較正年代は、1標準偏差（1 σ ）の値のみ示した。1 σ は、試料の暦年較正年代が提示した年代幅に入る確率が68.2%であることを示す。
- 3) 珪藻分析は分析地点B-E・L（第88図）で行なった。湿重量5gの土壌から100点以上の珪藻化石が検出されたのはB地点Ⅱ層とD地点Ⅲa層のみで、他は25点以下で検出数0点のサンプルもある。（下表参照）

サンプル地点	B地点 (南塚跡遺跡C)				C地点 (南塚跡遺跡D)				D地点 (南塚跡遺跡E)		F地点 (南塚跡遺跡F)		SE03
	B515				B514				B508		B501		
ゾノ	目	Ⅱa	Ⅱb	Ⅱc	Ⅱa	Ⅱb	Ⅱc	Ⅱd	Ⅱe	Ⅱf	Ⅱg	Ⅱh	Ⅱi
海水生種	0	0	0	0	0	7	0	0	0	0	0	0	0
海水～汽水生種	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	1
汽水生種	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
淡水～汽水生種	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
淡水生種	112	0	15	3	4	10	5	0	0	121	25	0	0
珪藻化石総数	113	0	15	3	4	19	5	0	0	121	25	0	0

- 4) バリオ・サーヴェイ株式会社がおこなった研究開発のための分析結果で、データは公表されていない。骨片を含んだ土壌の分析例は、三重県沖打越1号墳（中世墓）、新潟県柏崎市上原遺跡（近世土坑墓）などがある。

引用・参考文献

- 白居直之 2004 「後家山遺跡出土の西柄装着鍬について」『後家山遺跡 東久保遺跡 宮田遺跡Ⅰ・Ⅱ』佐久市教育委員会
- 長野県埋蔵文化財センター 2000 「川田桑里遺跡」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書47
- 長野県埋蔵文化財センター 2012a 「濁り遺跡 久保田遺跡 西一里塚遺跡群」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書106
- 長野県埋蔵文化財センター 2013b 「柳沢遺跡」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書100
- 長野県埋蔵文化財センター 2016 「琵琶島遺跡 壺田城跡 ねごや遺跡」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書112

第7章 総括

第1節 南大原遺跡調査成果のまとめ

1 南大原遺跡調査成果の概要

昭和4年、神田禎治氏が上今井村南大原から「有紋弥生式土器」を発見したことを、藤森栄一氏が「信濃考古学会誌」に報告し（藤森1929）、南大原遺跡が世に知られるようになって、もうじき90年が経つ。その後、昭和25年・32年・54年の調査と合わせて縄文時代から古墳時代前期の遺構が確認された（註1）。縄文時代では堅穴住居跡・堅穴状遺構2棟、土坑2基、弥生時代では堅穴住居跡・堅穴状遺構が13棟、墓跡6基（礎床木棺墓3・木棺墓2・土器棺墓1）、掘立柱建物跡6棟、土坑22基、溝跡5条、古墳時代前期では方形周溝墓が1基である。これらの遺構の多くは今回の発掘調査で確認された。

縄文時代では、昭和25年の調査で諸磯a式併行（南大原式）期の堅穴住居跡と思われる遺構が確認され、今回の調査で諸磯b式併行期の堅穴状遺構を確認した。いずれも前期後半の遺構である。この他、中期前半と後期前半の土器および石器が出土している。未調査地区に縄文時代前期後半、中期前半、後期前半の集落跡が今後発見される可能性が高い。

弥生時代では、中期後半から後期前半の集落跡が確認され、その遺構の大半は弥生時代中期後半栗林式期である。鉄斧1点と鉄鍬3点が中期栗林2式新段階（SB11・12、SB14）と後期吉田式（SB13）の堅穴住居跡から出土した。弥生時代中期の鉄製品は長野県内でも数例確認されているのみであり、貴重な資料である。また、栗林2式新段階のSB04とSB11・12とSB14では炉跡以外の床面に火床と判断した焼土を検出した。特にSB14では台石、敲石、粘土塊が出土しており、床面の火床は鍛冶遺構の可能性が高い。鉄器の出土と相まって特筆すべき事例である。鍛冶遺構については後述する。

本章では、弥生時代中期後半を中心に調査成果と課題を提示する。

2 南大原遺跡における弥生時代の集落の変遷

本書では、弥生中期後半の栗林式土器について石川編年を用いて報告した（註2）。堅穴住居跡、墓跡を中心に遺構群を、以下のとおり5期に区分をした。栗林2式新段階の遺構については炭素14年代測定値が測定年代で約120年間（ $2,050 \pm 30 \sim 2,170 \pm 30$ yrBP）の時間幅があり、測定年代が大きく前半と後半に区分できること、遺構出土の土器の様相がより古いものと3式に近い様相を示すものがあると考えられることから、II期を細分し、栗林2式新段階のより古相を示すと判断したものをII a期、より新相を示すと判断したものをII bと区分した。

- I期（栗林1式～栗林2式古段階）
- II a期（栗林2式新段階前半）
- II b期（栗林2式新段階後半～栗林3式）
- III期（吉田式）
- IV期（箱清水式～古墳時代前期）

礎床木棺墓、木棺墓（SM01～SM05）は出土物が少なく、遺物から時期を判断することは難しい。し

かしながら、これらの墓跡は重複することが無く、1ヶ所にかたまっていることから、一連の遺構群ととらえられる。SM01はSB14と約2mの距離で隣接しており、上部構造を考慮すると同時期に存在することは考え難いため、SM01～05の木棺墓群はSB14と異なる時期に構築されたと考えられる。SB14は栗林2式新段階後半と判断している。礎床木棺墓が栗林1式にはすでに成立しており、吉田式に該当するものが知られないことを考慮すると、一群の礎床木棺墓は栗林1式から2式新段階の前半の間に造られたものと考えられる。土器棺墓と推定したSK174は土器の型式学的検討から栗林2式新段階～3式と判断した。

掘立柱建物跡については時期区分をすることは困難であるが、以下の想定はできる。栗林1式段階の掘立柱建物跡と考えられるのは見いだせない。堅穴住居跡との位置関係や主軸方向、出土遺物の主体が2式新段階で2式古段階がほとんどみられないことから、掘立柱建物跡の多くは栗林2式新段階に属すると考えられる。SB11・12、SB13の近くにはピット群5・ピット群6があり、この中に掘立柱建物跡の柱穴が存在する可能性がある。

上記の状況証拠から、集落の変遷を以下の通り推定した。第4章で時期幅を持たせて提示した遺構についてもより新しい段階に組み入れ、これまでに判明した遺構群の変遷を以下のように整理した(註3)。

I期(栗林1式～栗林2式古段階): 3号住居址、SB15

II a期(栗林2式新段階前半): 2号住居址、SB05、SB06、SB07、SB08、ST07、ST08、
SM01～05、SD02、(ST01～04)

II b期(栗林2式新段階後半～栗林3式): 1号住居址、SB04、SB11・12、SB14、SK174、SD02、
(SM01～05、ST01～04、ピット群5・6)

III期(吉田式): SB09、SB13、(ST07・08、ピット群5・6)

IV期(箱清水式～古墳時代前期): SD03

これによれば、南大原遺跡の集落は以下のように変遷したと想定される。

I期に集落の形成が始まり、その中心は調査区外に展開していた。II a期にはSD02(溝)の北側に住居域の中心があり、溝の南側に墓域(木棺墓、礎床木棺墓)が形成された。II b期からIII期には、SD02の南側にも居住域が広がり、土器棺墓のような異なる墓制が出現する。IV期には居住域が遺跡の北側に移行するが消滅し、墓域に特化された地区となった。

今後周辺地区の調査が進めば、段階設定の見直しや、堅穴住居跡、墓跡などの遺構群の変遷も再検討が必要になろうが、現段階で仮説として提示しておきたい。

堅穴住居跡の形状を見るとI期は方形の堅穴状遺構を1棟確認したのみで、堅穴住居跡の形状は不明である。中野市琵琶島遺跡・栗林遺跡、飯山市小泉遺跡を参考にすると、円形の堅穴住居跡が主体であると想定できる。II a～II b期は円形と方形の堅穴住居跡が併存する。III期の2棟は隅丸方形で、千曲川下流の千田遺跡でも10棟すべて方形であることを考慮すると、奥信濃地域でも善光寺平南部同様に、吉田式期に円形の堅穴住居跡がなくなることが確認できる。IV期の堅穴住居跡はないが、中野市栗林遺跡・がまん淵遺跡の事例から隅丸方形であることが想定できる。

第2節 弥生時代鍛冶遺構の可能性について

今回の調査で炉跡以外に床面に火床が認められる堅穴住居跡が確認された。SB11・12、SB14の床面の焼土である。床面の焼土の他に、粘土塊が⑤b区を中心に出土し、SB11・12、SB14でも各1点出土した。また、鍛冶関連石製工具の可能性のある台石・敲石・砥石が出土している。台石はSB04とSB14からは出

土したが、SB11・12からは出土していない。敲石と砥石はSB04とSB14とで出土しており、特にSB14に多くみられるが、SB11・12では敲石1点が出土したのみである。台石・敲石・砥石は上記の竪穴住居跡以外からも多数出土しており、特に敲石はSD02から多数出土した。また、床面の焼土は確認できないものの、SB13の床面および床面付近から台石と砥石が出土している。

粘土塊、台石、敲石、砥石が鍛冶関連遺物であるかどうか検討するために、弥生時代後期の鍛冶関連遺跡とされる兵庫県淡路市五斗長垣内遺跡との比較を行った。具体的には台石・敲石・砥石と粘土塊の比較である。

台石は平坦面を持つ大形の自然礫を用い、平坦面には顕著な敲打痕は確認されない。また、脆くなり細かなひび割れが入るもの、表面がはがれるものがみられる点が類似している。

敲石は、量と敲打痕の位置と状態が類似している。楕円礫の長軸端部に平坦な敲打面（敲打a）があるもの、側面に敲打痕（敲打b）があるもの、平坦面に敲打痕（敲打c）があるものが両遺跡で確認される。特に敲打aが明確な平坦面を形成していること、敲打a・b・cが一つの敲石に認められるものが存在することは類似点として指摘できる。また、それぞれの敲打痕の状態も類似している（註4）。

砥石はいずれの遺跡でも手持ち砥石と置き砥石が確認される。南大原遺跡の砂岩製砥石の機能面は、五斗長垣内遺跡の粗い砂粒の砂岩製砥石のそれと非常に類似する。五斗長垣内遺跡の凝灰岩の砥石には明確な線条痕が確認されるものがあるが、南大原遺跡でも、砂岩製の砥石に線条痕が確認される。

粘土塊は五斗長垣内遺跡の出土量が圧倒的に多いが、小破片に割れている状況は類似しており、南大原遺跡における粘土塊の存在は無視できない（註5）。

竪穴住居跡調査時には鍛冶遺構があるとの想定をしていなかったため、磁石を用いた床面埋土中の鍛冶割片の有無を確認する調査を行っていない。現状では状況証拠のみであるが、床面の火床が鍛冶遺構である可能性が高いと判断した。なお、円形のSB14は6本柱の上部構造が想定され、他の円形竪穴住居跡が4本柱であるのと比べ本遺跡では特異である。中央部の作業空間を広く確保するための鍛冶遺構を持つ竪穴住居跡の特徴と考えることもできる。同様にSB11・12は方形であるが6本柱で中央の作業空間を広くとるような柱の配置と理解することも可能である。

長野県の弥生時代の遺跡では、中期の金属製品の出土例はわずかであり、後期の出土例が多かった。近年の発掘調査で弥生時代の金属器の出土例が増加し、中期の金属製品も多くなってきた。中野市柳沢遺跡の銅鐸5点と銅戈8点は特筆される。銅戈・銅鐸の埋納時期は中期末～後期吉田式の間とされているが、製作時期は中期である。その他、長野県で確認されている弥生時代中期の金属製品は第17表のとおりである。後期の可能性があるものを含め10遺跡40点が確認できる。

これまで、長野県における弥生時代の鍛冶遺構の可能性を指摘した事例を知らなかったが、如とは別に床面に火床がある竪穴住居跡は、善光寺平の主要な遺跡を見ると、飯山市上野遺跡、中野市柳沢遺跡、長野市檀田遺跡、松原遺跡などで確認できる（註6）。今後千曲川流域の類似を確認し、鍛冶遺構の可能性を検討する必要がある。

市町村	遺跡名	遺構名	遺物	数量	時期
中野市	南大原遺跡	SB11・12	鉄斧	1	弥生中期
中野市	南大原遺跡	SB14	鉄鏃	1	弥生中期
中野市	柳沢遺跡	青銅器埋納坑	銅鐸	5	弥生中期後半～後期初頭
中野市	柳沢遺跡	青銅器埋納坑	銅戈	8	弥生中期後半～後期初頭
長野市	徳間遺跡		鉄片	1	弥生中期
長野市	光林寺裏山遺跡		板状鉄斧	1	弥生中期?
長野市	泰山山遺跡	SB01	板状鉄斧	1	弥生中期
佐久市	西一本郷遺跡Ⅴ	M6号溝状遺構	鏃	1	弥生中期
佐久市	西一本郷遺跡Ⅵ	M6号溝状遺構	釘?	1	弥生中期
佐久市	西一本郷遺跡Ⅹ	H11号住居跡	不明	1	弥生中期
佐久市	西一本郷遺跡Ⅹ	H43号住居跡	刀子	1	弥生中期
佐久市	西一本郷遺跡ⅩⅤ	H22号住居跡	不用品	1	弥生中期
佐久市	五里田遺跡	H1号住居跡	鉄剣	1	弥生中期
佐久市	五里田遺跡	H2号住居跡	鉄剣	1	弥生中期
佐久市	五里田遺跡	H5号住居跡	鉄剣	8	弥生中期
佐久市	社宮司遺跡	土器埋納	鉄斧	1	弥生中期?
佐久市	社宮司遺跡	土器埋納	多鈕無文鏡	1	弥生中期?
佐久市	北西の久保遺跡1次	Y14号住居跡	角釘	1	弥生中期
松本市	宮瀨本村遺跡	第39号住居跡	鉄鏃	1	弥生中期末～後期前半

第17表 長野県内の弥生時代中期の金属製品一覧

一方、県外における鉄製品の鍛冶遺構が発見された主な遺跡をあげると、福岡県須玖唐梨遺跡、赤井手遺跡、大仁手遺跡A地点、長崎県カラカミ遺跡、鳥根県平田遺跡、兵庫県五斗長垣内遺跡・本位田権現谷A遺跡、和歌山県西田井遺跡、京都府奈良岡遺跡、大阪府星ヶ丘遺跡、石川県奥原峠遺跡、愛知県南山畑遺跡などがある。大半は後期の遺構であるが、長崎県壱岐市カラカミ遺跡は中期であり注目される（宮本編2013）。また、兵庫県淡路市五斗長垣内遺跡では12棟の鍛冶工房が確認されている。

第3節 善光寺平周辺の弥生時代の遺跡

本節では、南大原遺跡を取り巻く弥生時代の遺跡について概観し、調査成果の理解の一助とした（第90図）。

善光寺平（長野盆地）から奥信濃の地域では、弥生時代前期～中期前半の時期の遺跡は少ない。中野市川久保遺跡で前期末～中期初頭の条痕文土器が1片出土しているものの、善光寺平北部から奥信濃地域では弥生中期前葉以前の遺跡はほとんど確認されていない。善光寺平南部の長野市春山B遺跡・篠ノ井遺跡群・塩崎遺跡群、千曲市屋代遺跡群・力石条里遺跡群や、山間部の高山村湯倉洞窟などで遺跡が確認されている。

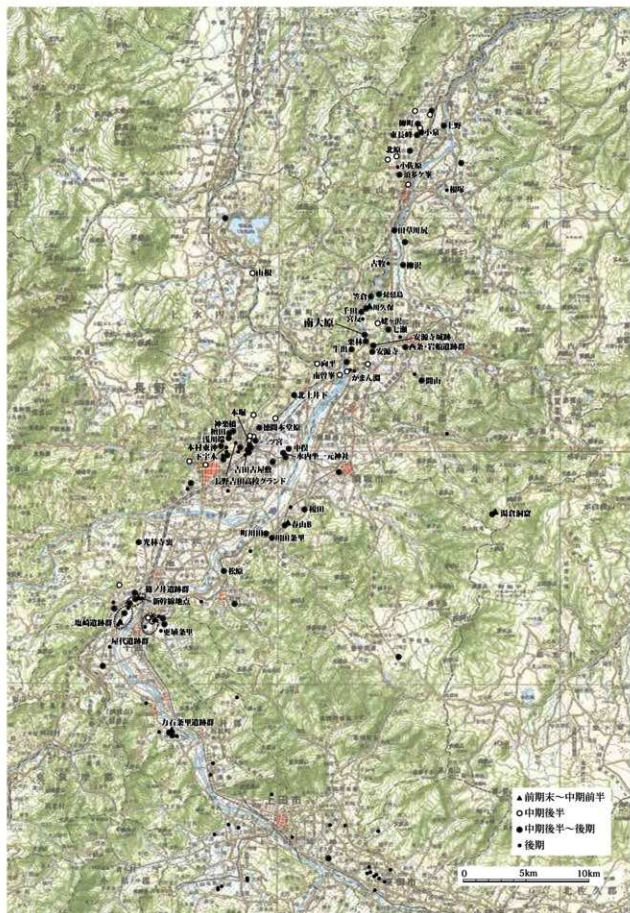
中期後半（栗林式）から後期（吉田式、箱清水式）になると千曲川の自然堤防上や千曲川の支流が形成する扇状地や、盆地縁辺部の丘陵地帯に集落跡が多数確認されるようになる（註7）。これらの遺跡はいくつかのまとまりを示しており、笹澤浩氏は、これらを遺跡群としてとらえている（笹澤2008・2009）。

千曲川下流域で中期後半（栗林式期）の主な集落遺跡をあげると、飯山市の北原遺跡（旭町遺跡群）、小泉遺跡、上野遺跡、中野市柳沢遺跡、琵琶島遺跡、向平遺跡、栗林遺跡、牛出遺跡、安源寺遺跡、姥ヶ沢遺跡、西条・岩船遺跡群、長野市中俣遺跡、浅川扇状地遺跡群（檀田遺跡・本堀遺跡・二ツ宮遺跡・本村東沖遺跡・浅川端遺跡・徳間本堂原遺跡・吉田古屋敷遺跡）、榎田遺跡、春山B遺跡、松原遺跡などの集落跡が認められる（註8）。多くの遺跡では、堅穴住居跡が検出されているが、松原遺跡、琵琶島遺跡、栗林遺跡では平地建物跡と推定される周溝などが検出されている。なお、栗林遺跡、南曾峯遺跡、北土井下遺跡では、環濠と推定される溝が確認されている（註9）。また、山間部では、信濃町山根遺跡、中野市川久保遺跡、高山村湯倉洞窟で堅穴住居跡などの居住の痕跡が確認されている。

集落遺跡では墓域が隣接しているものがあり、土坑墓、木棺墓、礫床木棺墓などが確認されている。飯山市小泉遺跡、上野遺跡、中野市柳沢遺跡、栗林遺跡、長野市松原遺跡、徳間本堂原遺跡などでは礫床木棺墓・木棺墓群がみつまっている。礫床木棺墓は長野県を中心とした中部高地に特徴的な墓制で、特に柳沢遺跡では礫床木棺墓群の中に、県内最大級の礫床木棺墓（1号礫床木棺墓）が発見された。銅戈・銅鐸が出土した青銅器埋納坑の存在と合わせて、1号礫床木棺墓の被葬者は「青銅器を埋納した集団の首長」と考えられている（長野県埋蔵文化財センター2012）。また、榎田遺跡、松原遺跡は大型鉛刃石斧の生産と広域流通に関わる遺跡として評価されている（註10）。

中野市七瀬遺跡、柳沢遺跡、川久保遺跡、長野市川田条里遺跡では弥生中期後半から後期の水田跡の存在が確認されており、当該期の千曲川流域での水田耕作の様子も徐々に明らかになりつつある。また、中野市川久保遺跡では千曲川に面した微高地の縁辺部に、完形の栗林式土器が群をなしてまとまって多数出土した特殊な遺構が発見されている（長野県埋蔵文化財センター2013）。

なお、以下の希少な遺物が出土しており、善光寺平から奥信濃の栗林式文化を研究する上で重要な資料となる。金属製品では、本遺跡や長野市春山B遺跡・光林寺裏遺跡の鉄斧がある。木製品では中野市七瀬



第90図 善光寺平周辺の弥生時代の遺跡



第91図 弥生時代中期の木製品・鉄製品・特殊な石器（縮尺不同）

遺跡、長野市川田条里遺跡、千曲市更埴条里遺跡などの農具、飯山市小泉遺跡の流水文が刻まれた板状の炭化木製品、本遺跡の器種不明の板状木製品がある。また、石戈、有孔石剣（註11）などの特殊な石製品が中野市笠倉遺跡、栗林遺跡、長野市松原遺跡などで出土している（第91図）。近年の発掘調査により、善光寺平を中心とした弥生時代中期社会の解明に必要な新資料が次々に明らかにされている。

後期では、千曲川沿いの丘陵や川岸、千曲川に流れ込む河川の扇状地上に多数の集落跡が確認されている。飯山市の田草川尻遺跡、小佐原遺跡、東長峰遺跡、中野市栗林遺跡、安源寺遺跡、七瀬遺跡、宮反遺跡、千田遺跡、川久保遺跡、古牧遺跡、西条・岩船遺跡群、間山遺跡、長野市の浅川扇状地遺跡群（榎田遺跡・二ツ宮遺跡・本村東沖遺跡・長野吉田高校グランド遺跡）、小島・柳原遺跡群（水内坐一元神社遺跡他）、神楽橋遺跡、下宇木遺跡、榎田遺跡、春山B遺跡、町川田遺跡、松原遺跡などである。

中野市がまん淵遺跡では、北陸地方に見られる斜面に環濠をもつ高地性の防衛的集落が確認され、長野市篠ノ井遺跡群、水内坐一元神社遺跡の平地の環濠集落とともに注目される。また、中野市安源寺遺跡の土坑墓群、飯山市須多ヶ峯遺跡、長野市春山B遺跡、篠ノ井遺跡群（新幹線地点）などで方形周溝墓群などの群集する墓が確認されている。一方、本遺跡から北東へ15kmの木島平村根塚遺跡では弥生後期の単独で独立した墳丘墓があり、隣接地から韓半島との関わりを示す渦巻き文様のある鉄剣が出土している。

第4節 弥生時代中期後半の南大原遺跡

善光寺平周辺では、千曲川流域を中心に、弥生時代中期後半の発掘調査資料が蓄積されてきた。近年、千曲川上流の佐久地域における発掘調査資料の蓄積も見逃せない。中期後半の栗林式土器文化圏の資料蓄積はここ数十年で質量ともに飛躍的に大きくなった。栗林式土器文化圏外における搬入品・模倣品としての栗林式土器の資料も増加してきている。栗林式土器文化を考察するに十分な資料がそろいつつある

という。ここでは、南大原遺跡周辺を俯瞰し、南大原遺跡についての雑感を述べて南大原遺跡の評価をしたい。

本遺跡は栗林式（弥生時代中期後半）の標識遺跡である栗林遺跡と千曲川旧河道を挟んで約200mの距離に対峙し、本遺跡が西岸、栗林遺跡が東岸にあたる。明治4年に千曲川の流路が変更され、現在は水田となった低地帯（旧河道）が両遺跡を隔てている。明治4年に瀬替えて変更された現在の流路は、もともと低地であったとのことである。弥生時代の千曲川の流路が現在と同じところであった可能性がある。弥生時代の千曲川の位置を検証する資料はないが、考慮しなければならない課題である。弥生時代中期に千曲川がどこを流れていたかで、栗林遺跡と南大原遺跡の関係は大きく異なる。ここでは、千曲川を挟んで南大原遺跡と栗林遺跡が対峙していたと想定し、話を進める。

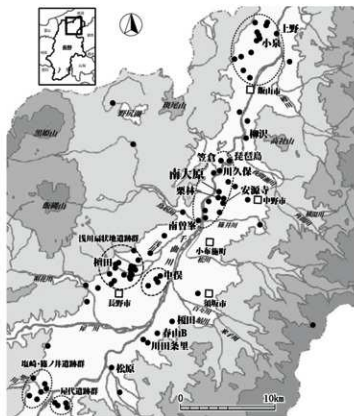
栗林遺跡は、これまで15次にわたる調査が行なわれており、40棟を超える弥生中期後半の堅穴住居跡、複数の掘立柱建物跡などの住居跡、円形周溝墓？、礎床木棺墓などの墓跡が確認されている。弥生時代後期の堅穴住居跡も見つかっており、泉史跡に指定されている。

南大原遺跡では弥生中期後半の堅穴住居跡が11棟と掘立柱建物跡、礎床木棺墓・木棺墓が5基、当地域ではあまり見られない土器墓が確認されている。調査面積はわずかであり、未発見の堅穴住居跡や墓跡も多いと推定できる。鍛冶遺構や鍛冶関連石製工具の可能性の指摘、鉄製品の出土など、特筆すべき調査成果が得られている。集落は後期前半の吉田式期までは続くことを確認している。

栗林遺跡の堅穴住居跡を概観すると、栗林1式～栗林2式新段階のものが見られるのに対し、南大原遺跡は栗林2式新段階のものが占めている。現在の資料を見る限り、両遺跡は集落の成立時期は異なる。善光寺平に集落跡が拡大していく栗林2式新段階に南大原遺跡の集落も成立しており、この集落の成立には対岸の栗林遺跡が何らかの関わりを持っていたと想定できる。

千曲川を下った西岸には、弥生中期後半の水田の存在と、舌状の微高地に焼土坑や完形土器が並べられていた土器集中が確認された川久保遺跡がある。居住域が確認されず、千曲川に臨んだ微高地に特殊な遺物出土状況を示す遺跡である。土器集中はいずれも栗林2式新段階のもので、南大原遺跡と同時期に形成された可能性が高い。その下流（北側）には有孔石剣を出土した笠倉遺跡があり、その下流には栗林1式の集落跡である琵琶島遺跡がある。これらの遺跡は千曲川西岸の約4kmの範囲に連なっており、さらに下流の東岸には大形礎床木棺墓と青銅器が見つかった柳沢遺跡がある。本遺跡と柳沢遺跡は直線距離で7km程度である。また、南大原遺跡の4kmほど上流には丘陵上の環濠集落の可能性が指摘される南曾峯遺跡があり、栗林1式～栗林2式古段階の土器が多量に出土している。千曲川流域の10kmほどの中に、それぞれ特徴的な遺跡が存在している。

千曲川の22kmほど上流の松原遺跡は300棟



第92図 南大原遺跡周辺の弥生時代中期後半の遺跡

を超える竪穴住居跡や平地式建物跡が発見され、弥生時代中期の拠点集落として知られており、榎田遺跡とともに磨製石斧の流通の拠点と位置付けられている。松原遺跡も集落規模が拡大するのは栗林2式新段階からであるとされており、南大原遺跡の集落形成とも連動した動きである可能性がある。善光寺平南部にある大集落の松原遺跡に対し、栗林・南大原遺跡を中心とした千曲川流域に連なる遺跡群といった、異なった遺跡のあり方が見えてくる。想像をたくましくすると、栗林2式新段階の時期に、南大原遺跡、栗林遺跡、川久保遺跡、笠倉遺跡などの遺跡が一体となり一つの共同体を形成しており、松原遺跡のような大集落を形成しない地域社会があったと想定したい。

そのような中で、南大原遺跡で弥生時代中期後半の鉄製品が出土し、同時期の鍛冶遺構の可能性が指摘されることは、善光寺平南部の集落遺跡の増加などの現象に、南大原遺跡を含めた共同体の鉄器加工技術の導入が関連していたと考えることができるのではないだろうか。いざさか、想像が過ぎたかもしれないが、南大原遺跡の発掘調査は、善光寺平の栗林式土器文化、特に栗林2式新段階の集落数や集落規模の拡大の要因を探るうえで、重要な発見をもたらし、今後さらに検討しなければならない課題を提供した。

第5節 今後の課題

この地域の弥生時代の遺跡を概観し、今回の調査成果を顧みて、当該地域の弥生文化を理解するために、今後行なわれる発掘調査と研究について課題を挙げて報告書の記述を終わりとしたい。

①千曲川水系における弥生時代中期後半～後期の鍛冶遺構の検証

今回の調査では鉄器加工を示す状況証拠は確認されたものの、鍛造剥片などの小鉄片の検出ができなかった。今後の調査で、鉄器加工の可能性のある竪穴住居跡では、床面直上の土壌サンプルを行ない、強力な磁力があるネオジウム磁石などを用いた小鉄片の有無の確認を行なう必要がある。

②栗林式土器文化における土器棺墓の存否について

SK174から割れた状態で出土した2個の大甕は、出土状態についての詳細な検討の結果、土器棺墓と想定した。栗林式期における合せ口の土器棺墓は長野県内では今のところ確認されていないと認識している。合せ口の土器棺墓は西日本で子供の墓であるとの見解が示されている（藤井2001他）。特に北九州と近畿地方での研究が進んでいる。今後の事例調査を含め、SK174が土器棺墓であり、栗林式土器文化に存在する墓制であるかどうかを検討する必要がある。なお、リン酸・カルシウムの分析結果からはSK174が土器棺墓であることを確認することはできなかった。ただし、SK174が土器棺墓ではないことを裏付けるものではない。今後、明らかに墓と考えられる遺構の埋土との比較をすることにより、今回の分析データの意味するところが理解できると考える。残念ながら、今回の調査では礫床木棺墓などの土壌のリン酸・カルシウム分析を行なわなかった。今後の課題である。

③打製石鏃など小型剥片石器製作廃止の実態について

I期のSB15は、黒色の安山岩の剥片が多数出土し、今回の調査で唯一小型剥片石器製作の痕跡を示す資料を確認した遺構である。II期（栗林2式）以降では、小型剥片石器の製作を示す剥片はほとんど出土せず、刃器に関わる輝石安山岩がSB14で比較的多くみられるほかは、ほとんど石器製作を示す剥片は出土していない。石鏃、削器等の小型石器の集落内での製作はII期以降ほとんど行なわれなくなった、と考えることができる。栗林式土器文化の中で消滅していく打製石器群と、鉄器の受容との相関関係を明らかにしていく必要がある。

④植物の穂状花序（花穂）を原体とした施文の実態の解明

琵琶島遺跡などの調査により、擬似縄文や刺突文がオオバコ、ハンノキなどの花序による施文であることが確認された。南大原遺跡でも花序により施文された土器が複数出土している。千曲川流域の他の遺跡でも、花序を原体とした施文が、少なくとも善光寺平の粟林式期の遺跡には一般的である可能性がみえてきた。粟林式土器およびその周辺地域の土器型式におけるこれらの原体による刺突文、擬似縄文の使用状況を調査し、穂状花序を用いた施文について時間的、空間的分布の解明が求められる。粟林式土器の系譜の理解にも有効である可能性がある。

⑤遺跡範囲について

現在の遺跡範囲は旧河道に沿って帯状に線引きされている（第2章第9図）。遺跡範囲は⑤a区北端あたりに沿って境界線が引かれているが、⑤a区北端には弥生中期後半の竪穴住居跡が検出されており、さらに北側に遺跡が広がる可能性は非常に高い。現在の千曲川と旧河道に囲まれた全域を対象とした遺跡範囲の再検討が必要であると考える。

註

- 1) 南大原式の標識資料となった昭和25年の調査資料は一部が報告されているが、全容が明らかにされていない。資料の追加報告が望まれる。
- 2) 粟林式土器編年研究を整理した寺島孝典氏は、現状では「粟林Ⅰ式・Ⅱ式」(笹澤1996)、「粟林古段階・中段階・新段階」(寺島1999)、「粟林1式・2式・3式」(石川2002・2012、馬場2008)という型式設定が存在し、粟林式土器を扱う際にどの編年を使用すればよいか判断に苦しみ、混乱が生じていることを鑑み、今後は石川編年を採用することを表明した(寺島孝典2013 p288)。合わせて、当センターが発掘調査をした中野市内の柳沢遺跡では石川編年、川久保遺跡では寺島編年、石川編年、松原遺跡の段階設定をした貫田編年(貫田2000)を併用している。これらの遺跡の調査成果との対比に混乱が無いよう、本報告書では石川編年を用いた。
- 3) 竪穴住居や木棺墓などの複数の遺構が同時に構築されることはほとんどないであろう。極論を言えば、竪穴住居跡や墓跡など遺構の数だけ変遷の段階があり、集落景観は動態的な変化をしているはずである。集落変遷の段階区分はあくまで便宜的なもので、変遷の実態とは異なることを確認しておきたい。また、1～3号住居址は昭和54年に調査された遺構で、報告された土器から時期を判断した。
- 4) 五斗長垣内遺跡の石英製敲石の中に、被熱により赤色化したものが報告されているが、赤色化は顕著ではない。南大原遺跡では赤色化した敲石が5点出土した。広範囲に赤色化しているが、敲打面は赤色化しておらず、被熱した後に敲石として用いられている。
- 5) 兵庫県五斗長垣内遺跡では多量の粘土塊が出土しており、その中に管状のものを覆った粘土塊が確認され、輪状の送風機の一部である可能性が指摘されている(伊藤2011)。
- 6) 飯山市上野Ⅳ遺跡 Y9号住居址、中野市柳沢遺跡46号住居跡、長野市榎田遺跡32① SA1・52② SA1・69① SA1・C② SA19、長野市松原遺跡(上信越道地点) SP214・SB260・SB274・SB319・SB320・SB405・SB1120・SB1143、などの事例がある。
- 7) 各遺跡の概要は第2章第7・8図、第5表参照。
- 8) 南大原遺跡の北にある遺跡では、柳沢遺跡で7km、北原遺跡で14.5km、小泉遺跡で17.2km、上野遺跡で18kmの距離にある。南大原遺跡の南にある遺跡では、中俣遺跡で11km、浅川扇状地遺跡群で13km、榎田遺跡で15km、春山B遺跡で16.4km、川田桑里遺跡で17.2km、松原遺跡で21.8kmの距離にある。
- 9) 粟林遺跡では、3つの大きな居住範囲が確認されており、その中央の集落では環濠の可能性のある溝が確認された。南曾峯遺跡、北土井下遺跡では竪穴住居跡等の居住施設は確認されていないが、多数の土器が出土しており、環濠の

可能性がある溝の存在が指摘されている（豊野町誌刊行委員会2001）。

- 10) 町田2008・2010、馬場2001・2009・2011、柴田2011などの論考がある。
- 11) 松原遺跡などで出土している2孔の石戈に対して、笠倉遺跡などの1孔のものを有孔石剣としているが、近年後者を含めて石戈とする研究がある（石川2009・2012）。

参考文献

- 青木一男 1996 「松原遺跡 弥生編」整理中間報告」[長野県埋蔵文化財センター紀要] 5 長野県埋蔵文化財センター
 淡路市教育委員会 2011 「五斗長垣内遺跡発掘調査報告」
- 石川日出志 2002 「栗林式土器の成立過程」[長野県考古学会誌] 99・100 長野県考古学会
 石川日出志 2009 「弥生文化と信濃」(10月24日長野県立歴史館における講演会資料)
 石川日出志 2012 「栗林式土器の編年・系譜と青銅器文化の受容」[中野市柳沢遺跡] 長野県埋蔵文化財センター
- 伊藤宏幸 2011 「第Ⅶ章 総括」[五斗長垣内遺跡発掘調査報告] 淡路市教育委員会
 神田五六 1951 「長野県下木内郡豊井村南大原縄文諸磯式遺跡概要」[信濃] Ⅲ・3-8
 桐原 健 1967 「南大原遺跡のV字溝」[高井] 5
 笹澤 浩 1996 「栗林式土器」[日本土器事典] 雄山閣
 笹澤 浩 2008 「信濃の弥生文化と柳沢遺跡」[北信濃 柳沢遺跡の銅戈・銅鐃] 信濃毎日新聞社
 笹澤 浩 2009 「善光寺平の弥生文化」[平成21年度秋季企画展 山を越え川に沿うー信州弥生文化の確立] 長野県立歴史館
 笹澤 浩 2012 「Ⅶ 長野盆地北部における栗林期集落遺跡の動態と柳沢遺跡」[柳沢遺跡] 長野県埋蔵文化財センター
 発掘調査報告書100
- 柴田 徹 2011 「構成石材から見た南関東地方における弥生時代の磨製石斧―千葉県佐倉市大崎台遺跡と神奈川県秦野市砂田台遺跡の磨製石斧からー」[物質文化] 9
- 寺高孝典 1999 「長野盆地南部の様相」[99 シンポジウム長野県の弥生土器編年発表要旨]
 寺高孝典 2013 「栗林式土器の成立と展開」[文化の十字路 信州]
- 豊田村教育委員会 1980 「南大原遺跡」
 豊野町誌刊行委員会 2001 「豊野町誌5 豊野町の資料」
- 長野県埋蔵文化財センター 1994 「栗林遺跡 七瀬遺跡」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書19
 長野県埋蔵文化財センター 2012 「柳沢遺跡」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書100
 長野県埋蔵文化財センター 2013 「川久保・宮沖遺跡」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書99
- 賛田 明 2000 「第1章 壺形土器の文様帯構造と変遷」[松原遺跡 弥生総論7] 長野県埋蔵文化財センター
 馬場伸一郎 2001 「南関東弥生中期の地域社会(上)(下)ー石器石材の流通と石器製作技術を中心にー」
 馬場伸一郎 2008 「弥生中期・栗林式土器編年の再構築と分布論的研究」[国立民俗博物館研究報告] 第145
 馬場伸一郎 2009a 「弥生時代長野盆地における榎田型磨製石斧の生産と流通」[駿台史学] 第120号
 馬場伸一郎 2009b 「磨製石斧の「流通」と「交易」ー栗林式土器文化の再考材料として」[中部の弥生時代研究]
 馬場伸一郎 2011 「栗林式土器分布圏の石器・石製品と弥生中期社会」[長野県考古学会誌] 138・139合併号
- 藤井 整 2001 「近畿地方の弥生土器棺墓」[古代文化] VOL.53
 藤森栄一 1929 「敦行録」[信濃考古学会誌] 第一年第三号
 町田勝則 2008 「石器に弥生の社会を読む」[「赤い土器のクニ」の考古学]
 町田勝則 2010 「中部日本」[季刊考古学 第111号 特集石器生産と流通にみる弥生文化]
 宮本一夫編 2013 「宅岐カラカミ遺跡Ⅳ」九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室
 村上恭通 2011 「弥生時代鍛冶遺構の諸問題ー鍛冶加構造を中心にー」[五斗長垣内遺跡発掘調査報告]

遺物観察表

土器観察表

土製品観察表

金属製品・木製品観察表

石器・石製品観察表

遺物観察表凡例

【土器・土製品観察表】

1. 図版番号は遺物実測図と写真に付した番号である。
2. 管理番号は同一個体と認識した土器に付し、同じ管理番号でも接合しないものは異なる図版番号を付したことがある。写真のみを掲載した遺物は()付きの数字で管理番号を付した。
3. 出土地点のPを付した数字は、遺物取り上げ番号である。方位は遺構を4分割して遺物を取り上げた遺構内の区域を示す。「/」は異なる遺構や遺構外の区切り、「・」は同じ遺構の出土地点の違いの区切りを示す。
4. 弥生時代の土器の器種、部位、調整・文様の呼称は第4章3節の分類による。外面調整・文様と内面調整の欄の矢印(→)は調整および文様の前後関係を示し、+は前後関係が判別できないことを示す。
5. 種実痕は、種実圧痕が観察されるものに○印を記した。その一部の写真を添付DVDに収録した。
6. 胎土分類は、含まれる鉱物の有無により4種類に大別し、その割合で細別した。A類：金雲母（金色の黒雲母）・黒雲母（黒色の黒雲母）・輝石・角閃石を含まない。多くは石英を含む。B類：金雲母を含み、黒雲母・輝石・角閃石を含まない。C類：黒雲母を含み輝石・角閃石を含まない。D類：輝石・角閃石を含む。いずれの土器にも白・赤・黒色の砂礫粒が含まれる。細分は下表のとおりである。

(胎土分類表)

分類	A1	A2	A3	A4	A5	A6	A7	A8	A9	A10	A11	B1	B2	B3	B4	B5	B6	B7	B8	B9	B10
砂礫(白・赤・黒色)	○	○	▲	▲	◎大粒	○	○	◎	◎	○	◎	▲	○	▲	▲ ^{大粒}	▲	▲	▲	◎	○	△
石英	△	○	○	▲	◎大粒	△	-	△	-	-	◎	○	○	△	△	◎	▲	▲	○	△	△
金雲母	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	○	△	△	△	△	△	△	△	△	△

分類	C1	C2	C3	C4	C5	C6	C7	C8	C9	C10	D1	D2	D3	D4	D5	D6	D7	D8	D9	D10	D11	D12
砂礫(白・赤・黒色)	○	○	△	△	▲	▲	◎	◎	◎	◎	○	○	○	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
石英	○	△	△	△	▲	▲	▲	▲	○	○	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲
金雲母	△	-	△	△	○	○	△	△	-	-	△	△	△	-	▲	-	△	△	-	-	-	▲
黒雲母	△	△	△	△	△	△	△	△	-	△	△	△	△	-	▲	-	△	△	-	-	-	▲
輝石・角閃石	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	▲

無し:- 微量:△ 少量:▲ 中量:○ 多量:◎

7. 焼成は以下の数字で記載した。摩耗の度合いで以下のように区分した。
 - 1：良好（摩耗度0～30%：触れると、細かい粉がわずかに手に付くか、ほとんど付かない）
 - 2：やや良好（摩耗度30～50%：触れると、手に細かい粉が付く）
 - 3：悪い（摩耗度50～100%：触れると、手に粉や粗い粒が付く）
8. 残存率は完形の表面積に対する残存する破片の面積の割合である。1～9%はすべて10%と表記した。
9. 口径、底径、器高の()内の数値は残存値、口径、底径()内の数値は推定値である。蓋は口径欄につまみ部の直径、底径欄に身部の直径を示した。
10. 色調は新版標準土色調（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）に準拠し記載した。

【石器・石製品観察表、金属製品・木製品観察表】

1. 図版番号は遺物実測図と写真に付した番号である。
2. 出土地点のSを付した数字は、遺物取り上げ番号である。
3. 器種、備考に記載した敲石の敲打痕の呼称は第4章3節の分類による。
4. 法量欄の()内の数字は残存値である。

収蔵番号	写紙 撮影 記録	写紙 番号	写紙 区名	標本 番号	出土 遺物 名(ラテン語)	内装	部位	外装 調子・文様	備考	種 別	地 域	積 層	出 土 年	測 長 (cm)	測 幅 (cm)	測 厚 (cm)	重量 (g)	内装 調子 (白黒)	外装 調子 (白黒)
昭600262	P1.1	189	①b	S812	奈良中層	襷	①襷部-⑧襷部	襷部-緋調染付文	裏料として不明	襷	近畿	Ⅱ	87	3					
昭600264	P1.1	184	①b	S812	奈良中層	襷	①襷部-⑧襷部	襷部-緋調染付文	裏料として不明	襷	近畿	Ⅱ	87	3					
昭600265	P1.1	184	①b	S812	奈良中層	襷	①襷部-⑧襷部	襷部-緋調染付文	裏料として不明	襷	近畿	Ⅱ	87	3					
昭600266	P1.1	199	①b	S812	奈良中層	襷	①襷部	襷部-緋調染付文	裏料として不明	襷	近畿	Ⅱ	87	3					
昭600267	P1.1	417	①b	S813	奈良中層	襷	①襷部	襷部-緋調染付文	裏料として不明	襷	近畿	Ⅱ	87	3					
昭600268	P1.1	417	①b	S813	奈良中層	襷	①襷部	襷部-緋調染付文	裏料として不明	襷	近畿	Ⅱ	87	3					
昭600269	P1.1	417	①b	S813	奈良中層	襷	①襷部	襷部-緋調染付文	裏料として不明	襷	近畿	Ⅱ	87	3					
昭600270	P1.1	419	①b	S813	奈良中層	襷	①襷部-⑧襷部	襷部-緋調染付文	裏料として不明	襷	近畿	Ⅱ	87	3					
昭600271	P1.1	434	①b	S813	奈良中層	襷	①襷部-⑧襷部	襷部-緋調染付文	裏料として不明	襷	近畿	Ⅱ	87	3					
昭600272	P1.1	426	①b	S813	奈良中層	襷	①襷部-⑧襷部	襷部-緋調染付文	裏料として不明	襷	近畿	Ⅱ	87	3					
昭600273	P1.1	426	①b	S813	奈良中層	襷	①襷部-⑧襷部	襷部-緋調染付文	裏料として不明	襷	近畿	Ⅱ	87	3					
昭600274	P1.1	405	①b	S813	奈良中層	襷	①襷部	襷部-緋調染付文	裏料として不明	襷	近畿	Ⅱ	87	3					
昭600275	P1.1	414	①b	S813	奈良中層	襷	①襷部	襷部-緋調染付文	裏料として不明	襷	近畿	Ⅱ	87	3					
昭600276	P1.1	189	①b	S812	奈良中層	襷	①襷部-⑧襷部	襷部-緋調染付文	裏料として不明	襷	近畿	Ⅱ	87	3					
昭600277	P1.1	423	①b	S813	奈良中層	襷	①襷部-⑧襷部	襷部-緋調染付文	裏料として不明	襷	近畿	Ⅱ	87	3					
昭600278	P1.1	423	①b	S813	奈良中層	襷	①襷部-⑧襷部	襷部-緋調染付文	裏料として不明	襷	近畿	Ⅱ	87	3					
昭600279	P1.1	409	①b	S813	奈良中層	襷	①襷部	襷部-緋調染付文	裏料として不明	襷	近畿	Ⅱ	87	3					
昭600280	P1.1	412	①b	S813	奈良中層	襷	①襷部	襷部-緋調染付文	裏料として不明	襷	近畿	Ⅱ	87	3					
昭600281	P1.1	437	①b	S813	奈良中層	襷	①襷部	襷部-緋調染付文	裏料として不明	襷	近畿	Ⅱ	87	3					
昭600282	P1.1	439	①b	S813	奈良中層	襷	①襷部	襷部-緋調染付文	裏料として不明	襷	近畿	Ⅱ	87	3					
昭600283	P1.1	437	①b	S813	奈良中層	襷	①襷部	襷部-緋調染付文	裏料として不明	襷	近畿	Ⅱ	87	3					
昭600284	P1.1	437	①b	S813	奈良中層	襷	①襷部	襷部-緋調染付文	裏料として不明	襷	近畿	Ⅱ	87	3					
昭600285	P1.1	439	①b	S813	奈良中層	襷	①襷部	襷部-緋調染付文	裏料として不明	襷	近畿	Ⅱ	87	3					
昭600286	P1.1	449	①b	S813	奈良中層	襷	①襷部	襷部-緋調染付文	裏料として不明	襷	近畿	Ⅱ	87	3					
昭600287	P1.1	439	①b	S813	奈良中層	襷	①襷部	襷部-緋調染付文	裏料として不明	襷	近畿	Ⅱ	87	3					
昭600288	P1.1	436	①b	S813	奈良中層	襷	①襷部	襷部-緋調染付文	裏料として不明	襷	近畿	Ⅱ	87	3					
昭600289	P1.1	435	①b	S813	奈良中層	襷	①襷部	襷部-緋調染付文	裏料として不明	襷	近畿	Ⅱ	87	3					
昭600290	P1.1	439	①b	S813	奈良中層	襷	①襷部	襷部-緋調染付文	裏料として不明	襷	近畿	Ⅱ	87	3					
昭600291	P1.1	427	①b	S813	奈良中層	襷	①襷部	襷部-緋調染付文	裏料として不明	襷	近畿	Ⅱ	87	3					
昭600292	P1.1	432	①b	S813	奈良中層	襷	①襷部	襷部-緋調染付文	裏料として不明	襷	近畿	Ⅱ	87	3					
昭600293	P1.1	432	①b	S813	奈良中層	襷	①襷部	襷部-緋調染付文	裏料として不明	襷	近畿	Ⅱ	87	3					
昭600294	P1.1	432	①b	S813	奈良中層	襷	①襷部	襷部-緋調染付文	裏料として不明	襷	近畿	Ⅱ	87	3					

() 内装調子は白黒写真

収容番号	学名(学名)	採集年月	採集地	採集者	標本	種別	部位	外装調剤・文様	内装調剤	備考	種地	標高	経度	緯度	内装調剤
第7180500	IV.21 707 (♂)	38.144	伊東	伊佐中野 彦	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別
第7180501	IV.21 708 (♂)	38.144	伊東	伊佐中野 彦	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別
第7180502	IV.21 709 (♂)	38.169	伊東	伊佐中野 彦	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別
第7180503	IV.22 782 (♂)	38.174	伊東	伊佐中野 彦	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別
第7205204	IV.22 783 (♂)	38.174	伊東	伊佐中野 彦	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別
第7205205	IV.23 794 (♂)	38.174	伊東	伊佐中野 彦	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別
第7205206	IV.28 607 (♂)	38.144	伊東	伊佐中野 彦	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別
第7205207	IV.28 608 (♂)	38.144	伊東	伊佐中野 彦	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別
第7205208	IV.28 609 (♂)	38.144	伊東	伊佐中野 彦	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別
第7205209	IV.28 610 (♂)	38.144	伊東	伊佐中野 彦	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別
第7205210	IV.28 611 (♂)	38.144	伊東	伊佐中野 彦	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別
第7205211	IV.28 612 (♂)	38.144	伊東	伊佐中野 彦	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別
第7205212	IV.28 613 (♂)	38.144	伊東	伊佐中野 彦	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別
第7205213	IV.28 614 (♂)	38.144	伊東	伊佐中野 彦	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別
第7205214	IV.28 615 (♂)	38.144	伊東	伊佐中野 彦	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別
第7205215	IV.28 616 (♂)	38.144	伊東	伊佐中野 彦	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別
第7205216	IV.28 617 (♂)	38.144	伊東	伊佐中野 彦	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別
第7205217	IV.28 618 (♂)	38.144	伊東	伊佐中野 彦	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別
第7205218	IV.28 619 (♂)	38.144	伊東	伊佐中野 彦	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別
第7205219	IV.28 620 (♂)	38.144	伊東	伊佐中野 彦	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別
第7205220	IV.28 621 (♂)	38.144	伊東	伊佐中野 彦	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別
第7205221	IV.28 622 (♂)	38.144	伊東	伊佐中野 彦	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別
第7205222	IV.28 623 (♂)	38.144	伊東	伊佐中野 彦	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別
第7205223	IV.28 624 (♂)	38.144	伊東	伊佐中野 彦	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別
第7205224	IV.28 625 (♂)	38.144	伊東	伊佐中野 彦	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別
第7205225	IV.28 626 (♂)	38.144	伊東	伊佐中野 彦	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別
第7205226	IV.28 627 (♂)	38.144	伊東	伊佐中野 彦	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別
第7205227	IV.28 628 (♂)	38.144	伊東	伊佐中野 彦	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別

() 内の数字は採集者 () 内の数字は標本番号

土製品観察表

図版番号	写真図版	管理番号	地区名	遺構名	出土地点 (クワッド名・層位)	時期	器種	胎土	残存	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	備考
第75図560	PL29	2001	①	SD02	IVB15Ⅲ層	弥生中期～後期	土製円板	A2	完形	3.0	3.1	0.6	
第75図561	PL29	2010	⑤b	SB14	北東	弥生中期～後期	土製円板	B10	完形	3.0	2.9	0.5	
第75図562	PL29	2016	⑤a	遺構外	IIW11Ⅲa層	弥生中期～後期	土製円板	C3	完形	3.3	3.4	0.6	
第75図563	PL29	2014	⑤a	遺構外	IIW01Ⅲa層	弥生中期～後期	土製円板	A4	欠損	2.5	(1.3)	0.5	
第75図564	PL29	2007	⑤b	SB11	北東壁	弥生中期～後期	土製円板	A4	完形	2.4	2.8	0.5	
第75図565	PL29	2006	①	SD06	P10	弥生中期	土製円板	B10	完形	4.4	4.4	0.6	
第75図566	PL29	2003	①	SD02	岸IVB10Ⅲ層	弥生中期	土製円板	A4	完形	3.6	3.9	0.7	
第75図567	PL29	2012	⑤b	SB14	北西	弥生中期～後期	土製円板	C3	欠損	(3.6)	(2.4)	0.7	
第75図568	PL29	2005	①	SD04	ヘルト内	弥生中期	土製円板	B10	完形	3.5	3.8	0.7	
第75図569	PL29	2017	⑤a	遺構外	IIW12Ⅲa層	弥生中期～後期	土製円板	A4	欠損	3.6	(2.0)	0.6	赤彩磁破片を利用
第75図570	PL29	2004	①	SD04	P20	弥生中期	土製円板	B10	完形	3.7	3.9	0.6	
第75図571	PL29	2009	⑤b	SB14	南東	弥生中期～後期	土製円板	A1	欠損	3.7	(2.2)	0.9	
第75図572	PL29	2013	⑤b	SB14	北西2層	弥生中期～後期	土製円板	A7	欠損	(2.1)	3.7	0.7	
第75図573	PL29	2015	⑤a	遺構外	IIW02	弥生中期～後期	土製円板	B3	完形	3.2	3.5	0.6	
第75図574	PL29	2002	①	SD02	IVB09Ⅲ層深	弥生中期	土製円板	C5	完形	5.9	6.6	0.9	
第75図575	PL29	2011	⑤b	SB14	北東2層	弥生中期	土製円板	C7	欠損	(5.1)	(2.3)	0.6	
第75図576	PL29	2008	⑤b	SB14	南東1層	弥生中期～後期	土製円板	C2	欠損	5.0	(2.4)	0.8	
第75図577	PL29	2020	①	SD02	IVB14Ⅲ層	弥生中期～後期	土製耳飾り	B10	完形	1.8	2.0	1.4	
第75図578	PL29	2018	①	SK25	P2	弥生中期～後期	有孔土製品	A7	完形	2.2	1.5	1.4	
第75図579	PL29	2019	⑤b	SB13	pit1	弥生中期～後期	土製勾玉	A1	欠損	2.9	1.3	0.9	
	PL29	2036	⑤a	SB08	pit6	弥生中期	土製品	B10	完形	3.0	3.7	2.3	
	PL29	2022	⑤b	SB13	北東1層	弥生中期～後期	土製品	B3	欠損	(1.9)	(1.8)	1.3	焼成前穿孔孔5つあり、結核車の可能性有り
	PL29	2021	⑤b	SB14	南東2層	弥生中期～後期	土製品	A7	欠損	(2.2)	(2.5)	(1.6)	
	口絵3	2023	①	SD07	覆土	弥生中期～後期	粘土塊	A12	1.9	1.6	1.0	種実痕?	
	口絵3	2024	⑤b	SB12	北西1層	弥生中期～後期	粘土塊	A1	4.1	3.6	2.9		
	口絵3	2025	⑤b	SB13	北東2層	弥生中期～後期	粘土塊	A1	4.8	3.7	3.2		
	口絵3	2034	⑤b	SB14	南西床	弥生中期～後期	粘土塊	A7	3.9	2.9	1.8		
	口絵3	2026	⑤b	SB15	南西2層	弥生中期～後期	粘土塊	A7	3.6	2.1	1.6		
	口絵3	2027	⑤b	SB15	南東2層	弥生中期～後期	粘土塊	A7	2.8	1.7	1.7		
	口絵3	2028	⑤b	SB15	北西2層	弥生中期～後期	粘土塊	A7	3.7	3.6	1.4	土製品か?	
	口絵3	2029	⑤b	SB15	南西	弥生中期～後期	粘土塊	A7	2.4	1.7	1.2		
	口絵3	2035	⑤b	SB15	南東	弥生中期～後期	粘土塊	A7	3.3	1.8	1.3		
	口絵3	2030	②	SD02	IVC01Ⅲ層	弥生中期～後期	粘土塊	A7	3.6	2.5	1.4		
	口絵3	2031	①	SD02	IVB10埋土	弥生中期～後期	粘土塊	A7	4.5	3.2	2.0		
	口絵3	2032	⑤b	SD03	IV105南	弥生中期～後期	粘土塊	B10	2.7	2.4	1.0		
	口絵3	2033	⑤a	遺構外	IIW12Ⅲa層	弥生中期～後期	粘土塊	B10	4.4	3.3	2.8		

()内の数値は残存値

金属製品・木製品観察表

図版番号	写真図版	管理番号	地区名	遺構名	出土地点 (クワッド名・層位)	器種	材質	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	備考
第84図81	第84図	3001	⑤a	遺構外	IIW11 弥生遺物包含層	木製品	木	(50.5)	41.0	5.0	カバ/舟風
第84図82	口絵3	3002	⑤b	SB11		鉄冷	金属	70.0	33.0	10.0	
第84図83	口絵3	3003	⑤b	SB13		鉄鏝	金属	25.0	25.0	3.0	
第84図84	第84図	3004	⑤b	SB14		鉄鏝	金属	(25.6)	(10.6)	(3.5)	
第84図85	第84図	3005	⑤b	SB13		鉄鏝	金属	(39.4)	(15.3)	(4.1)	

()内の数値は残存値

石器・石製品観察表

国統 番号	写真 図版	管理 番号	地 区	遺構名	出土地点 (9*9ドモ・層位)	部種	分類	石材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	備考
第21081	第2108	1125	⑤	SR16	S-1	砺石		砂岩	125.0	82.0	49.0	699.3	
第21082	第2108	1126	⑤	SR16	S-2	砺石		砂岩	126.0	76.5	47.0	570.2	
第76081	Pl.30	1061	⑤	SR14		打製石礫		柱状頁岩	65.6	18.5	5.8	4.6	
第76082	Pl.30	1012	①	SR07	IV2 S-8	打製石礫		黒色火山岩	36.7	21.3	4.2	2.2	石材組成は頁岩(火山岩)
第76083	Pl.30	1064	⑤	SR02	S1	打製石礫		チャート	30.8	14.2	6.5	1.7	
第76084	Pl.30	1003	⑤	遺構外	IIW-12	打製石礫		柱状頁岩	28.3	15.8	3.7	1.3	
第76085	Pl.30	1092	⑤	遺構外	IIW-12	打製石礫		チャート	24.1	15.5	3.8	1.0	
第76086	Pl.30	1013	①	SR72		打製石礫		黒色火山岩	15.3	14.4	4.4	1.1	石材組成は頁岩(火山岩)
第76087	Pl.30	1014	②	遺構外	II V09 Ⅲ層	打製石礫		黒色火山岩	18.9	15.0	3.3	0.6	石材組成は頁岩(火山岩)
第76088	Pl.30	1065	⑤	SR14		打製石礫		チャート	22.0	13.3	2.6	0.6	
第76089	Pl.30	1066	⑤	SR14		打製石礫		チャート	24.3	16.4	3.2	0.9	
第76090	Pl.30	1067	⑤	SR15	1層	打製石礫		黒色火山岩	28.4	14.4	5.7	2.1	石材組成は頁岩(火山岩)
第76091	Pl.30	1068	⑤	SR03	3層	磨製石礫		緑色片岩	33.4	21.2	2.9	2.7	
第76092	Pl.30	1069	⑤	SR13	Ⅲ層	磨製石礫		緑色片岩	45.1	17.3	2.8	2.7	
第76093	Pl.30	1011	⑤	SR14	2層	磨製石礫		頁岩	33.8	18.2	2.3	1.8	
第76094	Pl.30	1010	⑤	遺構外		磨製石礫		頁岩	26.1	17.0	2.9	1.6	
第76095	Pl.30	1015	①	SR04		石礫		黒色火山岩	36.7	14.5	8.4	3.9	石材組成は頁岩(火山岩)
第76096	Pl.30	1018	⑤	SR13	Ⅲ層	磨製石礫		チャート	43.8	24.9	18.0	21.1	
第76097	Pl.30	1016	①	SR04		磨製石礫		チャート	36.3	23.2	11.6	12.6	
第76098	Pl.30	1023	⑤	SR03		磨製石礫		チャート	28.2	23.1	12.2	7.6	
第76099	Pl.30	1027	⑤	SR10		磨製石礫		チャート	36.5	27.8	12.0	11.6	
第76100	Pl.30	1020	⑤	SR14	1層	磨製石礫		黒色火山岩	22.4	23.5	7.0	4.3	石材組成は頁岩(火山岩)
第760921	Pl.31	1178	①	SR07		磨製石礫		凝砂岩	31.1	20.8	8.3	6.7	
第77022	Pl.31	1037	⑤	SR11	S1	石礫		輝緑岩	(110.0)	69.0	43.0		
第77023	Pl.31	1038	⑤	遺構外	IV110 養生縁上面	磨製石礫		凝緑岩	(616.0)	(71.5)	(44.0)		大型磨石片
第77024	Pl.31	1036	①	遺構外	II V-21 斜面	磨製石礫		透閃石岩	86.2	44.5	20.2	131.2	
第77025	Pl.30	1028	⑤	SR13	2層 S-1	三稜石礫		頁岩	104.1	58.0	15.0	106.9	
第77026	Pl.31	1045	⑤	SR14	2層	石礫		チャート	83.3	41.8	25.1	144.9	
第77027	Pl.31	1044	⑤	SR14	S7	石礫		凝灰質頁岩	92.2	75.2	36.4	247.1	
第78028	Pl.33	1143	⑤	SR14	3層	磨製石礫		輝石火山岩	(48.0)	(35.0)	(12.0)	25.6	
第78029	Pl.33	1139	①	SR02	IVB10	磨製石礫		輝石火山岩	(31.5)	(39.0)	(8.1)	12.3	
第78030	Pl.33	1140	⑤	SR11		磨製石礫		輝石火山岩	(161.5)	(90.0)	(30.0)	298.8	
第78031	Pl.33	1141	⑤	SR14	2層	磨製石礫		輝石火山岩	(47.0)	(88.0)	(11.5)	34.0	
第78032	Pl.33	1142	⑤	SR14	3層	磨製石礫		輝石火山岩	(57.5)	(44.5)	(17.0)	45.6	
第78033	Pl.33	1143	⑤	SR10		磨製石礫		輝石火山岩	(67.0)	(50.0)	(19.5)	46.7	
第78034	Pl.32	1150	⑤	SR14	S8	刀部		輝石火山岩	(106.0)	(144.0)	(31.0)	448.3	
第78035	Pl.32	1161	⑤	SR14	3層	刀部		輝石火山岩	(92.0)	(78.0)	(27.5)	355.0	
第78036	Pl.32	1162	①	SR02	IVB-10 Ⅲ層	刀部		輝石火山岩	(111.0)	(91.0)	(22.0)	259.8	
第78037	Pl.32	1163	⑤	SR10		刀部		輝石火山岩	(95.5)	(61.0)	(31.0)	206.5	
第78038	Pl.32	1149	⑤	SR13		刀部		片麻岩	(117.0)	(88.0)	(11.5)	112.9	
第79029	Pl.32	1146	②	SR05	S-2/S-7	刀部		輝石火山岩	(267.0)	(117.0)	(33.5)	810.3	第79040と接合
第79040	Pl.32	1146	②	SR05	S-1	刀部		輝石火山岩	(320.0)	(144.0)	(47.0)	1281.5	第79039と接合
第79041	Pl.32	1152	⑤	SR14	S-10/3層・トレンチ	刀部		輝石火山岩	(251.0)	(179.0)	(30.0)	1106.9	第79043と接合
第79042	Pl.32	1156	⑤	SR14	9/1下段・3層	刀部		輝石火山岩	(188.0)	(93.0)	(18.0)	267.2	接合した個体
第79043	Pl.32	1152	⑤	SR14	3層	刀部		輝石火山岩	(57.0)	(88.0)	(16.5)	118.0	第79041と接合
第80044	Pl.32	1064	⑤	SR14	2層	砥石		砂岩	(43.1)	(57.4)	9.3	27.9	
第80045	Pl.32	1077	⑤	SR13	2層	砥石		砂岩	94.0	36.0	16.2	134.2	
第80046	Pl.32	1060	②	SR05	S-4	砥石		砂岩	72.8	64.2	26.1	101.6	
第80047	Pl.32	1063	⑤	SR14		砥石		砂岩	(47.9)	(67.0)	14.5	47.8	
第80049	Pl.32	1186	①	SR25	S-1	砥石		砂岩	111.5	48.0	21.0	139.2	
第80049	Pl.32	1082	⑤	SR14	2層	砥石		砂岩	74.5	23.0	13.0	38.2	
第80050	Pl.32	1065	①	SR02	S-33	砥石		砂岩	(72.8)	(50.0)	14.6	49.3	
第80051	Pl.32	1067	⑤	遺構外	II V06 Ⅲa層	砥石		砂岩	(92.8)	(83.2)	12.9	117.7	
第80052	Pl.32	1068	⑤	遺構外	II V11 Ⅲa層	砥石		凝緑岩	(66.9)	(27.5)	(24.9)	56.9	
第81053	Pl.33	1129	⑤	遺構外	II V06 Ⅲa層	部石		火山岩	97.0	75.0	49.0	404.8	
第81054	Pl.33	1129	⑤	SR05	S-9 床下	部石		輝石火山岩	(100.0)	(71.3)	50.0	457.5	
第81055	Pl.33	1124	②	SR05	S08	部石		輝石火山岩	(106.0)	99.0	37.5	429.2	
第81056	Pl.33	1128	①	SR02	IVB10 Ⅲ層	部石		輝石火山岩	54.5	42.5	22.0	59.7	
第81057	Pl.33	1189	①	SR07	S01	部石		火山岩	(88.0)	(59.5)	(56.5)	261.2	
第81058	Pl.33	1079	⑤	SR14	S11	部石	敲打部a	砂岩	128.5	51.0	30.0	215.9	
第81059	Pl.33	1090	⑤	SR14	S21	部石	敲打部a+b	頁岩	107.5	42.5	37.0	175.3	
第81060	Pl.33	1090	⑤	SR15	Nc2	部石	敲打部d	無脈晶質火山岩	80.0	48.0	34.5	122.1	
第81061	Pl.33	1103	①	SR02	IVB10 Ⅲ層	部石	敲打部d	チャート	52.0	82.0	41.0	339.2	
第81062	Pl.33	1102	②	SR02	S-35	部石	敲打部a	砂岩	140.0	66.0	80.0	531.1	
第81063	Pl.33	1098	①	SR02	S-19	部石	敲打部a+b+c	砂岩	141.0	70.0	43.0	607.8	
第81064	Pl.33	1076	⑤	SR12	1層	部石	敲打部c	砂岩	150.0	63.5	39.0	446.0	
第81065	Pl.33	1083	⑤	SR14	2層	部石	敲打部a+b+c	頁岩	121.0	60.0	24.2	234.5	
第81066	Pl.33	1118	①	遺構外	IV09 Ⅲ層	部石	敲打部a	凝緑岩	102.5	68.0	48.5	468.0	広範囲に赤褐色化(焼)
第81067	Pl.33	1099	①	SR02	S-22	部石	敲打部a+b+c	輝緑岩	(104.0)	66.0	33.0	224.2	
第81068	Pl.33	1086	⑤	SR14	3層	部石	敲打部c	砂岩	(76.0)	56.0	38.0	228.9	
第82069	Pl.34	1138	②	SR05	S-10	石礫		火山岩	377.0	(220.0)	110.0	1090.0	
第82070	Pl.34	1134	⑤	SR14	S-18	石礫		火山岩	(192.5)	(198.0)	(163.0)	476.0	
第82071	Pl.34	1130	⑤	SR04	S-4	石礫		火山岩	236.0	185.0	35.0	249.0	
第82072	Pl.34	1132	⑤	SR14	S-2	石礫		輝石火山岩	(256.0)	(232.0)	86.0	460.0	
第82073	Pl.34	1131	①	SR04	S-8	石礫		火山岩	318.0	208.0	138.5	1320.0	
第82074	Pl.34	1069	⑤	SR14	9/1 S1	砥石		火山岩	251.0	166.0	125.0	660.0	

遺物観察表

国史 番号	写真 番号	管理 区域	地 区	遺構名	出土地点 (P/Pa)名・層位	器種	分類	石材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	備考
昭3-30875	PL.34	1070	⑤b	S17	S14	磁石		安山岩	274.0	143.0	116.0	3200.0	
昭3-30876	PL.31	1191	①	S107	S05	有孔石製品		軽石	70.0	60.0	43.5	38.5	
昭3-30877	PL.31	1175	①	SD02		有孔石製品		軽石	52.0	50.0	28.0	20.8	
昭3-30878		1192	⑤a	遺構外	II W-12 包含層	絞紋器		絞紋器	22.2	20.2	5.2	3.0	
昭3-30879	PL.30	1176	⑤b	S14		石製品		ヒスイ	22.2	9.1	9.9	3.2	
昭3-30880	PL.30	1177	①	SD02	IV B10	石製品		緑色岩	34.0	18.4	5.1	5.1	
	PL.30	1029	⑤b	S11	1層	打製石斧		頁岩	56.8	44.7	12.0	31.4	
	PL.30	1030	⑤b	S11	2層	打製石斧		頁岩	71.7	32.0	16.7	36.7	
	PL.30	1031	⑤	遺構外		打製石斧		頁岩	31.0	40.3	11.3	16.0	
	PL.31	1039	⑤b	S14	3層	磨製石斧破片		輝緑岩	27.7	18.6	7.7	4.1	大型地刃石斧破片
	PL.31	1040	⑤b	S14	3層	磨製石斧破片		輝緑岩	15.2	14.1	4.5	1.0	大型地刃石斧破片
	PL.31	1041	⑤b	S15		磨製石斧破片		輝緑岩	15.3	15.4	4.2	1.1	大型地刃石斧破片
	PL.31	1042	⑤b	S15		磨製石斧破片		輝緑岩	25.1	26.9	7.0	4.2	大型地刃石斧破片
	PL.31	1043	⑤a	遺構外	II W12 包含層	磨製石斧破片		輝緑岩	23.0	17.0	4.9	1.9	大型地刃石斧破片
	PL.31	1047	①	S107	S03	軽石		軽石	95.4	81.1	39.6	87.4	
	PL.31	1048	⑤b	S11	2層	軽石		軽石	34.6	28.1	21.2	5.4	
	PL.31	1049	⑤b	S11		軽石		軽石	60.0	58.6	25.6	25.0	
	PL.31	1051	⑤b	S14	2層	軽石		軽石	44.5	34.8	27.5	11.8	
	PL.31	1053	⑤b	S15	2層	軽石		軽石	46.8	38.9	17.2	6.6	
	PL.31	1054	⑤b	SD03	2層	軽石		軽石	45.1	46.0	31.1	18.6	
	PL.31	1055	⑤b	SD03		軽石		軽石	42.8	30.8	25.5	11.6	
	PL.32	1144	⑤a	遺構外	II W06 遺物包含層	瑠璃石		輝石安山岩	64.5	60.5	25.0	54.8	
	PL.33	1072	⑤a	遺構外	II W06 遺物包含層	瑠璃石		輝石安山岩	127.0	111.0	23.0	621.6	
	PL.33	1078	⑤b	S14	96	礫石	敲打皿a	ひん岩	140.0	78.0	49.0	635.1	広範囲に赤褐色化(弱)
	PL.33	1081	⑤b	S14	97 P1	礫石	敲打皿a	安山岩	113.0	72.0	49.0	498.0	広範囲に赤褐色化(弱)
	PL.33	1084	⑤b	S14	2層	礫石	敲打皿a	砂岩	89.0	57.0	31.5	241.7	
	PL.33	1092	①	SD02	S-4	礫石	敲打皿a・b	ひん岩	154.5	102.0	63.0	662.0	黒色付着物
	PL.33	1121	⑤b	遺構外	IV C24 縄文面検出部	瑠璃石		輝石安山岩	93.5	72.5	57.5	512.2	一部暗赤褐色に変色
	PL.33	1137	⑤b	S13	1層	台石		輝石安山岩	107.0	68.0	37.0	264.6	
		1017	⑤a	S108		椀形石器		黒色安山岩	33.0	30.0	7.2	8.0	石研成または頁岩(安山岩)
		1019	⑤b	S14	2層	椀形石器		チャート	45.5	27.0	11.5	18.9	
		1021	⑤b	S15	2層	椀形石器		黒色安山岩	35.1	22.8	15.1	9.4	石研成または頁岩(安山岩)
		1021	⑤b	S15	2層	椀形石器		黒色安山岩	12.8	9.7	3.7	0.4	石研成または頁岩(安山岩)
		1022	⑤b	S15	2層	椀形石器		凝灰質頁岩	22.0	21.6	4.9	2.9	
		1023	①	SD02	IV B10 3層	椀形石器		不明	35.6	36.2	17.2	23.3	
		1024	①	SD02	IV B15 3層	椀形石器		石英	38.1	15.2	12.1	8.6	
		1026	⑤b	SD03		椀形石器		黒色安山岩	30.8	24.8	14.1	16.1	石研成または頁岩(安山岩)
		1147	⑤	S105	S-2	刀部		輝石安山岩	100.0	72.5	25.5	165.6	
		1148	⑤b	S109	Pc/S1	刀部		輝石安山岩	170.0	62.0	21.5	276.4	
		1151	⑤b	S14		刀部		輝石安山岩	143.0	78.0	49.0	483.3	
		1153	⑤b	S14	1層	刀部		輝石安山岩	126.9	120.7	10.9	9.0	
		1154	⑤b	S14	2層	刀部		輝石安山岩	64.5	49.1	10.6	31.5	
		1155	⑤b	S14	2層	刀部		輝石安山岩	95.9	74.0	33.0	196.9	
		1157	⑤b	S14	2層・3層・97下段埋上	刀部		輝石安山岩	225.0	163.0	23.0	706.1	接合した個体
		1158	⑤b	S14	3層・97上段	刀部		輝石安山岩	62.0	45.0	18.0	32.8	接合した個体
		1159	⑤b	S14		刀部		輝石安山岩	59.5	35.0	22.0	35.7	
		1160	⑤b	S14	3層	刀部		輝石安山岩	109.0	114.0	28.0	320.2	
		1172	⑤b	S14		刀部		輝石安山岩	71.0	53.0	26.5	118.4	調整加工あり
		1182	⑤	SD02	IV B11	刀部		輝石安山岩	71.0	57.0	14.8	55.0	
		1164	⑤a	遺構外	II W6 遺物包含層	刀部		輝石安山岩	110.0	68.0	16.0	113.6	
		1181	①	遺構外	IV B02 IV層検出面	刀部		輝石安山岩	90.0	73.0	20.2	144.4	
		1183	②	遺構外	II V・9層	刀部		輝石安山岩	159.0	69.0	29.0	282.4	
		1035	①	遺構外	IV B02 II層下部	u.FI		黒曜石	22.9	16.6	2.9	0.7	
		1165	⑤	S105	S-5	re.FI		輝石安山岩	63.5	111.0	13.5	89.2	
		1166	⑤	S105	S-6	re.FI		輝石安山岩	76.0	79.0	13.5	82.1	
		1169	⑤b	S12	2層	re.FI		輝石安山岩	27.5	36.0	18.0	51.1	
		1032	⑤b	S14		re.FI		黒色安山岩	38.0	22.7	4.0	4.3	石研成または頁岩(安山岩)
		1167	⑤b	S14	97S3	re.FI		輝石安山岩	100.0	65.0	28.0	240.9	
		1168	⑤b	S14	2層	re.FI		輝石安山岩	63.0	72.0	25.0	168.3	
		1033	⑤b	S15	2層	re.FI		黒色安山岩	29.2	18.0	6.0	2.8	石研成または頁岩(安山岩)
		1034	⑤b	遺構外	IV 1 06 粘土面	re.FI		黒色安山岩	33.4	25.6	10.7	8.7	石研成または頁岩(安山岩)
		1034	⑤b	遺構外	IV 1 06 粘土面	re.FI		黒色安山岩	15.5	8.3	3.2	0.4	石研成または頁岩(安山岩)
		1034	⑤b	遺構外	IV 1 06 粘土面	re.FI		黒色安山岩	10.7	8.1	1.0	0.1	石研成または頁岩(安山岩)
		1170	①	遺構外	II V21(前面)土器集	re.FI		輝石安山岩	90.0	61.0	41.0	228.9	
		1171	①	遺構外	IV B10 3層 深埋	re.FI		輝石安山岩	66.0	36.0	15.0	29.6	
		1071	①	SD02	IV B10 P-92	磁石		チャート	83.0	65.0	34.0	207.0	
		1179	①	S107	Pv1	石楯		無垢黒管安山岩	40.0	27.2	14.7	18.3	
		1045	⑤b	S14	2層	チャート		チャート	16.4	9.3	5.8	0.7	
		1046	⑤b	SD02	II W22	石楯		チャート	23.9	26.5	22.0	12.9	
		1180	①	遺構外	IV B03 II層下	石楯		チャート	30.5	32.5	26.2	34.5	
		1074	①	SD04	S-7	磁石		砂岩	60.7	31.9	10.4	34.9	表面が平滑で、側面に研ぎによると考えられる窪みがあるため、磁石と判断した。凝灰岩であり自然産の可能性もある

国史番号	写真国史	管理番号	地区	遺構名	出土地点 (P99が名・層位)	器種	分類	石材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	備考
		1184	①	SD07		磁石		輝石安山岩	(130.5)	(102.0)	71.5	125.6	
		1185	①	SD07		磁石?		砂岩	(56.8)	(35.2)	19.8	23.9	
		1061	⑤b	SR14	P67	磁石		砂岩	(37.9)	(18.9)	11.6	19.2	
		1062	⑤b	SR14	2層	磁石		砂岩	(55.8)	(37.4)	14.8	37.5	
		1066	⑤b	SD02		磁石		砂岩	(80.8)	(51.4)	(24.9)	87.9	
		1187	⑤	遺構外	IVB17 IIIa層 南壁	磁石?		輝石安山岩	80.4	45.0	22.7	105.1	
		1122	①	遺構外	IVB02 IV層 絨出面	磨石		安山岩	82.0	62.5	41.0	258.4	
		1123	①	遺構外		磨石		安山岩	(144.0)	(82.5)	(55.5)	735.3	
		1127	①	SD02	S-26	凹石		砂岩	144.0	106.5	69.0	1136.1	
		1073	①	SR04	S-3	磁石	敲打痕c	砂岩	87.0	74.5	31.0	226.1	
		1188	①	SD07	P16 S09	磁石	敲打痕b	不明	136.0	61.0	40.0	396.9	
		1075	⑤a	S308	P12	磁石	敲打痕a	安山岩	62.5	53.5	24.5	130.9	
		1085	⑤b	SR14	3層	磁石	敲打痕a	砂岩	186.0	50.0	53.0	682.8	
		1067	⑤b	SR14		磁石	敲打痕d?	チャート	(66.2)	50.0	25.5	84.2	
		1088	⑤b	SR14	B1下段	磁石	敲打痕d?	チャート	44.5	37.0	19.0	29.7	
		1089	⑤b	SR15	上部 IV105 S-1	磁石	敲打痕a?	頁岩	(118.5)	51.0	28.5	136.1	
		1110	⑤	SK91	IVA 08	磁石	敲打痕b+c	不明	137.0	48.5	45.0	362.7	
		1091	①	SD02	S-1	磁石	敲打痕a+b	不明	173.5	121.5	94.0	2300.0	黒色付着物
		1093	①	SD02	S-5	磁石	敲打痕b	砂岩	(120.0)	78.0	25.0	375.2	
		1094	①	SD02	S-10	磁石	敲打痕a	砂岩	(101.5)	(61.0)	28.0	228.7	広範囲に非焼色化(黄)
		1095	①	SD02	S-15	磁石	敲打痕b	不明	148.5	98.0	50.0	696.5	
		1096	①	SD02	S-17	磁石	敲打痕b?	安山岩	(101.0)	(50.0)	(31.5)	161.9	S-20と同一個体と確定されるが接合しない。
		1096	①	SD02	S-20	磁石	敲打痕b?	安山岩	(111.0)	(29.0)	(24.0)	108.5	S-17と同一個体と確定されるが接合しない。
		1097	①	SD02	S-18	磁石	敲打痕a	頁岩	64.0	(58.0)	33.0	146.6	
		1100	①	SD02	S-27	磁石	敲打痕a	安山岩	61.5	55.0	11.0	47.3	
		1101	①	SD02	S-31	磁石	敲打痕a	安山岩	109.0	68.0	64.0	576.6	
		1104	①	SD02	IVB10 III層	磁石	敲打痕a	砂岩	129.0	48.0	31.0	245.8	
		1105	①	SD02	IVB10 III層	磁石	敲打痕b?	花崗岩	89.0	(63.0)	(44.5)	337.0	
		1106	①	SD02	IVB10 III層 岸	磁石	敲打痕d	チャート	102.0	72.5	(57.0)	636.7	
		1107	①	SD02	IVB14 III層 深掘	磁石	敲打痕d?	不明	(135.5)	(87.5)	(73.0)	882.9	広範囲に非焼色化(黄)
		1108	⑤b	SD03	折曲部 2層	磁石	敲打痕d	チャート	(51.5)	(39.0)	32.5	68.0	
		1109	⑤b	SD03	折曲部南側	磁石	敲打痕b	砂岩	142.5	60.0	42.0	493.8	
		1111	⑤a	遺構外	II W17 S1	磁石	敲打痕a+c	安山岩	130.0	55.0	47.0	485.2	
		1112	⑤a	遺構外	II W06 包含層	磁石	敲打痕a	頁岩	107.0	45.5	29.0	187.4	
		1113	⑤a	遺構外	II W06 包含層	磁石	敲打痕a	不明	184.0	81.0	47.0	899.8	
		1114	⑤a	遺構外	II W11 遺物包含層	磁石	敲打痕b+c	砂岩	177.0	100.0	(30.5)	623.1	
		1115	①	遺構外	IVB02 II層下部	磁石	敲打痕a	不明	75.0	31.5	12.0	39.9	
		1116	①	遺構外	IVB09 III層(深掘)	磁石	敲打痕a	不明	(122.0)	(67.0)	29.0	294.6	
		1117	①	遺構外	IVB09 III層(深掘)	磁石	敲打痕a	頁岩	87.0	40.5	29.0	107.8	
		1119	①	遺構外	IVB09 III層 深掘	磁石	敲打痕a	チャート	104.0	58.0	54.0	395.0	
		1123	⑤b	SR14	S-16	分石		輝石安山岩	(145.0)	(107.0)	110.5	1900.0	
		1135	①	遺構外	IVB03 III層	分石		輝石安山岩	(129.0)	(65.0)	(70.0)	500.0	
		1136	①	遺構外	II W11 IIIb層	分石		輝石安山岩	(127.0)	(85.0)	75.0	1100.0	
		1058	①	SD02	IVB15 III層	みがき石		不明	32.4	20.4	16.1	14.3	
		1059	①	遺構外	II I区 表土	みがき石		硬砂岩	59.3	34.4	24.8	66.1	
		1050	⑤b	SR12	砂	軽石			22.4	19.9	14.2	1.8	
		1052	⑤b	SR15	2層	軽石			22.2	21.9	11.7	2.0	
		1056	⑤b	遺構外	IV 105 養生絨出面	軽石			21.9	19.6	12.3	1.5	
		1057	⑤a	遺構外	II W-17 包含層	軽石			27.5	26.0	15.3	3.4	
		1190	③	遺構外	IVB16 カタラン	軽石			50.5	31.9	26.9	11.3	
		1173	①	SR04	P22内	ヒスイ製片		ヒスイ	12.0	8.2	7.5	1.1	土器調査第54図-11の土器の中から出土

()内の数値は残存数

写真図版





調査区遠景



基本土層 (㊦a区 TR4)



基本土層 (㊦a区 TR1)



SB04



SB04 台石出土状況



SB05



SB06



SB07



SB08



SB09



SB11・SB12



SB11・12 鉄斧と炉跡



SB11・12 遺物出土状況



SB13



SB13 焼土 (炉跡)



SB14



SB14 炉跡遺物出土状況



SB15



SB16



SD02 下層遺物出土状況 (①区)



SD02 下層遺物出土状況



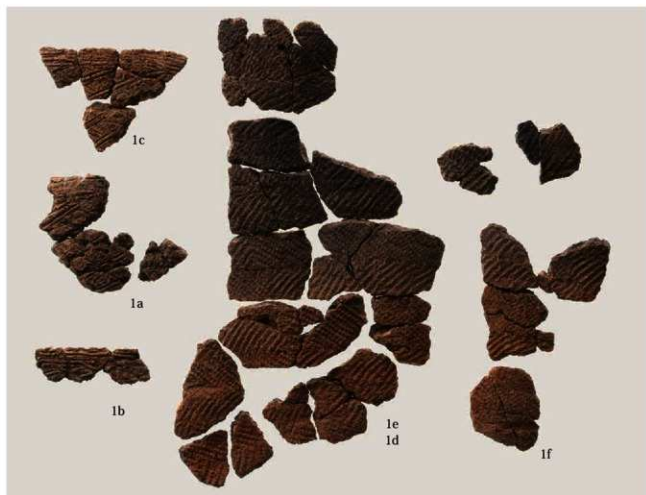
SD02 下層遺物出土状況



SD02 上層遺物出土状況



SD02 土層断面 (⑤ a区)



SB16 出土土器 (S 号 1/3)

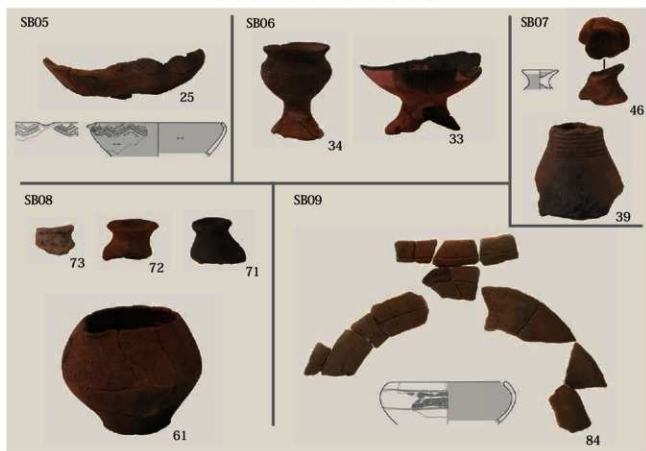


遺構外出土土器 (S 号 1/3)

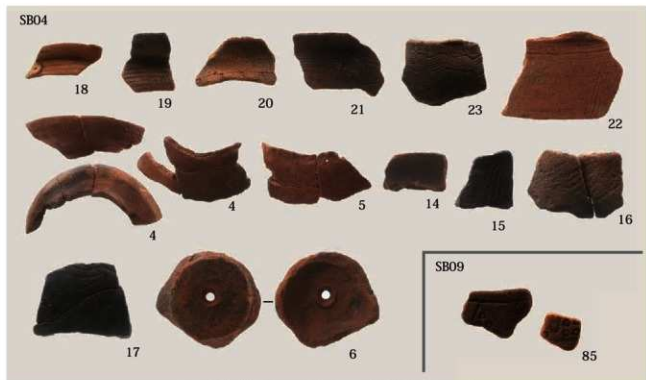
※ () 内の数字は遺物管理番号



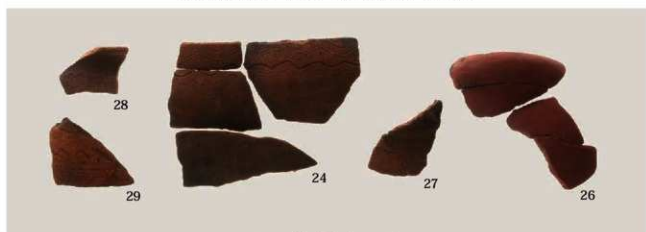
SB04 出土土器 (S 与 1/4) (実測図 1/6)



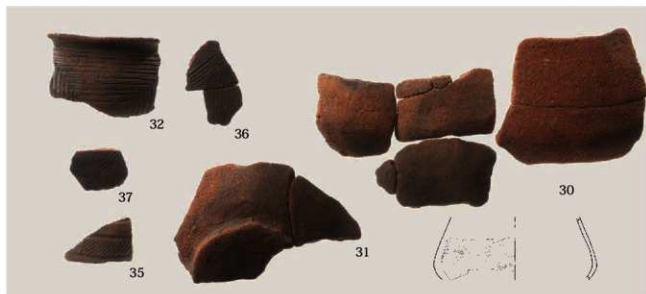
SB05・SB06・SB07・SB08・SB09 出土土器 (S 与 1/4)



SB04 出土土器 (S 与 1/3)・SB09 出土土器 (S 与 1/2)



SB05 出土土器 (S 与 1/3)



SB06 出土土器 (S 与 1/3)



SB07 出土土器 (S 与 1/3)



SB08 出土土器 (S 与 1/3)



SB08 出土土器 (S 与 1/3)



86



90



92



87



88

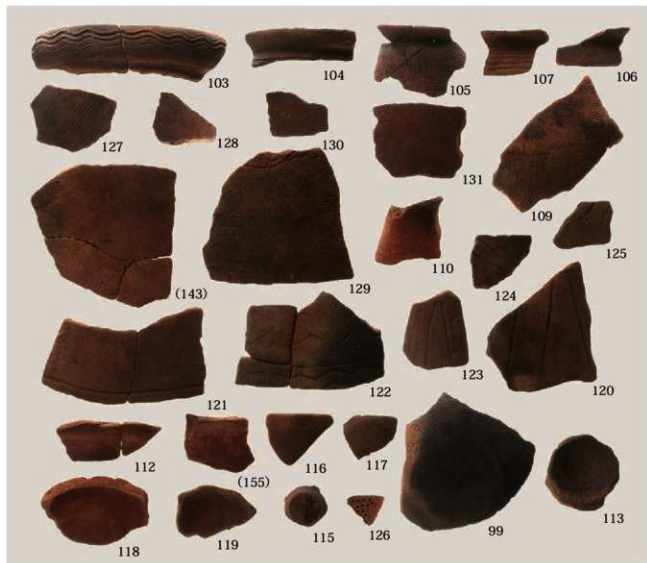


95



89



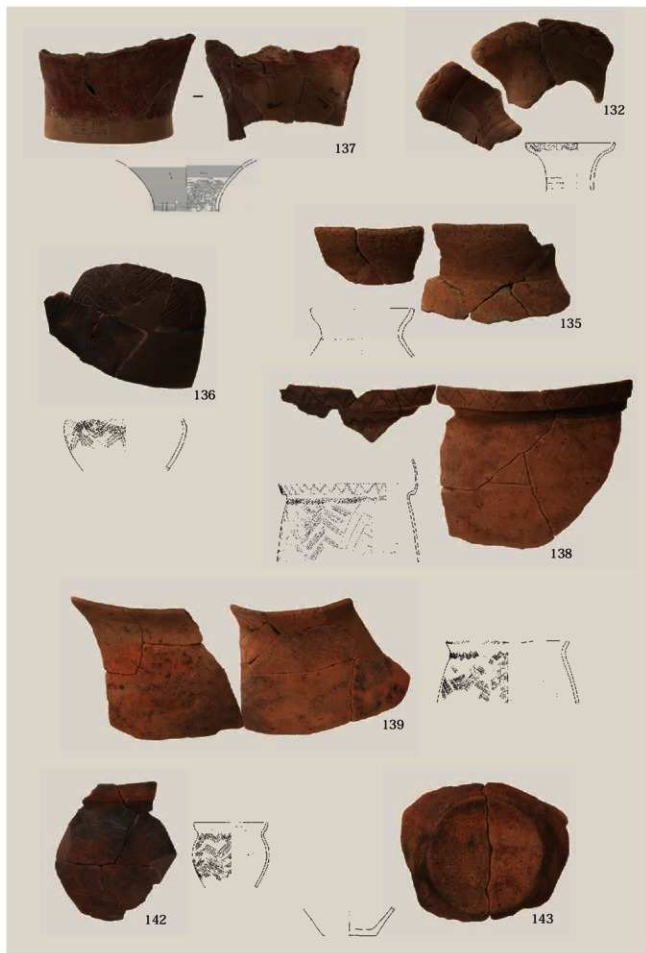


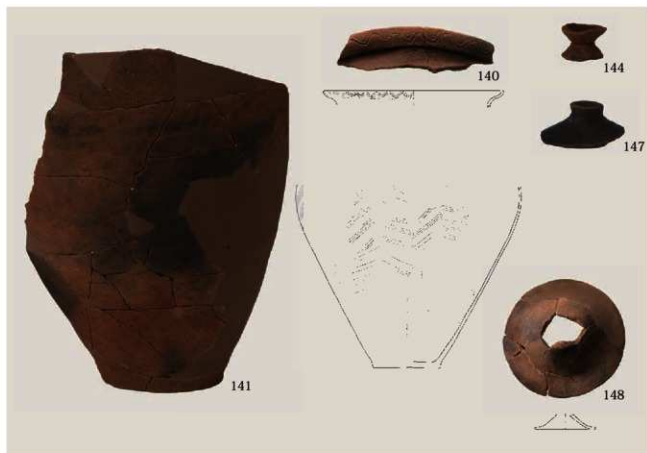
SB11 出土土器 (S ㉮ 1/3)



SB12 出土土器 (S ㉮ 1/3)

※ () 内の数字は遺物管理番号





SB12 出土土器 (S 与 1/4)



SB13 出土土器 (S 与 1/4)

※ () 内の数字は遺物管理番号



SB13 出土土器 (S ≒ 1/3)



SB14 出土土器 (壺形土器他) (S ≒ 1/3)

※ () 内の数字は遺物管理番号

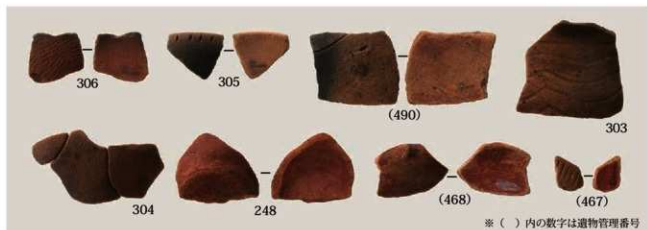


SB14 出土土器 (S ≒ 1/4)





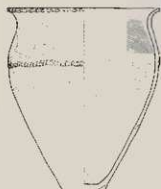
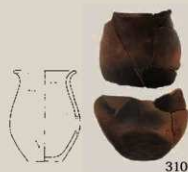
SB14 出土土器 (S ㉮ 1/3)



SB14 出土土器 (S ㉮ 1/3)

※ () 内の数字は遺物管理番号

SB15



ST04



(※ 365 は S 与 1/3)



(※ 314、315 は S 与 1/2、他は S 与 1/4)

SB15、ST04 出土土器 (S 与 1/2、1/3、1/4、実測図 S=1/6)



SB15 出土土器 (S ㉮ 1/3)

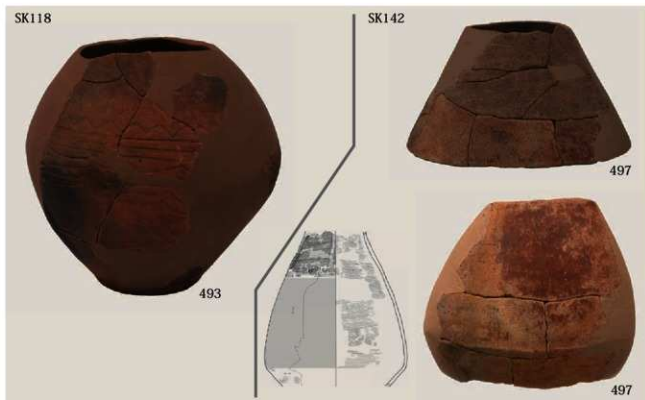


SB15 出土土器 (S ㉮ 1/3)

※ () 内の数字は遺物管理番号



SK26・SK32・SK34・SK58・SK89・SK91・SK112・SK169 出土土器 (S ≒ 1/4)



SK118・SK142 出土土器 (S ㊦ 1/4)



SK174 出土土器 (S ㊦ 1/5)



土坑（遺構記号SK）出土土器（S ㉮ 1/3）



※（ ）内の数字は遺物管理番号

SD03 出土土器（S ㉮ 1/3）

SD02 上層



448



449



450



451



370

SD02 下層



375



376



377

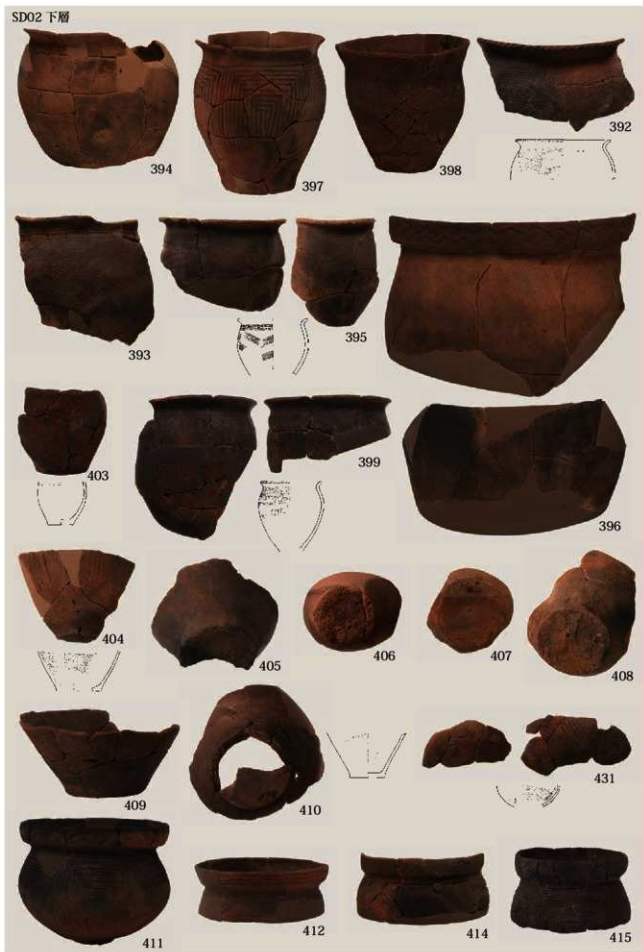
SD02 出土土器 (S ≈ 1/4)

SD02 下層



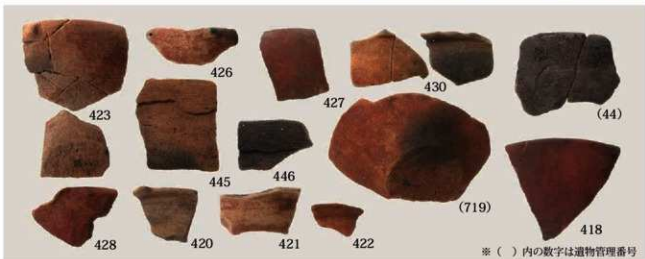
SD02 出土土器 (S ≒ 1/4)

SD02 下層



SD02 出土土器 (S ≈ 1/4)

SD02 下層



※ () 内の数字は遺物管理番号

SD02 下層

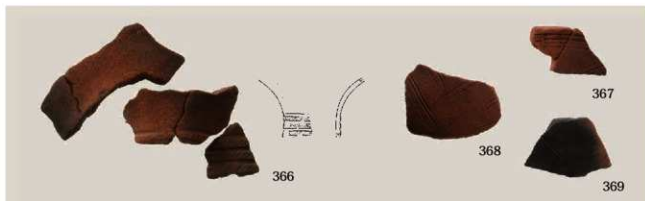


SD02 出土土器 (S ≒ 1/4)



※ () 内の数字は遺物管理番号

遺構外出土土器 (S ≒ 1/4)



SD01 出土土器 (S 与 1/3)

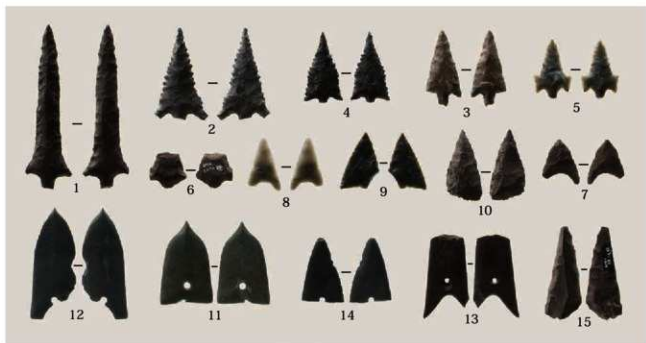


※ () 内の数字は遺物管理番号

土製品・ミニチュア土器 (S 与 1/2)



石製品 (S 与 1/1)



石鏃・石錐 (S 与 2/3)



楔形石器 (S 与 2/3)



三脚石器・打製石斧 (S 与 2/3)

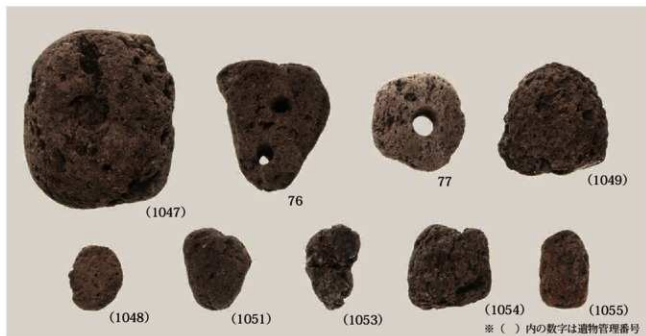
※ () 内の数字は遺物管理番号



石槎 (S 与 1/2)

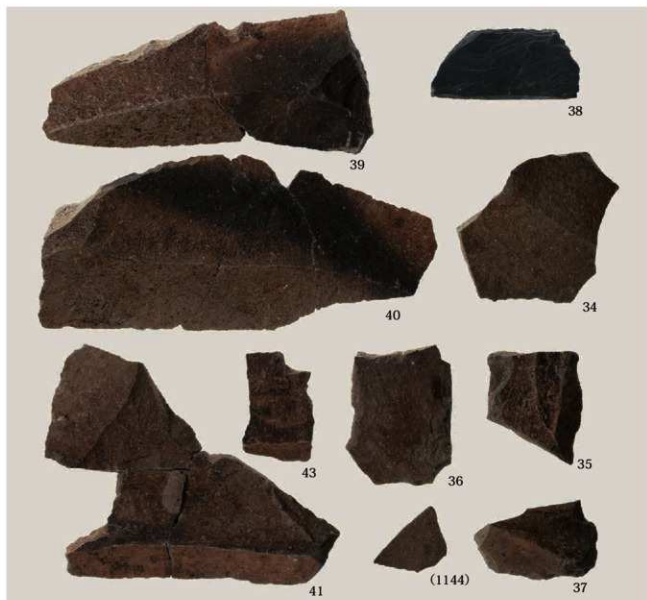


磨製石斧 (S 与 1/2)

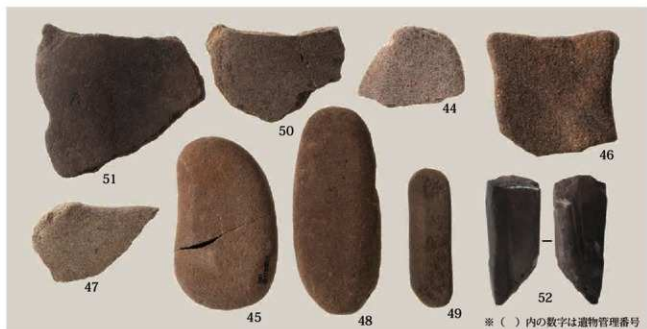


軽石・有孔石製品 (S 与 1/2)

※ () 内の数字は遺物管理番号

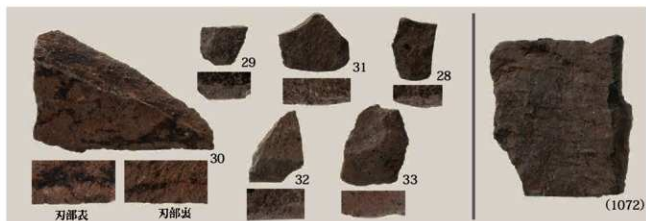


刃器 (S 与 1/3)



砥石 (S 与 1/2)

* () 内の数字は遺物管理番号



擦切り具・原石 (S ≒ 1/3) (擦切り具刃部拡大はS ≒ 3/4)



蔽石・凹石 (S ≒ 1/3)



蔽石・凹石・磨石・台石 (S ≒ 1/3)

* () 内の数字は遺物管理番号



台石・石皿・砥石 (S 1/4)

報告書抄録

ふりがな	みなみおほらいせき							
書名	南大原遺跡							
副書名	一般県道三水中野線建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	111							
著作者名	鶴田典昭 町田勝則							
編集機関	(一財)長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター							
所在地	〒388-8007 長野県長野市篠ノ井布施高田963-4 TEL 026-293-5926							
発行年月日	2016年3月18日							
所収遺跡名	所在地	コ ー ド		北 緯	東 経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市 町 村	遺跡番号					
みなみおほらいせき 南大原遺跡	ながのけんちゅうのし 長野県中野市 おおあざのみまいあざ 大字上今井字 みなみおほらいせき 南大原	202118	196	36° 44' 59"	138° 19' 34"	20110420～ 20110719 20121023～ 20121211 20130801～ 20131113	2000㎡ 335㎡ 939㎡	一般県道 三水中野 線建設に 伴う発掘 調査
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
南大原遺跡	集落跡	縄文時代	竪穴状遺構1、土坑2		前期・中期・後期土器、 石器		竪穴住居跡から、弥 生時代の鉄製品と、 鍛冶関連の石製工具 類と想定される石器 群が出土し、鍛冶遺 構の可能性のある火 床を確認した。	
		弥生時代	竪穴住居跡9、竪穴状遺 構1、掘立柱建物跡6、 礎床木棺墓3、木棺墓2、 溝跡4、土器棺墓1、土 坑18、ピット群6など		栗林式土器、吉田式土器、 鉄鍬、鉄斧、板状木製品、 打製石鍬、磨製石鍬、磨 製石斧、擦切り具、砥石、 敲石、台石、粘土塊など			
		古墳時代	方形周溝墓1		土師器壺			
要 約	<p>本遺跡は、縄文時代前期後半の南大原式(諸磯a式)の標識遺跡として知られているが、調査では、縄文時代前期後半の竪穴状遺構と土坑を3基確認したのみで、弥生時代の遺物、遺構が圧倒的に多い。</p> <p>弥生時代中期後半の栗林2式新段階を中心とした集落跡で、後期前葉の吉田式まで竪穴住居跡が確認される。遺構は竪穴住居跡、掘立柱建物跡と礎床木棺墓、木棺墓、土器棺墓が主なものである。また、集落域を分断するような大溝(自然流路)があり、溝底には多量の土器破片と石器などが出土した。</p> <p>竪穴住居跡は円形と方形のものがある。弥生時代中期後半の竪穴住居跡の中に如跡とは別に床面の焼土が確認されるものがあり、鍛冶関連の石製工具類と想定される台石・敲石・砥石、粘土塊などの遺物が出土した。これらの状況証拠から、弥生時代中期後半に鍛冶遺構が存在する可能性を指摘した。</p> <p>弥生時代後期後半からは集落跡の痕跡は確認されず、古墳時代初頭前後の方形周溝墓1基のみが確認された。古墳時代中期以降は、遺構・遺物が確認されない。</p>							

平成 28 (2016) 年 3 月 18 日 発 行

長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 111

南大原遺跡

一般県道三水中野線建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書

- 中野市 -

発行者 長野県北信建設事務所
(一財) 長野県文化振興事業団
長野県埋蔵文化財センター
〒388-8007 長野県長野市篠ノ井布施高田 963-4
Tel 026-293-5926 Fax 026-293-8157
E-Mail info@naganomaibun.or.jp

印刷者 信毎書籍印刷株式会社
〒381-0037 長野県長野市西和田 1-30-3
Tel 026-243-2105 Fax 026-243-3494